

珍談と獵奇の型破り雑誌

# 奇譚クラブ

奇譚クラブ

主義が独立が血が恋が!!  
民族宿命の  
悲劇に哭く  
**日鮮混血児**

愛慾奇譚  
女子の秘聞

汚されたマネキン人形

熱球に狂う処女の性典



昭和二十五年十月五日第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)  
昭和二十六年一月廿四日日本国有鉄道特別授受承認雑誌第一八八七号  
昭和二十六年五月三十日印刷 昭和二十六年六月一日発行 (第五巻第六号)

奇譚クラブ 六月號

定價 九十円

官能をくすぐる  
裸女の群像!!

全裸の女はかくし  
悩ましきものか!

★大阪・どうとんぼり★

**道 劇**



# 恋八卦色暦

新編  
おにぎり



おにぎり

民族宿命の  
悲劇に哭く **日 鮮 混 血 兒** ..... 木之下白蘭  
美濃村 見・画 32

(娘相撲部屋參觀記) 八重樫対乳張山の血闘 ..... 加茂三千彦  
峯 玄太・画 42

昭彦探訪 物 語 **競 輪 場 の 女 掏 摸** ..... 梶 裕  
志乃田よしろう・画 44

爆笑小説 **おらが村に來たストリップ** ..... 能 登 一 三  
曾根三太郎・画 48

色道通鑑 女 体 探 検 ..... 茨木浩平(田中比呂志・画) 56  
兵庫一平(明石三平・画) 57  
富田英二(秋田冷光・画) 58

時代情艶 小 説 **戀 八 卦 色 暦**(とんでもハッピー) ..... 綠 今 幾 久 藏・画 60

爆彈娘行狀記 **女 學 生 桃 色 遊 戲 圖** ..... 加 茂 川 清 子  
沖 研 二・画 66

實話奇譚 夫を万引にした妻 ..... 村 松 岡 敏 一・画 68

奇術師 **奈 落 の 慾 情** ..... 吉 丘 垣 根  
竹中英二郎・画 72

男娼哀歌 十年後の彼は女だった ..... 草 薙 玄 太・画 79

實 話 小 説 **女 情 痴 作 家** ..... 松 井 籟 子  
喜多玲子・画 82

愛慾奇譚 汚されたマネキン人形 ..... 愛 森 あ き ら・画 90

女子プロ **熱 球 に 狂 う 處 女 の 性 典** ..... 早 乙 女 見  
秋田冷光・画 94

三郎物語 内 語 **ラ ム ネ 爆 發 事 件** ..... 杉 山 清 詩  
沖 研 二・画 102

掌篇愛情 小 説 **税 務 署 員 と 戀 人** ..... 山 代 章 雄  
志乃田よしろう・画 106

奇譚百話 都 會 の 溜 息 ..... 信 土 寒 郎  
明石三平・画 108

女の秘密 **姉の秘密と妹の秘密** ..... 佐 々 木 直  
喜多玲子・画 110

新聞記者 物 語 **女は泥濘のなかにいた** ..... 三 宅 リ ラ 子  
箕田京二・画 116

猛比古作 繪  
幾々藏

猛比古作



# 奇術師の恋 奈落の情欲

ブーン、というモーターの唸りと共に、機械は美女の胴体目掛けて切り下されていった。術者が二枚の仕切板を一気に引き抜こうとした瞬間であつた。その中途の彼の動作は急に凍りつき、みるみる表情が蒼ざめていった。

「しまったッ」

「やりそこなつたッ」

「ほんまに切つてしもた!」

血が仕切板を取つた跡から、台上に溢れ出て、ホタホタ舞台の上へ落ちはじめた。

「奇術師の戀、奈落の情欲」本文七十二頁参照

奈落の片隅には、全裸に近い女が、横たつてはめられたまゝ、柱に縛られていた。若い女のあられもない姿であつた。





娘相撲部屋参観記  
八重椿対乳張山  
の血闘



再び突き合つて手四つ、やがてガツブリ四つ相  
撲、指が禪をひびいて腹が臍でせりあい、張つた  
四つの乳房が、相手の乳首を突き上げあつた。  
激しい音をたて、挑合う女と女の肌が鳴る。

「娘相撲部屋参観記 八重椿対乳張山の血闘」

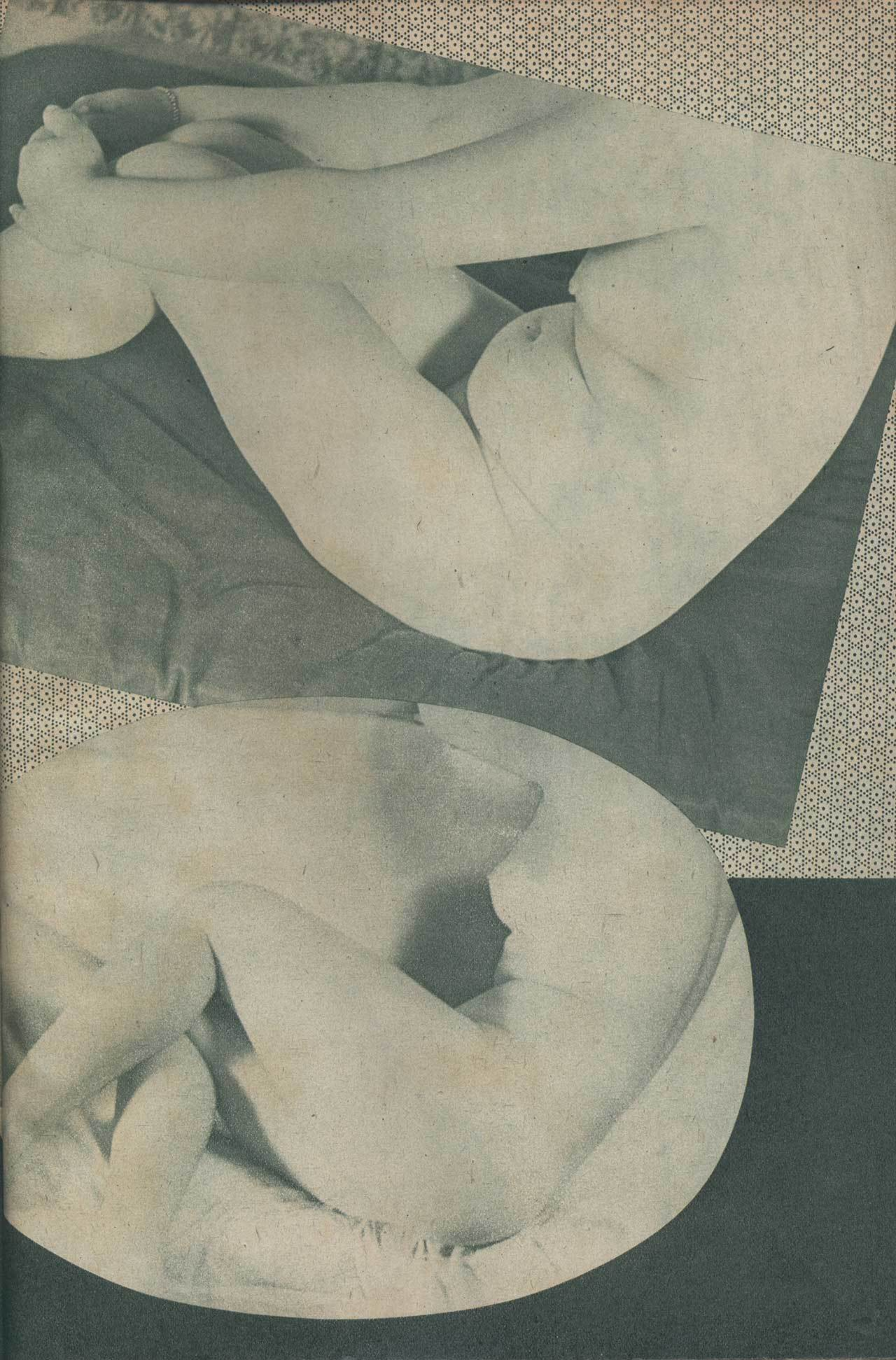


四角田つちや嬢よ

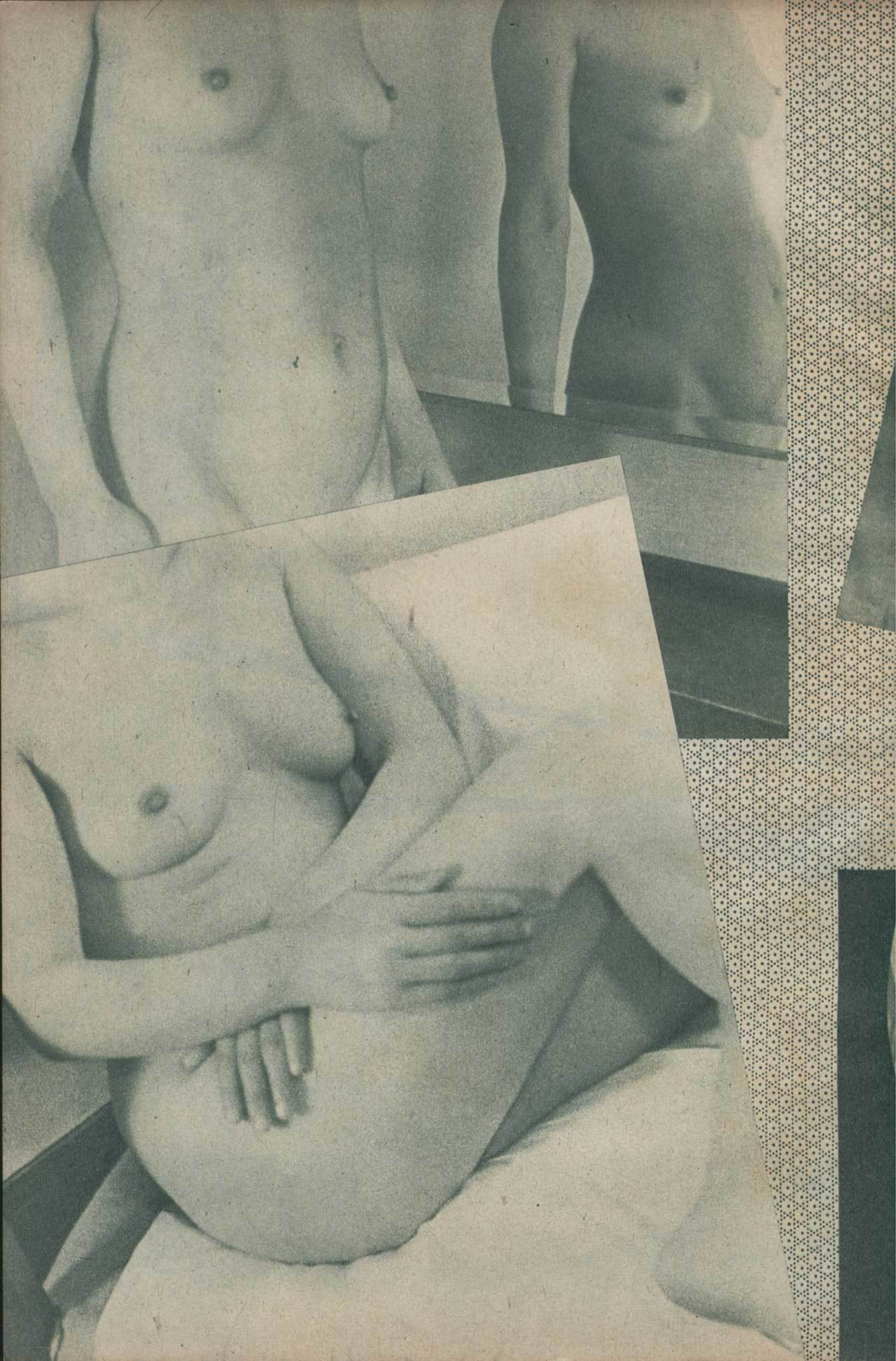
本誌写真部特写



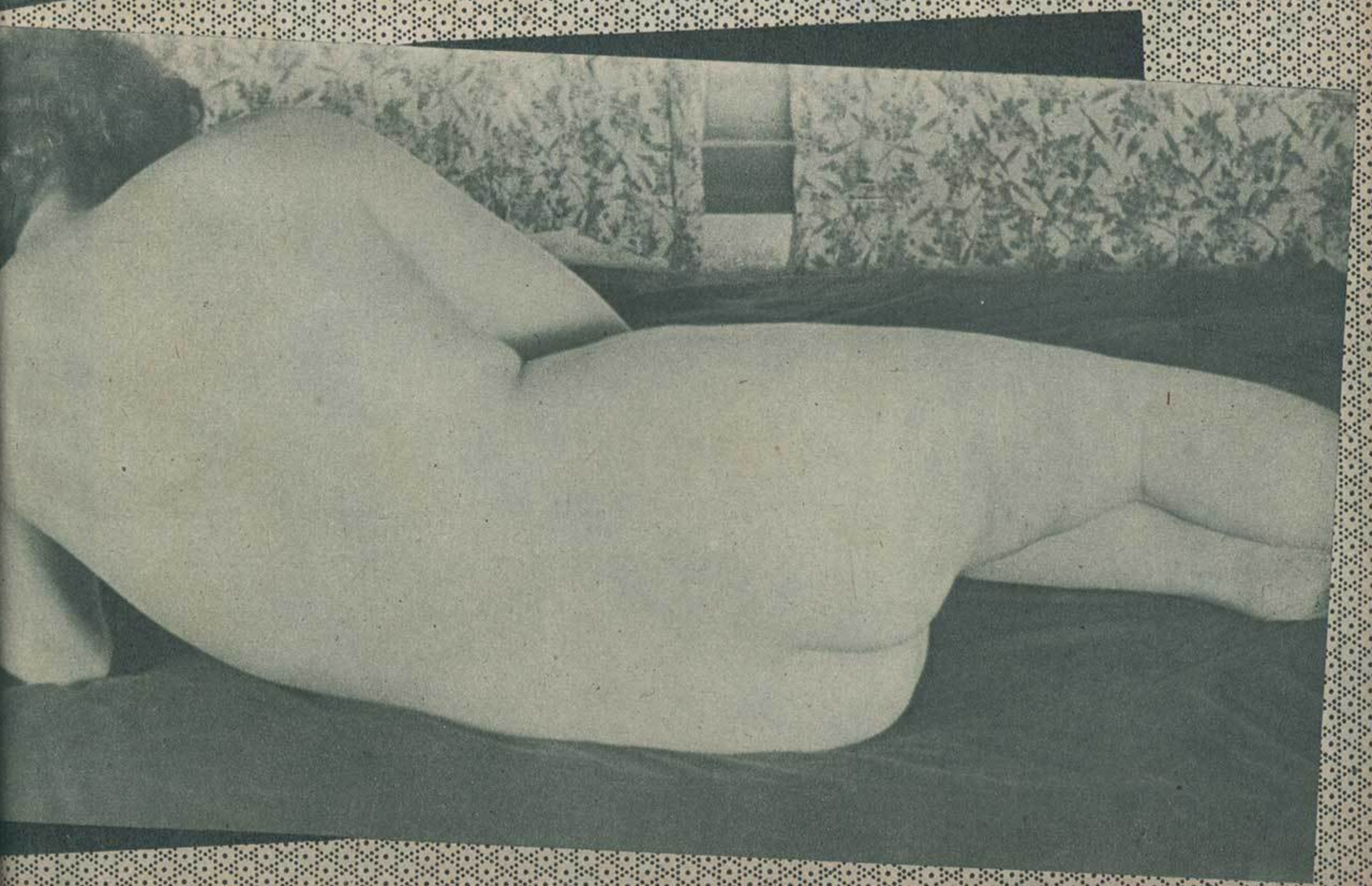
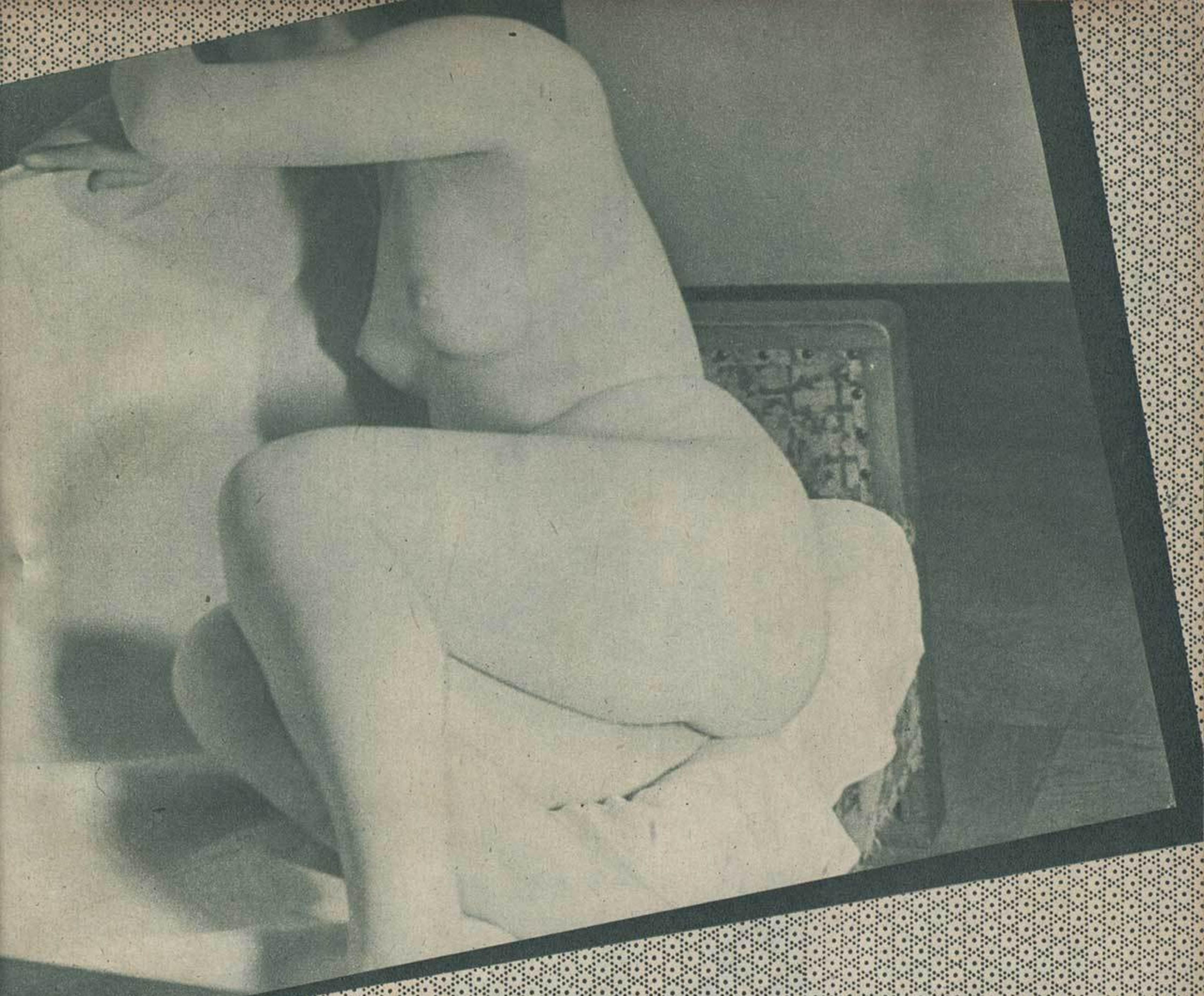




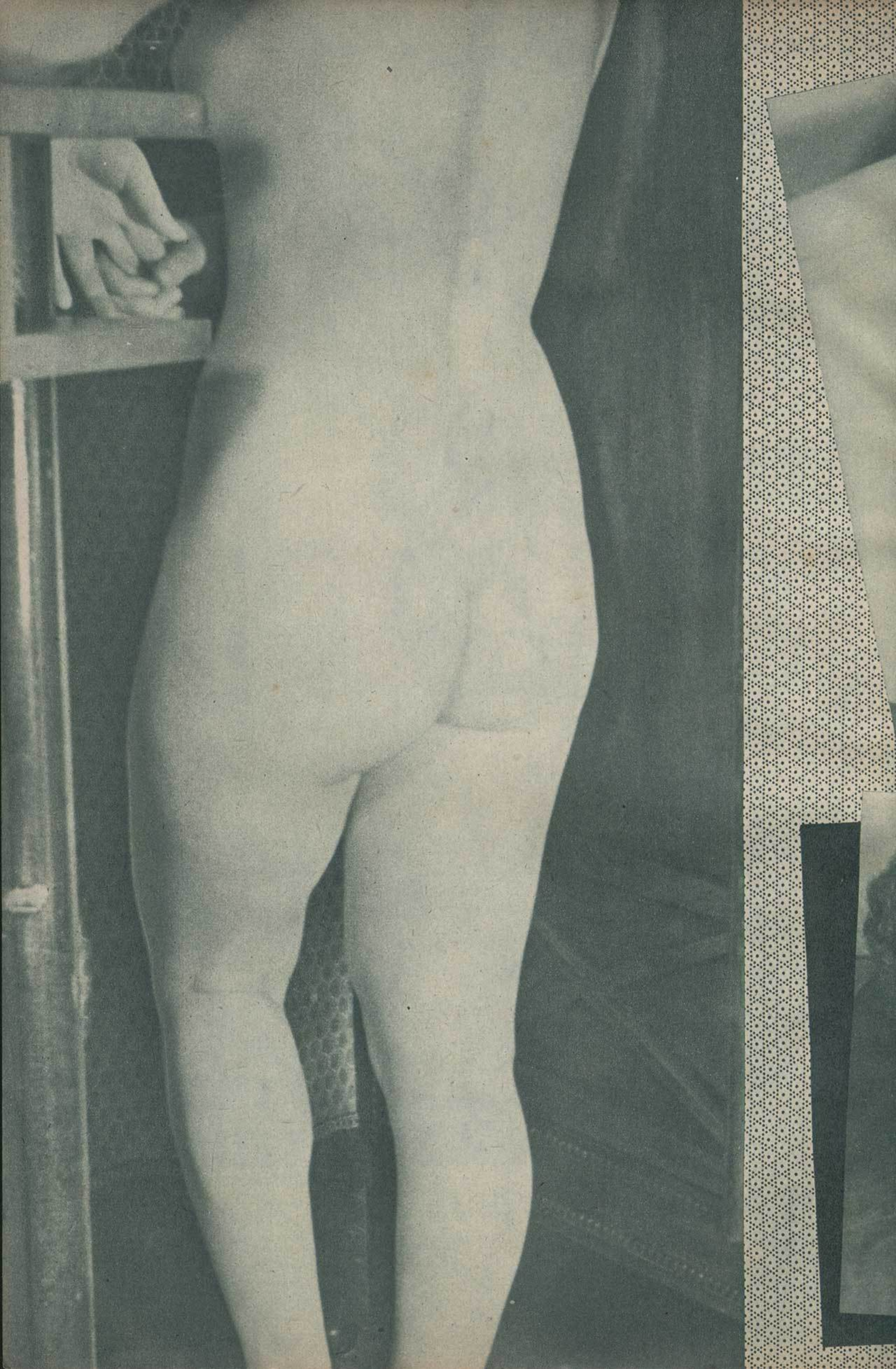








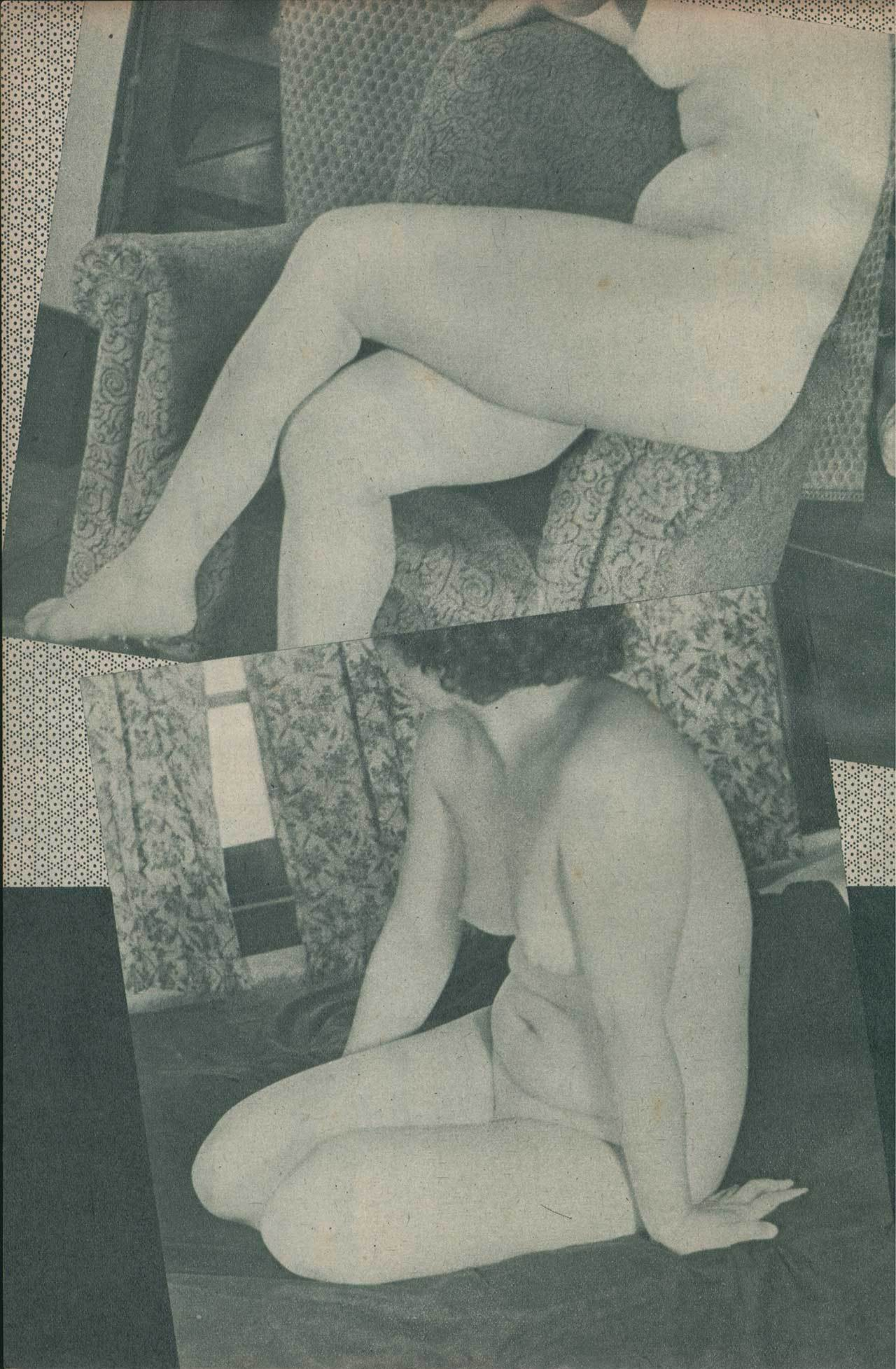




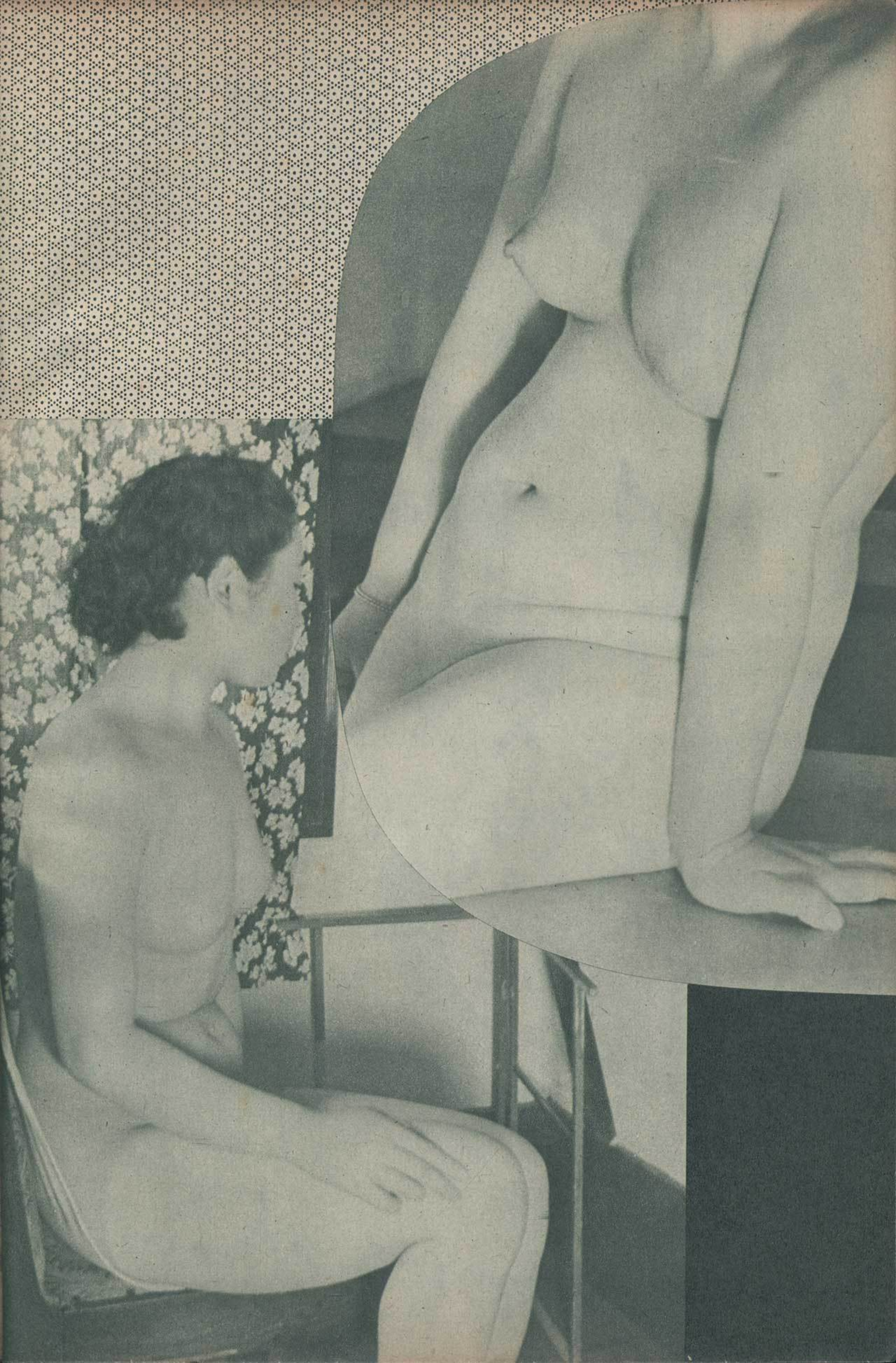










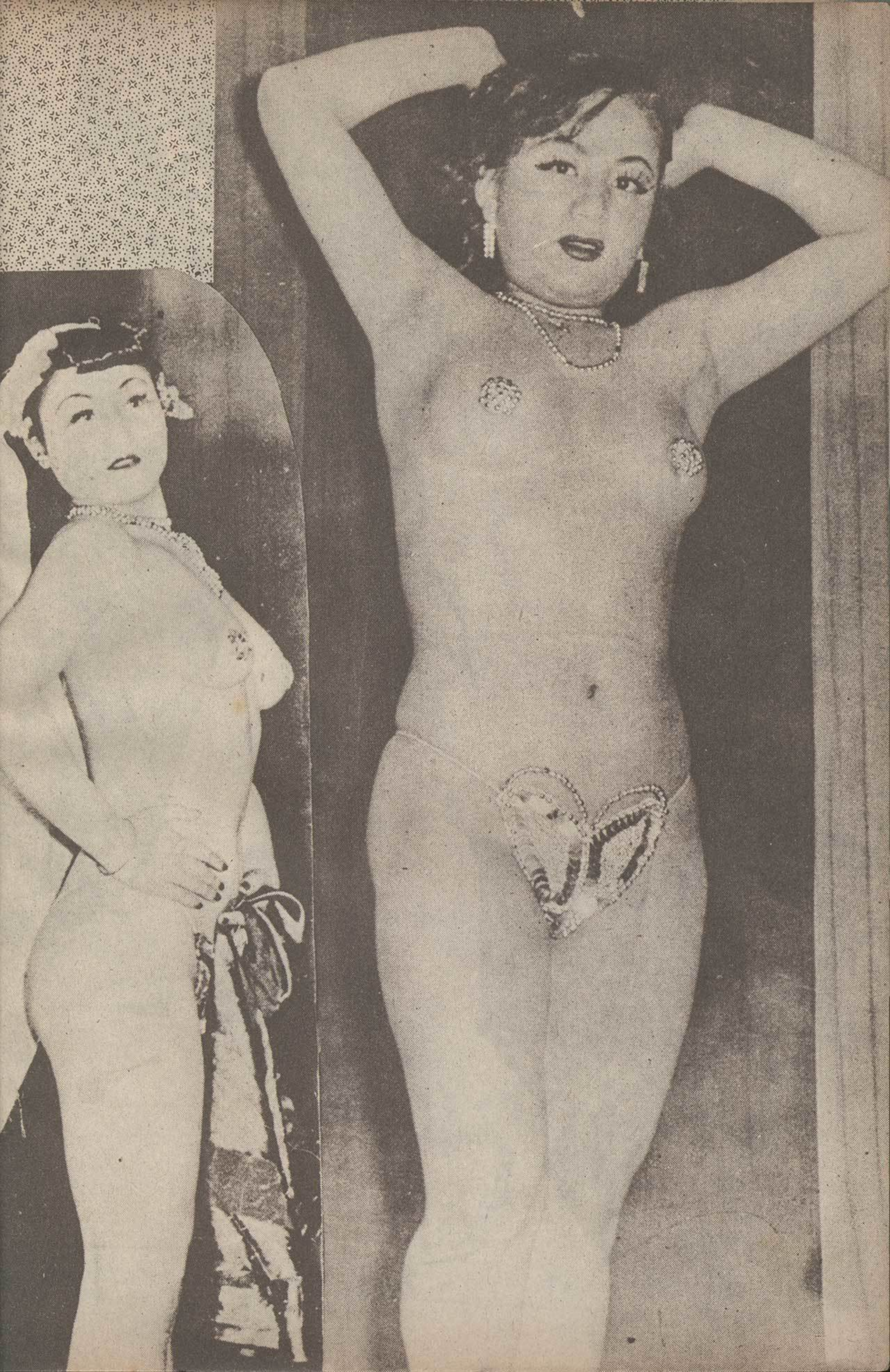




★ 花子 ★  
★ 花子 ★  
★ 花子 ★









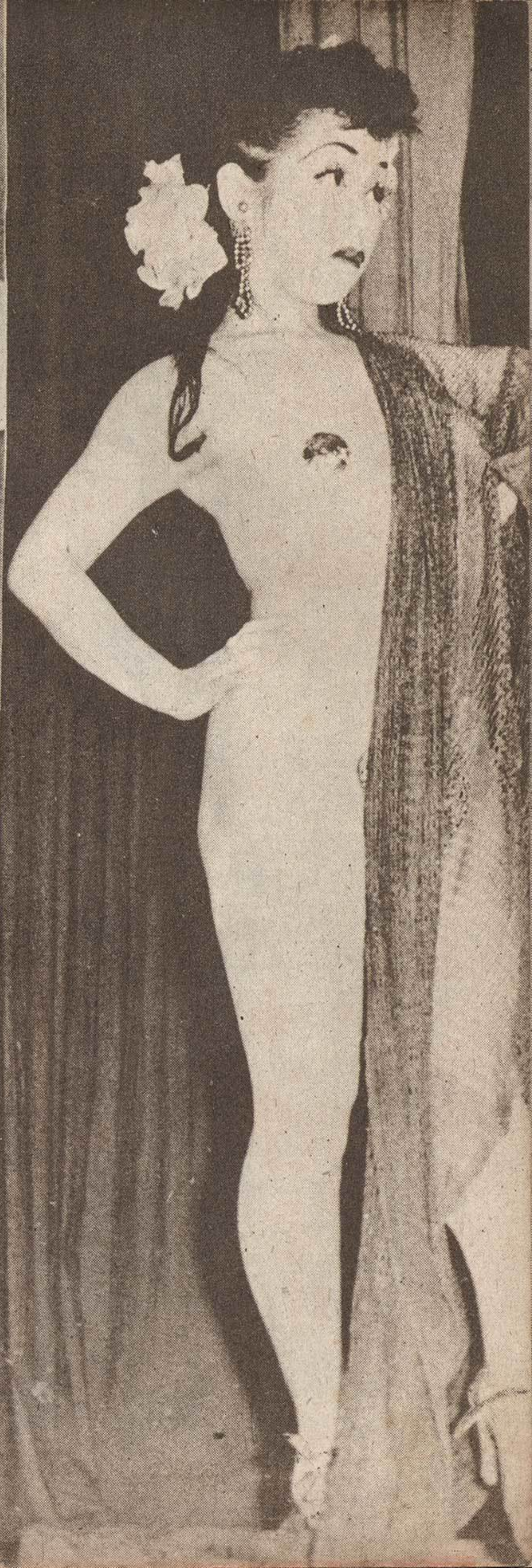
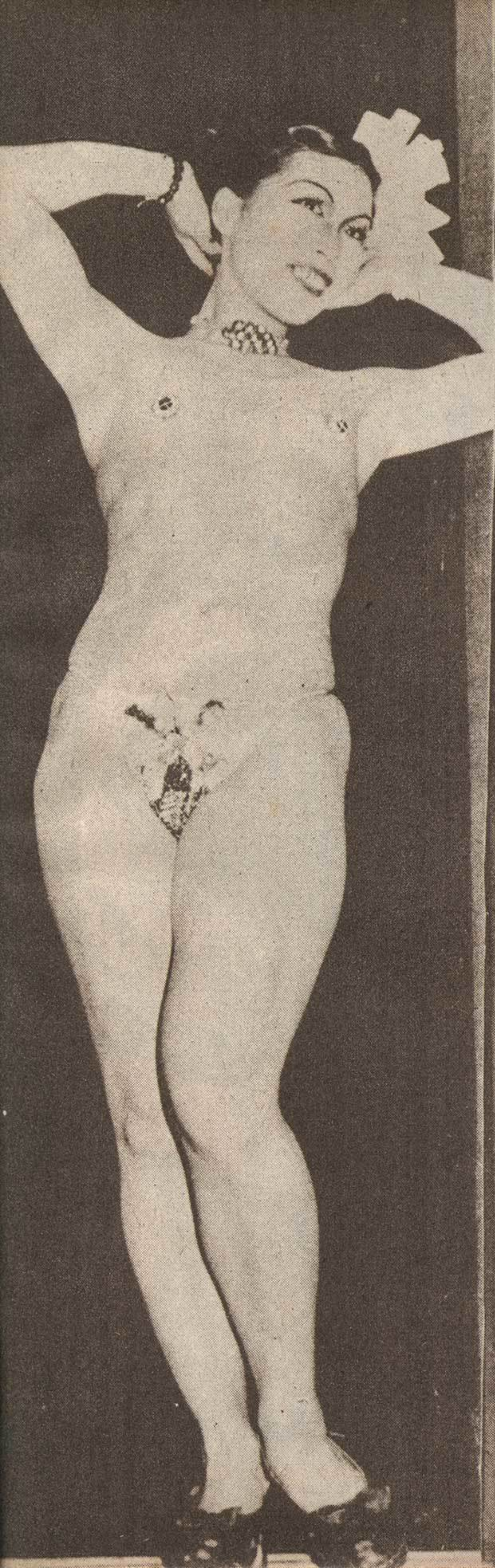
# 存在しないページ

※落丁や切抜きらしき痕跡が無い為、  
占領軍の検閲により削除された可能性大













# 局放送譚奇

エロニヤ人生同人合作  
風流太郎 明石三平  
根来若太郎 伊勢みどり

ゼーヒーキーケ こちら  
らば奇譚眠開放送局であ  
ります。各社にさががけ  
て本日より眠開放送のト  
ツプを切り 桃色番組を  
こゝに開陳致すことにな  
りました。

發足以來脱線に脱線を  
續けるエロニヤ人生同人  
の迷聲をますく高から  
しめんため 聴取者皆様  
のより以上の御支えんを  
お願いする次第でありま  
す 尚聴取料は無料、立  
読み 立聞きは大いに歡  
迎致します、では……



## ボットコント

### 第一話

「あなた、とてもかゆいのよ、ね、  
なんとかしてくれない？」  
「どうすればいいんだい？」  
「あー、とてもたまらないわ、かゆ  
くてかゆくて……、ね、あれでかい  
てよ」

「よし、よし」  
「そこんときよ、ぐつと強くかいて  
よ、あーい、気持、夢のようね」  
「これでいゝのかい？」  
「ええ、そう、あー」  
「おい見ろよ、こんな大きなシラミ  
が食いついてるぜ」  
奥様の頭にシラミが喰いついて、  
彼女の血をむさぼっていた。旦那さ  
んは櫛を髪の中へ突込み、ゆる  
く掻くかいてやつてゐる或る日曜  
日の日向ぼっこ風景。

### 第二話

「ね、あなた、人間の身体の中でお  
の字が上につかねば言えない処が二  
ヶ所あるの知ってる？」  
「え、おの字、うん知ってるよ」  
「じゃ言つてごらんさい」  
「奥歯、それから、ウー……」  
「あら、どうしたのよ、一つは合つ  
たわ、もう一つは何よ。早く言いな  
さいよ」

「おい、そんなこと、こんな往来で  
言えるかいあらどうして？何でもな  
いじゃないの」  
「おい、お前は悪趣味だぜ。俺にそん

なこと往来で言わせようなんて……」  
「まあ、往来じや言えないの？」  
「きまつてるじやないか。そんなこ  
と言つてみる、軽犯罪法で引ッ張ら  
れるよ」  
「おかしいわ、そんなことない筈  
よ」

「おの字が上につく所つて、きまつ  
てるじやないか。お前言えたら言つ  
てみる」  
「何でもないわ。おやゆびよ」

### 第三話

彼は可愛い彼女を膝の上に抱いて  
いた。  
眼がぱつちりと大きく、笑靨のボ  
コンとでざる豊かな丸い頬、花びら  
のような香ぐわしい匂いの唇をじつ  
と見ていると、彼は湧きあがる情熱  
に耐えきれなくなつてくる。

「ね、ルミちゃん！」  
「あら、いやーそんなに力一杯抱い  
ちや」  
「可愛い—— かあい、小鳩—— カア  
イイ奴」  
「いやーよーん」



### 第四話

ヤミの女とも見えない貴婦人然と  
した女性を連行して来た若い警官に  
向つて署長は尋ねた。  
「見た所、別段ヤミの女でもなさそ  
うだが、この女は何があつたのか」  
「は、女性として露出すべからざる  
処を本官に向つて公然と露出したの  
であります」

署長は役目柄尋問した。  
「女性として露出すべからざる処と  
言へば、只一ヶ所と決つてゐるが、  
念の為君は一体何処をこの警官に向  
つて露出したのか？」  
「あら署長さん、私、舌を出したん  
ですのよ！」



街頭



アナウンサー

中村米藏

夫婦の性愛は

如何にあるべきか

「眠閑放送局MRHであります。本日は第一回の街頭録音、夫婦の性愛は如何にあるべきかを話題に致しまして、御自由にカッパツに御意見を放出して下さい。皆さんの放出物、資、いや放出音は全国の夫婦生活者からパン／＼に至るまで、必らずや深い示唆を与えるものと思ひます。旦那様様様彼氏彼女、お声をどうぞ……さて最初に夫婦のランデブーの生動はどうでしょう、其処の斜陽夫人、どうぞ」

「あらわは、汝ら如き下賤の輩と、言の葉を交すさえ汚わしき雲上人なるぞ！」

「ギョギョッ（ちよつと頭にきてるな）それで御意見はありますか」

「時に意見無きにしてもあらう、敗戦此の方、下人民の仲間入りはしたれど、夫婦のランデブーについては、夫をわらわの杖代りに致すなり、それは細く小さき夫なればなり、途中、杖曰く、奥様、疲れてしやうがありません、たまには奥様の腰にとまらせて下さい」

「まるで小鳥か何かのようですね、



「ハハ、いや此れは失礼。ノミの夫婦の親類なしかし愛情溢れんばかりの美談でございます。買物カゴの中へ手を入れた奥さん、とゆうより山の神、じやないお内儀さん、抱擁についてどうぞ」

「わしらはホーッなんて甘つたるいもんじやねえです、ピリッ辛いチクリッ辛い刺激のあるやつです」

「愛情の爆発点とゆうような猛烈なんです」

「猛烈も猛烈、ドンガチャン、バリ／＼と派手な音をさせて、この亭主野郎ッ、つてんで胸ぐらをつかまえて離さず、エイトどたーんと腰ぐるまに掛けてキニツと伸びた奴を、これでもかッ」と次は寝技になる、わしらのホーッはこんなんです」

「それじゃ夫婦喧嘩じやありませんか、それ以外に、ねえあなたア、なんて言つて甘えながら抱れる時つて

「それでわかりました。では次に、旦那様にアッアッアッアと潤れていられるようなアッアッアッの若奥様、恥しきなんかバクバクと食つちやつて、どうぞ勇敢に……」



「ああお兄さん、嬉しいわね若奥様ですつて……バクバクつて言やあ此の間なんか、旦那様とのキッスで本當にバクバクと唇を食つちやつたんですのよ、その時旦那様の顔と言つたら、死んでもいいつて幸福の絶頂だつたわ、全身をふるわせて汗を流し……」

「ちよ、ちよつと待つて下さい、それ以上言つて頂くと発禁、いや放送禁止になりそうです。それであなたの幸福感はどうぞ」

「ええ、そりやもう、何と言つたらいいんでしやう、歌でも唄つてみるわ」

「接吻技巧も教あれど身から火が出る汗が出るちよいとバクバク食つちやえば息がつまると、泣き出した」

「美し奴ばりの吉良の仁吉、ああヒントが出ました、あなた芸者さんです」

「いいえ、男娼上」

「ギョッ、男娼の方は人の知らないテクニクを持つていて聞いているうちに、それが、それ程とは思いませんでした。それで、二人だけの寝室に話題を向けまして、蘭蘭の巻に移りまして、おやお爺さんの方が三歩前へ進まれました、曲つた腰を伸ばすのに一苦勞の御様子です、お爺

主婦日記とラジオ体操講習の混線



本日はおいしいお菓子の作り方を申し上げましよう。先ずメリケン粉を五百グラム器に取りましてお塩少々砂糖を大さじ十ばい位混ぜまして水で溶きどろ／＼になるほどこねまわしますその上へ青酸カリをコンマの五ほど入れまして両手を腰にあてフライパンを火にかけますそして首を前後左右に曲げ廻しながら油を引き先程のときましたメリケン粉を五分の一ほど入れ腫を上げ足を曲げてとろ火で静に伸ばします

次に背のりを細かく千切つて両手を大きく上にあげペラ／＼と振りかけて胸を後にそらせ、裏が狐色に焼

上つたら腕を大きく廻して裏がえします。そして上体を左右に曲げて火加減をよく注意しながら両足を開き程良く焼けたところまで血にとりまして手を交互に横に上げ大きく口をあけ適度の大きさに切り深呼吸をしながら食べます

今まで説明しました体操を音楽に合わせて行います。ではもう一度始めからやります。両手を腰にあて、頭を前後にまげるーハイッ（音楽）タンドン タカタカ タンドンタンドン





「ありがとうございます。男性の方から抗議的な意見が出そうです、先程から口をぐぐぐさせてコーンにしていただける方、どうぞ」

「いやこれはチューインガムです。だが只今のランデブーには反対です。夫を杖、とは何ですか、もつとも杖に似たモノは誰しも持つてはいます。僕は妻たる女性を大切にいたわりつつランデブーします。妻を尊重し妻を見上げ、妻を疲れさせず最もラクチンな方法を選んでのランデブーです」

「とおつしやると？」

「なんでもありません、妻を肩ぐるまに乗せて散歩するわけです」

「肩ぐるま、ね。それで見上げるわけですか。フェミニストの方々には奨励すべきランデブーですね。では今度は夫婦の抱擁は如何に行われているか、の御体験を伺いましょう。眼鏡をかけた中年の男子の方」

「抱擁つて君抱きつくことじやね」

「そのものズバリです」

「わしは結婚以来二十年此の方、御覧のように腰に弁当ならざる、簡易携帯用折疊椅子を缺かさず持つて歩いとりますわい」

「何か疲れた時に、腰を下して休まれる為にですか」

「いや左にあらず、妻と一緒に居て何時抱擁の欲望発情するやも知れず



「ありませんか」

「うちのはそんな顔じやねえだよ、あんなのうような美男子となら、此処でだつて実演して見せるがのう」

「ま、待つて下さい、あんまりその私の胸の所へ顔をすり寄せたりしないように、いやどうも恐れ入りました。では話題を換えまして、夫婦間のキッスはどうかあるべきか、皆さんの御体験で一番強烈な幸福を味つた場合を言つて頂きましよ、其処のトマート、いや失礼スマートなりユウとした背広を召していらつしやるお若い方」

「僕達の接吻程スリルに富み、身をふるわせる程の幸福感は先づ無いでしょうね」

「あまり勿体ぶらずにどうか卒直に言つて下さい」

「僕の肉体、妻の肉体を鳥の如く空中に浮遊させるんです、さながら羽根の生えたヴィナスの如き妻の肉体が、さーと僕の肉体の前へ飛んでくる。それを受ける僕だつて空中に遊ぶアダムの如く、イザなる妻の肉体に飛びつつサツと触れた瞬間、チユツと吸い合ふ、此の瞬間には僕達生命もいらなと思ふ程、幸福なんです」

「しかしそれ、どうも現実離れした夢でも見ているような気がするんです。鳥のように人間が飛べますか」

「僕は空中サーカスのスターです。朝めし前です」

「さんどうぞ」

「わしは素晴らしい前戯を知つとりまじや、その前戯のお蔭で若い娘が三人、未だにわしから離れようとはせず、喜んでころこんで寝ころんどりますわい」

「千軍万馬の強者と云つた所ですね後学の為には是非聞かせて下さい」

「先づ教科書が必

「えーお笑いを申し上げます。いつもながら我々同様に少くも趣味の量が不足して居る野郎が出て来ませんとお話になりませんようで……」

「おい、与太郎や、ちよつと此処へ来なさい。」

「エヘ……何か用かい。」

「用があるから呼んだのだ。」

「呼んだから来てやつたんだ。」

「何を云やがる、へらず口を叩く奴だ、そこへ座りなさい。」

「座つたら何か呉れるかい。」

「しよ、うがねえ野郎だな、お前ももう二十五じやあ

「そんなら、もう一人あるぞ。」

「本当かい、仲良くして居る娘でなきやア話がうまく運ばないからな」

「仲よくして居るよ。」

「年はいくつだい、その娘は。」

「十九だ、可愛いぜ。」

「うーむ今度は本当らしい、その娘は何処の娘だい。」

「うちのお福だよ。」

「馬鹿野郎、あれはお前の妹じやねえか、妹と結婚する馬鹿がどこにある、仲よくして居るなんて云うから、まただまされたよ。」



落語家  
桃色亭平助

「なるほどね、ヒョコでさえも啼くものを……ですか、いやどうもありがと。そちらの眼鏡をかけたインテリらしい奥様、どうぞ一声啼いていやおつしやつて下さい」

「私達のは科学的なよ、愛情露出機つて器械を使うのよ。私達は始めから一つのお床へ入るなんてしないの、襖を隔てた隣室へ一人々々寝るのよ、そして、あな一た、な一んだい、なんて甘い、お話をしながらお互いに愛情露出計を胸にあてて、あな一た私今八十五%よ、それじやまだ、僕は九十三%まで上つた、と言つてお互いに一〇〇%まで上つた時に襖を開けてはじめて床へ入るの」

「えーお笑いを申し上げます。いつもながら我々同様に少くも趣味の量が不足して居る野郎が出て来ませんとお話になりませんようで……」

「おい、与太郎や、ちよつと此処へ来なさい。」

「エヘ……何か用かい。」

「用があるから呼んだのだ。」

「呼んだから来てやつたんだ。」

「何を云やがる、へらず口を叩く奴だ、そこへ座りなさい。」

「座つたら何か呉れるかい。」

「しよ、うがねえ野郎だな、お前ももう二十五じやあ

「えーお笑いを申し上げます。いつもながら我々同様に少くも趣味の量が不足して居る野郎が出て来ませんとお話になりませんようで……」

「おい、与太郎や、ちよつと此処へ来なさい。」

「エヘ……何か用かい。」

「用があるから呼んだのだ。」

「呼んだから来てやつたんだ。」

「何を云やがる、へらず口を叩く奴だ、そこへ座りなさい。」

「座つたら何か呉れるかい。」

「しよ、うがねえ野郎だな、お前ももう二十五じやあ

「そんなら、もう一人あるぞ。」

「本当かい、仲良くして居る娘でなきやア話がうまく運ばないからな」

「仲よくして居るよ。」

「年はいくつだい、その娘は。」

「十九だ、可愛いぜ。」

「うーむ今度は本当らしい、その娘は何処の娘だい。」

「うちのお福だよ。」

「馬鹿野郎、あれはお前の妹じやねえか、妹と結婚する馬鹿がどこにある、仲よくして居るなんて云うから、まただまされたよ。」

# 七つの扉

- ① 居眠りをしている人の眼
- ② バスの女車掌のカバン
- ③ 脳病院の女患者
- ④ のみ





現在日本好色文學

案内

☆伊豆の踊子川端茄子成先生作

☆春 園 横光離位置先生作

☆若い人 石坂洋次郎先生作

☆刺 青 谷崎春一郎先生作

☆ヴィヨンの妻太宰大寒先生作

☆糞尿譚 火野足兵先生作

☆それから 夏目漱石先生作

☆木 石 舟橋性一先生作

☆結婚の生態 石川立像先生作

☆初夜の情事を手に取るように

☆女学生間に圧倒的人気を呼んで

☆発表当時部分削除を受けた

☆厭がらせの年令 丹羽路尾先生作

☆房事取行の能力が失せてから

☆一々娘夫婦のすることに当てこす

☆り云つて嫌われる老人の物語

☆中々・セクスアリス 森横臥

☆これは解説を待つまでもなく

☆読んでみるとよい

☆処女懐胎 石川殉先生作

☆無限抱擁 滝井工作先生作

☆昇天 内田鬼園先生作

☆七ツの扉

☆眠閑放送七ツの扉を始めしよ

☆目のお知らせは係から七ツの「ヒント」

☆を戴くことになつております

☆（藤の声は3）頁下段に発表致して

☆第一問 動物

☆第一ヒント「人間の動物です」

☆第二ヒント「え、職業年令関係なし

☆第三ヒント「男女の別？ありません

☆第四ヒント「その通り本人はとも

☆第五ヒント「毛に關係あり上下密着

☆第六ヒント「スースーと呼吸をし

☆第七ヒント「下半身？ご冗談でしょ

☆第二問 動物

☆第一ヒント「加工品です」

☆第二ヒント「動物は獸類動物は鉄」

☆無敵抱擁 滝井工作先生作

☆相方が死んで、なおかつ離す

☆マノン日本版

☆昇天 内田鬼園先生作

☆七ツの扉

☆眠閑放送七ツの扉を始めしよ

☆目のお知らせは係から七ツの「ヒント」

☆を戴くことになつております

☆（藤の声は3）頁下段に発表致して

☆第一問 動物

☆第一ヒント「人間の動物です」

☆第二ヒント「え、職業年令関係なし

☆第三ヒント「男女の別？ありません

☆第四ヒント「その通り本人はとも

☆第五ヒント「毛に關係あり上下密着

☆第六ヒント「スースーと呼吸をし

☆第七ヒント「下半身？ご冗談でしょ

☆第二問 動物

☆第一ヒント「加工品です」

☆第二ヒント「動物は獸類動物は鉄」

☆形式で描いてある

☆子を貸し屋 宇野重耳先生作

☆夜ふけと梅の花 井伏真筋先生作

☆大阪の宿 水上焚太郎先生作

☆春の宿の、多も營業するとい

☆りませんよ

☆第五ヒント「お金、此の場合關係な

☆第六ヒント「男と關係があるかつて

☆第七ヒント「歌を唄つたり、自殺し

☆第三問 動物

☆第一ヒント「人間以外の動物」

☆第二ヒント「しかし四つ足ではあり

☆第三ヒント「え？人間の肉體に關係

☆第四ヒント「何々の何ではありませ

☆第五ヒント「可愛いと云う動物では

☆第六ヒント「蛇？違います足はあり

☆第七ヒント「跳びますから御安心」

☆母子情 岡本蚊の子先生作

☆母と娘が、同じ青年を恋焦が

☆母と娘が、同じ青年を恋焦が



☆高尚な云い回しにきこえるが

☆オフィス・ワイフも、つまりはこ

☆れにはいる

☆母子情 岡本蚊の子先生作

☆母と娘が、同じ青年を恋焦が

☆母と娘が、同じ青年を恋焦が

☆男十人を手玉に取り、みな瘦

☆うという物凄く強い今様千姫記



●川上哲治 にか雨でまだ濡れて乾かぬ手摺に腰かけるは駄目だよ。

●藤村富美男 これは何と判読したらいいだろうな。不思議な文を寄こしたもんだね。

●佐分利信 あの男の言うことは嘘が多くてさつぱり信じられないね。

●中野実 青いのを喰べては体に毒だ。中のみのるまで待ちなさい。

●原 節子 苦勞してるだけであつて、仲々物の解つた話せる子だね

●邦枝完二 田舎の親がさぞ心配してるだろうに、国へは返事書いたかい？

●石川達三 いくら隠したつてあれじゃ浮名がいつかは立つぞ。

●塚田正夫 そんなに始めから小遣を欲張るものじやないよ。使つたら増そう。

●木村義雄 頭の悪い奴にかゝつては仕様がな。何時まで経つても定らな止そう。

●長谷川町子 随分前から行列



●松井翠声 この絵は誰が書いたんだい、随分まずい水彩だ。

●藤倉修一 私達が斯うして頑張つて無事暮すうちシベリヤの夫も帰るでしょう。

●諏訪根自子 安全交通週間の第一日に自動車事故なんてどうも運動の趣旨に添わねえ事故だな。

●江戸川乱歩 この模写は仲々うまく出来て居るね。本物の繪と変らんぞ。

●寒川光太郎 今年の冬の寒さは格別だ。そんな寒けりや買つたら、毛皮でも。

●田村泰次郎 斯う鼠が増えて

●横溝正史 殺人事件だなんて冗談もいゝ加減にしろ死体をよく見る水死だよ。

●武田麟太郎 その着物は弟の奴を借りて来たんだから丈足りんだろう。

●三遊亭歌笑 度々の無心だ。余り甘い顔ばかり見せては為になら

●近藤日出造 一遍だけは仕方がないから勘弁してやるが二度とやつたら今度はひでえぞ。

●上原 謙 いくら僕が大食漢だからと言つて、もうこの上は喰えん。

●菊地 寛 貴様のような解の解らない唐変木ともう一切口きかんぞ。

●尾崎行雄 あんな愚図々々して居る奴は待つておれん俺先へ行くぞ。

●武田麟太郎 その着物は弟の奴を借りて来たんだから丈足りんだろう。

●三遊亭歌笑 度々の無心だ。余り甘い顔ばかり見せては為になら

●近藤日出造 一遍だけは仕方がないから勘弁してやるが二度とやつたら今度はひでえぞ。

●上原 謙 いくら僕が大食漢だからと言つて、もうこの上は喰えん。

●菊地 寛 貴様のような解の解らない唐変木ともう一切口きかんぞ。

●尾崎行雄 あんな愚図々々して居る奴は待つておれん俺先へ行くぞ。

### 趣味の手帖

●尾崎行雄 あんな愚図々々して居る奴は待つておれん俺先へ行くぞ。

●武田麟太郎 その着物は弟の奴を借りて来たんだから丈足りんだろう。

●三遊亭歌笑 度々の無心だ。余り甘い顔ばかり見せては為になら

●近藤日出造 一遍だけは仕方がないから勘弁してやるが二度とやつたら今度はひでえぞ。

●上原 謙 いくら僕が大食漢だからと言つて、もうこの上は喰えん。

●菊地 寛 貴様のような解の解らない唐変木ともう一切口きかんぞ。

●尾崎行雄 あんな愚図々々して居る奴は待つておれん俺先へ行くぞ。

●武田麟太郎 その着物は弟の奴を借りて来たんだから丈足りんだろう。

●三遊亭歌笑 度々の無心だ。余り甘い顔ばかり見せては為になら

●近藤日出造 一遍だけは仕方がないから勘弁してやるが二度とやつたら今度はひでえぞ。

●上原 謙 いくら僕が大食漢だからと言つて、もうこの上は喰えん。

●菊地 寛 貴様のような解の解らない唐変木ともう一切口きかんぞ。

●尾崎行雄 あんな愚図々々して居る奴は待つておれん俺先へ行くぞ。

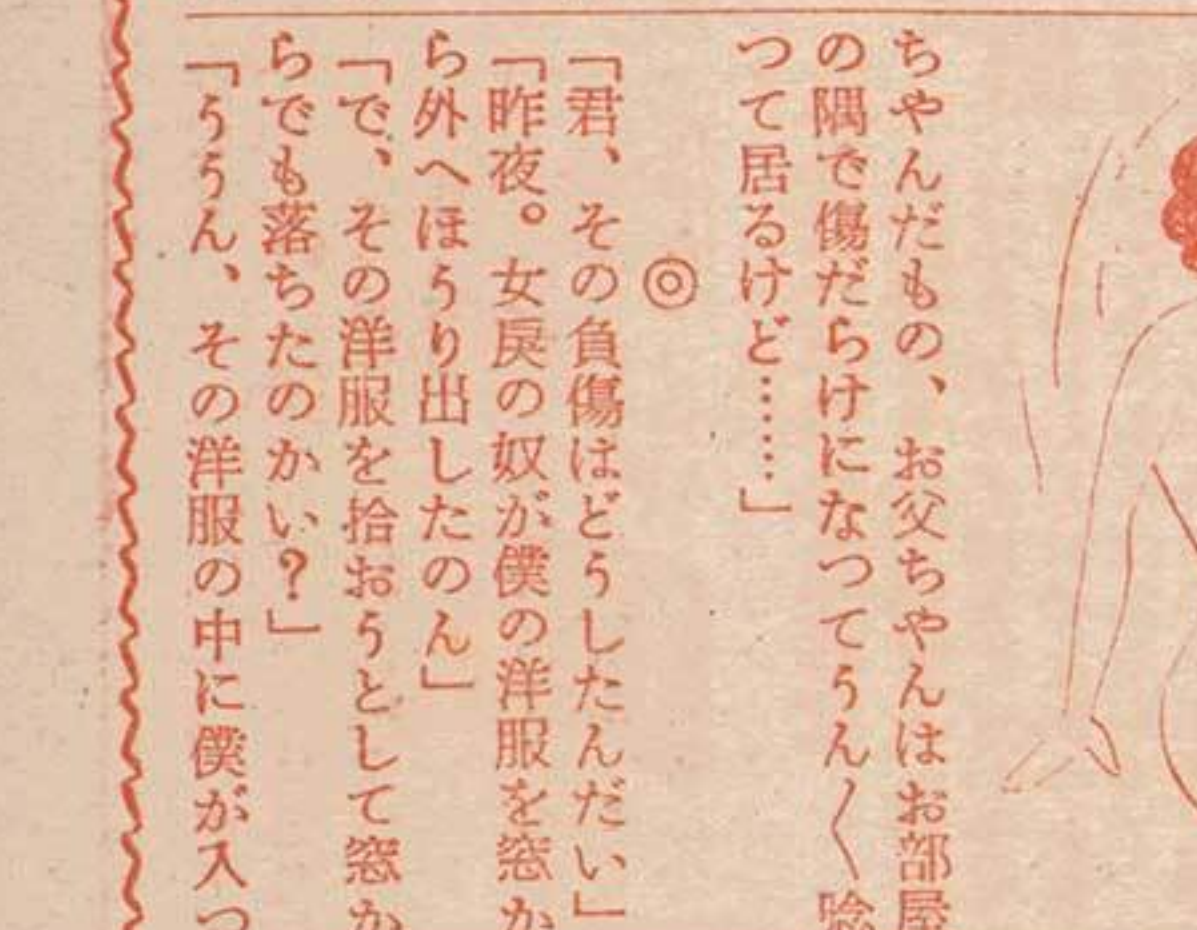
●武田麟太郎 その着物は弟の奴を借りて来たんだから丈足りんだろう。

### 日曜談落版

日曜ゴラクバーン日曜ゴラクバーンサア皆さんなじみの日曜名物ゴラクバーン坊ちゃん嬢ちゃん兄さん姉さんおバアチャマ誰でもかれでも仲よく一緒に聞きましょう、サア中味はどんなかお聞きになつてのおたのしみー



「アーそり押さずに順番に並んで下さい一番の方からどうぞ……」  
ああ求職ですか、ふーむなるほどねこの不景氣な時代に、あなたのような年輩で然も大した事務能力もない人間の就職なんて、仲々楽じゃありませんよ、一体あなたは今まで何をやつて居らつしやつたんですか？」  
「公共職業安定署長……」



「坊やのお家じや、お父さんとお母さんどちらが強いのか？」  
「お父ちゃんだよ」  
「坊や、嘘言つちや駄目だよ、そんなことはないだろ？」  
「だつて何時も謝まつてるのはお母

「坊や、その負傷はどうしたんだい」  
「昨夜。女房の奴が僕の洋服を窓から外へほうり出したのん」  
「で、その洋服を拾おうとして窓からでも落ちたのかい？」  
「ううん、その洋服の中に僕が入つ

「あなたは何故、失業したら直ぐこの職業安定所の窓口によつて来なかつたんです？一体あなたは今まで何処に勤めて居たんです？」  
「それがそのおあなたの椅子に座つて居たんです一月前まではね」

「とかく此の世は不可思議で人はあつても職がない  
肩鉄の値は上るけれど  
人の値うちは上らない  
公共職業安定署にて  
ガヤ／＼／＼ガヤ／＼／＼

「とかく此の世は不可思議で人はあつても職がない  
肩鉄の値は上るけれど  
人の値うちは上らない  
公共職業安定署にて  
ガヤ／＼／＼ガヤ／＼／＼

「とかく此の世は不可思議で人はあつても職がない  
肩鉄の値は上るけれど  
人の値うちは上らない  
公共職業安定署にて  
ガヤ／＼／＼ガヤ／＼／＼



身上相談

過去に男の肉体関係

私は彼と結婚すべきか

問 二十一歳の処女でございます。最近願ひ叶つて思ひ思われつゝの恋人から結婚申込を受けましたが、彼には以前に恋人があつて、しかもその人と肉体関係まで結んだといふことです。その相手の女の人は、れつきとした夫のある人妻なのです。

回答 エロエロ博士  
 今はもう關係を絶つてゐるようです  
 が、果して彼に私と結婚する資格が  
 あるかどうかで迷つてゐます。私は  
 どうすべきでしうか？  
 迷ふことはありません。あなたも誰かほかの人に処女を捧  
 げなさい。そうすれば、結婚する条

件に、互角の資格が具わります。当  
方へお越し下されば、私が喜んで実  
際問題の御相談に応じます。ちなみ  
に、私には確たる妻があります。  
**房事過度を慎みたいが**  
**それは一体どうすべきか**

それは一体どうすへきか

珍鳥の卵

發見さる

叩いても投げてても

割れない稀代の固い卵

この未曾有の固い卵の発見された草  
原は、ゴルフ場の近くだそうです。

日本國有鐵道總裁  
の宣言！

国鉄加毛山綫裁の発表に依りますと

小学校校帰りの子供が草叢の中から珍らしく固い円形の鳥の卵を発見しました。いろ／＼大人達が集つて来て調べましたが何という鳥の卵かわかりません。それで割つて見ようと、いうので、力まかせに地面に投げつけましたが、中々割れません。



方針の為だそうです

尙先日の省線生不勳事件によつて一度に百余名の死傷者を出したためこの宣言も実際上は、行われぬ模様です。

野球放送

問 二十二の新妻でございます。夫は二十六歳で、十日前に結婚しました。夜風の区別覚えず、もう夢我夢中で暮しておりますが、一体いとなみの方はどの位にいたしますれば宜しいものでしょうか。判断つかずに迷っています。お教え下さい。

答 その方は、体力の個人差によつて異なります。簡単に双方に無理のないところを知ろうと思えば一ぺんどの位やれるかやれる所までやつてみるんですな。次に、どの位やれずにいられるか辛抱を驗してみても、これを合せて2で割れば、あなたがたの平均点が出てきます。

一度に三つの良縁に  
私はどう選擇すべきか  
二十八歳の老嬢でございます  
今までとんと口のなかつた私  
に嬉しいことになればあるもので、  
一度に三ところから口がかかつて参  
りました。共に三十歳前後、大金持

後樂園球場より

明石三平アナウンサー

付いた羽黒山のカウンントはワンエン  
ドワン、吉葉山ニッコリ笑つて塩を  
攪んで居ります投手第三球目のワイ  
ンドアツブ、グル／＼と大きく四股  
をふみました投げました打ちました  
／＼立上りました立ち上りました三  
遊間ライナー性の痛烈なヒット両力  
士ガツブリ四ツに組んで走つて居  
ります  
ショート斜に走つておりますアツ危  
ない危ない羽黒山じり／＼押しなが  
ら遂にワンバンドツーバンド抜かれ  
ました  
ランナーは一壘から二壘一壘から二  
壘吉葉篠に手がかゝりましたショ一  
ト土俵際で二壘に投球しました  
羽黒残しましたランナー一、二壘間  
に挟まれましたあつ吉葉あぶない吉  
葉あぶない羽黒の右手が一壘に投球

ビービーガーガービーユーウ  
 全国の皆様どうも失礼致しました  
 変だと思つたら野球放送と相撲の  
 実況が混線した様でございますの  
 で残念乍らこのあたりで次の放送  
 にうつることに致します



一度に三つの良縁に

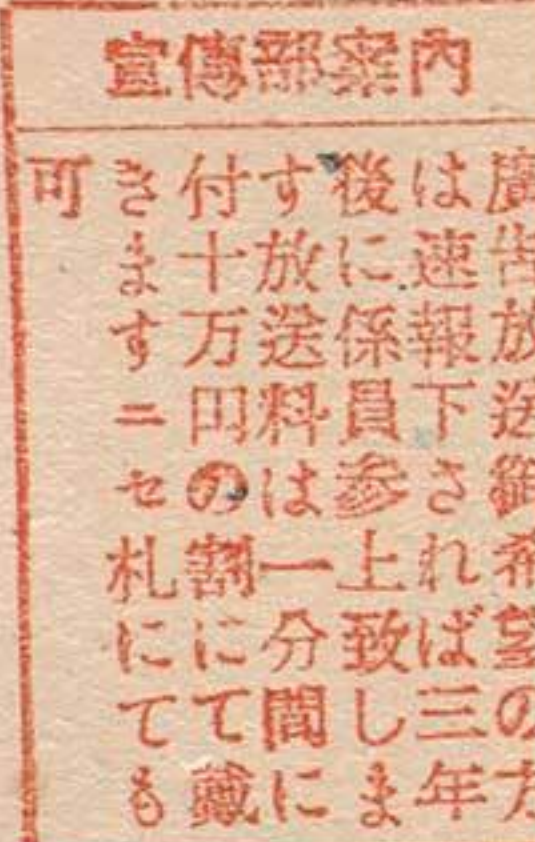
美男子ときていますので、取捨選択に迷つています。どうすれば宜しいでしょうか？

**答** 貴女は一度にその三人共持ちたいようですね。それはいけない。何といつても条件に甲乙があるアノ一事です。これが和合のカギ辛不幸の分れ目ですが、だといつて貴女が直接テストしては、三人とももう結婚した氣になれましよう。当方には専属の女社員がおりますから、御三方を調べるのに事欠きません。そのあと私が一寸貴女を見せて頂くだけで、すぐ詠え向きのサイズを合せます。

吉葉土俵際で走つて居ります  
アツ遂に打ちやりましたアウトアウト  
ト行司の手が高く上がりました吉葉  
の勝うつちやつてランナー吉葉山の  
勝……







アブレ娘に大恐慌

實用珍案特許

貞操保全器現ある

誘惑、姦通、暴行等新聞の社会面に  
は、毎日貞操を冒された婦女子の事  
事で埋つております。然しこれ等は  
表面上に現れた一少部分に過ぎない  
のであります。これ以外社会の裏  
面にかくれた幾多の凌辱事件は到底  
数え上げる事は出来ないものでありま  
す。露骨に申し上げれば、世間に現  
れなかつた出来事で、自己の貞操を  
破られ、その名誉を傷けられた場合  
と雖も、その迫害を秘密の裡に葬り  
而して姓名を社会に公表せられるの  
ありす。これさえお用い下されば、如何なる出歯亀に遭遇致しましても、絶対に貞操を犯されるような事はありません。婦女子はこの貞操保全器という鉄条網を張られたならば、全く鬼に金棒、迫害皆無、家庭円満にして且つ安全は請合ひであります。尙本貞操保全器へ実用珍案第五八二六四三号の特色及び効果については左記各項に記載してありますから是非御一覽の上御試用を願いたいののであります。



一 例えば御本人同志が承知でも保全器の鍵を監督者等が持つてゐる場合は鑑に關係することが出来ませんが御自分で鍵を持つておれば自由です。

二、客に接する芸妓、女給、仲居

酌婦の方々がこれを御使用になれ  
 ば助平男と雖もこれを犯す事に出  
 来ません。殊に一般婦女子の外出  
 に用いる時は、絶対に危険の予防  
 が出来ます。

三、放逸不良性を有する者にはその  
 操行を矯正する事が出来ずし、  
 女学生等には不良青年の誘惑や迫  
 害を蒙るような心配はありません  
 四、この貞操保全器は老幼、男女の  
 何れにも使用し得る構造でありま  
 して、特に使用したままで就寝、  
 大、小便にも差支もなく、また、  
 腹部を暖め得る装置になつており  
 ますから、暖の冷える憂なく、衛  
 生上にも至極適した品であります  
 五、月経帶にも兼用が出来ますから  
 甚だ貴重な品物であります。



特別講師  
ヴァン・デル・ゾオ

皆様の健康の時間が参りました。  
今日は特別講師としてダアン・デ  
ゾオ博士をお願い致しました。  
夫婦間の衛生及び健康法について  
話し下さる事になつて居ります。  
えい私がダアン・デゾオでありま  
す。とにかく昨今のアブレ若夫婦と  
申しますものはどうも私達の時代よ  
りも輸をかけて好きな様でして昔の  
川柳にあるように「若夫婦豈もタ  
スのカンが鳴り」どころか朝から晩  
らし纏けるのがもう常識になつと  
嫌ですワイ、若い中は精力があり今

六、体裁よく、品質堅牢でありますから、永久に使用保存し得られます。若し以上各項の記事に相違の点があれば、何時でも御取替致します。

御入用の方は、著名なる藥店、雜貨店にてお求め下さい。発売早々の事でありますから、若しこれ等の店に無い節は、直接発売元へ御注文下さい。れば直ちに御送付申し上げます。

一打以上御入用の方、又は取次販賣御希望の方は特に御相談に応じます。尙御一報賜れば早速美青年係員見本持参の上、着脱御使用に關し、詳細御説明申し上げます。

貞操保全體發賣元  
男女貞操保全協會

つてゐるやうに思つてゐるからいいやうなものやが、あやアとつても健康の爲に悪いですぞ結婚した以上離れる訳でもないしお互にそう急がないでゆつくり人生を享樂したらどんなもんじや。

よく考えて見なされ一國の戰鬪行爲にどれだけの貴重な物質を失うかを考へて見たら、翌朝会社へ出勤する途中で太陽が何故こんなに黄色いか足が何故こんなにフラ／＼するかと云う事もわかると云うもんですぞ明治の大医松本良順と云う日本の医者も云つとる様に「房事は健康の人各々その体力に應じて疲れざる程にすれば却つて養生に適せり、これ人間自然の本性にして止まるを得ざる」と云ふなり。」となにごとも程々にせいと云うことですじや。そしてその後は出来るだけ安眠せよと教へて

求人の時間

求男女好事家

男女年齡を問わず機智に富んで人生を愉快に楽しむことをモットーとする精力旺盛なる方々を求む。好色に興味を有す方なれば最も可。飛騨優遇、条件其の他委細は御照会下さ

エロニヤ人生同人



て  
居る様によく眠れることが大切じや  
貝原益軒君の「養生訓」では二十  
才のものは一日一回洩らす三十才の  
ものは三日に一回四十才合のものは  
六日に一回との事ですすがこれはちよ  
つと内輪すぎて諸氏には適用しがた  
いものですじや、しかし本当の事を



民族宿命

の悲劇に

哭く

混血児

目撃



## 第一章 爆弾と薄化粧

### 一、反戦ビラ

午後のごつた光線をななめに受け、それぞれ陰えいを造つた大建築物が街埃の中にそびえている。いらかの海を、一直線にさい断する京城鐘路通のできごとである。

鐘路通といえは、京城で唯一のいんしんな商業街だつた。高麗時代風の建物と、二十世紀時代の建物とをつきまぜた、東洋風の建築街なのだが、今日もこの大商業地帯は、馬糞の粉末と、舞い上る塵あいと煤煙とにすすけ汚れごう音にわき立つていた。

両側のほ道にはラムネの泡みたいに人々の群が雑とろし、車道には、自動車が咆こる疾くし、いたみ果てた電車が、そろそろとさまざまな色彩の人間を吸い込んだり吐き出したりしていた。

194×年×月×日午前十一時……一せいに敷かれた非常警戒線！

警察官である私は、その警戒線の一点に配置され、無帽、シルクボーラの夏服に白い靴で、街路樹の下に突つ立つていた。

私は今、自分自身のこころの中に、街のこころを感じていた。それはこの街一帯が朝からこころふんしているからである。今にも狂い出しそうなんふんが感じられるのだ。或る大きな破局に爆発せんとする一種異様な空気に圧せられているように思われるのだ。

崇洞に於ける民族主義の学生達と非反戦派学生達との衝突事件によつて、反動的に

生じた反戦思想は、今や猛烈な悪疫の菌みたいにまん延し、猖けつしている。これらの事件を報ずる新聞社の号外はさん布前にことごとく差押えられたが、校門を破壊した生徒達は既に朝から街頭に雪崩でているのだ。

急角度にとんがった向う側の、高い塔の時計が午後四時を指している。晝前から立ちづくめなので、靴の中で汗をかいだ足裏から疲労がはい上ってくる。身体がものだらかつた。が、私は思わず、あつ！と叫んだ。

泡のようになごめいている、十字街の安全地帯附近の群衆が、ダイナマイトをくらつた水面の如く、震動し動揺するのをふと見たからである。いや、もつとそれよりも前に、その群衆の中から、一個の白いかたまりがはおり上げられたのを目撃したのだ。それは空中で、ばつ……と粉末みたいに散つた。遠方から見ると、銀粉の如く、さらさら銀色に輝く紙片が、にわかに散乱しよるとあわてふためく群衆の、頭上に落ちてゆくのが分る。

まごうかたなき反戦びら——

今日は朝からそうした不穏びらが、京城中の雑とろ街をえらんで、幾度か、奥に大膽に、巧みにさん布されているのである。それ許りではない。それと同時に、主義者達による官公庁の襲撃、要路高官人の暗殺……とかいった樂觀をゆるさぬ情報もキャッチされている。それがために発令された非常





## 木之下白蘭

### 繪 美濃村 晃

警戒なのであつた。

びらが散ると、その真下の群衆達は、さつとたがをゆるめたように崩れひろがり初めた。朝からこの大都会に流布されている諸種の流言蜚語に、おびやかされている人達は、何よりもまづ、側杖やとばつちりをくらい、しゅん烈苛酷な特高警察や憲兵達の取り調べをうけることを、身の毛もよだつ思いで恐れていたからである。宣伝びらをはおつて行方を晦ますしゅん敏な犯人よりも、この都会人達は鋭敏になつていた。だから彼らはさつと散り初めたのである。びらを拾うものは一人もない。足ばやに人道の方に急ぐ者、何げなく無関心の態度で歩き初める者、にわかにかげ出す者……人々は十字街を交錯する電車や自動車の間をもばらばら横ぎつた。

びらが最初散つたとき、私はつづてのうにその方にかけて行つた。すると沸とうしているその群衆の中で、メロディアスな声がした。

「皆様・よろぶん！」

それは透き通つた秋の水を思わせるように澄んだ年若い女性の朝鮮語だつた。落ちついた物靜かな口調であつた。彼女は、さう叫びながら、二回目のびらを空へ向け高くほうりあげた。ほうる腕が白焰のように群衆の頭上に動いた。私はその群衆の中に真白い顔が一つ、怒とりの如く揺れ返しているたくさんの男達の間にもまれていたのを見た。それはあたかも、深淵に突然生じた渦の中に捲き込まれようとしてぐるぐる廻っている、白い一輪の花びらを見るような、異様な光景であつた。

「あいつだ！」

女の顔が、夜空の果に見出された不思議な星のように私の眼心をひく。私は突然、その女を目標に、その沸とうしている群衆の横つ腹へ、突つ込んでいつた。どこかで隆柄づくな、威勢の宜い怒声が聞える。物凄く高ぶつた群衆は、到々十字街の電車と自動車を停めてしまつたらしい。「こら、こら！退け退け。退かないか！」「車道へは入つちやいかん。あつちを歩くん。人道を歩くん！」

それは無論、散らしにかかつた騎馬巡査達の叱声であつた。それで群衆がはぐれかけた時、私は、その群衆の中から巧みに拉した女を、白い大きなけだものでもひこずつてゆくように、はアはア喘ぎながら、小さい露路にひきずり込んでいた。

「手を放してちようだい。腕時計がこわれちまう！」

と、女は憤がいて立ち停つた。ぱつと髪を毛をうしろに払いのける太い腕が白磁のように白い。その腕に宝石みたいに光つた小さな腕時計——。

私は、彼女が時計を改める時、その時計のかたわらの、やわらかそうな皮膚に、真赤に血をにじませて残っている私の手の把握のあとを見た。怪異な性的感情に似たものが、ぶくりと湧いて消える。

一寸時計を調べると、そのまな差を女は真正面から私にぶつつけた。

日本と日本人に恨みを抱く美貌の日鮮混血児が父の國へ報いる爆弾の洗禮、同胞相搏つ動亂朝鮮の眞只中に咲いた可憐な一輪の花、主義に生きるか。民族の血か、宿命の悲劇に泣く日鮮混血児

「あなた、警察なんですか？」

薄く、口紅のあとが、その唇に認められた。一個のちつぽけな腕時計に働きかける唯物的な乙女の感情——毒々しいせりふ——を飛ばせる唇に、尙口紅をほどこそうとする女らしさが、私をついほく笑ませた。

女の顔はまるぼちやで、柘榴のはなびらみたいな唇をしている。それがこらふんのために凍つたようにこわばつて見える。

「無論警察の者だがね。まア署まで行つて貰おう」

私は静かに、優しく言つた。すると彼女は、ふん……といったような笑を漏しながら真つ先に立つて歩き初める。

女は白い面纱のような薄い絹麻の赤衫（上衣）を着ている。それは蟬の羽みたいに薄い。太い腕がそのつけ根からすかして見えている。下には、ぱつとすそのひろがつた黒の筒裳をけいて、ふくらはぎあたりの曲線が美しい。潑刺とした元氣のよい歩きかたである。

## 二、爆風のいたづら

女のどこからか、ふと、後方一步をへだち歩いて私の鼻先へ、何かの香水の匂が漂うてきた。

口紅・香水・反戦ビラ……

私は歩きながら親しい言葉を考える。この唯物的な、乙女らしい感情しか持つてい





ないような少女を、憎めない気がしたからである。

「君は佛花女学校の生徒だね何というの」と物憂しい口調でたづねてみた。

「佛花だなんて警察：つてよく研究しているのね」

毒々しい位、感情や想念を、彼女は一時に吐き捨てるように忌々しげに答える。屈辱感がその眼底から、せいえんなほむらとなつて燃えて出た。時計を気にしたり、口紅を愛する彼女ではあるが、きまりを悪がつたり、悔んだりなんかしていない。天性の女性感情をなぐり捨て、全身の反抗を示せうとする。だが私から見れば、所せ

んそれは矢張り虚勢に過ぎぬ。私は動じなかつた。

「佛花か、佛花はちよつとたちが悪いようだね」

「ふゝゝ：そうかも知れないわ。警察の人達から見たら。相手によるのよ」

「なる程ね、ソ連あたりの人が見たら良いんだらうね」

とせゝら笑つた。すると冷然と、

「そうだわ」

とはじき返した。

「君も似而非（ニホニハ）コンミニュニストか」

「あなたは何か？ 帝国建設者（エンペイアビルダ）つていうのね」

「まさか：でも似而非（ニホニハ）では仕方がないさ」

「似而非（ニホニハ）か何か見えていて下さい」

一抹のし笑が毛ばだつた頬に走つた。警察署の門をくぐる時、彼女の顔色は螢光燈をあびたように青白かつた。広場のさき大きな建物、真正面の玄關（くわん）を洞穴（ほら）のように見せ、見張の巡査が三八式歩兵銃を片腕にぶらぶら警戒していた。

その玄關まで五十米位の距離に近づいた時だ。女は立停（たちどまり）つた。

右手を裳（もも）のポケットに突つ近んだ。ぎら

ぎらと眼がりん光のように炎上した。裳（もも）を乱しながら、大きな響（ひび）をちよつとひねるようにして、全身をむんと伸した時、彼女の手には胃散の空罐（くわん）みたいなものが光つていた。彼女はそれを、玄關の洞穴（ほら）を目がけてほうりつけようとした。

腕が大きく空（く）に白い弧を描いた。閃光（せんこう）のようなものが頭脳（ずなう）にびんときた。

点火された爆弾！

あつと叫んだ。恐怖心をねらい、ぶすぶす燃えくすぶつたあげくに炸裂する仕かけになつてゐる、彼ら一味独特の、一種の手製時限爆弾——私は敏捷な野獸（やじゅう）みたいに女に飛びつき、その腕のつけ根あたりを力一ぱいなくりつけた。

奪（うば）われまいとする彼女の必死の抵抗力は案外に激しかつた。ぶくぶくした深い弾力にふくれあがつてゐると思つた肉体は、意外に固くひきしまつてゐる。緊張した筋肉は粘土（ねんど）みたいな感じだ。あなどり難い反抗である。赤（あか）い裂ける。琥珀（こはく）の鉤（かぎ）が光つて飛ぶ。脂肪臭（じやつしゅう）い白い胸がこぼれ出る。

美しい旋風（せんぷう）のように渦巻（うずま）きながら私達は一緒に倒れた。すると、三尺位前の、土の上に転がった罐（かん）から、薄黄色（うすきりやう）い煙（けむ）がぶすぶす噴き出てきた。

「おい、腹（はら）ばえ、地面に腹（はら）ぼろんだ！」

絶叫（けつごう）し、私は兇暴（けうぼう）に起き上ろうとする女を突き倒した。まくれた裳（もも）裏から雪白（くわくぱく）のズロースがこぼれる。白い太ももが土に汚れている。私は煙を噴き出している罐（かん）を素早くつかんで広場の中央に向つて投げた。炸裂瞬間（ざれつしゅん）の死角（しやくかく）を利用しよう、とつぎに腹（はら）ばつたまま、女を反対側（かたがは）にし、動きもくくのを固（か）く抱いた。

だだーん……建物に反響（はんきやう）して、ごう然（ごうぜん）た

る音がした。爆風（ばくふう）が大地の震動と共に頬を殴（う）りつけ、やがて土砂（どさ）がばらばら降つてきた。その時私は、彼女が美（うつく）しき虫（むし）けらみたいに大地にしがみついているのに気がついた。小さくおののいているようであつた。

「なアーんだ。手製爆弾（てせいばくだん）にしてはちよつと凄（すご）いや：だが、こんなものを持つてゐるなんて危険（けんけん）千万（せんまん）なお嬢（ぢやう）さんもあつたもんさ」

笑いながら土埃（どがい）を払（は）うと、凍（こ）つたように突つ立つた彼女の筒裳（つつも）をばつととはいてやり、時ならぬ爆発（ばくはつ）の音（おと）に飛び出した多くの署員（しよゐん）達の好奇（きうき）的な視線（しせん）を避け、私は彼女を二階（にかい）の調室（てうしつ）に連行（れんぎやう）した。

概略（がいりやく）の口頭報告（くどうほうこく）を上（う）司（し）に済（す）ませると、私はおもむろに、女のこうふんの鎖（くわ）まるのをまつた。その間に、下宿（げしやく）に電話（でんわ）して、娘（むすめ）の紅貴（べにき）に——警察署（けいさつしよ）の小使（せうし）を寄越（よこ）すから赤（あか）い一着（いちしやく）暫（しばらく）貸（か）してほしい——と依頼（いひん）した。

眼前（がんぜん）の女の赤（あか）い赤（あか）い、只今の騒（さわ）ぎで、むざんに裂（き）けちぎれてしまつてゐるのである。乳（ち）白色（はくしき）の気のうかなんそのように、程（ほど）なく思（おも）ひ春期（はるき）の生理（しやうり）に花開（はなひら）こうとする素裸（すだ）の胸（むね）は、中央（ちゆうさう）に深い凹（くぼ）みを生（な）ずる程（ほど）、もう両側（りやうがは）に豊かな突起（とっき）を見（み）せ、ちやうど私の眼前（がんぜん）にあつた。

三十分位の、沈黙（しんもく）の時間（じかん）をおいた。その間に私は煙草（けんそう）を吸（す）い、黄昏（たふしん）近い窓（まど）外の美（うつく）しい夕映（ゆふえい）の空（そら）を見た。

やがて、住所（しよじよ）氏名（しやうめい）をたづねると驚（おどろ）く程（ほど）なおに、南山（なんざん）町（まち）番地（ばんち）、化粧品商（けしょうひんしやう）：寒素（さんす）英（えい）の私生児（しせいじ）、寒映（かんえい）子（こ）、当（たう）十八（じゅうはち）歳（さい）と答（こた）えたが、

「身体検査（しんたいけんさ）をする。所持品（しじひん）があつたら全部（ぜんぶ）出し給（たま）え」

とちよつと厳格（げんかく）な口調（くうてう）で言うと、映子（えいこ）は激（げき）しい眼付（めづ）で私（わたし）を睨（にら）み返（かへ）した。だが反（はん）ばくはしない。胸（むね）の凹（くぼ）みの奥（おく）へ手（て）を差し入（い）れる



と象牙のコンパクトと、わに草の小さいがま口を取り出して机上に黙っておいた。その指に、柘榴石の指環がはめられているのに初めて私は気づいた。

「お化粧道具とがま口と、爆弾か……どうも妙な……だが大した組み合わせだね。まさかピストルなんか持つてないだろうな」

「お調べになつてみると宜いわ」

「持つてないというんだね。その方が宜いんだ。殊に爆弾なんか持つてない方がよかつた……と、君のために深く思う。君達が持つて歩くのは、学校の教科書と化粧道具に限る。一人しかない親に心配かけるの悪いぜ」

平凡陳腐だつたが、おだやかに親身にそう言つてやつた。するとそう言う私の眉間から、突然ぼたりと落ちたものがあつた。

「あ、血……血です！」

と、映子が突然叫んで私を驚かせた。

爆風と共に叩きつけた石ころか何かが眉間をかすめたものであろうか——何時の間にか、にじみ溜つた血が垂れ落ちたのだ。

私は、背後の戸棚の中から救急箱取り出し、蓋を開いた。

「爆風のいたづらだ。大した事はないが、破傷風菌でもは入るといかなからね」

いたづらっぽい調子で、うつむいてしきりに何かを反すうしている映子を見た。病院臭い薬品の匂が流れてくる。小さい区かくが幾つもあり、紫や青や、赤の小さい薬びん、金属製の罐がはめられてあつた。油がみやガーゼを取り出し、

「あ、ちようど宜いや、ちよつとこのコンパクトの鏡を貸して貰おうかね」と言ふとそれまで石の如くみぢろがなかつ

た映子が突然顔をあげた。

「私が……」

無愛想ではあるが、或る決意を示している。驚くべき変化だ。

「え？き、君か？ふむ……そう……じゃアやつて貰おう」

こんな経験は多年に亘る私の警察官生活に、夢にも想像したことのない事柄であつた。如何なる心理の変化であるか？詐謀か

或る欺惑の手段であらうか——だが、今や冷凍した映子の顔は、陽のめをみた朝霜の如く、そのこわばりを失い、

ほのかな憂いをさえ湛えながら、小さい鉄の輪に、むつちりと白く肥つた指をはめるのであつた。洋銀の鉄はびかびかと夕焼空を反映し、沈黙の中に油紙をきる音がさわやかに聞える。

油紙に薬品を塗り、絆瘡膏を準備し、ガーゼにオキシフルをにじませると、映子は立ち上り私のそばへ寄つてきた。

ちよつと薄暗いので電燈を点け、私はその真下に立つた。

眼の前に立つた映子の顔は、灯影を映して異常な美しさに輝いた。ちようど、酔姫——と称する薔薇のはなびらに似て、淡い明黄色にはえて豊えんだつた。映子は電燈に手を伸すと、それを自分の頭髮の上にもつてきて、まじかに傷口を照らした。

私の視野に、突然白いものが横たわる。それは肱のところまで深くびれを生じて、くの字型の曲線をつくりながら、電燈に伸びた映子の太い腕だつた。きめの細やかな皮膚に小さい産毛が金色に光っている。だが、その腕は男のように隆起した筋肉こそ見せないが、逞ましい發育を遂げ、突けばゆらゆら揺れそうな柔かさではなさそうだ

むちむちした弾力がひそんでいるのだらう破れた袖の奥に見えるその腕のつけ根は急に逞ましく太くなり、ぶ厚い脂肪の塊みたいな肩に頑丈にくつついている。幾らか凹みを見せる腋下の、二三本の薄い毛の間から、乳臭い分泌物が仄かな匂を放ち、私の鼻のあたりへ流れてきた。

私はいつの間にか、自分の眼が、その腕の美しい養分を吸いとるみたいに劣情を湛え、なめくじのようにその腕にはいつり廻つていのに気がついた。

「これで宜いと思ひますわ」

と映子は私から靜かに放れてゆこうとした。

「うむ、有難う」

と言つたが

「映子！」

私の手は彼女の両肩にあつた。不意に恐ろしい力に引っぱられたように、よろよろと映子の身体は、私の胸によろめきかかつてきたが、私のこの発作的な不可解な行動に、誤解をし、驚いたらしい彼女は、さつと襲い上つてくる不安と疑惑のためにがく然とし、がたがたと震い初めた。

私は暫くして、砂のうのように重いその映子を靜かに押し放した。

何事もなかつたという風で、映子は薬品類を藏い初めたが、夏の窓にはらむ薄絹のカーテンみたいに、大きく膨んだり、しぼまつたりする胸の喘ぎは仲々やまない風であつた。

「いい子なのに、どうしてあんな無暴なことをしたの？」

私は不憫でたまらなかつたのだ。かき抱いてやり度い不思議な衝動におそわれて、私はそう言つた。すると彼女は黙つてうなだれる。私は、そんな映子が、どうしても





ほんとの心底から兇暴な人間だとは思えなかつた。爆動に踊つただけなんだ。唯の娘じゃないか——と私は考えるのだ。

「仲々立派な看護婦じゃないか。こんなこと学校で教つたの？」

「……………」

「反戦ビラまきや爆弾投げの手伝なんかしているより、戦線に出て負傷した君達同胞の看護でもする方が君には似合いそうだ。どう？そんなことを考えてみたことないかね」

「……………」

映子は答えなかつた。こつこつとノックの音が聞えた。お……と答えると扉を開いて、小使の李老人が入つてきた。私の下宿から、娘の紅貴の杉衣を借りて持つてきたのだ。

### 三、赤杉の主

私は報告書と一緒に、寒映子の身柄を特高係の方へ引き渡したが、それは私の本意ではなかつた。しゅん烈苛酷をきかむる特高警察の係員の取調べを知っている私は思想的にも肉体的にも未熟であるばかりでなく、案外に温良な性格の映子に、肉も飛びそうなきびしい取調べを加えては、それこそ彼女を悪道の深淵へと追い込む結果になるからと思つたからだ。

殊に、あの爆弾の炸裂する瞬間大地にかりついていた心境には、確かに大きな変動があつた筈である。私はもつとそれを見きわめたかつた。然し、私には、私の働く部署があつた。磨き次第では立派な珠になりそうな原石を掌中より喪うような寂寥を感じながら、彼女を特高係に引渡し担任の職

務に精励する外なかつた。

或る日、下宿の二階の裏縁に座布とんを敷いて、丹念に拳銃の手入れをしていると静かな物の氣配がして、珍らしく薄えんじの赤杉に、青磁の長い裳をまとつた紅貴がしとやかに入つてきた。お茶を運んできて呉れたのである。

高麗焼の湯のみを百日紅の茶たぐにのせ、壮油紙貼りの床におき、物静かにこちらの方に滑らせるその、何時もと変らぬ、何かの花みたいに美しい紅貴を、私は何故かしみみと正視しがたい氣持であつた。

「そんなにしていると疲生みたいだなア」  
紅貴は一寸顔を赤くし、くすりとおかしそうに笑い

「それ、何ですの？」

と不思議なものを見るような調子で、物珍らしそうに覗き込んできた。

「ブローニング拳銃さ」

「まア、なんて小さい拳銃でしょう。玩具みたいだわ」

「小さくつたつて拳銃は拳銃さ。この精悍な表情をこらん。凄いんだぜ。柄にない呻をあげて飛んでゆくんだ。さく岩機みたいに、岩だらうが鉄だらうがぶつ通すんだぜ。只貫き通せないのは紅貴の胸だけさ」

私は滅多に言つたことのない冗談を言つてからかつた。

「まア冗談ばかり……」

「いや冗談じゃないらしい」

「……………」

「そうだろう紅貴」

「でもそれどういう意味なんですの」

「紅貴の情感は武装しているということさ」

「……………」

「難攻不落つてところだね。健二達はどうかね。近頃寄つてこないの？」

健二達というのは、北隣の春養館に下宿している京城医専の学生達のことと、彼らが美貌の紅貴に言い寄ろうと策謀していることを、私は常平生ちゃんと知つていた。

「嫌ですわ。そんなこと仰るの」

冗談がそこまできると、まだ女学生の紅貴は明らかに不満の色を見せ、そう答えた「そんな服装をしていると大分肥つて見えるようだね」

何時も女学生服で、滅多に長い裳なんかはいた紅貴を見たことのない私は、話題を転じてそう言つた。

「あら、そうか知ら」

「何時もその方が宜いね」

紅貴は初め、少し顔を赤らめ、黙つて笑いながら私を見返えそうとはしなかつた。だが果物皿に盛つた干なつめを箸にはさむと、初めて何かしら深い色を湛えた眼で、ちらちら私を見た。

「いかがですの？」

と言つて干なつめを差し出す、むつちりと肥つて、そのはさむ赤いうるしの塗の箸の色にさえ染まるかと思われ指の白さが強く私の眼をひきつけた。すると紅貴は、突然、

「ね、玻玖さん、私の赤杉……誰に貸しておあげになつたんですの。教えてちょうだい」

「……………」

「ねえ？」

「それをきいて何にするの」

「知りたいのです」

きつぱり言つた。署から帰宅して、紅貴に赤杉を借りたお礼を言つた時、彼女はその着物の処置をたづねたが、或る人に貸し

てやつたんだよ……と言つただけで詳しいことは言明をさけた。まさか爆弾犯人に着せたとは言えなかつたからである。すると紅貴は反対に、必死にそれを知りたがつて、しつように私の説明を迫るのであつた。

「あとで分るつたら！」

私は強い口調で言つた。紅貴はうたれたように私を見た。次第に、水底に沈せんした乳白石みたいに血を退いた頬は、にわか

に凍つてきた。

「怒つたの？」

「いいえ」

「だつて顔色がおだやかでない」

「……………」

「ではこれだけ言つところ。或る女学生に貸してやつた……とね」

「その方玻玖さんとどんな間柄なんですの？」  
玻玖。教えられないなんて……

紅貴は静かに立上り、夕映の射し込む縁側の硝子戸に白い窓帷を引くと、私の傍をすりぬけて階段のある廊下に出た。私はその紅貴を急にぎらぎら光る眼で追つた。

赤杉の赤い唇元へ押し当てるようにし、青い色の裾裏から白い足うらをちらちら見せながら、逃げるみたいに角をまがつた、紅貴としては珍らしく深刻なそのしぐさが私の眼底に焼けついて消えなかつた。

追いかけるような思いで階段のところまで行くと、ぶんと、泰山木の花の匂が鼻をついてきた。おや、花が咲いたのかと裏庭の濃緑の中に雪のような白さで咲いている花を見ると、しんみりした心で花なんかこうして眺めるのも久しぶりのような氣持であつた。



## 四、日鮮混血兒

外勤巡查達の監督と教養を担任している私は、多忙のため滅多に特高警察室なんぞに顔を突込つてこむことはなかつた。

寒映子は、自分の属する移動秘密指令部のことも、女生徒達のグループ関係も、何もかもす直に言つてしまつたらしい。只、爆弾がどこで造られているかは全然知らないと言ひ張つた。それは何も強情に押し隠しているのではなく、彼女達にはそんなことは分らないのが眞実である。—そう信じていた私は、それをきびしく追求しようとする同僚の係長に警告した位である。

そんな事柄よりも、私が驚いたことは、映子が、当時、妓生だつた寒素英と春田達雄という若手の朝鮮総督府理事官との間に生れた、いわゆる日鮮混血兒であることであつた。だが彼女は生後間もなく生母と共に、父親の春田理事官から弊履の如く捨てられてしまつたのだ。日本から新妻を迎えた春田は、黄海道や忠清南北道を転々したあげく、東京に帰京して以来、風の便りも無いのだつた。

長ずるに従つて、映子の、そんな父に対する憎悪の念は募りこらじ、果は日本人、日本に対するしき烈なしんい反感となつてきた—というのである。犯行への動機もそんな事柄に胚胎したことが想像され、私の映子をれんびんに思う心は深まりゆくばかりであつた。

或る日私は、警察署の廊下で、映子の生母である素英に出会つた。まさに沈魚落雁しゆうり月閉花の美というところだろう。生色尙おとろえず—驚くべき美貌の所有者であつた。一目で宜いから映子に是非面会させて呉れと嘆願するので、私は所定の手続を済ませ許可を得て、面会ができるよう取り計らつてやつた。

埃に白つぽくゆがんだ硝子窓のならんだ廊下を踏み鳴らし、私は薄暗い留置場には入つて行つた。

「おい、寒映子に面会だ。出して呉れ」

私は看守の巡查に言いつけた。だが私は間もなく重たげな軋りをあげて開かれた檻房から出てきた映子を見て、慄然と驚がくの眼をみはつた。

暫くの間彼女は、別人かと見違える程しようにすいし果てゝいた。輝きを失つた瞳が落ちくぼんだ眼くわの底にしじみの穀みたいに光つている。肉のそげてしまつた頬や岩石のようにとんがつた顎は、無限の淋しさを満えているのだ。

「お母アさんが会いに来てくれるよ」

いたわる眼で見た。

「落みません」

映子はこ声で言つて微笑もろとしたが、唇のほとりがびくびくけいれんし、それは笑いにはならなかつた。その眼にはもう泪がにじみ出ていた。

「だいぶ、やつれてしまつたね。いかなア、そんなに元気をなくしちゃア」

私は留置場の隅にある、所持品保管戸棚の扉をあけ、保管中の、映子の所持品である、象牙のコンパクトと口紅をとり出した

余りにも不憫だつたからだ。これでは第一、母親の素英も驚くだろうが、こんなに打ちひしがれたみぢめな姿を母親の前にさらすことは、映子にとつては死にまさる苦痛であらう。彼女のすさみはてた眼底は尙屈辱の念に燃え光つていのではないか—

「さ、少しお化粧でもして行こう。ね：お母さんがそんな顔を見たらどんなにびつくりするか知れやしないぜ」

私は象牙のコンパクトと口紅を手渡そうとしたが、映子はそれを受けとろうとはしなかつた。感がいきわまりはてた風で、只涙に濡れ輝く眼でちつと私を見た。かと思ふとせきあげてくる激情が破裂してしまつたみたい、両手を顔に押し当てると、わがつと声をあげ、濡れたような重さで、思いがけなく私の胸に泣き崩れてきた。

「時間がない。さ、元氣を出して」

映子の身体を押し放し、私は促し立てたさて映子親子の面会はその風で、どうやら終つたが、済まないのは映子の、この薄化粧の問題であつた。之れは亦、絶好のニユースバリユウある資料として、社会部の新聞記者達の好餌たらざる筈がない。

「爆弾女学生に薄化粧」

留置場の看守あたりが喋つたのか、そんな三段ぬき標題で、新聞はこの問題をでかでかと妖しき色香を漂わせて報道した。お蔭で、私は、警察官としてあるまじき感傷をむさぼり、下らぬ宋じよりの仁を施したというかどにより、減俸百分の十五の罰法処分に附せられてしまつた。

寒映子は、一もう打尽に検査された一味と一緒に、治安維持法とか、爆発物取締罰

則だとか、凡そ女学生にふさわしくない、国法を犯した兇悪な少年犯罪者として体刑を受け、K刑務所に送られていつた。

私は厳正に自己の感情を三思三省したがその都度、これまでの映子に対する感情が愛恋の情といふべきか、或は惻いんの情に過ぎないものであるか、又は痴情に基く情炎の発露であるか、それは之から次第にはつきりしてくるだろうと結論するのであつた。

が、どつちにしろ検査した警察官と検査された犯人という大きな溝渠は、二人の間に超え難い遠い距りを再確認させた。然し到底常識を以つて判断出来ない、私の映子に対する狂熱的な感情は更に飛躍して、遂には映子に殉じたいシヨックにかられることすらあるのだつた。寒映子が入獄してから、私の生活も映子と相似て暗澹としていた。

はからずも私達をおそつた運命の悪戯を呪わざるを得なかつた。私はその生涯をかけて愛すべきものが、なんと此の手で逮捕し、刑務所へ送つた寒映子であることに、気づき、この意義は日増しに私に堪え難い苦悩を与えた。

この苦悩は、映子に幸福の日を迎える迄は打続いてゆくであらうと考えると、私は更に暗澹とした氣持になるのであつた。

## 第二章 獄中に咲く花

### 一、閃家の娘

「玻玖さんのお氣持：よく分りますわ」

爆弾女学生に薄化粧—新聞の記事を見た時、紅貴は簡単にそう言つたきり、深い感



動を示すような素振りも見せず、映子のこ  
とにはそれつきり触れなかつた。ふだんと  
変ることなく、私の室内の掃除整頓、洗濯  
物なども、従来通り女中にまかせるような  
ことなく、自ら周到に配意して呉れた。

黙念と私は、机の上を色どつてゐる花が  
めの白ばらを見た。雪柳を風雅に添えた姿  
態が、黄昏の光線のにじみ込んだ青銅色の  
壁を背に、静かに息づいてゐる。じつと見  
つめてゐると、そうした小品の盛り花にも  
教養深い紅貴の気品のひらめきが感じられ  
てくる。が、それもしばしの間、白ばらの  
花は、何時の間にか映子の顔に見える。網  
膜はぼやけ果て、しまう。

はつとして、私は周辺を見廻す。その  
私の眼に、暮色の空がしみる。現実の世界  
が急に意識によみがえつてきた。茜をさし  
た、美しい夕焼空を背景にして、街埃の中  
に黒々と一角を領してそびえてゐる東大門  
の城壁が、遙か彼方に見える。東隣りの長  
崎電気商会の裏庭で、細君が行水を初めた  
らしい。白豚のように肥満した裸体が、珍  
奇な花を一ぱいつけた源平木の蔭に動いて  
ゐる。

ひとしきりかきしましい電車の音が遠のく  
と、暫く森閑となる。その静寂の中に、  
廊下をへだてた紅貴の室から、朗読の音が  
聞えてきた。

あだし野の露、鳥部野の煙立ち去らでの  
み住み果つるならいならば……

教科書の徒然草らしい。私はそれを聞い  
てゐるうちに、紅貴に今日こそ頼んでみよ  
う……かという気になつた。と、いふのは、

爆弾事件の日、紅貴から借りて映子に着換  
えさせてやつた赤衫を、実はずつと以前に  
映子の母の素英から、私は返して貰つてい

るのであつたが、私はまだそれを紅貴に返  
却してゐなかつた。それはまだ私の手箱の  
中に藏い込んだまゝになつてゐる。私は何  
故かこの赤衫を手放し難く思つた。幾度か  
紅貴の承諾を得て貰い受け、終生の記念品  
としたい、と考えながら、何か逡巡し勝て  
ないのびのびになつてゐたのである。

私は襖を開くと、ぷんと香氣に満ちた  
紅貴の室には入つて行つた。狭いが洋爐ま  
で設けられた、整つた室だ。

街路に面した窓に、淡紅の窓帷が垂らし  
てある。綺麗に拭ききよめられた卓子の上  
の真赤な軸の万年筆もなんとなく艶めかし  
い。物惱ましい風情うつむいて立つてい  
る硝子戸棚の中の抒情人形、卓上静物の油  
絵の額、虎紋石のインクスタンド、洋銀の  
機械をびかびかが光らせてゐるミシン、一輪  
のクロンミカドをさした紫のカットグラス  
の壺、猩々木の植木鉢、黒い皮張の深い椅  
子金持ちの娘つて、何とぞいたくな室を構  
えてゐることか――

本をひろげてゐる紅貴の白磁のような頬  
は窓帷をこす光線をうけ、薄くれないの、  
不思議な美しさに色どられてゐる。顔のよ  
うではない。何かのたべものみたいだ。

真珠色の薄い赤衫に、ひだの多い雪白の  
裳をまとつた清麗な紅貴は、豊かな教養と  
高度の美しさを全身にみなぎらせてゐる。  
書物を乱暴にびしやつと閉ぢると、ふつ  
くらとしたあごをあげ私をふり仰いだ。あ  
どけない微笑をたたえてゐる。

「私の顔まつ赤でしよ」と言つた。

「林檎みたいだよ」と、私は答え

「食欲を唆る」と笑つた。

「熱があるの」

甘えるように言つて、自分の指先をみつ

めたかと思つと、徒然草の書物を取りあげ  
ようと伸した私の手の甲に、その手を重ね  
て軽く押えた。

「ね、熱いでしよ」

「なんだ、火みたいじゃないか。体温計で  
はかつてごらんよ。変だぜ」

私はとつさにそれを握り返してやる程の  
大膽さも、すれた芸も持ち合わせてゐなかつ  
た。紅貴の手は確かに火の如く燃えてい  
た。だが、その体熱とは別に、その手を誘  
導体として波打つてくる情熱があつたので  
はなからうか――

紅貴は、じきその手を放すと、かすかに  
溜息し、も早やよそよそしく冷やかな態度  
で、卓子の上を取り片づけ初めた。それで  
も黙然と椅子によつてゐる私を見ると硝子  
棚から干なつめをとり出して

「いかが？」

とすすめた。

「実はね紅貴」

と、私は軽い調子で口を開いた。

「せんだつて寒映子に貸して貰つた赤衫の  
ことなんだね。あれ、僕にあのまゝゆずい  
て貰えないかね」

私は思ひきつてそう言つた。案外言いに  
くいことではなかつた。むしろ、のど元にか  
かつた夾雑物をばつと吐き出した安らか  
さに、心のゆとりもできて、私は煙草をと  
りだすと火を点け、紅貴の反応を見定めよ  
うと氣構えた位であつた。やや毛ばだつた  
顔を、暫く黙つていたが、

「でもそれ……どうなさるんですの？」

「終生の記念に保存して置きたいのさ。そ  
れだけなんだ」

「嫌ですわ」

紅貴は叩きつけるように強く叫んだ。私

は何故か、もうそんな紅貴を見るのが恐ろ  
しい気がした。だが紅貴は、急におだやか  
な口調で、

「だつて女の肌ふれたもの、玻玖さんに  
だつて汚ないじゃないやせんか」

「代償は拂う」

「私の氣持そんな風にしか分つていただけ  
ませんのね」

紅貴はがっかりして、恨をこめた調子で  
そう言つた。

「それどういう意味？」

紅貴の眼には泪がにじみ出てきた。

「こんどの爆弾事件の検査は僕にとつては  
終生忘れ難い出来事なのだ」

「ですからどうだと仰るんですの、それを  
聞かしてちょうだい！」

涙の中で細々とそう聞くのがもう精一ぱ  
いであつたらしい。

大体、厳密に言えば、私は間違ひなくこ  
の鎌路通りの豪商因家の裏二階に住む下宿  
人なのであるが、一面また、因家の用心棒  
たることが暗黙の下宿条件であり、一方で  
は日本人の学校に通つてゐた娘の紅貴が  
十三歳の時からの家庭教師でもあつた訳だ  
家庭教師というよりも私と紅貴との間柄は  
この足かけ六年間、全く真実の兄妹みたい  
な親愛のむつびに明け暮れた。それが寒映  
子の事件以来、紅貴はにわかにな愛憎の旗幟  
を鮮明にし、私に迫つてくるのである。私  
は紅貴の、私に対する好意が愛慕の境にま  
で深く進んでくるとは考えてゐなかつた。  
何処かの高嶺に咲き匂つてゐるとばかり思  
つてゐたのが、露が薄らいでみると、清純  
無垢の花は余りにもま近かに咲いてゐたそ  
んな感じだつた。



だが、私には、その花も今は只ふれがたき至宝の珠に思えるのだ。

「ね、どうだと仰るんですの。それを聞かして下さい。私も寒映子のように爆弾を投げなければ駄目だと仰るんですの！」

「何を馬鹿なことを言うんだ！」  
「あなたの、赤衫を放したくない気持：分つています。私だつて爆弾位：」

「ばか！」

「いいえ私だつてできます」

「紅貴！」

私は叫んだ。すると紅貴は立ち上り、両手を顔に押しあてて出て行つた。

「紅貴！」

私は廊下の隅に立つて嗚咽している紅貴を射りつけるような激しい感情の眼でみつめたが、暮色の空を背景にしたその後ろ姿が、何とも言えないきよらかなものに見える。私はそうした、人間の生彩ある美しさを、その時程森厳な気持で眺めたことがなかった

「紅貴！」

不思議な感動に胸はふくれあがつてき、つかつかと紅貴の方へ歩いてゆき、その声をかけたのである。

「紅貴、赤衫はもう要らないから返すよ。どうも無理を言つて済まなかつた」

「……………」

紅貴は濡れたままの眼で放膽に私を見つめた。かと思ふと逃げるように階段をふみ鳴らし降りて行つてしまつた。その態度からみて、絶交する覚悟であらうと、私は考えた。

## 二、薄青い静脈

「玻玖さん、玻玖さん！」

紅貴の母親の沈氏に呼び起されて、私が眼をさましたのは、夜半の十二時過ぎであつた。

「何んですか」

警察署から非常召集の電話でもきたかと驚いて飛び起きると、

「紅貴が変なんですよ」

おろおろした調子であつた。

「紅貴が？」

「一寸降りて来ていただけないか知ら：だつて、：ねえ毒か何か飲んだみたいで大変苦しんでいるんですよ」

「毒ですつて：」

「十一時頃までは何も変つたことなかつたんですよ、さつきから変な声をするのでびつくりして行つてみると、もう全身いれんしてるんですよ」

「変ですね。とに角行つてみましょう」

雷光のように、黄昏の二階での事が頭脳を走つた。あわてゝ服装を整えると、私は、ぼたぼた階段を踏み鳴らして、階下の紅貴の室の扉を引きあけた。が、とたんに、あつ！と私は声をあげた。

「早く医者！電話を、近い所の誰でも宜いですから：」

私は只いたづらに狼狽するばかりの沈氏を促して、紅貴に飛びつくようにかけ寄つた。

紅貴はもう蒲団の上に横たわつてゐるのではなかつた。薄い掛蒲団は蹴り返され、枕は壁の方に跳ね飛ばされてゐた。

彼女は温突に仰向けに、或は横に屈曲ししやちこぼり、輾転と反転し、のたうち回れんしているのであつた。苦しそくに胸を掻きむしる如くし、太いものはシユミーズの裾を乱して激しく虚空をけつた。

「紅貴・紅貴！」

大声で叫ぶと、意識不明なのかと思つた紅貴は必死に見開いた眼から、まだ視力の残つてゐるらしい眸で私を見た。

「僕だ、玻玖だ、分るか？」

と叫ぶと、かすかにうなづいて笑うようにしたが、唇はけいれんする許りで笑にならなかつた。

全身けいれんの発作が止ると、只火のような息が苦しげにのどを鳴らした抵抗を失つた、重いその身体を抱えて蒲団に寝せていると沈氏がは入つてきた。

「病院の方へも電話しとかれた方が宜いですよ」

あいにく今日は、西大門通りの赤十字病院に入院中の父親の関光植の容態急変が伝えられて、家人はみんな病院の方についていたのである。

「そうですね。春瑠にでもこつそり知らせておきましようね」

沈氏は、そわそわと又出て行つた。

発作がしづまると、紅貴の、額と鼻の上には、粟粒程の汗が、一面に噴き出して、柔かそうな首の横を、ぶくぶく生物のよう



に膨らませながら、薄青い静脈が高く波打つてゐた。かき開いた胸が、はずむ呼吸の度に、激しく太つたり凋まつたりする。





分厚く肥つたその胸に、淡紅色の乳がさを尖端に廻してゆたかに盛りあがつた乳房の真中に生じている青白い凹みへ、透明な水晶みたいな汗玉が拭いても拭いても、たぎるように噴き出でて溜つた。真白いのどのくびをぬらぬらと滑り落ちる。額へも、耳のあたりへも髪毛がべつとり乱れて濡れついている。灼ける身体が一種異様な匂を放つた。

黄昏の出来事を思うと、私は感傷的なこころふんにかられて、涙が止めどもなく湧き紅貴の身体にぽたぽたと落ちた。

医者は間もなくやつてきた。一應しん察が終ると、推察通り、多量の睡眠剤をのんでいる——というのであつた。

「心臓が弱つてはいるが、この程度なら大丈夫でしょう」

医者は注射の準備を看護婦に命ずると、大した事態ではないといった調子で、そう言つて、紅貴の青白い肥つた腕に注射器の銀針をぶりと深く突つ込んだ。

医者の言葉に間違ひなかつた。翌朝になると紅貴は意識を回復した。それでも床を離れるまでには、尙十日程を要した。

私はもう到底、紅貴の家に下宿を続けるわけにゆかなかつた。少し熱のある身体へ睡眠剤を多量にとり過ぎてあんな結果になつたものらしい……とあらたまつて母親の沈氏から説明をうけた時、私はのみを打ち込まれるように胸が痛かつた。

紅貴は身体が恢復しても、私のいる時は減多に二階に上つてこなくなつた。偶然廊下などで会つたりしても、微笑んでは見せたが親しい会話は成る可くさける風を見せ

た。彼女は私への感情をすつかり清算してしまおうと、必死の努力をしているのに違ひなかつた。それはいいよ私の下宿移轉の決心を固めさせた。

下宿は間もなく、簡単に見つかつた。ところが、なんとその下宿の世話をしてくれたいのは寒映子の母の素英だつた。

私は或る日、彼女を訪れ、映子の安否近況をたづねた後で、序に下宿のことを話してみたのであつた。

寒素英は南山町で小さな化粧品商を開いていた。その隣は二階建の青物商であつたその青物商が新しい下宿であつた。

主人は逓信省の高官の遺族扶助料を貰つている種子という未亡人で二十位の女専学生との二人ぎりの世帯であつた。近頃物騒千万だから警察の人なら……とここでも私は、この女世帯の用心棒の意味で簡単に承諾されたという次第であつたらしい。

数日後私は都合よく二階の廊下でばつたり出会つた紅貴を、その肩に両手を伸してあつ……という間もなく兇暴に引寄せた。紅貴はあわてゝ身を引こうとしたが、私の強い緊縛のために動けなかつた。小さくおのきながら、懸命に、

「いたづらお止しなつて……」

やつと細い声で言つた。

「話があるんだ。一寸私の室にきてくれな

いか」

私は紅貴を放すと、室の扉をあけた。処が、紅貴は座敷に坐ると、おそいあげてきた激情のためか、私の膝へわきまえもなく突伏してしまつた。

んのくぼあたりが、哀愁をこめておののいている。私は、新しい下宿のことを話して了解をうけ、これまで警察署に出勤する時みたい、肩を叩き笑を投げて、六ヶ年間に亘る閑家への下宿生活に終止符をうちたかつたのだ。が、この意外の、場面の展開に私はうろたえ、この雰囲気はいかに打開するか処置に困りはてた。みぢろぎもしないで、紅貴のとり乱した激しい呼吸ばかりをきいていた。

紅貴はやつと生気を取り戻したのか、あ……と声を漏しながら、身体を少しもがき動かすようにし上体を起した。ちよつと髪に手を当てたが、静かに膝を放れた。

「下宿をおかわりになるんですつてね」と低い声で言つた。あらかじめ沈夫人にはそれとなく漏らしてあつたから、言い聞かされていたものだろうと思つた。

「お別れだわ……」

独りごとのように言う。

「実は、今そのことを君に相談しようと思つていたところなんだ」

「何も私にご相談なさることなんかありませんわ。そんなこと……」

紅貴はしんらつに言う、にわかに折り崩れるように膝をななめにし、手すりの間から今日も美しい夕映の空に、放心したように眸を投げた。

「何もかも夢なんですもの」

泣いている。ぽたぽたと膝の上に落ちた涙を指先でいぢり散している風である。

「若い日の夢は夢としてしまつておくのが一番宜いのだよ。やがてそれがよかつたとわかる時代が必ずやつてくる」

「私ね……」

紅貴はやつとひと言いつたが後は涙にな



つて言えない風であつた。私は窮地に追い  
つめられるような気持で、黙つて次の言葉  
を待った。

「私……」

彼女は再び細々とそう繰り返したが、じ  
き両手を顔に押し当て、わつ……と泣きくづ  
れた。

### 三、灼熱の戀

私は万難を排し、下宿移転を強行した。

新しい下宿に移ると、私の寒映子に対す  
る決意はいよいよ確固不動のものとなつた  
だが私は何もまがしい情火にばかり燃えて  
いるのではなかつた。懲役四年……そうした  
苦役のかん獄に投じた映子の、青春の空白  
を、私は、一さいの迫害と圧迫をのりこえ  
て私の愛情で償わねばならぬと考えるので  
あつた。

「内地人の父親に捨てられたせいだ段々い  
ぢけてしまつたんですよ」

下宿の未亡人にそう言われた時、私は、  
ごろがんと軽薄な日本人に対する反感怨憤の  
情は素英の胸中にも、深く押しかくされて  
いるのだと思つた。

表面素英は、毎日おだやかな生活を営ん  
でいた。然し、映子を奪われた淋しさは、  
ひしひしと身にしみるらしく、はるか彼方  
の夜空に輝く星の如くにも永遠なものと思  
われる、四十年の刑期のひとひと日が消  
えてゆくのが、せめてもの慰みのようだつ  
た。それがまた、私の眼にはきびしく應え  
てくるのだ。

激しく責任を感じる気持が募りこうじ、  
はては職をとしてでも、映子母娘に殉じよ  
うと思ふ気持が、日を追うて深まつてい

た。

私は、遂にその決意を素英に告白してし  
まつた。それをきつかけに段々素英の  
店へも出入りするようになった。

「いつそのうちに引越して来ていただ  
けないか知ら……ちようど映子の室があいて  
いますからね。でも、それでは警察署の方  
にご都合が悪いでしょうね」

愁眉を開き、素英はそんなことを言い出  
す程私を信頼し、何でも相談するようにな  
つた。私は化粧品品の仕入、陳列などの商談  
にも応じた。男子禁制の映子の室へ私を、  
「ここが映子の室なんですすよ」

素英は、或る時わざわざ案内までして呉  
れた。スイッチを押すと、薄藍色のシェー  
ドにくるまれた電燈がぼんやり室内を照し  
物体は物柔かい輪かくを造つて湖底のよ  
うに静寂だつた。デイフレツガーの「母の  
膝」と題する泰西名画が額にほめて掲げて  
あり、素英の配意なのであろう。仏花女学  
校の制服を着た映子の写真を飾つた机上の  
壺に、るり玉草の花が可憐に匂つていた。

そのままにしてあるのであろう。金銀の  
鏝の多い朝鮮たん笥の横の壁に映子のらし  
い桃色の襦衣と黒い筒裳が掛けてあつた。

何もかもなつかしく、彼女に縛りつけられ  
た私の、煩悩のくさりを、尙更たも難いも  
のにするばかりであつた。

私は月に一度は缺かさずに面会に出かけ  
る、素英にこの間の消息を伝えて貰いたい  
と依頼した。どんな犠牲、いかなる高価な  
代償を払つても君の帰りを待つて……そ  
んな意味の手紙も送つた。

落葉の、野も山も空気まで赤い季節を過  
ぎると、三寒四温の大陸的嚴冬が訪れ、や  
がて又ポプラの若芽から夏へ……私は深山に

こもつて荒修業をする修験者達のように、  
只一心不乱に、映子の刑期満了を心に念じ  
祈り暮した。

「玻玖さんのお話になると泣いてばかりい  
て何も話できないんですのよ。困つてしま  
つてとほろに暮れているともう制限の時間  
なんですもの」

刑務所に面会に行つて帰宅した素英は、  
そんな愚痴をこぼしたりした。がそれから  
間もなくして、私は映子の入獄後、初めて  
葉書を受けとつた。

——御厚情の程映子死んでもお忘れでき  
ません。只この上は罪の償いを果すのを  
念願するのみでございませう。なにとぞ、

この獄中に開いたみすばらしい花をお見  
捨て下さいませぬ様お願い申し上げます——  
便りには簡単にそんな事が認めてあつた  
そして、二十二を迎えた初夏、刑期より早  
く仮出獄した寒映子は、刑務所からまづ直  
ぐ、既に警察官を退職した私のふところに  
飛び込んできた。懲役だつたから、勿論彼  
女は在監中、肉体労働に服してきた訳であ  
る。

だが、彼女は私達の心配を裏切つて、逞  
ましく思われる程健康に輝き、成長してい  
た。だが、私にしてみれば、相違らず彼女  
は純情可憐な花に違いなかつた。そうした

きびしい、すさみ勝な環境にはぐくまれて  
きながら、何ものにもけがされぬ不思議な  
何かの花みたいに發育してきたかと思える  
からである。品性の下等な女、痴精深い女  
兇暴な女、自暴自棄の女、常習、万引の  
女、姦婦、殺人、傷害の女……そうした女達  
の中に、映子はその純情を露程もうしもの  
ことなく、一切の罪ごろを清算し、沈静の  
美しさをおび帰つてきたのだ。

私は成熟した映子の美貌にも驚異の眼を  
みはつた。母に似た、朝鮮民族独特の皮膚  
の美しさは、なんとというか、こう硬さをう  
せ、淡青をおびた薄ら絹みたいだつた。  
笑くぼのあとを深々とたたえた頬は、触  
れただけでも血がにじむかといいたいたしく  
感じさせる白さだつた。

素英の簞笥の底には未だ、春夏秋冬各季節  
の豪華な日本の着物がしまわれていた。

「一べん着てお見せよ。独りで着れるんだ  
ろう？」

「え、でもオ……」

映子は顔を赤らめ、幾たびかためらつた  
それでも私が強請すると、従順に渦巻を明  
るくぼかした京染の、はでなゆかたを抱い  
て次の室に姿をかくすのであつた。

南山の緑は益々濃く、夏はたけなわとな  
つて行つたが、その頃私の本国では既に刀  
折れ矢つきで、太平洋戦争の終幕も近づ  
うとしていた。

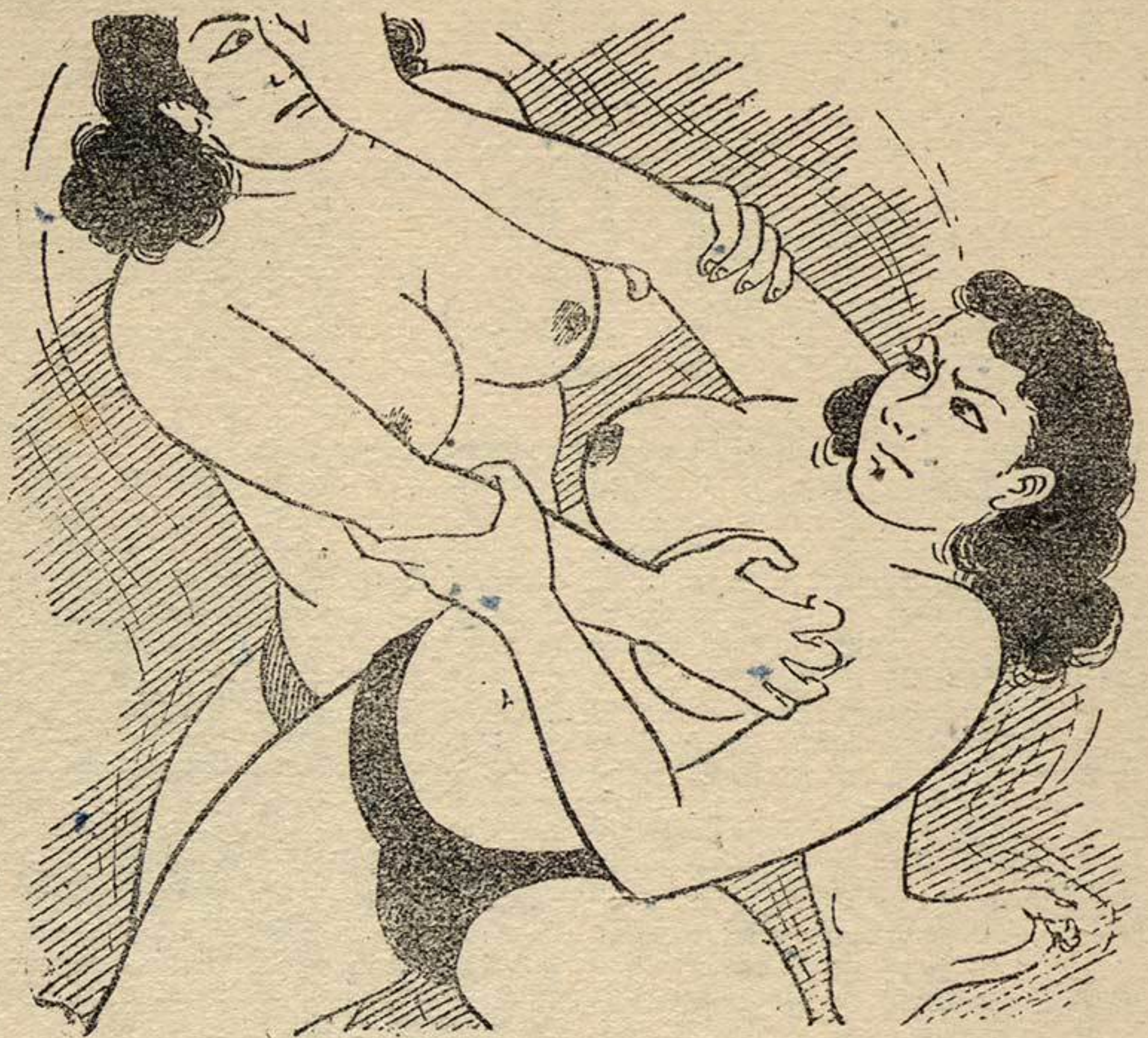
#### (前篇第一章第二章終り)

日本人玻玖を慕う日鮮混血兒映  
子と豪商閥家の娘紅貴、敗戦に  
よる日本の退陣、独立万才を叫  
ぶ大混乱の朝鮮、やがて南北二  
つに分割された朝鮮には、冷た  
い戦争は遂に同胞相喰む熱い戦  
争へと狂つていつた。

動乱朝鮮を舞台とした国際愛の  
一大純情小説

主義と民族の郷愁に悩む宿命の  
混血兒！  
後篇日鮮混血兒を御期待あれ





## 八重椿對乳張山の血闘

初夏や女相撲の

ふれ太鼓

大江戸は両国、本場所の恒例大相撲も尻食えと、櫓の赤幕、色とりどりの千両幟もなまめかしく「花櫓女大相撲」と名乗をあげたのは昔話、誌上をかりて茲に御披露申上げは、素人女相撲の元締大御所とおつしや

る、本誌でおなじみの「土俵四股平氏」の「娘相撲部屋」

勅封ならぬ秘伝女菩薩、いやブライベイトなるが故に、みだりに伺い知ることをゆるされぬその桃源境を、何のかのと絵筆がもつ強味から、女相撲の色紙絵など土産にして、四股平氏の別業「ちからめ莊」のくぐり戸をチョッコラ潜つたのが忘れもせぬ

五月五日、昔でいえば端午の節句、緋毛氈には坂田の金時、熊を相手に大相撲、それにひきかえ私の摺んだ幸運は、いろはならねど四十八手、あのしなやかな娘御が、さす手引く手に腰のものを奪いあい、あとがない土俵際で、あやうくもたせる腰のあえぎ、寄らせては寄つてかえす櫻色の餅肌餅腹、そんな夢を描きながら、前裁をぬけて玄關に立つと、

「いらつしやいませ」  
とあらわれたのは十七八才と思われる娘サンだ、ハハアこれがお抱えの力女（ちからめ）嬢かと、シースから名刺をつまみ出そうとすると、

「存じあげております、加茂先生でいらつしやいませよう、うちの先生がお待ちでございます……どうぞ」

と愛嬌一〇〇パーセントである。あとで知つたことであるが彼女こそ、ちからめ莊の娘相撲部屋のピカ一八重椿（やえつばき）こと雲珠京子嬢だつたのである。こんな秘境へ案内されたのは、五指を屈するにたらずの数であらう、きけば氏の家族すら夫人をのぞいては、この別業の存在すら知らないのであつた。

「やあよくいらつしやいました。みえた以上はゆるゆると御賞味下さい、画藝も充分にふくらませていただければ幸甚です」との挨拶。

とおされた一室は、應接室というよりも氏の研究室であらう、本棚には雑然と和洋の書がつめこまれていて、壁面には額があつて、若い女の乱闘図がかかっている、其下にはガラスケースがあつて、各種の女相撲人形が行儀よく並んでいる、島田醬の取組も三番目に入っている、とその反対側の

窓べりの壁には、明治時代から昭和に至る興行女相撲のポスターが文庫として仮表装して吊つてある。

氏が準備のためか、一腕のユ、アをすゝつて坐を外されたのを幸に、椅子を立つて巡覧した結果がこれだ。ところが悪いことは出来ないもので、泥棒猫のように無遠慮に、この十畳の間を歩きまわっていると、隅のテーブルの上に、白布をかぶせた品物が目に入つた、チョットのをいてやれと、おそろしくめくつて見ると、それはケース内の人形に比べると、十倍も大きい七八才の少女位はある裸形の女体で、一糸もまとわぬ姿で仁王のように向きあつて立つてゐる。

コリヤ素敵なものだと、いじつてみると木彫であるが、手足や首胴其他の関節がボールジョイントになつてゐる。至極巧妙なものである。塗装は完全な肌色に仕上げてある、たしかに人肌に近いといえよう「これ一つ見ただけでも、小説の一つや二つは書けるわい」と思いながら、ゴチャ／＼やつている内に、どえらいことになつてしまつた。

というのは、どうしたはずみかパチンといつたかと思うと、人形の立つ合の方々に豆電灯がついて、同時に手足の関節が生物のように動き出してきた。テーブルの下ではモーターのようなものがカスカにうなつてゐる、驚いた位の騒ぎじやない、こんな無作法なお客はつまみ出されるに相違ない半年も口説いてやつと氏の好意を得たのに……私は青くなつたり赤くなつたりしたが、どこにスイッチがあるのか皆目わからぬ、あわててゐるからあつても見えない。後刻氏によつて再び操作してもらつて、



餅肌の女体が相搏つ女相撲の醍醐味

心を丹田に落着けて鑑賞したが、突によく出来た天下一品とでもいいたい、活動女相撲人形なのだが、其場の私はそれどころでなく、何とか早くとまればと思うが、下手に人形をおさえてはこわれること必定である。人形は私の心配にはおかないしに、手を出す、足で蹴る、首を振る、腰を捻るものすごい乱闘をやっている、「止め！」と大喝一声したい衝動にかられてきた時、「驚いてますね、心配しないでいいですよ……でもこれはあとでゆつくり見なさい」といいながら何時の間にか背後にあらわれた四股平氏は、床のボタンを踏むと、モーターの音も消え人形もとまった。

「いやどうも、何ともはや、どうも……」と私はしどろもどろであるが、氏は哄笑しながら、「あまりお待たせするから、こんなおいたをなさるんですよ、こつちが悪いんですよ」

と手をとらんばかりに案内に立たれる、ドアの外は廊下になつていて、左右は納戸と浴場と炊事場らしく、板戸とガラス障子がつづく、そして廊下のつきようとする左右の部屋が、相撲でいう仕度部屋になつてゐる、廊下は其邊で詰まつて、三段おりると其処がめざす相撲場になつてゐた。

柱の間隔を一間とみて計算すると十六坪はある。道場のように武者窓があるが、スリ硝子戸がはまつてゐる、二方は羽目板で其上に取組が貼出してある、どれもこれも女らしい四股名である。氏にきけばどの力女嬢も好きで同人になつてゐるので、氏から衣食と若干のポケットマネーは与えられ

るが、金銭めあての者はないのだそう、住込は今のところ五名で、外に二人の通勤組と先輩とでもいうべきか、客員組が六名計十三名だということだつた。

客員中には既婚者や未亡人もあるそう、サテ今日の出席はというと、先程の八重樫こと雲珠京子嬢をはじめ九名のメンバーである、手帖にひかえた取組貼出をかがけるところだ。

乱髪つや(二十八)十七貫—東京都  
乳張山ちえ(二十六)十八貫—京都  
花柳はる(二十一)十四貫—福井  
富ヶ浦とみ(二十三)十四貫—京都  
八重樫京子(十八)十四貫—北海道  
梅の花よし(二十一)十五貫—長野  
恋衣やす子(二十一)十六貫—京都  
女山よし江(十九)十五貫—京都  
玉椿千代美(十八)十四貫—島根  
大櫻たま(十九)十五貫—島根

土俵はと見ると、これは別段に交つたところはない、しかし砂が何となく赤黒いので、赤土かと思つて手にとると変だ、四股平氏にきくと、これは檜の挽粉だそう、な、ブンといいかおりがするの、香料が混じてあるのか、美女の肌の移香か、何にしてもなまめかしいことだ。

説明によると、土俵の底は丈夫なカンバスがはつてあり、其下は畳で、土間と見えただのは板間だつた。力女嬢の仕度部屋は東西によつて二室に分れてゐる、それは双方の力女に敵愾心をもたすためらしい、とこ

ろが其点について、勝星など東西が相当はげしくせり合ふものかときけば、そんなこともないではないが、どうも女共はチームワークが保てないもので、ちよつとした個人的な感情で、スグ反目しあい喧嘩をするのでこまるこの話だつた、そんな際はスグその二人を東西にふり分けるそうだが、かかる場合土俵で顔を合せると、女闘美と女怒美のクライマックスを演出して、双方共グロツキイになるそうである。

今日は花柳春子嬢が福井へ帰つてゐるからで、其相手方の西方力女富ヶ浦とみ子嬢が行司にまわつて、東西各四人が登場した東方は濃い納戸色、西方は焦茶色の禪をしめてゐる、四股平氏の説では、黒髪の日本娘は黒の禪に限るそう、黒い禪をしめてこそ頭髪の黒とバランスがとれて、重量感が下方に働き、ドツシリと見えるのださうであるが、東西を分ける関係上、昨今は前記のような色を使つてゐるのださうだ。

頭髪は日本鬚、相撲鬚、断髪などまちまちであるが、娘サンは大抵パーマをかけてゐるので、乱髪と乳張山の二人をのぞいてはパーマの獅子頭だつた。

贅沢なソファアにかけたまま、十何番の稽古相撲を見せて貰つたが、四股平氏は「どうです、君の希望の者に一番取らせて打出しにしたいと思ひますが、遠慮せずにいつて下さい、但しですね、この際片方同志の取組だけは遠慮して下さい」といふ、十数番といへば、小一時間にわたる見物だつたが、なまめかしい美女の乱闘を夢心地で見つてゐた私は、自分の顔がどんな表情をして土俵へ向いておつたか、それすら自覚しなかつたことを恥しく思ひながら、千載一遇の好機逸すべからずと、

眼底の女相撲図絵を繰返しながら、「では八重樫と乳張山をお願いします」「乳張山より貴男は八重樫が好きになつたんでしよう、御案内した御縁もあつて……」それは図星だつた、思わず双頬に血がのぼるのをおぼえた。四股平氏は微笑しながら、「雲珠君、ちえ公ともう一番真剣にやつてごらん、勝つたら『夜の梅』だね」「駿河屋なんて、先生ひどいわ」「雲珠京子嬢はボツと頬を染め御機嫌ななめである。『夜の梅』は御承知の如く羊羹の名で、京都の菓子屋「駿河屋」の名物であるが、其処に何か含むところがあるらしい。

稽古相撲では、八重樫京子嬢は、梅ヶ花女山、大櫻と三人を、寄切、持出し、小手投でたおして土つかずであり、乳張山は恋衣、玉椿を吊出し、乱髪と団体に落ちて取直し、突張つて三勝、八重樫と組んで再び団体に落ちた強の者である。

きけば乳張山は西の大関であり、最年長の東の大関乱髪すら三番に一番はあぶないという話だ、其の四股名の示すごとく乳房はリュウ／＼と張出して、側面からだより乳首が一寸も出ているように見える顔は高峰秀子のような丸顔で、すべてが大造りである、出身は某酒場のマダムだとのこと。

一方「八重樫」はミスで戦災孤児で、女学校時代は水泳の選手だつたとかで肢体も実に美しい、容貌は京マチ子ばりで眼の大きいところと肉付のよさがいきうつしである。

「東——八重樫、西——乳張山」



# 競輪場の女掏摸

椿

昭彦

志乃田よしる 一画



「ウム。然しそれが事実とすれば、一寸薄気味悪いなア。大穴を事前に予感出来るなんて、人間業じゃあない」

「ところが事実も事実。あたしが此の目でチャンと見届けて居るのよ。絶対同一の人間だわ。それが証拠に左手に箆めて居る、あの指輪に見覚えがあるわ。地金は金でオットセイの浮彫があるんだもの、一寸類が少いわ」

嘘だと思ふのだつたら、夕方迄窓口の所で座つて居てごらん。と、彼女は自信大ありの気焰を吐いた。

それにしても、不詳事件の続発しきりで一時は国会辺り迄、廃止論が持ち込まれて居る矢先。競輪浄化と肅正の声がかまびしい現在、卑怯な八百長も存在しまいし、又自覚の念にも眼醒めて居る筈なのだ。

八百長が伴わぬ競輪場で、では一体何うして大穴を射止めるのだらう……然もその女は、素晴らしく綺麗な左手の指に、燦然と耀く豪華なオットセイの指輪を箆めて居ると言うのだ。

「分らん。分らん……」

大阪競輪の新緑第一日目の午後。スタンドを埋めつくして喚声を挙げて熱狂するファンの怒濤をガラス越しに聴く競輪場事務室の一刻。若い女事務員に混つて奇妙な話題に耳を傾けて居るのは矢張り賞金係の一人、清川だつた。

清川は、其の日の午後から、歌島園子と入替つて、噂の本態をつき止めるべく、窓口で凝つとレースの高潮して行くのを待つてみた。

常連の声を綜合してみても、予想屋の囁きを参考にしてみても、評判は依然としてA級の黒田選手に呼声が高かつた。やがて黒田選手が出場する五千米のレースとなつた。

「黒田ッ。クロダーッ」

柵に殺到した群集は、今正にスタートしようとする、一列に並んだ銀輪の車体の中に、彼の名を連呼して手をふつた。ダーン号音が轟いた。銅色の逞ましい肉塊が縦条人形みたいに一斉にスタートした。

ワーツと場内が悲喜交も喧騒のるつぽと化した。

「清川さん。黒田選手は優秀ね。グングン抜いてるわ」

場内を一瞥して来た若い事務員が一寸亢奮して云う。

「そうかなア……じゃ又、大穴だらう」

清川の大穴と言う意味は黒田選手に勝利が約束されていない気配を察知して云つたのだ。おそらく予想外の選手が中途から呆ツ気なく抜いて一着にゴールインする……

声がかれたとかで、行司は西方の大櫻がかわつて出た、乳張山は相撲鬚だが、八重椿はパーマの断髪である。

「京ちゃんしつかり、負けたら夜の梅が逃げるよッ！」

と彌次半分、應援半分といったところ

「ちい公、娘に負けちや姉御が笑うよッ」と西方の声がとぶ、

番附で見ると八重椿は東の小結である、すこぶるおとなしい性質らしいが、イザ士俵で仕切つたとなると、眼がやや、つつて内なる勝気がグン／＼眉におし上つてくるのがわかる。口もとがキツと右にひきつるのも、彼女の個性の表現の一つだ。

乳張山は、おれは大関だぞといわぬばかりに、傍若無人大びらに自慢の乳房を見たりや見やがれと、プリン／＼と揺らせながら四股を踏む、肉体がものいう稼業だから豊満なのはいいが、男に気をもたせるようなやり方は多少鼻につく、腹から腰へ脂ののりきつた曲線のウネリ、官能をそよることおびただしい限りだ。

「一丁可愛がつてやろるか？」

と乳張山はユツタリと仕切る、先程から幾度も仕切直して待たされ気味の八重椿は、

「馬鹿野郎！」と爛瘤を爆発させた、

「おおこわハハ……」とおどけながらも乳張山も尋常に仕切つた。

「やッ！」と八重椿がたつと、乳張山も「おおッ！」と素直に立つたが、パツパツと烈しい空張りの速射だ、八重椿の足が砂をかいてさがる、あとがない。

「はアけよい！はアけよい！」大櫻が廻る一時は駄目かと思えた八重椿の腰がガツと残した。

案外な相手のねばりに、乳張山は突くと



……清川は頭の中で独り勝手な推理を進めて居た。

ところが、結果は何うであらう？……清川の予測は遂に當つてしまつた。黒田選手は二周目あたりから俄かに速度が衰え挙句の果ては無惨に敗北してしまつたのだつた。医務室に悄然と這入つて来た彼は、敗退の最大原因とする体力消耗に対して、ビタミンB1の注射をして貰い、蒼ざめた顔で歸つて行つた。

「ね、清川さん。あんなに元気だつた方が急に軀が衰弱するなんて、おかしいやないの」

後姿を気毒に見送つて居た園子が呟いた「そりやあるだろう。競輪戦線異常ありかよし、僕が原因を糾明しよう」

「あら、ほんと？面白い観ものだわ。ほゝゝゝ」

## 二

清川は元来、人の投げ出しそうな小面倒な事柄でも、好んで自分が一手に引受け、

コッコツとやり遂げてしまふ。謂わば一風突つた頑張りのある性格だつた。したがつて、丁度手許に煩雜な事件もなく、手持無沙汰であくびを洩して居たところだつたので、冗談半分に迂闊に口に滑らした行掛りから、慙々、面子にかけても此の不審事件を解決しなくてはならない破目となつてしまつた。

勤めが終つて我が家に帰ると、夕食もそこゝに落させて、一人で自室に閉籠つた

ジツと天井を凝視して居た彼は、何を考え付いたのか、一気に手帳の上にペンを走らせた。

彼は事件を二ツに分類して、それぞれをあらゆる角度から洞察し、鋭く分析して解決の端緒を掴かろうとした。

一、黒田選手は最近甚だしく、競技が不調である。

一、原因は体力の消耗を理由とせるも根拠は不明。

一、彼は選手の中でも稀な美貌である。然し現在迄に異性関係の噂なし。

一、黒田選手は未だ独身である。

一、彼は敗れた後は、必ず医務室に於いて精力回復の為、ビタミンB1を注射して居る。尚、当日はたいい双眼が充血している。

## 2

一、最近番狂せの賞金受領には、定つたように一婦人が来る。

一、彼女の年齢、容貌は不明なるも、掌は非常に美しく、又、其の指先には、いつも金製の指輪で、オットセイの浮彫がある。

一、彼女の夫の大穴の場合には、不思議にも黒田選手の不調の日又惨敗を喫した日である。

清川は、此処迄細かく書いて来て、フーッと太い溜息をつき、オットセイの文字に眼を烙付けられると、又、「分らん。分らん」を連発し始めた。

競輪選手——有閑夫人——オットセイの指輪……何か有りそうだが、その端緒は？？。

清川は焦つて、頭髪を掻き上げ唇を噛み時には万年ペンの先を、乱暴なくらい机の隅でコッコツと叩いた。もう夢中で意地になつて居た。だから、後から妹の千鶴子が悪戯ッぽい足取りでそつと忍び寄つたを、全然彼は知らなかつた。

「兄さん。それ何？面白そうな問題じゃないの」

いきなり覗き込んでニヤツと笑つた。

「オイッ、吃驚するじゃないか。ところで千鶴子、お前だつたら此の問題を何う云う風に解決する？」

兄は聰明な妹に助太刀を頼んだ。

「そりゃ。あたしだつたら、その上にもう一人の女性を配して考えるわ。恋愛沙汰をオミットしちゃ解決の鍵は無さそうよ」

兄さんも案外駄目ねえ、と言う顔付で、彼女はクスンと鼻先で嗤つた。

「ねえ、兄さん？こんな推理は何うか知ら？」

と、長い映画物語でも始めるように、千鶴子は逞しい想像力を発揮した。

「此処に競輪選手を志望するAと言う青年が居た。A青年は熱心な稽古と優秀な走破力を着目されて、或る大自転車会社の専属となり社長の推薦を以つて愈々競輪選手としての、待望の登録も叶い、華やかなスタンドに疾走する身分となれた。

彼は一レース毎に勝利へ勝利へと勝進み念願のA級選手に迄栄達する事が出来た。然かもA青年のお蔭で自社の製造になる、自転車車の優秀さを宣伝してくれた功勞に報いて、北海道出身の社長は、感激の余り、製品の商標でもあり、又、一生の記念に大金を授けて拵えさせた、鮮やかなオットセイの金の指輪を、A青年に激励の意味で贈

みせかけてガツブリと下手に組んだ、八重樫はあとがなないと知つて「ウーム」と門に絞つたが、太鼓腹の乳張山は根がはえたように動かない、あせる「八重樫」の横顔へニタリと皮肉なあざ笑いを送つて、相撲巧者な乳張山は、弓手の差手をぬいて上手に差し加え、あわてる八重樫を土俵一パイに引廻しドツと寄つて腹櫓に吊つた、ピンピンと若鮎のようにあばれる八重樫の足を高々と吊つてノツシノツと土俵際へ……。

「八重ちゃん、あかんがなア、しつかりおしよッ！」

と東の声援は必死だ、それ以上必死なのは当人の京子だ。獅子頭をバサ／＼とゆつて掛け業で防ごうとする、双方汗みどろだ電光にヌメ／＼した脂汗がういて光る、乳張山の相撲鬘もゆるんで今にも解けそうだ相手の腰を折れよとばかり抱いている八重樫の紅をさした腿が、やつと相手の攻撃を喰止めた。大関といつても女は女だ、女力の弱さか？其処に今一息のガンバリが不足したのだ。

再び突き合つて手四つ、やがてガツブリと四つ相撲、指が禰をひいて腹が臍でせりあい、張つた四つの乳房が、相手の乳首を突上げあつた、激しい音をたてて挑合う女と女の肌が鳴る。

乳張山はどこまでも得意の腹櫓とばかりに、太鼓腹をおつつけてゆく、睨む京子の眼を、智恵子の眼が負けずに睨みかえす、燃える敵意と敵意だ、焦熱だ！赤熱だ！白熱だ！

何時の間にか乳張山の手が八重樫の乳房を掴んだ、男を知っている女の指が、男に掴まれた其日のように、イヤよりむごたらしく憎悪に燃えて、男を知らぬ女の乳房を



る事にした。つまり、A青年の乗つて居た自転車は、オットセイ印であり、彼は社長から頂いた、オットセイの彫刻の指輪を、一日も肌身離さず持つていたのよ」

「ウーム。それから……」

「ところが名声日に増し盛んとなつて行くA青年の男性的な風貌に、勘からず心を寄せて居た競輪場の女事務員があつた。彼女はせつない胸の中を打明ける機会をいつも逸して悶々と彼の面影に乙女心を痛めていた。然し、一方A青年は、そんな可憐な心を知る筈もなく、又、浮ついた精神的の余裕すらなく、毎日、朝はまだ未明の頃から自転車を乗り出して、猛練習に専念し将来に大きな希望を燃やして居た。丁度その朝も例の指輪をキラリと光らせて、お守りのように頸に掛け、六哩往復のペダルを踏んだ。

朝もやの街を突き抜けて馳て一直線の郊外の国道に差掛ると、彼は渾身の力を両脚にこめて弾丸のように走り続けた。行手の通行人を風みたい追い抜いた。一人、二人、三人、そして小さく後へ距離をつくる彼の前途に、突然、女がハンドルの方に歩み寄つて来た。「アッ。危いッ」叫ぶのと同時に、勢い余つた彼は、自転車諸共毬みたになつて前へ抛り出された。

A青年は奇蹟的に僅かの怪我で済むことが出来た。が、頸に掛けたオットセイの指輪は、何処に飛んで行つたのか、遂に彼の眼には見当らなかつた。A青年は諦めて帰つて来た。再び彼の許に還つて来ようとは思ひも寄らなかつたが、皮肉に、それを拾つた女は拘摸の姐御で千島のお蔭。玩具にしては光り過ぎると、たかを食つてつまみ上げて見れば、意外、時価数万円

は固いところの金の指輪、それに、何より彼女の心を魅せたのは、故郷恋しい海豹の姿。愈々、誰れにも渡したくなかつたが、路上に顛倒したA青年の情熱的な顔を想い浮べると、流石に彼女は良心が痛んだ。千島のお蔭がすっかり変装して、競輪場へ奥様然として現われたのは、A青年に対する日々に高まる恋情と、指輪を返したい殊勝な心根からだつた。

彼女は柵に刮うて群がった、観衆の臨に身を窺めて、トップを切つて突ッ走るA青年の颯爽とした姿を惚々として眺めて居た……此処ら辺り迄言つてしまえば、後は大方想像がつくでしよ。A青年は黒田選手、千島のお蔭は例のオットセイの指輪の女よホ、ホ、

千鶴子はお伽噺が終つたように、兄の興味を窺つた。

「なるほど。そんな筋書も考えられるな。千鶴子お前は仲々小説家だなア」

清川は真面目くさつて妹を褒め讃えた。

「でもね、兄さん。筋はこれからかなり複雑よ。後の半分は兄さんで解決して頂戴」

思ひせぶりに口許を綻ばせて、さつさと千鶴子は部屋を出て行つた。

### 三

清川はやつと元気づいた。



よしろうとく

妹千鶴子の助言で、大体の輪廓は掴み得たが、果して事実は其の通りに進展してゐたのだろうか？オットセイの指輪の女が拘摸だとすれば、人様の懐中是我が物同然、ものゝ見事に車券をスリ替え、まんまと大穴をせしめる事も考えられよう。

では黒田選手の不調の原因は？女か？金か？それとも他に？……又千鶴子の看破した女事務員とは一体誰なのだ？

彼はその夜結論を得ずして、習日、最終日の競輪場へ出勤した。第一レースが終り第二レースに入つた頃、出場した黒田選手は後から追尾する第三コーナーで、不運にも後車輪に接触されて、両車の選手は凄じい力力で数米を投げ出された。黒田選手はひどい裂傷でスタンドを生々しく鮮血で染めて、すぐさま病院に担ぎ込まれた。

混睡状態の黒田選手は、劇痛と熱夢の中

掴むのだ、かつて四股平氏が「女が相撲に夢中になると、キツトどちらかが乳房を掴みます、乳房を掴まえばもう土俵は眼中になくなります、勝負は相手を泣かすか自分が泣くかです、ですから乳房に手がかかる迄は、本当の相撲じゃないともいえます」

では今こそ私も本当の女相撲、真剣な取組に接した訳なのだ。もう控力士の声援も私の耳へは入らない、入つてもそれは一種の雑音にすぎない、今度は八重樫の手が指が、掴みきれないほど豊満な乳張山の乳房を握つた、拇指と人差指が其乳首をひねり上げる、そのたびに智恵子の眉がビリビリと動いて八の字をかく、私の眼は四つの乳房に吸引されて金縛りだ。

「乳房相撲だ」とよくきかされたが、見るのは今日が始めてだ、行司の大櫻は引分けもせず平気で廻つてゐる、糸底をうつた腕をふせたようなヴィナス型の京子の乳房と、脂肪をやや持ちすぎた真桑瓜型の智恵子の乳房との競合いだ。

「噛むなよ！」と大櫻が首をふりく双方の耳もとでがなる、乳房相撲で狂気して女は、無意識の内に相手の肉を噛む危険があるのだ。乳張山の足が二度も土俵を割つたが行司は軍配をあげない、ここまですればもう相撲の作法じゃないらしい、智恵子が新鮮な果実のような京子の乳房を握りつぶそうとすれば、京子は智恵子のうれたそれをグリグリとしごいて引切ろうとする「勝負あつた！」軍配がサツと八重樫にあがつた。

「わわわアッ！」と何ともいえない叫びが、智恵子の口から発せられたかと思ふと、智恵子は我と我が胸乳を抱いて崩折れた。



で、盛んに誰れかの名を呼び続けて居た。低い、然し確かに聴き覚えのある名前だとハツとして清川は緊張した。糸口が現われたような予感がした。耳を澄ました。

「ソノ子さん。……園子さん……」

唸るように一言、苦しうに二言。黒田選手は呻吟のベットの从上から、両手を顫わせて何かを求める。どうやら輸血の効果が現れたらしい。室付の医師が暗に、良かったですね、と清川や馳付けて来た園子の面を見比べて慰める。

園子は採血の終つた蒼白い顔に、わずかに安堵の色を漲らせすぐに両手で顔を蔽つた。

輸血を一番先に申し出た彼女と、黒田選手の間柄に、清く芽生えて居る純愛の花――

――矢ッ張り千鶴子は小説家だな。清川は感謝の声を危く上げそうになつた。オットセイの指輪にとられすぎて、脚許の花に愛情が彩つて居た事実を、迂闊にも彼は忘却して居たのだつた。

と、その時病室の扉が慌だしく開けられて、

「清川さん。一寸急用が出来たんです。すぐに事務室へ帰つて下さい」

使いの者が荒い息遣いで耳打をした。

「何んだ。突つた事でも出来たのか？」

「女掏摸が捕つたんです。大穴の車券と窓口の所で掏り替えようとしたのを発見して今大騒ぎなんです上」

「何ッ。女掏摸が――」

清川はビシヤリと面を摸られたように愕いた。奇妙に想像へ向つて現れて来る、千鶴子の言葉が薄気味悪くなつてきた。

清川が使いの者と一緒に、競輪場の事務室へと引返して来た頃には、夥しい騒次馬に取囲れた二十六七歳の女が、キツと四囲を睨み合せて居るところだつた。

「案外、別嬪じゃないか」

「ふン。あの顔で蜥蜴食うかよホト、ギスだ」

事務室の一間に引据えたあとも、窓ガラスの所に黒山になつて、野卑な罵倒が四方から飛んでくる。

「皆さん、余り騒がないで下さい。騒ぐと一層亢奮して取調べも出来ませんから」

隠やかな調子で清川が群衆に制止した。

それでも一部の者が喚めきつづけるので、仕方なく硝子窓のカーテンを引いた。

やつと静寂になつた。ホツとして額の汗を拭い、黙つて彼は女の背に廻つた。

「何故車券を掏り替えるなんて、莫迦な真似をやつたんだ」

女は唇を残念そうに引歪めて、

「失敗したのは今日が始めてさ。千島のお薦めやきが廻つたよ」

自虐的に呟いて窮屈そうに膝を崩した。

「オヤッ？……」

千島のお薦め？それじゃあ千鶴子の言つた通り何から何まで本当だ。呆ッ気にとられて清川は、改めて女の顔を見直した。お薦

めがニヤリと微笑して、

「あなた、千鶴子さんの兄さんでしょ？」

簾から棒に彼女はズバリと凶星を指して云う。清川は愈々訳が分らなくなつてきた

「どうしてそれが分つた？」

「兄妹だもん。何処か似てるよ。あたしア

これでも女学校ぐらい出てるんだよ。千鶴子さんは四年下だつた。纏綿良しで評判だつたから下級生でも覚えてるんだけど」

お薦めはふと眼を外らせて淋しうに、千島の故郷を振り出しに、全国各地を転々とした、波瀾に歪められた沈倫の過去を、しみじみとして物語つた。彼女の語るところに依れば、黒田選手の指輪を拾つて以来、心に住んだ男の影を求めて、競輪場に出没するようになったのだと言う。その後、路上で偶然に千鶴子と逢い、彼女はすべての事を打明けたのだつた。

「それでやつと分つた。ハハハ。千鶴子の奴一杯喰わせたな」

清川は今更のうに苦笑した。

それから三ヶ月経つた或る日。

清川兄妹の家の近くに、前非を悔いたお薦めの更生の姿が、明るく陽差しに照らされて、せつせと洗濯や縫物に、甲斐がひしく立働いて居るのが眺められた。

今日も薦子は縁側で独り針仕事に余念がない。千鶴子がお薦めのお菜を持つて這入つてくると、彼女は一寸狼狽して、小さな縫物を後へ隠した。

「――斯んな事言つて、間違つてたらごめんさい。あたし近く、お嬢さんと言つて呼べる日が来るような気がしますわ」

「あら……」

薦子は軀の秘密が見透されたように、みる／＼中に赫くなつてうつつむいた。

「当つてるでしょ。あと幾日くらい？」

「まだ／＼ですわ。お兄さんによく似た子が欲しいわ」

「あたしは反対。お嬢さんをつくりの女の子よ。ほ／＼」

二人共和やかに笑聲をたてた。 〓終〓

女同志の本勝負、乳房相撲に勝つた八重椿も、立つてはいるが胸乳をきしめてい

る。西の控力士が乳張山を介抱する、サロメーチルか何かの香がブーンとただよう、

京子は友の渡したバスタオルで汗をふきながら、はじめてニッコリした笑顔を此方へ向けた、此方といつても残念ながら私じやないどうも四股平氏へらしい。

「夜の梅／＼」と東方の力士がわめけば、西方からもそんな言葉がとんだ。四股平氏は苦笑しながら眼で私をうながして、前の部屋へ歩をはこばれる、私としてはまだ名残がつかないのであるが、いくら後髪をひかれても一人残ることならず。これが今生の別れといつたせつない心でふりかえ

と、其眼に八重椿の襟を解いた全裸がうつつた。アツと眼をそむけたが、紅潮した乳房にバランスするように、濃厚なブエスがうつつた、それはたしかに悪夢である。さてここに及んで、また一つ気にかかるのは

「夜の梅」である、氏の研究室へ戻つてシトロンをすりながら、

「夜の梅／＼つて何ですか？」とエチケツトを忘れたふりをして尋ねると、

「ハハハハ……夜の梅ですか？」と氏はくすぐつたそりに笑いうばかりである。

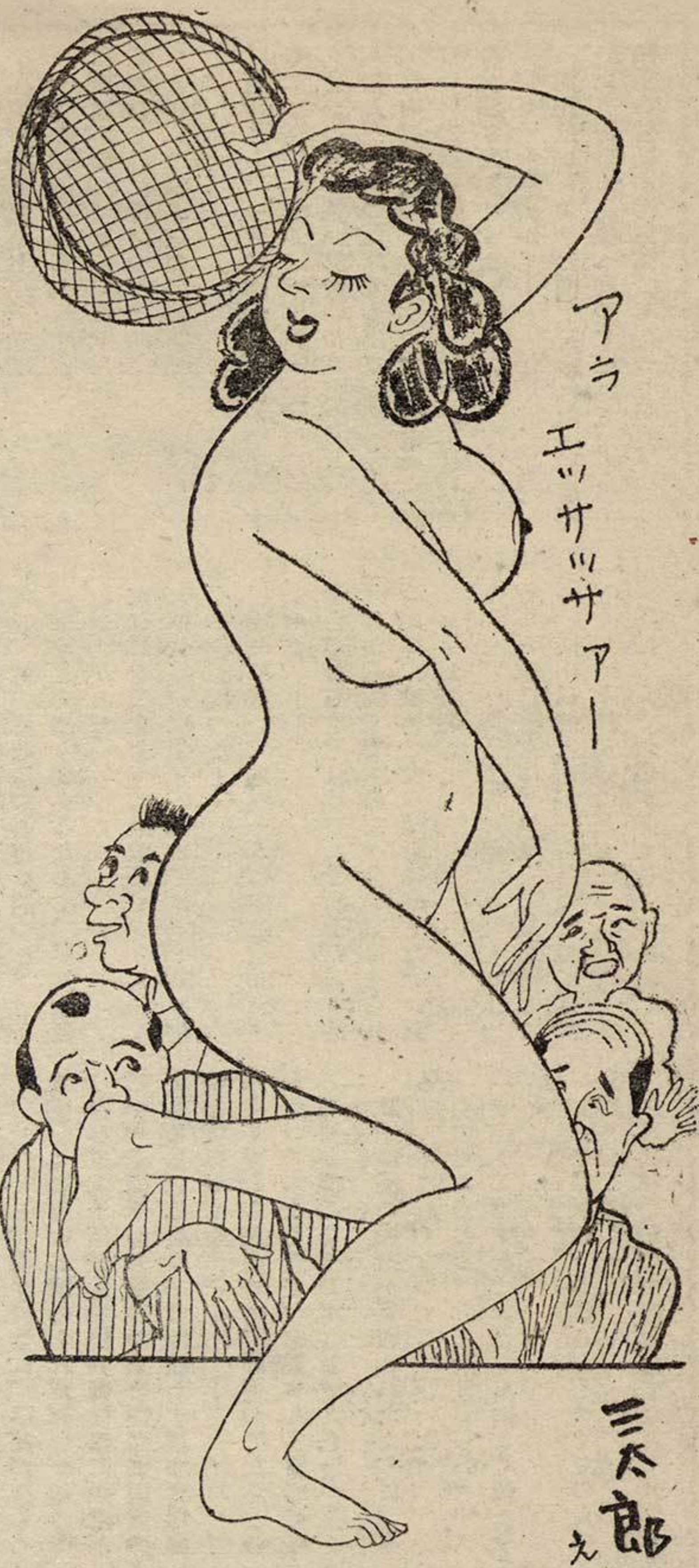
私の眼底には、あの成熟した雲珠京子嬢の肉体が、筋肉という筋肉に大浪をうたせた幻影が、カッキリと焼付いて動かぬので

「可憐な話ですね」なんていつてすまさないのだ。無神論者の私も遂に神様に祈つたです。

「贅沢は申しません、一夜で結構です、どうか私にも夜の梅／＼をお恵み下さいませ」とね。

(完)





# 爆笑小説

## おらが村に來た

### ストリップ

能登 一三

曾根三太郎画

お、あこがれのストリップガールが山の中のおらが村にもやつて來た  
そして、ぞえらいさわぎが持ちあがつた。ストリップ一行が村にくれ  
た贈物とは果してなんだつたらうか？……

「おらは、この村一番の文化人じや。岡山  
どころか、神戸まで名が知れちよるのはお  
らだけじやもん」  
と種吉君はいつも団子鼻を高くしている

笑わせちやいけな。津山の新制高校を出  
ただけのインテリで、自慢の種である。神  
戸の文学雑誌の同人というのが、隔月に一  
ぺん出るガリ版刷りの川柳誌だ。それでも  
この村の娘つ子達にとつては、東京の総理  
大臣よりもえらく見えるらしいのだから世

話は焼けない。  
「種吉つあん、川柳ちゆうたらどんなもん  
ぞな。やつぱりドドイツみたいなものかい」  
村のよろず屋のせがれ金太郎君は、この  
漢薬屋の息子とウマがある。どちらのおや  
じも村会議員である。おまけに種吉君のお

ふくろは、金太郎君のおふくろの妹である  
つまり金太郎君と種吉君はいとこで、村の  
小学校の同級生で、共に村の青年会の幹事  
である。

「おほん、金太郎君よ、おらは文学の名前  
は青田種吉じやねえ、ちやんと涼風ちゆう  
立派な雅号があるんじやけん、涼風宗匠と  
呼んじよくれ、ほら、こゝに出とる、青田  
涼風……この月はちよいとえ、句がないで  
三句組じやが」

なんとかの一つおぼえやらで、また例の  
ガリ版刷り十二頁を金太郎の膝に押しつけ  
た。

「あとでゆつくり読ましとくれや、そいで  
結局、川柳ちゆうと」

「なか／＼深遠な文学じやけん、説明がむ  
つかしいがなあ、まあえ、たとえば」

もつたいぶつた手付で、机の下の硯を引  
きよせた涼風宗匠の種吉君は、特製の短冊  
(つまり新聞紙を細長く切つてある)に金  
釘流の筆を運んだ。

「ほほう、岡山のどこじやと巡査炭をつぎ  
か、こりや何の意味じやな？種吉つあんじ  
やなかつた涼風宗匠よ」

「つまり、おらたち岡山県の男はどういう  
もんか、昔から巡査になるのが多いじやろ  
？、まあ、大阪の派出所勤務か何かしとる  
な、そこへ家出人が迷いこんで來たんじ  
や」

「ふんふん、向う見ずの娘つ子がふら／＼  
と故郷から家出して來たかなんかじやな」

「そいで、巡査が、お前の故郷はどこじや  
とたずねる。娘つ子はおじ／＼しながら、  
岡山県阿哲郡……とでも答えるんじやなあ」  
「なるほどな、巡査も岡山県じやけん。同  
郷なら急に懐しうなる、阿哲郡の何村じや



金太郎君の方のよろず屋となると、全く

大いに川柳熱を上げたいし、金太郎青年だつて、都会へ出れば百貨店の重役ぐらいや

が  
い  
に  
出  
て  
行  
つ



1



郵便局長さんは支部長で木堂先生の軸をたくさん秘蔵している。

漢詩をひねつて、碁が自称初段で、謡曲は観世流の天狗と来ているから、村での人望ははなはだ厚い。ところでたつた一つ、こまつた道楽は仲人役をするのが大好きなこと、御老人はもう九十九まとめたことを自慢の種にしている。

もつともたいていは身体の方は他人でなくなつた若い者同志が、袖でかくせぬほど腹が膨れてから、名目だけ仲人をたのむ習慣だから、まとめるのに向苦勞は要らない。結婚したらすぐ赤ん坊が生れる。そのお産の取り上げ役が金太郎君のおふくろだから、商売繁昌の福の神として、下におけぬもてなしを尽くさざるを得ない。

この間もやつてきて、  
「どうじやな、お宅の金太郎君もえゝ若い衆になんすつたの。そろ／＼嫁御もらわんけりやならんのう」  
とかまをかけ出した。よせばいいのに、おやじさんが

「へえ、おらも心がけちよりますが、なんせ帯に短かし、たすきに長しだしてなあ」と合組を打つたのがわるかつた。とたんに、局長さん、ぐつと一膝乗り出した。  
「うんにや、あるある、金太郎君なら打つてつけのえゝ花嫁御がある。どうじや。わしに任せなさんか」  
「へえ、そりや局長はんの進めなさる娘御ならおらも異存ごわせんが、いつたいどこ？」

「ようご存じじやろ。安楽寺の住職の末娘じやがな。ほらあの、お久さんなあ、今年十八、番茶も出花じや。金太郎君はたしか二十一じやろ。そしたら三つちがいの若夫

婦、仲がえゝぞな」

「安楽寺ちゆうたら、おらが壇下総代じや和尚はんとは仲がえゝし、願つたり叶つたりじやなあ」

「善はいそげじや。早速行てこまそ。はいごめん」

老人は氣が早い。かんじんの金太郎君の氣持ちを汲んでくれる暇がない。さつそく羽織ハカマに身を固めて、毎日毎晩、安楽寺とよろず屋を往復しはじめた。金太郎君がふり返つたら、局長さんの姿は安楽寺へ消えて行くところだつた。

「これ、金太郎やい」

ぽんと灰吹を煙管で叩いて、

「どこ行つとつたかい。また、種吉つあんここで油売つとつたな」

眼鏡をでぼちんにあげて、おやじさんはぎよりりと眼をむいた。

「おらや、局長はんがやきもきしとるに、呑氣にぶら／＼しちよる氣が知れん、それともお久はんを嫁にするになんぞ不足があるんけ」

「おら、なんちゆうてもあんな娘つ子はきらいじや、カボチャみたいにふとつちよる」

「ほんなら誰なら氣にいるんじやい」

「小学校の園井先生みたい

なスマートな娘つ子なら文句はいわん」

「なんじやと、おらはあんなウラナリの胡瓜みたいな娘つ子はきらいじや」

「父つつあんのもらう嫁じやねえ。おらのもらう嫁ぞな」

「なまいきぬかすな。こら金太郎やい。おら胡瓜は生れつき見るもきらいじやわい」

「なんかすそい、おらはあんなカボチャなど三度の飯を二度にしても女房にせんわい」

おやじさんが禿頭に湯氣を立てると、金太郎君も馬のように鼻息を荒くした。

「どういうても親のおらのいうことを聞かんちゆうなら勘当するぞな」

「そんな脅しはもう通らんわな。父つあんだよ、結婚は双方の合意により成立するちゆう新憲法の世の中ぞな、ふふん」

「新憲法はこの村では通らんわい」

「父つつあんだよ、えらそりにいうてもおら知つとるぞ。水車場のヘチマみたいなお花

後家はんに小遣錢やつてふざけとるのを！」

「げえつ」

おやじさんはたちまち七面鳥のように顔色を変えた。とたんにがらりと襖があいて

「なんぞな、さつきからカボチャの、胡瓜の、ヘチマのと大の男二人ががなりおうとりなさるのは」

とおふくろが顔を出した。

「うん、いや、なんじや、こりや商売の苗の売込みを相談しちよるのじや。なあ、金太郎や」

どうも弱いもんだ、男つてもものは。安楽寺のお久さんの件はどうやらお流れになるらしい。金太郎君はにやりとほくそ笑んだ

実は小学校の園井先生とはもう他人じやない。

### 三

「そこで、どうじやろな、一つ、あんた方青年会主催ちゆうことで万端仕切つてくだけはらんかな。費用の方は村会と農業会に相談して出してもらうけに」

村長さんはさかんに涼風宗匠をくどいて

いる。こゝは村長さんの家の奥座敷。

「おらも賛成だすな。浪曲じやの、剣戟じやのは時代おくれだけんど、芸術的大舞踊団ちゆうのは、新時代にびつたり会うちよりますけん」

男はみんな巡査になつて大阪へ行きたがるし、女は糸へん景氣にうなされて村から逃げ出す。田園まさに荒れんとす。村長さんは氣が氣じやない。村民は故郷を大いに愛してもらわんとこまる。おいさんとばあ

さんとだけが村に残つてはどろにもこうにもならん。若い者の足どめに、演芸娯楽の類を村長さんは大いに歓迎する。





「そんじや、舞台は鎮守の森にすぐこしらえさすけん。あんたは青年会の幹事二三人と停車場までこの大舞踊団ちゆうのを迎いに行つてくださらんけ」

相談一決。三日後、涼風宗匠は金太郎君と処女会の娘つ子三人とつれ立つて、三里距つた停車場へ、大舞踊団を迎えに行つた。農業会のトラックを借り出し、「歡迎リベラル芸術大舞踊団」と染めた幕をトラックの胴に張りまわした。朝の五時に村を発つて、峠を上つたり下つたり、停車場について待つこと三時間。

ピーポーツと単線のガタ／＼汽車が喘息やみのぢいさんみたいによた／＼と辿りつた。さて、胸をおどらせて待ちうける五人の純真な若人の眼前に現われたのは、おい、ミステーク！ たつた七人の芸術的大舞踊団リベラル座の一党であつたとは。

大阪なら新世界、神戸なら新開地のインチキ小屋さえ食いつめてのドサまわり、よりもず／＼しく芸術的大舞踊などと銘打つたものだが、岡山の山奥まで／＼／＼巡業にくるだけに、心臓も強いが、身体の方も物凄い。

三四の象と二匹の河馬みたいな女にピラピラした人絹のドレスを着せて、楽手と称するキリンのような男が首からアコージョンをぶら下げた、この化物的リベラル座のマネージャーつてのがこれまた珍妙な紳士だつた。

シルクハットに燕尾服、白のチョッキに赤いネクタイ、上着のボタン穴に大きな白バラの造花を挿したいでたちも噴飯物だが「ふうつ、暑うおまんな」

と大阪弁で、腰にぶら下げたまつくらに汚れたタオルでゴリラみたいな顔をごしご

し拭いた。おまけに足には兵隊靴、どうも飛田本通辺を桃色バーのプラカードをかっいで歩いているおつさんによく似ている。たいへんな芸術大舞踊団だが、トラックにぞろ／＼乗りこんだおつさんに、「すまんけどなあ、なんぞ食うもんおまへんかいな、朝早う出てまだ飯食うとりまへんで、腹が減つてめまいがしまつさかい」

燕尾服のマネージャーがベコ／＼頭を下げたのにはこつちが驚いた。実はもう一つ前の村でもさん／＼の不入りで、宿賃をふみ倒しそこなつて、興行用の衣裳も楽器もさし押えられ、三十人ほどの一座がちり／＼に解散し、行くあてのない持てあまし物の七人が命から／＼、着のまゝでこゝまで辿りついたんだから、朝飯どころか、前の晩も水ばかりが／＼／＼呑んで来た／＼だけだ。涼風宗匠と金太郎君が食べあましの焼味噌づきの握り飯を出したら、七人が眼の色かえてかぶりついた。

「おら、どうもこの芸術舞踊団ちゆうのけすこうし臭せえようにおもうだがなあ」



金太郎君は運転台で涼風宗匠の耳に口をよせた。「はかこけ！ 臭えのは、このトラックがいつも下肥を運ぶからじやが」

「けんどもさ、芸術家ちゆうたら、あなにい味噌を頬つぺたにくつつけて、握り飯にかぶりつくもんけ？ もつと行儀のえゝもんずら」

「いや／＼、金太郎君よ、芸術家ちゆうたらそんなもんには氣を使わんもんじや。おらの川柳の先生は神戸の下駄屋で、はじめに会うたときには、ふんどしの隙からあれが見えちよつた！ けんど、先生の川柳ちゆうたら、芸術にちがいないもんな」

「ふふん、そうけ？ 芸術家ちゆうたら、世間と大分変つちよるなあ」

それかでも金太郎君は不安そうに、運転台の小窓からうしろをのぞいてみた。おゝ女の象三四は鼻から提燈をつけて居ねむり

女の河馬二匹はバットを吹かし、怪しからんキリンは、こつちのだいいじな処女会員の大きなお尻をながめて鼻の下を長くし、ゴリラはまだ握りめしと格闘しているではないか！！

「臭えぞ、おらにやどうも合点ができねえなあ……」

金太郎君は次第に近づくわが村の森を眺めながら呟やいた。

#### 四

「大阪、神戸で大評判のリベラル当村で大公演！ 艶麗の舞姫総出演！ 再び見られぬ豪華な芸術大舞踊！ 今すぐ来たれ、会場」

鎮守の森特設大会場」青年会と処女会総動員で村中にべた／＼張りつけてまわつたポスターのきゝめで、その日は、夜も明けぬうちから、弁当持ちで村人がわんさと鎮守の森へ集つてきた。大人十円、子供三円で見られる芸術だからこんなお安いものはない。もつとも、この裏には臨時村会を招集して口うるさい議員連中をくどき落して金五千元、それから農業会から特別寄付金五千元を出させた村長さんの奔走の若勞はなみたいでいじやなかつた。

「やれ／＼、めでたいこつちや。みんな集つちよるな」村長さんは、校長さん、村会議員さん、農業会長さん、郵便局長さんのお歴々と、一段高い招待席につくと、満足そうにこゝ／＼と見渡した。特設舞台といえは物々しいが、丸太とムシロの組立だから仕事早い。

「わしも今日は臨時休校しましたじや、あゝこれ／＼、園井先生や、こどもが舞台を走りまわつとる、静めてください」校長さんは腕白ざかりの子供を預かつて





三太郎

がに涼風宗匠だつて大いに男性ホルモンの分泌を刺激される。

「……みな待つとるだで、早いとこ着て始めにやあ、じやたのんだぜよ」

起とうとしたら、しびれが切れていた。

「あいたたた……」

と宙で泳いで倒れかゝるのを、ひよいと抱きとめたストリップガール、真赤に塗つた唇をほころばせて

「……ねえ、そない固いこといわはらんでも、わてらが踊りやすいようにさせとくなはれな」

ぎゅつと胸の中へ抱きこまれて、涼風宗匠とたんにぼろつと眼がかすんだ。

ほうくくの体で逃げ出すと、げらくその後で女達が笑つた。田舎の文化人はつらい。

「涼風宗匠よ、おめえの頬つぺたになんじやら赤いもん一杯くつついちよるぞな」

出あい頭に金太郎君はケゲンそりに宗匠の顔を見た。

「……なんじやて？、そりいう金太郎君の鼻にも赤いもんついとるぞな」

「はてな、おらおぼえねえがのう」

文化人二人は妙な顔でお互の頬と鼻をこしく手でこすつた。

「ははあ、おめえ、あの踊り子の誰かとえふことしとつとろがな？」

「ばかこけ、おめえこそ……、さあては、園

井先生も口紅をきつう塗つとるぞ、今日は」

宗匠と金太郎君はにや／＼と幸福な顔を見合せた。

さて、テンヤワンヤの大さわぎのあげく幕が上つた。幕といつても、昔々日本に軍隊とかいうものがあつた時分、さかんに使われた「祝入營」の幟を何枚も継ぎ合わせたもんだから、まさに戦犯物である。ありがたいことに純綿だから、なか／＼破れない。キリンがアコージョンの調子外れの頼りない伴奏をはじめたとたんに、上手のムシロをまくつて五人の雄大な体格の踊り子が舞台へぞろ／＼と現われた。

ストリップとは裸を見物するもの、で御本人連中も裸を見せる他には何の芸もないせめて顔だけでもいゝならまだしも、いま動物園から脱走してきたような物凄いのがビール樽のような腹をつき出して、ずらりと並んだのだから、どう見たつてドサまわりの女相撲の土俵入りとしかとれない。おまけに涼風宗匠の人れ智恵で、借物の裾模様や長襦袢で、むりやりに巨体を包んでいゝから、いやはやなんともかとも壮絶な奇観を呈した。

「ほう、芸術ちゆうもんは着物の裾があなにいにあくもんかのう」

村長さんは眼を丸くした。

「おうい、安来ぶしやつちよくれ」

「そだそだ、姐ちゃんや、安来ぶし踊れや」

山ん中の村の連中には深遠な芸術はわからない。旅役者一座が来たら忠臣蔵、浪花ぶしの大先生らしき五つ紋なら森の石松をやらせなければ納まらない。満場一致で安来ぶし／＼と喚き立てるもんだから、リベ



ラル座一党もとろ／＼あきらめたのか、アラエツササと踊りはじめた。

「えゝぞ、えゝぞ、そこじや／＼、アラエツササ」

しまいには見物衆が総立ちになつて、アコージョンに合わせて、アラエツササと踊りはじめたのだから、舞踊そのけのさわざである。

「涼風宗匠や、一体どないなるんじや、こりや」

「うゝん、おらもどないなるかわからん」若き文化人二人はボカンと口をあけた。ところが……、踊り子連中、はじめは窮屈な衣裳をがまんして着たものの、踊つて

いるうちに一枚ぬぎ二枚捨て、いつの間にか、いつものストリップ調で、乳当てと三角布だけの素裸になつていた。

「あれえ？、姐ちやんら、みんな素裸になつとるぞな！」

「そだ／＼、みんな見ろや／＼、おもしれえぞ……」

アラエツササと手拍子を打ちながら、見物連中は嬉しそくに、げら／＼笑い崩れた。「……、こどもらはすぐ席を立つじや、学校さすぐ帰るだ！」

あわてたのが校長さんだ。眼を白黒しながら、ひよこを追うように生徒達を追いつた。

「幕引けや、幕、幕……！」

金太郎君と涼風先生は大汗をかいて、ごつた返す見物席から声を張りあげたが、アラエツササと踊りくるう声には及ばなかつた。もつとも進行係の青年年の連中が、舞台の裾にかぶりついて、よだれを垂らしているんだから、なんぼ、どなつたところで幕

のしまるはずはない。

## 五

「……男ちゆうたら、なんたらバカたれ揃いじや、村長はんよ！」

「うん、だつて、おらは」

「いんにや、村長はんだばつてよ、デレリと鼻の下長うなさつとつたぞい」

あくる朝。村長さんは昨日の名残りのムシロ張り舞台にひつぱり上げられ、処女会の娘つ子連中にぎゆう／＼とつちめられていた。

「てえせつな村の金を一万円も使いなさつて、あんなつまらん女の裸踊を見せるちゆうなんて、なんたらこつちや」

「あんな女らは、昨晚、おらたちがさんざんひつぱたいて村ん外へほり出したけんどな、これ見ろや、村長はん」

「漢薬屋の種吉つあんが涙こぼしてたのむけん、仕様ねえから貸してやつたけんどなこれ見いされ！」

大事な嫁入衣裳を白粉だらけのしわくちやにされては、処女会員の娘達がいきり立つのもむりはない。

「いつてえ、どうしてくんはる、村長はん」

「そねえに、村の男が女の裸踊を見てえなら、別に銭出さんでも、おらたちがいつても見せてやるぞな、村長はん」

「おらたちのおつぱいは、びいんと乳豆が立つとらな、昨夜の女のは、纏袋みたいに下つとつたぞな」

「お尻だつてば、おらたちの方が、ずうんと恰好えゝぞな、あんな豚の尻みてえに皺よつとらせんが……」

女の賞める女はない。処女会員にとつてリベラル座一党は憎悪の的となつたらしい

「かんべんしとくれや、はあ、おらがわるかつただで……」

村長さんは平蜘蛛のようにあやまつた。

山の村では女の方がよく働く。男なんぞ眼中にいない。男女同権はとつくの昔から実行している。

一方……

金太郎君は、涼風宗匠の家でしよんぼりとウイスキーをなめていた。二人とも元気がない。

「おら、もうあかん……、園井先生から絶交を言い渡されたわな」

「うん」

「おら、はじめから気が進まんじやつた、おめえは、臭いのは下肥を積むからじやというたが、おら、あのリベラル座の女を臭えとなんべんもうちよろうがな」

「うん」

「なにかもぶちこわしじや、園井先生にあいそつかされたら、安楽寺のカボチャがおらの嫁に押しかけてくるんじやぞ」

「うん」

「涼風宗匠よ、おめえ、うん、うんとたよりねえ返事ばかりしてねえで、なんぞ、おらの失恋をなぐさめてくんろや」

「うん」

「おめえは村一番の文化人でねえか、おらの頼みの綱ぞな」

「ようわかちよる、どうじや、金太郎君この川柳は……」

涼風宗匠は深刻な顔で筆をとりあげると新聞紙の短冊にさら／＼と書いた。

「……ふうん、ストリップ抱いたらあとで

トリツベル、か？、トリツベルちゆうたらなんじやな」

「おらの店の漢薬が一向効かん病氣じやが」

「はゝあ、ベニシリンの口かな、宗匠や？」

「えれえ土産くれよつたもんじや」

「ほう、いつの間にもろうたんじや？」

「トラツクで迎えに行つたあの晩じや、ちよいと森へ引つぱり出したたら、すぐ話がついたけに、たゞでえゝことしたとおもたらこの始末じやけんあ……」

「おらは失恋で、おめえはトリツベル、これでおんべこじやが」

村一番の文化人はにや／＼と頭を掻いた。(完)

## 夫婦展示會

(風流太郎)

◎強敵◎

妻「あなた、口惜しいわ、お隣りの奥様あたしと同じ着物を持つているのよ」

夫「そりや大変だ、早速引越すとしよう」

◎合理主義◎

妻「ね、あなた、どうしましょう？この洋服もこの帽子もこの靴も、みんなもう私には似合わないわ」

夫「仕方がない、それに似合う女房でも探すよ」

◎頭痛◎

夫「おい、お前ちよつとこの秤にかゝつてごらんよ、少しこの頃肥つて来たようだね」

妻「あゝ、絶対にそんなことないわ、私、今朝から少し頭が重いよ」





## 間違えた赤い腰巻

兵庫 一平 明石三平画

一

人間の運なんてわからないものである。鉄工所の平社員であつた江川良太は、終戦と同時にちよんと首切られた。こんな勤人なんかいやだと、石嶮に手を出した、それが、運のひらきとなつて、大あたりをとり、しこたま儲けた、石嶮が出す泡のように、なんでも金が増えてきた、けれど、こんな泡みたいな商売はいやだと、こんどは、たゞいてもわれぬ金物屋に転向した、一時は儲けたが、経験がないのと、購買力の低下が禍いした値下りで、山ほどのストックを抱えて青息吐息、いまにも店を閉鎖する土壇場まで追いこまれた。

前の石嶮屋が恋しいと思つて、切歯扼腕、不運をかこつていたが

動乱でちよつと金物が芽をふき出した。そこへもつてきて、あのジエン台風が江川へ幸運の風をふきつけた。釘とトタン板でぼろ儲けした、特需景氣を見越して、こんどはスクラップの思惑を買した、そこへ金ヘン景氣ときて、石嶮で儲けた金が百倍にもなり、江川は新興財閥の列に加り、居宅は天下茶屋に、店は長堀に、わが世の春をうたり、絢爛華麗な輝ける生涯に突入した。

余裕ができると、むほん氣が起きてくる。「江川はんは、ほんまにお堅いひとや、スキヤンダル一つたてなはらへん」

誰でもが言う、この言葉を江川は甲斐性なしの代名詞と感ぜ、妻一人を守つてゐるのが男の恥と思

うようになつた。「妻は家の道具でつせ、困い女は若返り秘薬みたいななんや、あんたのようなひとが、奥さんひとりは、あんまり藝がなさすぎる」

たきつける不埒者もいる、江川とて木石ではない、色氣と慾氣の旺盛な四十過ぎ、言われなくても若い女に食指が動く。

石嶮で儲けている頃でも、こんな誘惑は度々あつた、けれど、養子の身を考へたり、また激しい嫉妬をする、妻の榮子のことを思ふと、若い女に手も足もでず、逞しい欲情をかりうじて抑えつけて、第一の危機はきり抜けた。

だが現在ではあの頃とは格段の相違である、金物屋での有力者になると、役員にもなつた、なれば会合にも出て、夜おそく帰る日も珍

らしくない、江川は会合が苦手なのだ。日が暮れ、電氣がつくと、もう尻のあたりがうぢうぢして、頭のなかではヒステリックに叫ぶ榮子の顔が、ぐるぐる廻り、会合の騒事など頭にはいらぬ

「江川はんは恐妻病がおきた」はやしたてられ、江川は意氣銷沈、吐息ばかりつく。

会議から解放されて、ほつとしたとたんから、榮子の嫉妬攻勢の対策に心を悩ます、いくら完全な守備陣をしいていても、夜おそくなつた事実が、江川を苦戦へおいやる。

数々の誘惑をおしのけて脱兎の如く家へ帰ると。

「今晚も異常おまへんやろ、見せてごらん」

とくる、強制的な身体検査がはじまる、最初は衣服から、榮子は嗅覚、視覚、触覚を総動員して鋭敏に動活を開始する。

洋服の袖や肩、胸のあたりは嗅覚と視覚でもつて攻撃する、自分の愛用している以外の脂粉の香を嗅ごうと躍起になり、また白粉で

もつていないかと眼を光らす、異常なしとみとめると、白いワイシャツから口紅のあとでもつていないかと、真剣な視線の一番射撃、次にパンツ、これの検査こそ榮子の主眼なのだ、特に入念である、うっかり小用で濡れてでもいたなら、それこそ大事だ。

「きたないもんが、」

と言いつゝ榮子は眉をひそめたが、見逃すことはしない、その不潔なところを、指先でそつともんでみる、粘着性の有無をたしかめるのだ、たゞの排泄物の失敗と判明すれば、これで検査は終了。

二

「江川はんは、ほんまに木石のようなひとだつせ、女嫌いでんな、奥さんも倅でつせ」

なかには江川への同情者もあつて、こんな有利な証言をしてくれる組合員もあつたり、数度の身体検査にも、疑惑をいだかせぬ清潔さを見せた効果があつて、江川はよりより身体検査の拷問から逃れることができた、だと言つて、榮



ヨリつちやイヤッ



SANJ

子の嫉妬に休止符がうたれたわけではない。

金へん景気は江川をますます太らせ、酒席をもつ機会も多くなつた、その間に執拗にからんでくる誘惑に負けて、南地の若い芸者、梅香とできてしまった。

誘惑に負けたと言うものゝ江川にも野心もあつたのだし、栄子の嫉妬へも反響を感じていた際だつたので、梅香のコケットにこころと参つてしまつた。

森小路の、二間つゞきの豪華なアパートに梅香を囲つて、栄子の眼を盗んで通つた。そこでは妻では得られぬ、情痴の陶醉境があつた。江川は二十年も若返つて日々が楽しかつた。

三日逢わぬと、梅香の肌の匂が恋しくなり、江川の欲情をそよりたてる。匂うような梅香の肉体が眼の前でちらつく。

こんな想いで日を送る江川は、運悪く風邪をひいて二週間も寝こん

たが、感謝の念はわかず、心は梅香を追いかけていた。

少し無理だと思つたが、梅香の顔が見たく、病の床を蹴つて起きた。栄子へは長堀の事務所へ行くという口実をつくつた。

和服に二重廻しというもののしきで家を出た。寒いというほどでもなかつたが、この厚着は栄子の指図だつた。こゝで反対して、栄子の気嫌を損じると、梅香のもとへ行けぬ。厚着に不満だつたが易々諸々として言いなりになつた

外出禁止の爆弾が怖しかつたのだひさかたぶりに出た事務所、社員員の報告などうわの空、心は梅香のもとへ飛んでいた。

一応、仕事にけりがついたのが四時だつた。ハイヤーを森小路まで飛ばし、梅香と食卓をはさんで盃の数を重ねた。

「すつかり風邪がなおつたのん」「もうよいのんや」

声にはまだ二週間の名残りがあ

でし

まつ

た。

栄子

の手

厚い

いた

り尽

の看

せり

うけ

る。

「まだ元氣やなさそうやおまへん

か。無理しなはつたらあとが……」

「けどおまえに逢いとうて逢いと

うて」

「それほんと……あれも大丈夫」

「そりや、もう」

「あれまでが風邪をひいていたらこゝへ来る資格あらへん。妾宅やもん」

りた。

そのトタン、電燈が消えた。「電力事情はよくなつてんのやにまた停電か、困るなあ」

江川は手さぐりで衣服をさがした。

「あんた、懐中電燈でもつけましか」

「よいよい、もう着物も知れた。おまえはそのまゝ寝とりい、くたびれとるやろから」

「すんまへん」

「すまんことなんか、あらへん」

「あきながら、ちやんと服装をとのえた。」

天下茶屋まで、ハイヤーで帰つて来た。この附近も停電だつた。

栄子が、懐中電燈を持つて出迎えた。

「お食事？」

「そとですませた……それよりも今日はひどく疲れたから、はよ寝たい」

大袈裟に言いつゝ、とんとん肩をたゝきながら寝室へ入つた。江川としてはこの上栄子に要求されたら、また風邪がぶり返りそうなた

気がして

「痛い、無茶すんなよ」

江川は、顔をしかめて太腿をなでた。

「ほんまに帰らはるのん」

「わしは栄子がこわいのんや。外泊でもしたら、おまえとも別れるよるなことになるかもしれへん。まあ帰しておくれ。そのかわり明日の晩もくるさかい辛抱しといて……」

江川の首にまきついていっている梅香の手をやさしくはねてベットをお

思つて、着物を脱いだとき、電燈

がぱつとついた。

「ありやうや」

あわてゝ隠そうと思つたが、そ

んな間がなく、恐る恐る栄子の顔

を見ると、栄子の眼は媚めかし

とろりとしていた。

「すまん、すまん」

思わず口から出た。

「まあ、あんたが赤い腰巻してゝ

くれはつたのん。誰かに盗まれた

ものと思つていたのに、おゝきに

うち、うれしいわ」

意外の言葉に、江川は果敢とし

て栄子の顔を見まもつた。

「うちのこと、そのように思つて

いてくれはつて……」

栄子の言葉にほつとして、急い

で寝床に入り、

「栄子、早く休んだらどうだ」

と白くれた。

「もう、そんな元氣がでたのん」

「うん」

江川は宙をみつめつゝ間違えて

来た赤い腰巻の処置を考えてい

た。

「まあ、あなたに

腰巻を脱いで、

くれたのネ

く

た

の

の

の

の

の

の

の



SANJ



# 女の鑛脈

茨木浩市

田中比呂志・画

「君は、どうして、何時までも結婚しないんだい？」  
「野暮なことを訊くもんじやないわ。貴方、妾に恥をかゝせる積りなの？」

「冗談じゃないよ。それこそ全く尖がらがつちや嫌だ。僕は真面目にきいて居るんだぜ」

「妾も真面目に返事してんのよ。いくら妾が男まさりの中性だと言つたつて、独りじや結婚出来ないわ。相手が居なくちやね」

「すると、相手にとつて不足のない男性が居ないと言う訳だね？」  
「それ皮肉？ 嘲笑ないでよ。誰も相手にして呉れないからなのよ」  
「とんでもない話だ。柄にもなく撰り好み過ぎるんじゃないのか」

ね」

「あら、茨木さんて、随分はつきり物を言うのね。柄にもなく御挨拶だわ」

「いや、失敬。そいつは全く失言ものだ。何分、人間が正直だと余り心にもないことが言えないんでね」

「益々ちやつかりして居るわ。でもいゝわ。妾、別に怒つて居る訳じゃないの。妾だつて、それ程自信が強い女でもない積りだし、それに女の嗜みの懷中鏡位は持ち合せて居るから、自分の御面相が高峰三枝子に似て居るか、飯田蝶子に似て居るかの判断ぐらいはつけて居るわ」

「まあまあ、そんなにむくれ給うことはな



い。何も僕だつて君をからかう意志は夢さうに持つちや居ないさ。唯、女の子がだぶついて居る世情

とは言い乍ら、君ほどの女を手つかずの儘、事務室の片隅に埃を浴せて置くなつて、随分間拔けたぼんやり男が世の中には案外多いもんだな——と感激これ久しうした訳なんだが——」

「若い娘さんなら、てもなく喜びそうに殺し文句ね。でも、そう言やあ、貴方だつて、其の間拔けたぼんやり男性の一人じやなくて？」

「そのものずばり。将にギョツと言ふ所だね。だが、今からでも決して遅くはない。僕はこの抜けなぼんやり男性を卒業しようと思つて居るんだが、この神秘の扉は、やつぱりジイドやないが、狭き門かね？」

他人が聞いたら、とんだ掛け合の万才だが、これでこの話、案外真剣味のある話なのだから些か変妙ではある。

東洋度量衡株式会社の、晝休みの、若い社員連がそれぞれ、食後の軽い散策や運動に出掛けて行つた後の、潮のひいた様な静かな、がらんとした事務室の一隅での、私と社長秘書の西条真砂との、虚々実々の会話の一齣なのである。この東洋度量衡株式会社と言うのは、震災から免れた絶好の条件

を金城湯地として、今や業界の王座に君臨せんとして居る。至極景気のよい会社なのである。

の張りのない精神がよく其の服装にも表われて居る。

彼女自身、冗談にでも飯田蝶子を引き合いに出す位だから余り容貌に自信のないことは解るが、斯うして一尺と離れて居ない目と鼻の先に、真砂の顔をじつくり眺めて見ると、満更でもない道具立てであることに気がつく。唯、何と言つても残念なことは、女の色気が全然ないのである。固い線の輪廓の中に、ごつごつした目鼻立ちが女の色気からそつぽを向いて居る。何とはなしに若い青春を、艶つぽい噂話もきかず、十年近くも此の会社の固い椅子に腰かけて来たのもそのせいかも知れない。

然し、若し彼女に此の固い椅子の代りに、柔かい暖かい社長の膝の上に腰かけて見るだけの茶目気でも持つて居たら、少しは彼女の女性地図にも変化があつたかも知れないのだが、この社長、僕にも似て女が好きな癖に、何時か社長室で書類を持つて部屋を出て行く真砂の後ろ姿を僕が顎でしやくつて、

「あんなの、案外じやないのかい？」

とけしかけたら、

「駄目駄目、あれは全然駄目だよ。ありや没柿だよ」

と至極そつけない返事だつた。いやにはつきり駄目の字を重ねた断定的な否定だけど、その笑、別に試食して見た訳ではないらし

を金城湯地として、今や業界の王座に君臨せんとして居る。至極景気のよい会社なのである。

それはさておき、斯うして、晝休みの閑散な事務室の中で、のんびり腰を落ち着けて、西条真砂と掛け合ひ饒舌を交わしては居るが、私はこの会社の社員ではない。これでも私は茨木鑛物鉄工株式会社

の社長なのである。と言つても、社長にもピンからキリまである。私の方は残念ながら、そのキリの方に属するのだ。社長以下従業員総勢三十五名と言う、いともささやかな株式会社社長の社長なのである

その私が、此の会社に斯うして気安く出入りして居るのは、私の会社がこの会社の下請工場でもあり、此の会社の社長が私の小学校時代からの莫逆の友でもあるからである。

資本金二千万円、従業員四百五十名の社長と従業員三十五名の社長とでも、友達と言うものは有難いもので、何のひけめもしに交際出来るのである。

この親友の社長の女秘書をもう十年余も勤めて居る西条真砂は、彼女の勤続年限が離弁に物語るよりに決して若い娘ではない。

其の昔の実科女学校をも卒業して居る筈だと言うから、どんなに若く見積つても三十近い勘定になる。それに、彼女の風態も、どちらかと言うと年齢以上に地味で、野暮つたくて、顔に自信のない女



い。唯、何となく外形的にそんな感じの充分にする彼女であつた。「また、君のいかもの喰いが始まつたね。だが止した方がいゝよ。あの女だけは」

「君の手垢のついた人形なら僕も手を引くが、どうやら彼女だけは流石の君も食わず嫌いらしいね。どうやら、こりや上手の手から水の漏るの類かも知れないね」

「いやに深い執心のようだ、君の買いかぶりだよ。母親が一人あるだけで他に何のうるさい系累もない女だから、後腐れがある訳じやなし、君の言う様にそんな秘めた珠ならとつくの昔に僕が世話してるよ。残念ながら君の年期を入れた筈の女撰眼も、あの女に關する限り少し脱線して居るよ。止した方がいゝね」

「僕は、そうきけばきく程興味をそゝられて仕様がななんだよ」

「どうしてもあの固いごつごつの渋柿をしやぶつて見なければ気がすまないと云うのかい？ 全く悪い趣味だよ。それに、きまぐれの悪戯だけは止めて呉れよ。とに角長い間、俺の為に尽して呉れた有能な秘書だからね」

「手を出すからには責任は持つさあの渋柿、案外熱れて居るんじゃないかなあ」

男同志の遠慮のない放談の果て逐々、私は西条真砂の女体開発を宣言してしまつた。

そして、其の実行第一歩が晝休

みの事務室の中でのあの掛け合い問答となつた訳だが……。「もう一度冗談ではなしにきくがね。君は結婚する意志が今でもあるのだね」

「意志はあるけど相手がないわ」「一生独身主義である訳でもないんだね」

「顔には自信はないけれど、私は別に不具じやないわ。何も好き好んで獨身主義を通す女なんてあるものですか」

浮薄な噂話や淫猥な男女秘話から、完全に卒業して居るような、とりすました真砂の固い表情と、静脈の浮いた蒼白い三十女の皮膚の底には、やるせない女の焦燥と諦観の錯雑した感情が、古沼のうに淀んでゐる。何気なくはき捨てた言葉の響にも、じつと耳をすませば、肉体の底で騒ぐ血のうごめきに慟哭する女の悲愁がききとれるのである。

私は私の眼が決して曇つて居なかつたことに凱歌をあげると、益々、この女への興味は深まつて行つた。どんな努力を積み重ねてもこの女の肉体の中から、眠つて居る甘美な女の脈脈を発掘せずには置かない積りだ。

年齢はもう既に三十を超しては居たが、男女の愛慾の修羅場には殆んど縁が遠かつた女だけに、見よう見真似で薄つ葉な真連女の様な口をきくことはあつても、正味はまるでねえだつた。男女の性

愛秘事なんぞ、子供のお伽譚の絵本を繙く程にも興味も好奇心も感じない。とりすました中性の蒼白い皮膚の底から、私は、奔放な情熱の脈脈とたぎり立つ淫蕩の増殖を発見しなければならぬ。

私は愚かれたようにむきになつて、この誰の注意も興味も惹かず、事務室の片隅に埃を浴びて青春から置き去りにされて居た乾からびた三十女に突進して行つた。

斯う言う、自分が女であること、を長い間、忘れて仕舞つて居たような女を御するのは、仲々に根氣と熱情と、馬鹿々々しい程廻りくどい手練手管が要るのだが、私は期するところがあつたので、面倒臭い顔もせず、着々と得意の蜘蛛の手を張り廻らして行つた。

さて、この真砂と言う女の肉体から、素晴らしい情熱の泉を発掘するに至るまでの迂余曲折の経緯は、我ながらよくも斯んなにまで綿密な基礎工事の下に仕上げたものだとあきれれる位、いろいろな語り草があるのだが、それは又の機会に別稿で御披露することにして、茲では私の女体探險記の決末だけを報告するに止めて置こうと思ふ。

とにかく私は勝つた。

苦勞の仕甲斐は充分にあつたのである。

十年近くも自分の傍に待らせて朝、晝、夕と、前から眺め、後から眺め、上から眺め、下から眺め、いや、下からだけは眺めたかどうかは、友達の名譽の為に疑問符を附して置くとして、ともかくも飽かず眺め暮しながら、遂に彼女の秘扉を叩き得ず、渋柿と烙印を捺して居たのは、彼にとつては何と言つても大いなる誤謬であつたのである。

あらゆる誘惑の手練の網を張つて、見事に捕え得た西条真砂の肉体は、渋柿はおろか、実に熱れ切つた豊饒な甘柿のそれであつた。

十余年、奥深く秘めに秘めて居た女の情熱と媚情は軀を切つた疎水の如く奔騰狂瀾し、とどまる所を知らない程であつた。然し、何と言つても年齢だけは年増でも、根がおぼこだけに、性愛技巧や男を喜ばす巧緻なテクニクなぞ御存知の筈はないけれど組板の上の鯉のように投げ出された女体は豊潤に熱れ切つて、あの固い肉体の線の何処を弾けば、こんな甘美な旋律がほとばしり出るのかと疑われる程に、男の官能をあふり恍惚をほしきまゝにした。

遂に、新しい泉は古き泉の底に見出されたのである。私は意氣揚々と東洋度量衡株式会社の社長室に断金の色友をたづねると、歡喜と得意に相好の今にも崩れそうになるのを無理に我慢しながら、悠然とそぶいたものである。

「見たり聞いたり試したり……我遂に勝てり」

友達是我誤てり——と言つたような顔をしてそれでも固く私の手を握つて呉れた。

それから間もなく、社長室から西条真砂の姿が消えた。十年勤続の退職金はけちな社長のこととて何程のことともなかつたのだが、二三ヶ月過ぎると、小じんまりとした日当りの好い新築の二階家が、新しい女主人として彼女を迎えたその家の表札には……そんな野暮なことは書かない方がいゝでしよう。





# 痴情の果て 富田 信二

秋田冷光画

## 邦戀に狂う妻の痴態を眼前に眺めた夫の氣持は果して どうであつたらうか？女体の秘密を覗く犯罪讀物！

「わたし、殺されるに違いありません、とても恐しくて夫の顔がみ  
ていられません、お願いです、一  
緒に逃げて下さい」

よねは、森田の膝にすがつて哀  
願した。

しかし、資産家で、家も土地も  
妻子もある森田四郎兵衛は、そん  
な事ぐらいで逃げたりなど出来る  
訳のものでないので、黙つていた

すると、よねは、きつと唇を噛  
んで、何か深い決心をした。瞳が  
異様にきらめいた。

「では、思いきつて、夫を、この  
世からしないものにしてしまいまし  
よう」

「えッ！殺す——」

さすがの森田四郎兵衛も、たる  
んだ五十面に恐怖を満ち、よねの  
大膽不敵な言葉に驚いた。

「驚くことはないじやないの、殺  
さなくては、とても二人で楽しむ  
ことができませんもの、ね、いい  
でしょう？」

邪戀に狂つた四十女の淫らな瞳  
が、森田をみつめて燃えたつた。

甘い含み声の中に、恐ろしい刺が  
隠されているのを感じたが、彼も

恋に狂つた浮気男の図々しきで、  
胸にすがりついてきたよねのから  
だを、いじきたなく弄びながら

「ふふ、まあ、なんとかするさ」  
そういつて、盲目の情痴に身を  
浸らしてゆくのであつた。

二人の邪戀は、よねと、夫の松  
之助との間に、子供が出来た頃か  
らはじまつた。

森田は、自分が経営している養  
魚場の使用人である、松之助に、  
当時、女中奉公していたよねをと  
りもつてやり、同じ屋敷内の小屋  
を改造して住まわせてやつた。

松之助は、養魚場にいつていて  
留守がちな晝間は、よねが唯ひと  
り、縁側でぼんやりしている。そ  
んなとき、森田がよくやつてきて

色々新婚生活の話などして、よね  
をからかっている裡に、いつの間  
にか關係を結んでしまつたのであ  
つた。

二人の關係は五年も続いた。

夫の松之助は妻の不倫を、うす  
く知つていたのだが、少々お人  
よしの上に、小さい時から養育さ  
れた森田に恩義もあるし、どうし  
ても口にするのができなかった

一週間ほど前のある夜のこと、  
松之助は、番小屋から遅く自宅に  
帰つてきた。

いつも開いている筈の襖が閉め  
切つてあるので、よねが急に何処  
か悪くなつて寝たのかもしれない  
と思ひ

「よね——よね」  
そりいながら、ガラリと襖を  
引いた。

「あッ！」  
松之助は仰天して眼を掩つた。

聲音に気がつかないほど夢中に  
なつていた森田と、よねは、彈か  
れたように身を離した。が掩りべ  
くもない淫らな肢態に、驚愕の聲

をあげ、ブルブルと身震いして、  
今にも飛び込んでくるのではある  
まいかと、松之助のくしやくしに

歪んだ顔をみつめた。

しかし、松之助は、身を翻えし  
て番小屋へ引返していつた。

その夜松之助は、真つ暗な番小  
屋の中で、如何に悩み苦しんだこ  
とが——。

いくら恩義があるからといつて  
妻まで裏とられて黙つて引退つて  
しまつた自分の氣の弱さに、彼は

自分が憤ろしく、といつて、どう  
して復讐してやればいいのか考え  
がつかなくつた。

それに、どちらが言い寄つて関  
係をつけたかも分らない。小柄で  
いかにも精力の弱そうな松之助  
に不満を感じていたらしいよねの  
態度を思い返すと、彼女が、十四

も年の違つた森田の脂ぎつた精力  
的な体軀に魅力を感じ、言い寄ら  
れるままに身をまかせたのではあ  
るまいか？いや、女中奉公をして  
いた頃から続いているのかもしれ  
ない。

そんな事ばかりくよく  
よ思ひ悩みながら、松之  
助は、夜が明けると、我  
家へ歸つた。

よねは氣まづい顔をし  
てはいたが、快よく夫を  
迎え、食膳を整えた。

松之助は石のように黙  
つたまゝ、物凄しい形相で  
よねを睨みつけていた。

そんな日が續いて、よね  
は、いよいよ松之助が恐  
しくなり、森田にそのこ  
とを訴えたのであつた。

情痴の虜となつた女の  
心は、実に想像以上に大  
膽だ。森田は、最初驚え

上つたが、一度墮ちこん  
だ泥沼の戀の味に、うつ  
とりとなつてしまつてい

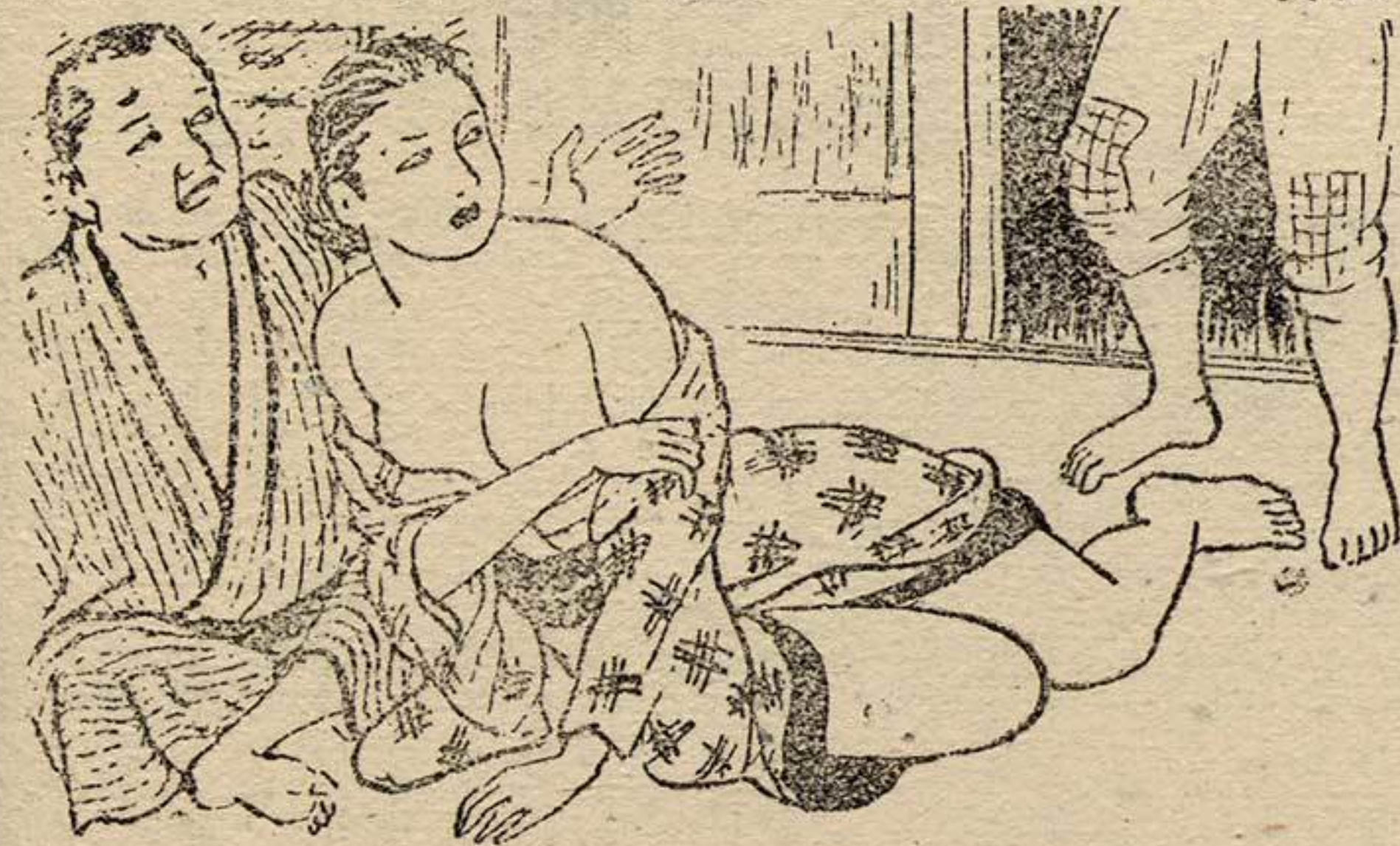
た彼は、遂に恐るべきよ  
ねの計画に従うことを約

してしまつた。

ところが、その話をすつかり縁  
の下に潜んで聞いていたのが松之  
助だつた。彼は復讐すべき相手に  
逆に復讐を受けるような立場にな  
つた事を思うと、全身が怒りにふ  
るい立つた。

「ようしッ、その氣なら——」  
彼は、ガラリと變つた野獸の瞳  
で暗闇を凝視しながら、ニヤリと  
笑つた。どんな考へが浮かんたの  
であらう？

彼は、縁の下から這い出ると、  
闇の中へ姿をくらましてしまつた







自分は温順しく身をひくつもりだったが、二人は自分達の邪魔になるといふので私を殺そうとして

いる。

あなたも夫に見捨てられた境遇だ。自分は二人を殺そうと考えたが、やつと昨日思い止まり、あなたに援助を乞いにきた一緒に逃げてくれ。二人にあてつけるために考へ出した事ではない。私は、あなたを、とつくから慕っていた。妾を三人も置いて、満足な愛情も与えてくれない森田のような男から離れ、私と一緒に仲良く暮そうではないか。それでうまくゆくのだ。奥さん、お願いします。

それから二三日、彼は消息を絶つてしまった。よねは森田と大つびらに毎夜淫楽に耽つていた。

その頃、森田の妻が我が子に添乳をしながら、毎夜の夫のあくなき淫乱を思つて涙にくれているところへ、突然、松之助が現われた声を立てようとする。

「奥さん！」

松之助は哀願するように手を差しのべ、自分の妻が、あなたの夫と関係結んでしまった。恩を受けたあなたに怨みはないが、憎い

之助の手を逃れようとあせつた。森田の好みの緋の長襦袢が乱れて、三十女の体臭が、むうつと松之助の鼻に迫つた。

狂気と淫慾は必ず共に溢れ出すものだ。

松之助はよねと、森田が邪惡に狂つてゐる場所へ飛び込んだとき、の幻覚が脳裡にクローズアップされるのを意識した。彼は泣き叫ぶ女体を思いきり抱めぬいてやりたくなつた。泣き叫ぶ女の体を軽々と抱き上げると、掌で口を押え、横抱きにして裏庭へ飛び降りた。母親の乳房を無理に離された赤ん坊が、座蒲団の上で火のついた様に泣き出した。

いくら広い屋敷といつても、この騒ぎが分らぬ筈はない。忽ち家人が駆けつけて大騒ぎになつた。「旦那様あ——旦那様あ——」

ただならぬ叫びに、森田はハッとしてよねの鉢を突き放して駆け出した。

我家へ帰つてみると妻の姿がない。大慌てに探索したところ、番小屋の中で殺されてゐる妻を発見した。よねも蒼白になつて駆けつけてきた。積まれた薬の上に仰向けに寝かされ、苦悶の形相で両手を固く握りしめている。それに下腹部が露出され、凌辱を受けた証を歴然と残している。

よねと森田は、犯人が松之助であることを暗黙のうちにさとした。あることを暗黙のうちにさとした。よねと森田は、犯人が松之助であることを暗黙のうちにさとした。よねと森田は、犯人が松之助であることを暗黙のうちにさとした。

ソトンと前のめりになつたと同時に、背に強烈な痛みをピクツと感じ、それが脳天につき刺つて次第に全身が硬直するやうな激しい痛みに変つてゆくのを覚えた。

「さまあ見ろッ」

たしかに松之助の声だと思つたが、その真偽を確かめる迄もなくそのまゝ深い谷底へ落ちてゆくやうな虚脱を感じ、何もかも分らなくなつてしまった。

よねの悲鳴を聞いて母屋から人々が駆けつけて来た時には、血塗られた森田とよねの死骸が築山の下に転つてゐるばかりであつた。

現場から少し離れた裏木戸のあたりには、兇行に使用されたと思はれる血塗れの薪割りが投げ出されてあつた。

「さあ、犯人は此の近くだ！」

というので直ぐさま非常警戒が附近一帯に敷かれたが、容として犯人の足跡は知れなかつた。

養魚場に続く裏山へ逃げ込んだ松之助は、それから一週間後、空腹にヘトヘトになつて町へ食糧を求めに来た所を逮捕された。

裁判の結果、犯行の動機には同情されるが、人を二人迄殺害したくとも、不貞の妻は潔く離別して再起をはかるべきであつたとして懲役十五年の判決が下つた。



新釋おさん茂兵衛

とんでもハッパン わやのかけひき

# 恋心八卦色暦

緑 猛比古

繪・今幾久藏



— 生きた花見で拾

つた女房 —

貞享年間——、將軍綱吉在戦中の出来事である。

京都烏丸四条下ル——に、大経師で意俊と云う男がいた。禁裏、院中、五摂家へ献上する、新暦づくりの総元締として、今時のカレンダー製造業者等想像もつかぬ程の格式ばつた家柄——。諸役御免で、務要らずのぞろりとした長羽織に十徳着で、宮中に出入り出来たと云うから大したものである

この意俊、性来の色好みで、女房を三度めとつたが、一人として彼に太刀打出来る女としてなく、精力萎えてみまかるか、余りの強淫さに怖れをなして逃げ出してしう有様。そんなわけで、このところ久しく寡夫暮しをしていたが、京で育つた面喰いだけに、並大抵の女では仲々承知出来ない。

そこで思いついた一趣向——。南の芝居が閉ねる前、祇園の松屋と云う水茶屋の、道に面した張窓を開けさせて、芝居帰りの女をゆつくり見定め、いゝのがあれば選ぼうとの、生きた花見と洒落た窮余の一策——。

ぞろ／＼大勢群がつて行く女達——、さほど醜いものでもないが、さりとてこれと取り立て、云う程の美人も見つからない。

そのうち、身装恰好も他の者より勝れて目立ち、思わず意俊がハッと息を呑んで、二階の手摺から身を伸び出す程の美人がス——と通りかゝつた。

「これだ／＼。やつと今日こうして眺めて

いた甲斐があつたと云うもの。これこそ京洛一の美人に違ひなからう——」

意俊が感嘆の声を放つも道理、当時流行の浮世笠を供の者に持たせ、お下げにした髪を梳き流し、先をすこし折戻してもみ絹でたゝみ、前髪若衆の様に金元結をかけ、その花のかんばせは辺りを拂い、白繻子に墨模様の肌着をつけ、孔雀の刺繍をあしらつた玉虫色の繻子の上着を軽やかさし、透く様な白いしなやかな手に、幾房もつながつて咲いた白藤の花をたおやかにかざして歩む姿はさながら天女の様。意俊尽く気に入つて、そつと傍らの茶屋の女将に女の名を訊ねると、

「さいな、あの娘御が今、室町小町と評判の、おさんと仰有るお方ですがな——」

と云われて意俊、もう是が非でもおさんを欲しくなつた。思い立つと、こゝ数年のやもめ暮しで辛棒が出来なくなつていた折早速人を介して、金と地位と伝手でがむしやらに、相手の意向も考えばこそ、相当年の違ひ十七のおさんを遂々わが女房にとし

— 啜り泣きの一つも

させて見たさの

口説上手 —

思い叶つた雅妻として、なめる様な可愛がりように、おさんととも嫁いだ身、今は意俊大事とまめ／＼しく仕え、連れ添つた當時は、厭で厭で仕方なかつた夜毎の闇の営みも、やがては愉しみとなつて、三年が程の月日は何事もなく過ぎ去つた。

意俊の強淫も年と共に納まつて、日増し





に豊満に優艶さを増すおさんの肉体的受入態勢は、流石好色の意俊をもたじく／＼とせしめる程のよさで、声を細めた恥かしさが消えて、夫婦の仲に遠慮会釈がなくなつてくる頃、倦怠期と云おうか、矢張り男は勝手なもので、可愛い／＼おさんに惚れて／＼惚れ抜いてる癖に、意俊奴そ／＼浮気し出したのである。今も昔も浮気の虫に交りがない。女を征服して体の隅々迄も知り尽し、すっかり無我夢中にさせて仕舞うと、物足りなくなるのが男の性情らしい。

それと云うのが、二年前に女中に来たおたまが、近頃すっかり瑞々しく色気づいて折ふし紅刷毛とつて顔を撫で／＼は、チョイ／＼小間物屋通いする様になるのを見ては意俊チョツカイを出さずにはいられなくなつて、ソツとおたまの部屋に忍ぶ様になつた。

あのふくらんだ胸押し抜けて、嚙り泣きの一つもさせて見たい慾情にかり立てられて、夜這いをするが、未だものにならないそれもその筈、豈にはからんや、おたまは手代り茂兵衛にぞつこん惚れて、一年前から人知れず片想いの胸を焦がしていたのである。

三度／＼の食事にも、茂兵衛の分には気を遣い、すゝぎ物でも主人の意俊よりは念

つて、繕いあらば気を配り、懸命の心尽しも知つてか知らずかさつ張り反応がない。何しろ茂兵衛と云うのが、こんな大経師屋には勿体ない程の美男——産れは丹波の萱原と云う草深い田舎だが、まるで加茂川の水で産湯をつかつた様な優男——。愛想がようて物柔かで、その癖裸になれば田舎育ちのがつちりした体つき、眼鼻立ちが整うて、独り者とときているから、おたまならずとも夢中になるは無理もない——。

茂兵衛が店先に座つてしていると、唇の売行がぐんと殖えると云うから大したものので、ほんにあの茂兵衛様のような男をもつた女子は果報者じやと、女三人寄れば姦しく、折ふし井戸端会議の話の種に、慌て／＼どら亭主と食つついた女房、後家、姥様、はつさい娘が額を集めては茂兵衛の尊——。

当の茂兵衛は女など何処吹く風と、日がな一日、せつせと唇づくりに精出しているにつけ、おたまは尙更胸のなやみを打ち明けかねて、独り悶々としている。仕事も手につかずぼんやりしている折も折、奥でポソ／＼と手がなる。波々顔を出すと、おさんが薬師様へ御詣りの留守、意俊が独り寝そべつていた。

「旦那様、何ぞ御用でござりますか——」

「手空きならば丁度幸い。腰が凝つてならぬゆえ、ちと揉んでくれぬか」  
魂膽かくして打伏す意俊に近づいたおたまは、奉公人の事故詮方なく、ヘンな事でもなければよいかと案じつ／＼も、ソロ／＼腰の辺りから、臀、股、ふくらはぎかけて揉み出した。

「あゝいゝ氣持じや。——もちつと上……うんそこじや／＼。もつと脇の……」  
段々延びてくるおたまの手を、頃合やよしと、意俊はぐつと掴むなり引き寄せて、「ハハハ、たま——たま、美しい女猫とらえたぞ——」

と冗言交りに素早くおたまの乳の辺りへ手をやれば、おたまは驚くなり、さつと顔赤らめて、

「まあ、こそばゆい——離して」

「いや／＼、何で離すものか——」

と抱きしめて頬ずりしようとする。

「あれッ、又しても悪戯をなされます。今度こそおさん様に告げますぞえ。今夜はどこもかしこも紫色になる程つめられますから覚えておいでなさい——」

おたまは振切つて逃げ様とするが、どっこいそうはさせぬと意俊、後より羽がいじめして、

「なーに、本妻の格気とうどんに、胡椒はおきまりじや。いゝわ／＼、紫色はおろか例え身中が樺茶色に腫れ上ろうとも離しはせぬ。えゝむごいぞおたま——折ふし夜毎寝込みにお見舞申せど、一度も本望遂げさせぬ。今こそいやとは云わさぬ」  
「えゝい、もうどうなと好きな様にしやさんせ。妾しや。おさん様にすつかり申し上

「かまわぬ／＼。おさんに告げるその口をわしが口で蓋しよう」

とずき／＼した意俊、おたまの口を吸いつけんとしたその時、表の方で、

「御新造様、御帰ります——」の、丁稚手代の声につれて、廊下を踏んでこちらに近づく足音——。

えゝい、折角もう一息のところに残念なと手を離れた意俊、ほつと一息ついて、危うく難を逃れて乱れた身装いをと／＼のえるおたまが勿々に出て行つた後、氣拙く苦虫をかみつぶした様な顔でふてくされていた——。

——女に頼まれては、

いやとも云えぬ

身の破滅——

「世間体も悪くて人にも云えず、旦那様に頼むも辛い。のうそなたの才覚で何とかならぬものならと——」

「よく分りました。おさん様にこうと打明けられて頼れば、この茂兵衛も男、なんとか算段致す事にしましょう——」

唇をつくる手を休めずに茂兵衛は、そつと傍らに、つづくまる。思案に余つた浮かぬ顔のおさんに向つて力強く引き受けた。店先は折柄出払つて、人影もない午下り——。

下立売の、おさんが父の家座敷が、町衆の加判で一昨年三十貫目の家賃に入れた処、愈々期日になり、折悪しく物入り続きで拂い様もなく、詮方なくおさんの許へ頼み込んで来た。



布をしぼつたが三十貫はどうにもならぬ。税の取り立てで苦しむのは昔とても変りがない。出来れば家は抵当、差押えされるとあつては、おさんも実家のこと、人知れず悩んだ。男女同権なんて薬にしたくもなかった。封建的な屈辱的妻の立場のその時代まして神妙なおさんの事とて気も弱く、意俊にも云いかねて思ひあぐんだ末、頼んだのが、日頃実直な、頼りになれそうな男茂兵衛であつた。

おさんに事情打明けられて頼まれては、茂兵衛とて断り切れない。その場は力強く引受けたものゝ、さて手代風情で三十貫の金策は思ひもよらぬ。その時ふと思いついたのが掛金の取立て——。丁度新曆を屈けた先の、掛取りの集金が三十貫足らずある身の慾につけぬ金なれば、暫くの間自分の思案で一時流用しておさんに立替えておこると思つたのが間違ひのもので——。

人眼につかぬ折を窺つた夕刻、そつとおさんとすれ違ひざま、金子を手渡そうとしたところを、折からはぐかりより出て来た意俊に運悪く見つかつてしまつた。

「やい茂兵衛、うぬが今おさんに手渡したその金は何じや。ハーン分つた。扱は金で人の女房の歡心を買つて口説くつもりか——」

「とんでもございません。私は唯頼まれただけで……」

「何！何を頼まれた。第一お前にその様な大金の出来る道理はない。どうせ店の金をチヨロマカシタに違ひあるまい。言訳するなら云つて見ろ——」

云うなりパン／＼と二つ三つ続け様に茂兵衛の横面を殴つて、ドンとそこに押し倒

おさん様が旦那に内緒でつくろうとした金だと、こゝで打明けるといふ易いが、云つてしまえばそれ迄よ。自分の疑ひは晴れるだらうが、それではおさん様に頼まれた甲斐がない。何とも義理固い話で——、茂兵衛は断然黙然否権を行使することに定めた。おさんが横でハラ／＼する。一言云えば話は分るのに、云わない処を見ると、夫に内緒で茂兵衛に頼んだその一件が、反つて逆に疑がわれてもその悲しい女の弱身からか、その意俊の肩ごしに手を合している。

言訳せい／＼と怒鳴りつけている折しもその場を通り合したおたまが、此の有様を見ているうち、ムラ／＼と茂兵衛のピンチを助けたくなつた。こゝで茂兵衛を助けたならば、万更あの人私を無下には扱ひもすまい。況してや恋しい茂兵衛の事なら例え私の身がどの様になろうとも、我が青春に悔なしと、いきなりバタ／＼意俊の前に飛び出すと

「あれ——若し旦那様。何もかも打明けます。実は岡崎におります私のたつた一人の身寄りの叔父が、永の浪人暮らしにつまりにつまつた挙句、高利と知り乍らも借り溜めた三十貫の金策が出来ず、詮方なく腹を切るとの切端つまつた便り、あんまり氣の毒で、迷惑とは思えどあの方に頼んで、才覚して貰える様、おさん様にお願ひした次第でございます——」

みんな私が悪いのよ——と誠しとやかに言い立て、自分の芝居にすっかり自分で感激し、勿論茂兵衛の心理状態を勘定に入れて、涙すら浮べて申述べると、どうしたことか、意俊は愈々猛りに猛つて怒り出し「さては近頃、おたまの素振りが可怪しい

ていたのか。えいこの恩知らず奴——」と、反つて意俊の、ふんだりけつたり。所詮おたまが己れに離れぬのも、茂兵衛が奴が仕業に違ひない。日頃あんなに口説いてもうんと云わぬはこいつの爲じやと、己れの慾情の遂げられぬ意趣晴しで一層当りが強くなつた。散々責め折檻の挙句。「明日はうぬの性根を入れかえてやるからそう思え——」

意俊は有り合せの細引で、茂兵衛を後手にキリ／＼縛り上げると、二階の物置に追いつて、ポーンと放り込んでしまつた。どうも今夜は氣がくさ／＼する。こんな時は祇園の茶屋でも一杯引つけかけ。その勢いで今夜こそはおたまを口説き落してやらにやならんと、女房のおさんに頭巾と紋

提灯出させ「さあ／＼みんな早仕舞じや。今夜の戻りはチト遅からうから、先に休むがよい。物置の茂兵衛奴を逃がすでないぞ」と、声をかけて意俊は朧月夜の表へと出て行つた。

### ——主に抱き寝の身代り枕——

「私が余計に出しやばつた為、殊更ひどい責め折檻、喉痛かつたでういまいしょう。ほんとに氣の悪い旦那様じやわいのう——」と、おたまはいそ／＼、物置の茂兵衛に近づく。目を閉ざし、齒を喰ひ縛つて耐えている茂兵衛の、血の氣の失せた顔を見つめ



幾久藏 絵



ていると、おたまは男恋し、いとしの胸が一杯に切なくなつて、堅く縛つたいましめを解いてやる。これぞおたまが男の肌の触り始め——。

時節は丁度若葉の頃、そろ／＼汗ばむ程の心地よさ。細目をほどいた手をそつと茂兵衛の手に重ねて、触れなば落ちん風情で魂の抜けた様に切ない吐息を洩している。何か一言云つて呉れよば、おたまはワツと泣き出して縋りつきたい程の、やるせない胸の疼きも知つてか知らずか、茂兵衛は手首をさすり／＼じつと無言で思案にくれてゐるのみ——

えい、ほんに焦れつたい男じや。こんなに思い焦がれているを、この人は推量して下さらんかと、恨めしく思う折しも「おたま——、おたまはおらぬかえ」とおさんの呼声、仕方なしにハイと返事をし、後髪引かれる思いで降りてくる——

おたまを探してこゝまで来たのか、おさんはおたまの寝所と定められた茶の間の隅に佇んでいた。「まあ、おさん様。御用がございましたらお寝間からお呼び下さればよいものを——見苦しい私の寝所へござらして……」

と、おたまは女臭の漂う煎餅布団を、恥かしげにクル／＼と巻き上げた。「未だ寝なかつたのかえ。いえ別に用とてないけれど、先刻茂兵衛が折檻されたは皆私の事ゆえ、それをお前が横から助け船出したは合点のゆかぬこと。したが、茂兵衛の危うい所を助けてやろうとの心ざし、私は嬉しく礼を云いますぞえ——」

「まあ勿体ないお言葉——。私の出過ぎゆえ反つて茂兵衛様に迷惑かけたぐらい。お恥かしい事乍ら、もと／＼私はあの人に、

骨の髄から惚れ込んでおりました。一年この方、いつか折あればと、女の身で待てど暮せどあの人は、器量に似合ず恐ろしく堅い人。人の氣も知らないで、私の心尽しも御に風と、手一つ握つてはくれませんでし。優しい言葉ひと言かけてはくれねど、惚れた身の因果。茂兵衛様の難儀見ては、思わず我が身を忘れて飛び出した迄の事でございます」

「ほんならそなたはあの茂兵衛に……」おさんは意欲許りにこたわつて、今まで意識しなかつた茂兵衛の立居振舞、端麗な面ざしをまざ／＼胸に描いて、フト心の熱くなるのを覚えた。

成程あの男なら、おたまならずとも女子の惚れる道理——。したが私は人妻の身、こんな事考えただけでも且那樣に申訳ないと、心に咎めたその矢先、おたまは急に声を潜めて

「それにつけてもおさん様。いつか云おう／＼と考えておりましたが且那樣のこと——おさん様の前なれど、ほんにさもしきたないお心——」

「えつ、且那樣がどうかしたと云うのかえ。」

「そりでございますとも。先程の、あの且那様の茂兵衛様に対するきつい当り様は、皆格氣からの事——。私にきつう惚れたとて、日がなすすきさえあれば、抱きついたり、乳を撫でたり、腰さすつたり、ほんにいやらしい事許り。暇をとつてこゝを出よ。そりすれば一軒、何処かへ困つてやろうとか、こりがいやろうの、小袖やろうの銀やろうのと、うるさいやな、きゝともない事許り申して……」

「えッ、あの且那樣が……」



「おさんは始めて意欲の浮氣を知つて、唯呆然、啞然とする許り。それもぢかに、浮氣相手のおたまから、頭ごなしに意欲をこきおろされては、何とも突嗟に返事のしようもない。今も今、茂兵衛の姿を頭に浮べて、自ら恥てたところ。おさんの感情は妙に複雑怪奇なものになつて来た。

おたまは言葉をついで

「今だから申し上げます。えい、もうこりなればすつかり申し上げます。且那樣は、よその夜咄や寄合いで、夜を更してわざと遅く帰つては表のほれ、男部屋の二階から屋根伝いに私の寝所の上に忍んで来て、あの引窓の欄つとらて、私のところへ殆んど三日にあげず忍び込み、口を寄せるやら、いやらしいところへ手を差し込んでの口説き様。大声立てゝ喚きます。町内中に触れ歩きますよと脅して、やつと今日迄どうや

ら無事で落んで来ました。首尾の叶わぬ苦い顔で、す／＼我が家の中戸を叩いて、今帰つたでと云うを聞いては可笑しいやら憎いやらで、これが茂兵衛ならどんなに嬉しかろう——。毎夜忍んで来て下さんせと囁りつくに、ほんにまゝならぬ浮世でございすなあ——」

とおたまの言葉に、おさんは頓に返事も出来ずうなだれて、心は千々に乱れに乱れた——。そんな且那と知らず、今の今まで操立てたが恨めしい。おさんはほつと溜息をついて、

「ようこそ打明けて下さんした。ほんにそなたは見上げた女——。それにしても男畜生とはあの且那樣のこと。あんまり女房を踏みつけた仕方に腹が立つて涙も出ぬ。そんなら今宵もいづれ……」

「恐らく忍んで来る事でございましょう」



「そうと聞いてはお願いじや。頼みと云うのは外でもない。今夜この寝所へそなたに代つて、この私を寝させてはくれまいか、いつもの調子で旦那様がこゝへ忍んで来れば、私は散々口説かせた上、そなたが願くと思せかけて、旦那様とは言葉を交さず夜の明ける迄抱かれて寝ます。夜明けと共に恥かゝして恨みのたけを晴らさねば私の気が納まらぬ。のうお願いじや。そなたの寝間着貸して下され、腰巻貸して下され」

「まあこんな汚れたものを勿体ない。私は構いませねど、日頃着馴れぬ木綿の単衣でもよかつたら——。それにむさいこの腰巻など——」

「何のくゝいといはせぬ——」

おさんは素早く着物を脱いで、おたまの夜着を纏い、外に出て出された腰巻を白いふくよかな腰に巻くと、すつぽり頭から布団をかぶつた。この納りがどうなることかと案じつゝも、おたまは四尺屏風で枕元をかこんで、フツと行燈の灯を吹き消すと静かに出て行つた。

## 味がよかつた

### 假初の契り

すき間洩る夜風に頬をなぶらせて、茂兵衛はほつねんと物思いに沈んでいた。明日の我が身はどうなることか分らない。実直に勤めた二年間の信仰が一夕のあやまちでうたかたの如く脆くも崩れ去つた。それにも況して彼の脳裡を去来するものは、夕刻のおたまの合点の行かぬ突然の助け船。何

れ我が身の危急を助けたい一心からのつくり事だろうが、それにしても、あの懸命の様子は唯事でない——。

今頃やつと彼はおたまの深情に気がついたのである。そう思えば何かにつけ、思い当ること許りである。物堅い茂兵衛の胸にも、始めて女の真実が沁々としみ渡つて来た。日頃つれなくしているにもかゝらず女心に恨みもせず叱られるを覚悟で、我がいましめを解きに來てくれた女——。

定めた女と連れ添ひ迄は、童貞を守りたいと考へていた茂兵衛とて木石ではない。それに今となれば明日の分らぬ我が身——。こうなれば、せめておたまに優しい言葉の一つもかけ、もしおたまが其の氣でいるなれば、掘膳食うが、反つて相手を喜ばすことにもなると、男冥利につきた事をまるで恩でも返す氣で、茂兵衛は生れて始めて女の肌に触れる氣持になつた——。

辺りの氣記を窺いつゝ、そつと物置から忍び出て二階の屋根伝いに、天窓からおたまの寝所を覗けば真の暗闇——。

嚙つれない男と、恨み泣きに泣きじやくつて寝た事であろう。今暫しの辛抱だと心に言い聞かせて、引窓の繩を伝つてソロ／＼寝所に降り立つ。一寸先きも見えぬ闇に、柱をさすり、壁をなで乍ら行く程に、四尺屏風に突き当たる。スウ／＼と安らかな寝息と、仄かなくわしい女臭が、そこはかとなく闇に漂つてゐる。茂兵衛は手早く無言の儘撫でた布団のふくらみを頼りにソロ／＼枕辺に近寄つた。

こちらはおさん——、空寝入も長く、今か今かと待ち構えているところへ、てつきり忍び込んで來た男の黒くうごめく姿——え、明日になつたら驚きしやんすな。き

つと思ひ知らせてやると、胸騒ぎする体をちぢこませてじつとしてゐる。

男の手がスツと女の顔に触ると、戦く手で静かに揺り起した——。

「まあ、そなたは——」と、さもびつくりする風情のおさんに

「叱ッ——」と声を押し殺して、茂兵衛は夕刻の御礼心を含めてぐつと手を握つた。

え、い、腹が立つ。旦那様は噓かし首尾よう云つたと、有頂天で喜んでござる事であらう。今かんづかれては折角の苦心も水の泡——。今宵一夜は我慢して、明日こそはと、おさんは唇かみしめて、相手のなすが儘にまかす——。

ホホ、なんとうぶを装つてごぢないこと、いつもの旦那様らしくもないと思ふ内場所が違ひ、その場の雰囲気は違ひ、こゝろも感じの違ひものか——。いつもに似ず若々しい氣力に溢れた相手に、腹が立つけど、乱れる裾先もろば玉の中。

始めて知る女体の神秘に、茂兵衛は膝ふるわせ乍ら、力一杯抱きしめていつた——

## 死んだ氣での

### したい放題

道行く人として、知るも知らぬも逢坂の、関を越えて行く忍びの姿の男女二人。初夏の匂いを包む山路に見出されたのは、あの夜から数えて三日目の朝である——。

夜——、それはとんでもない悪戯者であり、ほくそえむ悪魔の黒い影でもあつた。夫々で思ひも幻の、睨を告げる雞の声にしつかと抱き合つた夢路を破られた頃おいドン／＼表を叩く音に気がつけば

「おい／＼戻つた。開けてくれ——」

と呼ばわるは確かに意後の声——、おさんは愕然として、ハツと夜着をかきのけて相手の顔を覗けば、相手は意後ならで茂兵衛——。

「やッ、そなたは茂兵衛——」

「えッ、そう云うあなたはおさん様——」

互に訳を訊し合えば思ひもよらぬ大間違。とは云え、この事許りは笑つてはすまされぬ——

とんでもない思ひ違ひでかくなるも、今さら間違いだだけでは済まされもせず、最早この上はこれも万世の縁と諦めて、茂兵衛と手に手をとつてかけ落とし、死出の旅路も二人で行かんと、おさんは突嗟の間に心を決した。いざとなると女の方が大膽で、覚悟の程を茂兵衛に打明けると、茂兵衛もかくなつては仕方ないと諦め、乗りかゝつた身の引くにも引けず、其の場から手廻り纏めて手に手をとつて、人眼をさけて逸早く逐電してしまつたのである。

折からの、石山寺御開帳の雑踏にまぎれて、逢坂山を越え、生ある限りの思ひ出にと、勢田の岸から船を出し、琵琶湖に漂い出たが、他人目には愉しく見える若い男女の相合船も追われる身の落つかず、いづれ死を免れぬ運命だと思ふと、二人は期せずして残された現世を愉しむ氣持にかり立てられた。

お互いの持ち出した金子を合すとざつと六十兩許り——。当分どころか、こゝ十年でも遊んで暮せはするが、追手に捕まつたが最後。どうしたらよからうと思案の挙句いつそ書置したゝめて、心中した如く装おえば、三途の川迄も追つては來まいと、それより人眼を避けて丁度竜灯のあがる時



分、白髭の宮につくと  
二人は連署で書置をし  
たゝめた。

「われく二人、よしなき事にて不義密通  
致せしも、天命のがれず身の置きどころな  
きにより、今月今日心中仕候——。おさん  
茂兵衛認む」

と書き認め、夫々の形身となる品を書置  
と並べ、船頭にわけを話して口止めの金子  
を掴まし、それから半刻後、湖畔より身を  
授ける大きな音がして、茂兵衛おさんの姿  
はその辺りから秘かに消えた——。

意後の許に形身の品が届いたのは数日後  
の事であつた。散々手分けして探したが結  
局心中とあつては遂々あきらめるより外仕  
方なく、浮気の罰とは云え、おさんを失な  
つた意後は、毎日／＼腑抜けの様にぼかん  
と仕事も手につかずに空しく日を送つた。  
流石に世間体も恥かしく、他所に洩れぬ様  
内々で形許りの葬儀も済ませた頃、おさん

茂兵衛は人目  
をはぐかり乍  
ら、茂兵衛の  
生れ故郷の柏  
原に茨の道を急いでいた。

夢にも思わぬ仮初の契りで、のつびきな  
らず手に手をとつて出奔した二人であつた  
が、いつしかしみ／＼した愛情がお互いを  
包み、今は人の見る眼も羨やましく、いた  
わり合い、励まし合つて、いつ迄続くかこ  
の短かい現世の喜びを、少しでも長く引延  
したいものと、夜毎の旅枕をしとゞに濡ら  
しては、眠りもやらぬ激しい契りにつぐ契  
りに身を焦らしていた。

一方こんな筈ではなかつたと悔むおたま  
と、思いこそ違え意後は、あのおさんの豊  
艶な瑞々しい女体を思い出すと、憎い女と  
思い乍らも、今は既にこの世になき女と諦



めて、ねんごろに僧を招いて回向して  
いた。茂兵衛の事は考えただけでも腹  
が立つ。主人の女房を寝取るとは憎み  
てもあきたらぬ奴、えゝいハッ裂にし  
ても飽きたりぬわ——と、明け暮れ意  
俊に聞かされるもつらく、それにこの  
上は我が操もいつ侵されんやも限らぬ  
ど、おたまは間もなく無理矢理暇をと  
つて岡崎の在所に帰つていつた。

### —美しううまれた

### が因果のとりめ

火の消えた様な淋しさのうちに、大  
経師屋にも菊の盛りの季節が来て、毎  
年京に丹波栗を売りに来る山男が今年  
も意後の宅を訪れた。

例年通り栗を売り、四方山詰のはづ  
みに、フト山男は辺りを見廻し  
「そう／＼、旦那様——。あのきりよ  
うよしの御内儀は、離縁でもさつしや  
いましたか。」

さも不審気に訊ねる山男に、意後は古傷  
に触られて眉をしかめると  
「なに、つまらぬ事で死んでしまつた  
よ」

「なんと——、世間にはよく似た方もある  
もの。丹波の柏原に、こゝの御内儀とそつ  
くり瓜二つの、美しい都育ちのお方か、若  
いこれも滅法男前の若い衆と楽しく睦じげ  
に暮らしていたがのう——。何しろ、こゝの  
御内儀の様な、あんな綺麗な方なら、どこ  
へ行つても目立ちますでなあ。はてそれ  
にしても不思議——、お亡くなりなされた  
ときは、矢つ張り他人の空似と云うや

つか——」

「な、なんと申す。それは確かか？」  
きくより意後は眼の色変えて聞き訊した  
柏原と云えばまぎれもなく茂兵衛の生国——  
てつきり間違ひなく、おさんと茂兵衛——  
それつと許りその場から人をやつて柏原を  
探らせた。

丹波柏原の夕陽は美しい——。

そろ／＼庭先の柿が色づいて、夕陽に赤  
々と映えている茂兵衛の生家の庭先——。

「おさん——、今年はどうやらあの柿が喰  
べられるぞ——」

「ほんに早いもので。そう云えばもう京を  
逃れて半年になりますわいなあ——。それ  
にあなた、どうやら私、やゝが出来たらし  
うございます——。」

「それは何より、不思議なえにしとは云い  
乍ら、わしはもう幾歳も前からそなたと世  
帯を持つてゐる様な気がしてならぬ——。お  
さん、そなた俵せか——」

「何の——、勿体ない位俵せでございます  
やさしいお前様に、片時も離さず可愛がつ  
て戴いて、これが女冥利につきると申すの  
でござりましょう。」

しかし二人の幸福はやはり短かつた——  
おさんがそつと茂兵衛の傍らから立上つ  
た瞬間、どや／＼とちん入して来た数人の  
屈強の若者、あつと云う間に二人を捻じ伏  
せ、用意の駕籠に押しこめて一路京へと連  
行した。

始めの動機は始何様とも、その頃の姦通  
罪は重い処刑と定まつたこと——。

姦通罪のなくなつた今日なれば、おさん  
茂兵衛も、恐らく愉しく半生を送つていた  
に違ひなからうに——。



女学生桃色遊戯図

爆弾娘行状記



加茂川 清子  
絵 沖 研二

高校の三年生にもなると、もう結構使いものになる。いや、完全なる大人である。だからと言って、今日我れ欲情するまゝに無節制に振舞つてもらつちや困る。

ところが、最近母校の生徒達が、何でも宮川町界隈で、桃色グループを結成して、よからぬ遊をしていゝという、唾棄すべき情報を得たので、樺島恵津子くんは、早速その真偽の程を、探索に乗り出した。

その事の起りというのは、三月七日は学校の卒業式、母校懐しさの余りに、恵津子

はその日学校を訪ねてみた。

卒業してまだ一年、庭の桜も恩師の顔触れも、当時のまゝだつたし、顔見知つた下級生の誰彼も居た。それに彼女は、河原町の悦ちゃんとして、悪い方の令名は全校に普及し、不良でお転婆でデタラメで、誰一人知らない者はなかつたが、心気一転、一躍社会改善の協力者となり、又京横映画の女優として誕生したのだから、人気は大したものだつた。

生徒も先生も大歓迎、お蔭で螢の光の愁嘆場の前に、同窓会の代表として、激励の辞を説き渡された。そして、新卒業生達は、

つゝがなく校門を送り出された後、水泳部で顔馴染だつた今田喜子さんが、「今日で卒業、せいせいするわ、こんなケツタイな学校大嫌い！」

睡でもヒツかけるように、校舎を振返つて眩しているのを見て、恵津子はそつと近付いていつた。

「そんなに学校嫌やつた？」

「学校は嫌と違ふけれど、厭らしい事強迫されるのが辛かつたわ」

「厭らしい事つて？」

「樺島さんやから教えたげるけど、桃色グループがあつてね、その入会を強要される

のやわ、喜んで加入した人もあつたけど、病氣うつされたり、お母ちゃんに内緒で墮胎した時なんか、思い出してもゾツとするわ」

聞いているうちに恵津子は呆れた。あれだけ札つきの不良で通つていた自分でさえ身体は純潔は守つて来た。それなのに、あゝそれなのに、いくらアプレ最新版の女学生でも、これは又聞棄てならぬ痛恨事である。

「あんたもその犠牲者？」

「——そやかて、そうせん事には卒業出来ヘンのやもん」

「一体そのメンバーは誰？」

「それは言えへんわ、死んでも口を割つたら、自分や学校の破滅やもん。まだ一部メンバーも残つてゐるし、早う止めてほしいとは思ふけど」

正に驚くべき事実の発覚。しかも喜子さんの話によると、その本拠は宮川町附近にありその定例総会の他に、男生徒達は藝妓遊びもするし、女生徒は芸妓や女郎の代用品にもする。勿論脱会すれば、両親に通告するといふ口実で、脅迫するのである、喜子さんが懐妊した時は、そつと母の着物を持出して売り、それで医料を賄つたといふ全く言語道断の乱脈ぶりである。

恵津子はこの由々しき一大事を、徹底的に剔抉しようと思ひ出した。しかし、下手に世間に出せば、母校の恥になる事だし、最も安全に改悔させる方法を、先づ考えねばならなかつた。

彼女が教員室へ入つて行くと、お菓子とお茶のサービス、たつた一年の間隔で、生徒だつた頃とは大違いである。セーラー服を着ていると、その下の内容は如何に成熟



していても、まだ子供っぽく見えるが、こうして和服姿になると、一ペんに四つ五つも娘になつたような錯覚を与える。若い先生達は、用事もないのに、何かと話しに来た。どの美人客に対してもするやうに。

「樺島君が女優になるとは思わなかつたなア、しかし随分大きく綺麗になつたぢやないか」

と卒業当時受持だつた吉田先生

「あの時分から綺麗どしたわ」

「ハ、その口だけは相変わらずだな」

「ねえ先生。一寸ようない噂があるんですけど、今度の卒業生の中で、特に素行の悪い生徒、あらしまへんどしたか？」

「さア。君程お転婆でジャ／＼馬の子はなかつたようだが、三年A組の小関真理子ちゆうのが、実習助手の本川先生と、懇になつてね。落第候補から、一躍優秀な成績で卒業したよ。但し答案の方はデタラメだつたがね」

「聞取引ね。そんな桃色教師、当局に弾劾して追放しやはつたらどうですの」

「うん、近いうちに辞めてもらふ事にはなつてゐるがね。それにこの小関の卒業論文が実に傑作なんだよ」

吉田先生が文庫の中から一冊の論文を取り出して来た。

## 二

——長い間お世話になりましたわね。当校の男性の皆様、お名残り惜しうございませう。社会に出て、皆様のように、甘い親

切な、一寸足りない方々に逢えるかどうかと思つと……オロン、オロン。

罪多き男こらせと肌きよく、黒髪長くつぐられし我れ——と、晶子の歌にあります通り、私達は全く幸福でございました。かく美しく作つて下さつた父母に、感謝の心で一杯ですわ。

ですから皆様、もうこゝ加減に、お目覚め遊ばしては如何でございましょう。たつた三年余でしたが、もう見飽きてしまひました。

太宰の言によると、小説は女子供をダメせば足りるとありましたが、皆様方小説を書く様な氣で、氣取つてらつしやいましたわね。

学校をサボつて、文学青年を氣取つた人我れこそは天下の秀才なりと、ツンとすました人、俺は女なんか眼中にないんだテナ恰好で、チャリ／＼私達を見ていた人、或はブルジョア振つて、学校の隅りに金十円也のコーヒを奢つてくれた人、ケンカの強い事を唯一のより所にしていた人、化粧品屋のマネキンみたいな人——多勢いらつしやいましたかね。

それが悉く、私達の歡心を買わんが為ですから、全く呆れ返つて物が言えませんわ。そして先生方も、まア何んて嫌らしかつた事でしよう。アノ眼付「遊びに来給え」だなんて、ギョギョだわ。そりやア親切にして下さるのは、悪い氣持じやないけど、それが見えすいてるんですものね、中には私達が好きになりたい程の人もあつたけど

そんなのは又、女の美しさなんて解せない人なんだもの、仕方がなかつたの。

それにしても、キタナイ学校でしたわね。朝登校する時は、肥車コンクールの中を通つて来て、帰る時は黒靴が真白。何の美意識もない装飾、無風流な皆の立居振舞。全くもつてイヤイヤ。

男の子にチャホヤされたのは嬉しいけれど、何だか自身で悪くなつたみたい、つまりぬおヤジでも聞いてると、ついその氣になるんだもの、これも生れた所、生れた時が惡かつたのね。

そこを因果と諦めてなんて、諦められるもんですか、今日ご卒業。セイセイするわ。明日からは自分の運命を切り開いて行く。もつといゝ人の居る所へ、途中で仆れ倒れた時には、K高校には何の

話にもなつていないと言つてやるの。では、恩師やメイトの方々、バイバイノ

三年A組 小関真理子

## 三

その日から、恵津子は早速探索に乗出したが、幹部の大部分が卒業して、解体してしまつたセイか、一向にそれらしいものは纏めなかつた。しかしそうした桃色団体は摘発されない限り、そう簡単に終熄してしまふものではない。きつと又新幹事達によつて、秘密裡に存続されている筈である。だが、そんな事件ばかりにかゝつても居られず、その間に春が来て、花が咲いて、又散つていつた。

或日恵津子は、東山散策の途中、又学校へ寄つてみた。丁度春の身体検査の最中で



男なんて阿呆な動物や

と喝破した女が男に欺されて……



保健室は超満員、養護衛生の畑宮先生は、月給の安きを嘆きながら大活躍。その傍で平川先生がヤニ下つて、生徒の体重を測っていた。

成程三年生ともなると、正に壮観、男性禁制の大絵巻を展開する。どの子もどの子も、ブルマース一つで胸囲や体重を測定されるが、オッパイ小僧ハダシの乳房をしているのや、ジャングルみたいな腋毛の娘、ストリップも顔負するような、水々しい均整美の娘、ビチビチした肢態、若い曲線、芳醇な肉つき。芳香正に円かならんとはいまだ破爪せずという風情——成程これなら、桃色グループが誕生しても、決して不思議じゃないぞと、感心したくなるような光景である。

「おい田島、そんなに羞しがらんと、もつとシヤンとして」

平川先生に云われて、体重秤の上で乳房を隠していた娘が、バツと頬を染めた。

「もつと胸張つてみ、この間の要領や、先生なら構へんがな」

からかわれて次へ廻つていつたが、恵津子はその子の身体を見ているうちに、ハツと靈感が閃いた。この身体は男を知っている！桜貝のような、処女のピンクの乳房は影を失つて、黒く濃んだように見える輪廓の大きな乳暈、やゝ垂れ気味の豊満な双隆起、この娘は妊娠しているのだ！

#### 四

昔なら、団栗橋を喜久屋の横から渡つて宮川町の石畳の小路へ、客引く女の声に挟まれながら、この色街の情趣を味つたものだが、喜久屋も焼けたし団栗橋もなくなつた。

四条通りは南座の横から、川端柳の青い道を行く。灯ともし頃に、ホロ酔いでこゝを通れば、どこか令嬢かときまがうような汎々女が、屹度何人か、声を掛けてくれる筈である。いくらお顔の出来の悪い殿方でも、呼止められるのは間違いない。彼女達は皆様のお面相に惚れて、風鳴きを強行するのではなく、諸君の財布に惚れているのだから、——。

ところが、今通つた一団は、墮天使達も敬遠した。というのは、どの男もまだ若いポンチコだからではなく、その中に女が二人混つていたからである。快よさそうに川風を頬に受けて、鼻唄など歌つてゐるのは、もうチョイと一杯入つてゐるからだろう。

川端道が団栗通りで突当り、そこからぐんと道幅の狭くなる石畳。ズラツと並んだ門灯が、客を招いて瞬いている、そこが宮川町遊廓の入口。一步入れば、表に椅子を出している婆さんや、半開きにした入口の戸の陰から、顔を出している女が、通りがくる足音を呼止めてさしまねく。

「ちよつと兄さん、お入りやすな、えゝ妓が沢山いやはりまつせ——」

かなり難解なる京都弁を駆使して、独特の情緒を残してくれる。行くうちに、襟の白い女達が忙しげに、カラカラと下駄を響かせて行交い、古びた格子の奥からは、粋な三味の音じめが、薄闇の街路へ流れ出して来る。輪タクから降りる客の姿が、この街の印象に一番びつたりと絵になつた。

福本楼、大和家、明治家、富田家——巨館青楼軒を連ねて、今この街は夜開く装いに忙しい。旧宮川町新宮川町を含めて、団栗橋から五条まで、女体小売店は実に三百八十。戦時中なら、一步その軒を潜れば、ズラリと数年前からの写真が陳列されていて、初店何々子という看板が並んでいる。どうせ今晩は初店という意味だろうが、ネオンの燃えるこの商品カタログの前で、青年達は垂涎三斗、茫然と青春の片鱗を偷しんだものである。それが終戦以後は、人権尊重とか何とかで、公娼が閉止され、彼女らは自由意志で、貞操を公販売するようになった。だから、あの写真看板は無くなつた代りに、お代は見えてのお帰りと主観で、格子の向うの座敷には、実物見本が鎮座ましましている。

こうしたB級どころが百数十名、芸妓な特別職の女性が数千名、この川東の五丁

街に棲息しているのだそう。

若い一団は、宮川町歌舞練場の前を通り松原大橋を右に見て、軒燈と石畳の道を折れ、川端の隘い道へ出ると、その静の家なる一軒へ雪崩れ込んだ。

丸窓に竹格子、粋な八畳の間に尻を落付けると、音頭株の若いのが、脇側に凭れかゝつて、お内儀の運んで来た茶菓に手を出した。

「今日は誰ぞ芸妓はん呼びまひよか」

「そうや、三味の引ける妓二人程呼んでもらおう、その後で又例の……、あれを始めさかい、チョンの間二ツ程貸してや」

「へえ、よろしうおます。ほな、若うて別嬪で唄の上手な、えゝ妓はんが居やはりまつさかい、すぐ呼びますわ、ちよつと待つてとくやつしや」

キャバレー五条の灯を加茂の対岸に望んで、腰を据えたのは男四人女二人。首領顔の若い青年を除いては、どれもこれもまだ未成年らしく、下手に背広を着こなしてはいるが、その正体は高校生。

「ねえ、うち妊娠したんと違うやろか、もう三月もアラヘンのやけど」

「そら一ペン見てもろた方がえゝぞ、若しそらやつたら、早いうちに仕末せなあかさかいなア」

「田島さんはえゝ身体やさかい、大いに可能性はあるなア」

「その代り若しそらやつたら、その間は何ペン関係しても、もう妊娠の心配ないさかい安心や」

卑俗な会話に興じているうちに、やがて置家から芸妓が来た。

「今晩は、おゝきに——」

三ッ指を突いて、ニッコリ頭を下げる

実話

奇譚

## 夫を万引にした妻

村 正 治

|| 派出所日記から ||



## 派出所へ連れ

### 込まれた鴨

四月二十九日 日曜 快晴

八時十分前出勤、祭日の上に日曜で訓練はなく、窃盗指名犯人手配外二件の通牒を控えただけで、派出所に行き甲部員と交代、引継ぎ事故なし。

十時過ぎから人出が多くなり、映画館へ、デパートへと人波が流れて行き、祭日と日曜のぶつつかつた上に上天気の雑踏を見せ出したが午前中何の事故もなく過ぎた。

正午、増田君が巡回に出たのと交代して見張り勤務に就く。十分も経たないうちに、飛んでもない事件が舞い込んで来た。

元本署の刑事で、正月に退職、S百貨店の保安係に就職した武田君が、一見、

絵描きか文学青年と見られる、長い髪を油気なしに撫で上げた男と、何か云い争いながら振り切ろうとする手を引張りながら、派出所へ入って来たのだ。

「何うしたんです」

「万引きなんです、御厄介ですが、お願いします」

拒む男を突き飛ばすようにして、ドアを開けて休憩室へ押込んだ刑事上りらしい乱暴さに、眉をしかめてとがめるように尋ねたのへ、武田君は肥つた身体に呼吸を弾ませながら、嘗ては下僚視していた僕へ鄭重に答えた。

「まだ、万引きだなんて、失敬な、身に覚えがないと云うのに、こんなところへ引摺り込んだりして、それが民衆警察か」

武田君の言葉を聞いて、青年がいさまきならんだので、現職の刑事らしい態度で連れて来たのかと、僕は険しくした視線を注いだ。

「いや、何うも、青二才の癖にしぶとい奴で人違いだらうなんて洒々として逃げようとしてやがったので、止むを得ず引張つて来たんですよ」

と、てれながらに、武田君は自分勝手に空いている椅子を僕のの前へ引寄せて腰かけ、国民服の袖で額に噴き出していた汗を横に撫でた。

「店だけの処分では便に済ませようとしたんですが、何処までも図太くしらを切つて、そんなに疑うのなら裸になつて見せるが、間違いでしたと謝つても承知しないぞなんて、タンカを切りやがるんで事件にして貰つた方が良くと思つて連れて来たんです。御厄介ですが、一つお頼みますよ。増田君は？ 巡回なんですか」

君じゃ駄目だ、ハコ長(派出所主任)の増田君にそう引継いでくれ……と、まだ就職一年足らずの僕を侮る気持ちの感じられる言葉にムツとした僕は、引継ぐにしても、もつと詳しい事を聞かなければ……男の云い分も聞いて見なければ……と、武田君を促して休憩室へ入り、二人を対決させて見た。

一階の化粧品部で看視していたら、女店員の一人が、この男が万引きをした合図したので、武田君は、後を追うた。化粧品部は入口に近く、それにちようど客の出盛りで雑踏していた人波に揉まれ、店外へ出てから、やつと武田君はこの男に追いついた。

「S百貨店の者ですが、唯今のお買物の代金お支払いをお忘れになつたようです、ちよつと店内へお引返し願います」と、穩かに持ちかけたところ、たいいていの者なら、それだけ云えば、もう顔色を失い、観念してすく／＼随いて来るかでなければうろたえて逃げ出す筈なのに「何か、思い違いをしているんだらう、

情趣が又格別。

ある著名人をして、宮川町遊廓は日本一だと礼讃せしめた所謂は、この今晚は、おききにある。この界限では、たとえ三文の遊女でも、必ず立派な着物を着て帯を結び、丁寧に寝室へやつて来る。そしてその室で、客の前で帯を解き着物を脱ぐ、その情緒が又格別なのである。それから先は、美人で情の細やかな事では定評のある京娘お客さまに悪かろう筈はない。として、客が満足して帰る時も、きちんと衣裳を正して、玄關まで送り出してくれる。

どこかの遊廓で時々見かけるような、よれ／＼の寝衣のまゝ、面倒臭そうに送り出したたり、汚点だらけの長襦袢をだらしなく着て、いかにもくたびれた顔で、生欠伸を殺しながら、次の客を迎えたりする事は、この町に於ては絶対にあり得ない。それが非常に好印象を与え、この町の魅力となつて、日本一の折紙をつけられたのである。

安モン娼妓にしてもこの有様だから、芸妓に至つては、実に至れり尽せり、愛嬌よろしく二人の妓が、酒肴を運んで来て挨拶した。一人は丸ボチャ美人で二十三、もう一人は眼鏡をかけ、口許に大きな黒子のある、白粉の濃い娘。大柄だが、まだ年の若そるな感触である。

すぐに酒盃が乾され、女学生達も、仲々勇敢に飲んだ。

「ねえ、皆さん方、K高校の人でしょう？」と眼鏡の方が盃を返しながら云う。

「お内儀さんが喋つたのかい？」

「うゝん、すぐに分りますわ。そちらの方が平川先生、その隣が高木さんに渡辺さん小川さん、女の方は田島美代子さんに小関富子さん、小関真理子さんの妹さんでしょ」



僕は何も買わないよ」

と、デンド相手にせず歩き出した、図太い態度に憤慨した武田君が、人違いだ馬鹿にするな。ときまき抵抗する男の手をつかんだ時には、もう派出所の近くまで来ていた。

それで、確かにブツ(万引した品物)を呑んで(身体に匿して)いるのに違いないが、どうせ一筋縄で行かない奴だから、警察でしめて貰おうと思つて、派出所へ引張り込んだ。

そう云う武田君の言葉をさへぎつて、青年は怒鳴り出した。

「うそを云うな、いきなり、刑事のように、手をつかんで、ちよつと来てくれと云つたじゃないか。僕は刑事だと思つたから、まだ温順しくしていたんだぞ。保安係だと知つていたら、係長に会つてねじ込んでやるんだつたのに……」

裸になるから調べてくれ、万引きしてないと判つたら、人事部長に会つて誠に

してやるから……と、四月も末なのに黒つぽい冬服を着ていたのが、勢いよく上着を脱ぎ、チョッキのボタンに手をかけた青年の眼に口惜し涙が滲んで来たのが度の強い近眼鏡の底にキラリと光つた。

興奮しきつてゐる態度からも、自信に満ちた言葉からも、虚勢を張つてゐるのではないという印象を与えられて、僕は

これは厄介な事になるぞと当惑した。「いや、誰れも裸になれなんて云つてないよ。まあ、そう大きい声を出さないで

……人だかりがするといけないからね」

と、男をなだめてから、眼で促して武田君を公衆(派出所の表の執務室)へ誘い出した。

「どうも、貴方の黒星らしいなア、人違いをしているんだつたら、裸にしたりしたら、幕の引けないことになりますよ。一度、その合図をした女店員に首実検をさして見たら何うです」

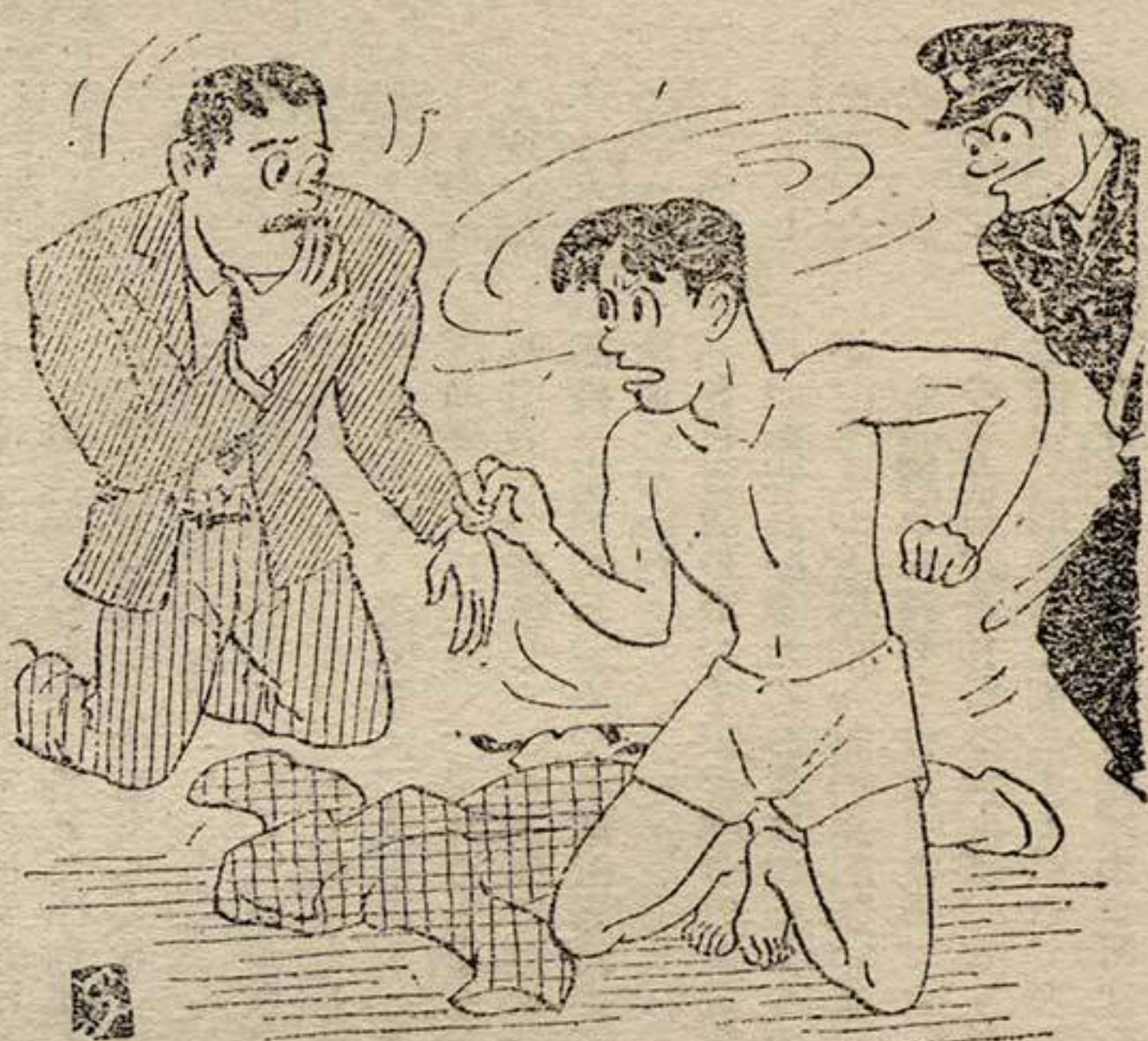
そう忠告したのに、いや断じて人違いはしてないきつとブツを呑んでいる筈だから裸にして見てくれ……と、いつか在职當時のようにな上手に命令するような態度に出た武田君も、僕が動かないと見て、いま……そうに百貨店へ引返した。

### 妻の純情の發露が

「あなた、済みませんでした、堪忍してネ」

武田君が戻つて来るより先きに、S百貨店の制服のままで駆けつけて来た女店員が、僕へも挨拶せずに、いきなり、男に縋りつくようにした態度や、その第一声に、二人が恋人か夫婦らしいのを直感し、僕は呆然として突如に女店員をとがめる言葉も出なかつた。

肥つた身体をよちよちと、汗を拭いながら、これも駄目で来た武田君が、「馬鹿くしい、間違ふにも事を缺いて



痴話喧嘩の飛ばつちりで、えらい馬鹿を見ました。ほんとに貴方にも何と云つていいか」

と話し出した事の真相を知つて、僕も苦笑するより外なかつた。

その男——小牧龍男はこの二月までS百貨店に勤めていた画工だつた。同じ駅から同じ時刻に通勤する化粧品部の里村芳枝と型通りの恋愛から同棲へ——夫婦になつてからも秘密にしていた仲が朋輩の噂に上り、人事部にも聞こえ、何故、正式に諒解を得て結婚届をしなかつたかと人事部長にたしなめられた。

正式の結婚が出来ず、自分のアパートへ引き入れた野合を嘲けられたように取つて、芸術家氣質の短気な男だけに、そ

座が白けて、一同は驚愕に顫えた。紙より香くなつたのは平川教諭である。

「キ……君は一体——」

「卒業生の榊島恵津子」

その彼は眼鏡を取つて黒子を拭き取つた「先生、恥しいと思はしまへん？　うちはこの事実を察知して、義憤のあまりに、涙も出せまへんなんだわ。学校の爲、皆さんの将来の爲に、この席へ乗込んで来ましたのよ。隣の部屋には、実は校長先生も来て貰うてます。若し先生方が反省してくれはらへんのやつたら、警察や新聞社へも、電話して貰うつもりですけど、学校の名譽のために、事を荒立てんと済ましとおすわ」

平川先生は平身低頭、男生徒達は校長の出現と聞いて震え上り、女生徒達は今更遅い後悔の涙を流し始めた。

「今田喜子さんは、そうせん事には、卒業出来ひんと言わはつたので、この桃色団の蔭に、担任の先生が居やはる事が分り、こないだの身体検査の時、平川先生に、この間の要領や、先生なら構へんがなと言われて、頬を染めた田島さんの態度等から、この忌まわしいグループが、厳然と存在していることを確認しました。

又、小関真理子さんの卒業論文から、在学中の男関係を調査して、卒業後のその生徒達の行動を監視し、とうとうこゝを見付けたのです。若い男ちゆうもんは、こゝういふ所で遊ぶ時は、大ていは、一ペン以上行きつめた馴れた所へ行くもんやからです。どうです平川先生、もう観念しやばりましたか？　この芸妓はん、衛生の畑宮先生の妹はんどんね、畑宮先生の家が、宮川町で助産婦してはつて、この界隈の婦人会長



んなに面倒なら辞めます、店員同志でなければ文句はないでしょうとあつさり退職したが、差当り新しい就職口もなく、退職金も使い果して、芳枝に養われていよう生活が続いた。

朝も金の問題でちよつと口論して、芳枝はブリツとして出勤した。残された小牧は、風食の準備もしてくれずに出て行った女の気持ち悪い煩うてクサツていたが、することも無い徒然なままに、映画でも見ようとアパートを出た足が、いつかS百貨店の方へ向いていた。

詫びるような、てれた微笑を見せて、忙しく客と応待している自分を見ていた龍男の視線にぶつつかつて、芳枝はハッと狼狽した。

不貞くされて家を出て来たことを後悔していた心に、夫が、そんな自分の態度を気にして、店へ様子を覗きに来たのだと思うと、うれしくなつて、詫びる思い



をこめた微笑を見せた。

それに微笑み返しただけで、忙しい中を朋輩の手前も憚つて、言葉も交さずに入口へ歩み出した夫の後姿を見送つていた芳枝は、龍男の洋服の衿が薄白く汚れているのを見て、本能的に夫のあとを追いつつ、「見つともないわ、何か着いているわ」と囁きながら、何処で着けたのか、チヨークの粉にまみれているのをそつと払つてやつた。

それを生憎なことに武田君が、五、六間離れたところで見ていたのだ。

S百貨店では、店員が万引の現行を見つけた場合、近くに監視している保安係へ知らせる方法として、いろいろな合図を設けていて、その一つに、着物や洋服の衿の埃を払うてやるようにして、それと知らず方法があつた。

「お衿に埃が着いていますよ」と、店員に不意に背中を叩かれたら、ドキツとして品物を返すか、金を払うかするか

も知れないという心理も考え、そうせなければいけない捕まえるという狙いだつたのだが、きよりの場合、それが飛んでもない間違ひを惹起したのだ。

それを知らなかつた芳枝ではなかつたが、女店員という意識を失い、

妻としての本能的な瞬間の衝動にしたことが、武田君の眼に、万引きを教える合図だと見られたなんて、夢にも思つていなかった。

だから、武田君が夫を追うて出たのも全然知らなかつた芳枝が、話を聞いて武田君より先きに駆け着けて来たのも当然で、僕は、僕にも挨拶せず、いきなり龍男に抱き着いた女の態度にも、至純な妻の愛情の発露を見て、涙ぐましい気持ちにされた。

真相が判つて見ると、小牧君も武田君を非難することが出来ず、まして、女は自分の責任のように夫にも武田君にも詫び続けた。

武田君も鹹の問題にまで発展しなかつたのに、ホツと寛いで初めて心の底から笑つた。

僕は三人と同道して百貨店へ行つて、面識のある保安係長に会い、きよりの出来事で誰れにも瑕が着かないよう、出来れば小牧君を復職させてやれたら……と頼んで飯つた。

二時間ばかり経つた、僕の休憩時間だつた時に、小牧君が一人で派出所へ来て「あれから、人事部長に会わされ、店規の手前、惜しみながらも退職届を受理したんだから、君に飯の気時があるのなら……と云われましてネ、また、共稼ぎすることになりましたから……」と礼を云つてくれた。

悲劇が喜劇——笑えない喜劇になり目出たく幕が引けたのに、僕の慾力でハッピースェンドとなつたのも、警察官であればこそ。祭日の出勤も楽しいものだ。

やいう事を、計算に入れてはらんかつたのは、えらい先生にも似合わん不覚としたなア——  
千鳥が啼く、加茂のせゝらぎ、宮川町界隈は今宵も絃歌さんざめく、一つの悪は消えても、又一つの悪が、この町のどこかで今夜又増えている事だらう——。——終——

### 笑話スアラベク

山本慶基

#### ◇どうして御存じ

妻「わたし腹に大きな痣があるので、お湯へ行くと気になりますわ」

夫「そんなこと気にしなくつてもいいよ。隣りの奥様だつて、お尻に大きな痣があつても平気だからね」

#### ◇女房孝行

A「君は近頃ぶつくり酒を飲まなくなつたね。細君に小言でも言われたのかい？」

B「なあに、近頃では家内が飲み始めて来たのでさ」

#### ◇女釣り

甲「君は釣りの名人だそうだが、どんなのを釣るのが一番面白味があるかね」

乙「そりや、金持ちの未亡人釣りが一番さ」

#### ◇口なら結構

A「僕の家内の口早には閉口するよ。こちらに何んにも言わせないんだからなあ」

B「口ならまだ結構さ。僕の家内の手の早いには本当に閉口だよ。いつも逃げるひまがないんだからね」



# 奇術師の恋

## 大示落

## 情欲



米吉立垣根  
竹中英三郎画

### 胴切り術

ベルが、けたたましく鳴った。

むん／＼する人いざが、目に見えぬ埃と一緒に、劇場の中に逆巻いている。

蟬の鳴き納めのように、サインと短く、もう一度ベルが鳴り渡ると、さすがに人声はあちこちから鎮まつてきて、する／＼重い幕が裾から巻き上げられるや、悪い思いの勝手話も、すっかり葬り去られた。

活弁華やかなりし頃の、ジンタまがいの音楽が、奇術天地一座の附の楽士によつて、舞台正面カブリツキのボックスから、ぶ／＼ジャカ／＼、景気のよいメロディが奏せられる。客席の灯は、あらかた消され、煌々ともつてゐるのは、木箱を台上に乗せて据え置かれた舞台ばかり……。

木箱のうしろに、これが術者であろう、髪を生やして胸ポケットにハンカチを覗かせたモーニング姿の中年の男が、白手袋にムチを持つて、上目づかいに、この「大都劇場」の偶々まで、公平に視線を振舞いて、恭しく最敬礼してから、渋い、底力のある声量で前口上を始めた。「扱てこより、不肖天地一座の十八番、その砌、歐洲

はデンマーク、コペンハーゲンの首都において、これが草分け公開演出せられた節、満堂アツと息を呑んで心膽を寒からしめた大奇術、——これなる箱中に御覧の如く美人一人が横たわつておりまする」

縦二尺、横四尺五六寸ほどの長方形の白木造りの木箱から、箱の向つて右側面に女の頭と両掌だけが出てい、左側面には靴を穿いた足首が出てゐる。客席から正面に当る木箱の横側に、術者は上から手をおろし、左右に二タとところ、開き戸式の小さな把手をつまんだ。

扉は蝶番によつてばらりと垂れ、中の仕掛けがまる見えになつた。右側の、頭に近い内部は、女の肘と、薄衣を纏つただけの胸のふくらみ、曲線の胴——。

左側の中には、そのつづきの膝から脚が見え、一ところ箱に遮られて、再び足首は外に出てゐる。果して美人であるかどうかは、横顔だけで分らぬが、一人の女であることには、間違いない。

二人の助手が出てきて、二つの扉を閉め、人入り箱に乗せた台の両脇を持つと、ぐるりと一廻りし、種も仕掛けもないところを見せて、引込んだ。術者は両手をひらいてゼスチュア宜しくつづける。

「仔細御覧に入れましたる通り、箱中に仰臥致しており、真二ツ

に、箱もろとも切つてお目に入れまする——。満堂の紳士淑女諸君、首尾よく参りますれば、拍手御喝采……」丸鋸が、舞台の上から垂れ下つてきた。観客の注視の中で、それは箱の真中へんに止められた。どこかでスイツチを入れられたのであろう。ブーンというモーターの唸りが、かすかに客席の最後尾まで聞えてくる。風をあざむく電光をはねかえして、ベルトが急がしく廻つてゐる。モーターの伴奏の中で、プロペラの翅の回るような音がする。

術者は箱の上へムチを置いて、代りに幅五六寸、長さ四尺ほどの板を、身をかがめて拾い上げ、機械鋸の歯へ当てがつた。あたかも製材所に聞く轟音が鳴り渡つて、板は二つに割れた。術者は唾に返つたような表情で、その切口だけを観客に見せると、すぐボーと舞台の後ろへほうりつけた。

術者はムチを上げた。鋸は、再びオガ屑を吹き上げて、こんどは別な音色で人入り箱の真中を切り下げていつた箱の女は、掌と顔を出し、足首を出して、目を閉じたまま、微動もしない。気の弱い客席の女は、鋸齒がいよいよ胴のあたりへ近づくと見ると、あ／＼と思わず声を上げて、傍の連れの男にすがりついてゐた。

箱に手を添えて、術者は最後の箱の底辺まで鋸齒にか



けた。その鋸が、さつと天井へ引上げられるまゝに、二枚の板を、それぞれ箱の截断面に手並鮮やかに当てて、「ハイ、血止めの仕切板を立てまする！」

と云つた。実際に胴が二つに切られたとしても、血は外へ流れ出る邊はなからう。観客は一斉に息を呑んでいる。

さつきの二人の助手が、また舞台に現れた。そして、上半身に当る箱の半分を抱えて、台上から観客に近い方の舞台へ下した。完全に足首の覗いている下半身の方の箱とは、別々に離された。

咳一つが、どこかでした。

胸に白い縁取りのチョッキを覗かせた術者は、身振りだけで箱が二つになつたことを示すと、再び助手に箱を抱えさせて、元通りにさせた。びつたり一つに合わさつたところで、術者は二枚の仕切板を、一気に引抜いた。いや、引抜こうとした瞬間であつた。その中途、彼の動作は、急に凍りつき、みるみる表情が青ざめてしまつたのである。

のである。

片手を振つて、幕を下せと合図している。やつとそれが通じて、訳のわからぬままに幕は、両端ちぐはぐに、ドタドタと下されたが、観客は、一瞬にして見て取つた。――血が、仕切板を取つた跡から、台上へ溢れ出て、台上から、ポタポタ舞台の上へ落ちるのを。

取乱した足音が、下された幕の向うでして口々に何か慌てている。その気配は、すぐ観客席に乘移つて、客席もざわめき出した。

「失敗だ！」

「やり損なつた！」

「ほんまに斬つてしもた！」

予定の通りなら、一つに合さつた箱の中から、今真二つに切られたはずの女、しかも美人が、すつくと立上つて見せるところであつた。そこで観客は、先ほど味わつた

スリルも醒めやらぬまま、納得のいかないながらこの現実を承認しないわけにいかず、我を忘れて拍手喝采の急霰を注ぐ……はずであつた。

## 良金巡査登場

小旭 斎華芳は、初代松旭斎華芳天一が發明した日本獨特のきれいな奇術「指抜き」の名人でもあつた。これは、観客の一人に、両手の親指を思い通りに固く縛らせその指を縛られたまま、棒を越えてあちこちへ行き来させる、非常に熟練を要する手品である。

そんな高度の技術の保持者華芳も、舞台に立つて二十年、いまだかつてない大縮尻を演じたのだ。もし、千二百人の観衆が見た通りに、一人の女の胴が切られたのであつたら、最低限、彼は過失致死罪に問われねばならぬいだらう――。

大都劇場の支配人津之内弁敬は、事務室で、本社の企画部から送られてきた来月上映演の映画とアトラクションの企画明細書を、デスクの上へ靴のままの両足をほら

り上げて鼻鏡眼で眺めていたが、慌ただしく駆け込んできて、机の角に突当たりながら報告する使い走りの山田少年の声に驚かされた。

「た、大変です！支配人、て、手品、本当に、胴体バサツと斬りました！」

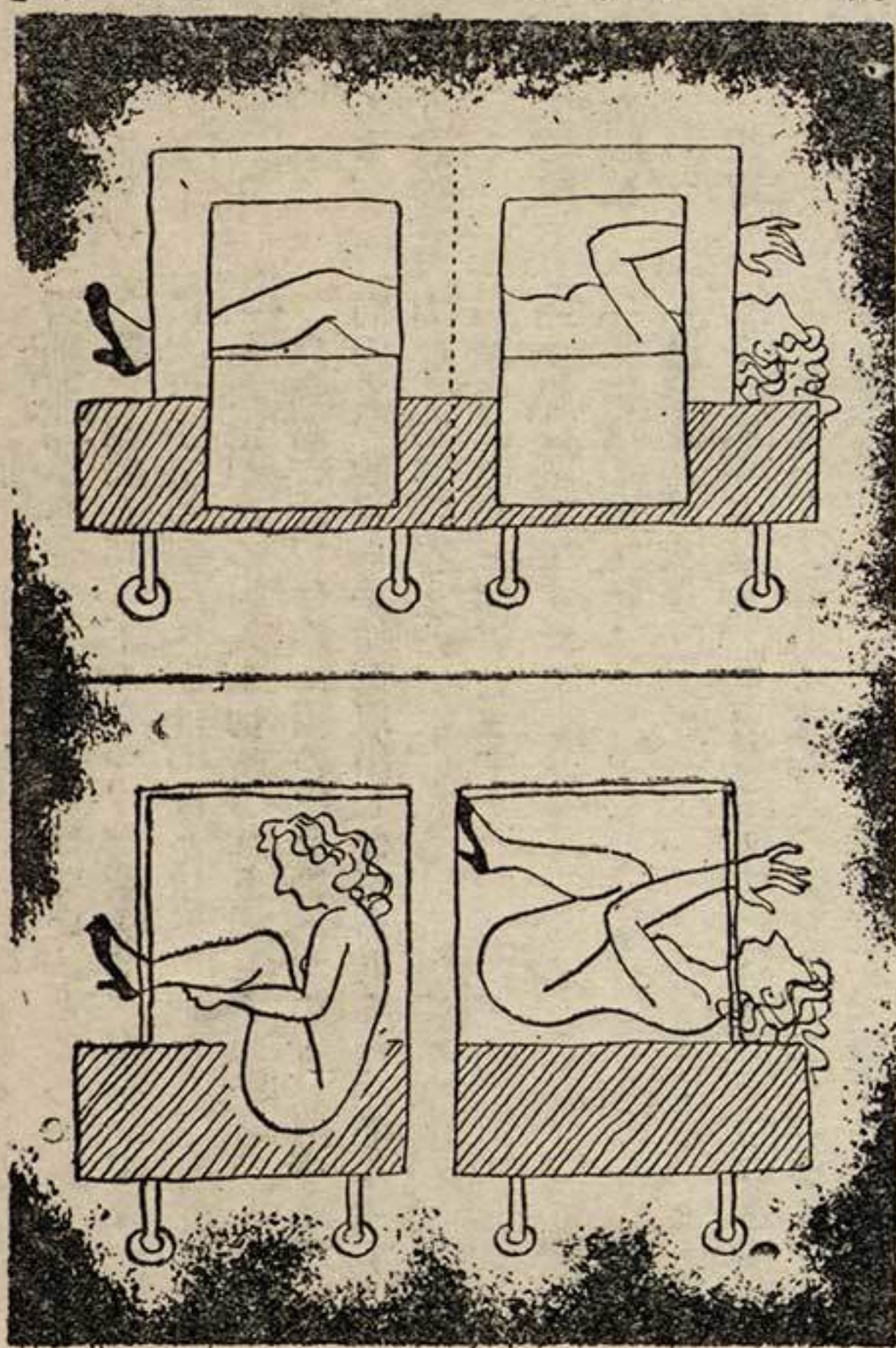
「何だと。客席が騒がしいのはそれか――」

と、手の雷類を置いて立ち上つた。まだ半信半疑であつた。華芳が、そんな手を使うのであつたら、あらかじめ自分の耳に入れたくはずだと、胴切術の種明しを知っているこの支配人弁敬は、わざと人騒がせを演じてみせる華芳の新趣向かも知れぬと思い、山田少年の注進をすぐさまに信じられなかつた。

急いで楽屋口から回つて舞台へ出て見ると、幕は下されて、華芳は青ざめ、助手に箱の乗つた臥台を運び入れさせようとしてるところであつた。箱の真中を伝つて落ちていく粘つた血を見て、弁敬はすべてを察した。そして彼も青ざめた。これは大きな手違いだ。楽屋に控えている天地一座の座員や、劇場の事務員が、舞台へ出てきて、口々に騒いでいるのを、手で合図して引取らせすぐ幕の外へ出ていった。

「皆さまお認めの通りに、只今ちよつと手違いが御座いました。呼び物の胴切術を、これを以て打切るのは、甚だ恐縮不本意で御座居ますが、座員多数が控えておりますゆゑ、別の新趣向を以てお目見得致すことにいたします。尚この準備も御座居ますので、幕が上りますと同時に、映画、家原兼一・今日町子主演の『再今昔馴染み』を上映し、その次に新奇術を御覧に供する予定で御座いますれば、皆様御ゆつくりと御覧の程を――。尚又只今の被害の傷の方は、ごく浅く、命に別条のない模様でありますので、御赦念の程を願つておきます」

乱れ立つた客席を押えようと、必死に取つくろつていく弁敬の声が聞える中で、華芳は、舞台の血を拭き取ろうとする掃除婦を、まだ拭いてはいけなさと制しながら命に別条はないどころか、背中 of 皮膚一枚まで切つてしまつたのだ、と思い返していた。恐らく観衆も、そんな説明の苦しさを見抜いているか、さもないければ、狐につ





まされた思いをしていることだらう。

楽屋へ、ハンカチで額を拭き拭き飛び込んで来た弁敬は、運び入れられた箱の中を覗いてみて、こと切れているむごたらしい死体の切口を眺め、

「うわー。——小旭斎、どないした？」

と、立っている華芳の顔をいぶかり見た。

華芳は言葉なく首を横に振った。もうどうやつても、傷口を繋ぎ合せて生き還らせることは出来ぬという意味をこめて——。

華芳の確答を見て取ると、弁敬は、またハンカチで顔を叩き、「警察、警察」と口ばしり、ずりかかった眼鏡をおし上げて、電話口へはしつていった。

大都劇場から一丁と隔つていない巡査派出所の、任官

してまだ間がない二十三歳の若い青年である良金巡査は折柄巡邏から帰つて日誌をつけているところであつた。

腰に棍棒とピストルをつけた制服で、山田少年と一緒に大都劇場の楽屋へ駆けつけた。

「あなたがこの婦人を切斷されたのですね」

良金巡査は、仔細に箱の中を極めてから、傍の華芳に向つて、胸から手帖を取出しながら問うた。そうですと力なく華芳は答えた。

「お名前は何と仰言います？」

「小旭斎華芳です」

「被害者の婦人は？」

「藝名を花井京子」

そこへ道具係が、椅子を二脚持つてきて、二人に坐らせた。支配人の弁敬は、二人の傍に立会つていて、良金巡査が鉛筆を執つて記すのを、覗き見した。

「この奇術は、どういふ仕掛けになつておるんですかなあ」

この質問は、彼の職務に熱心な余りと大いに好奇心を刺戟されてなされたものであつた。これは捜査主任が到着して捜査主任が直き直き訊問しても遅くないものである。しかし、良金巡査にはこういう事件が初めてであつた上に、いつかロツクという探偵雑誌で、「蝶々殺人事件」の犯人当てに、彼の推理解答が紛れ当りに第一席に入選したこともあるので、彼は少々出しや張るところがあつたのである。

華芳が、良金巡査の質問に答えて、「切術の種を説明しかけようとした時、入口の方で飯の打つた靴を踏み鳴らす音がして、「本署から来やはつた」という誰かの声がした。

金筋の中に座金を一つつけた警部補佐藤捜査主任、腕に同じく金糸で二重の山

形をつけた辻中刑事部長、鑑識係菱木民藏の三氏は、良金巡査の、現場保存に異状のない旨の報告を受けてから支配人弁敬が、揉み手しながら話しかける説明を聞いて問題の箱へ近づいた。

## 戸祭雛子の行方

箱を覗いて菱木鑑識係員は、血のどろりと固まつた柘榴のような切口を極めて、鋸で切られたという間に間違いないことを、納得した。異様な胸を衝く血の臭いに佐藤主任は面を逸向け、華芳に、鋸が死体に近づく時、異常はなかつたのか？と問うた。これは並居るものも、等しく疑問に思つていたところであつた。

「それが全然分らなかつたのです」と答えた。良金巡査は、これはどうも臭いな、と思つた。

死体の顔を裏返そうとした菱木鑑識員は、死後硬直が始まつていると見えて、指先を空しくあきらめた。そして支配人弁敬を顧み、まだ現場の舞台へ出られぬかと問うた。

「もうすぐで終りです。もう十分ほど」

腕時計を眺めて弁敬は、哀願するように云つた。

「鋸が箱に食込んでくる時、何と云つたかな？花井京子ですか。これがどんな態度を取つたのです？」

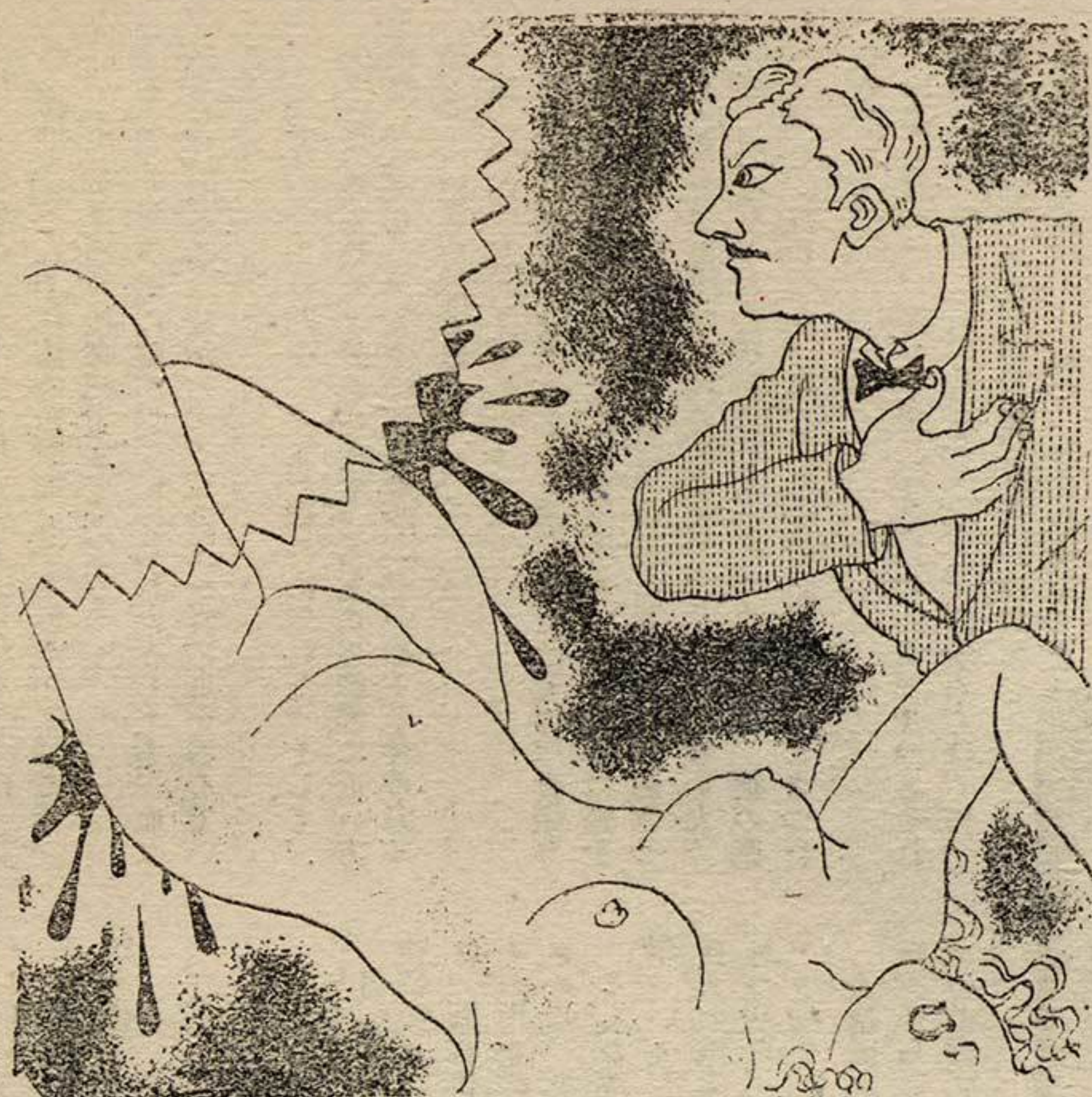
「それが、実は私に納得出来ないのです。京子は、いつものように目をつむつて、じつと観念してました」なるほど、と佐藤主任が、顎に手をやつてまた頷いた良金巡査は、華芳の答を聞いて、一筆何事か手帖に記入した。

「さあ、この手品の種を明かして貰おう」

と、菱木鑑識員と一緒に死体を覗き込んだりして、自分では一言も口を利かなかつた辻中部長が、はじめて華芳を促した。

「それは——」と横から弁敬が引取つて

「二人の女を使つていゝんです。この箱の下の寝台に、





もう一人の女が隠されています」

「もう一人の女？それはどこに？」

「それが、いないんです。ねえ小旭斎——」

名差されて華芳は、相変らず血の氣のない顔で、へえと云った。

辻中部長は、華芳へ目を移して、

「いつから？」

「それがあたしには、合点参りません」

「舞台へ出る時は？一緒にやなかつたか？」

口を緘している華芳を見て、二人の助手が、代るく口を利いた。

「こちらへ運び込んできて、中に戸祭雛子さんがいるはずやと思つて、声を掛けましたですッけど、返事おまへんね」

「わても、舞台上で回す時、——なんや軽いな——と思ひましてん」

「すぐ中を檢めました、中にいるはずの戸祭雛子の姿は見えませんでした」

——と華芳が受けた。

「そうすると、舞台へ出る初めからかね？その戸祭雛子とかがいなかつたというの？」

佐藤主任の間に、華芳は、そう思います。と答えた。

「二人の女を、舞台ではどう使うのかね」

辻中部長が云つた。その説明を、横から弁敬が引取つた。

「最初、この二つの扉を開いて客に見せます時は、一人の女だけを寝かせております」

「それが、花井京子さんでした」

とお喋りらしい助手の一人が、口を出した。

「そして、その二人に——」

と弁敬は、口を入れる助手らを指差して、

「——これをぐるつと回して貰つてます時に、足をかみ込んでこちらの半分へ移り、あとへ、下の寝台に入っているのが、こつちの半分の箱の中へ起上つてきて、坐つたまゝで、足だけを穴から出すのです」

「それが丁度、舞台へ来た時、足を出し入れしやります

すねん」

と別の助手の一人がまたも口を入れた。彼らは共に、三十過ぎの瘦せた馴れた顔の男である。

そこまで聞いてみると、一行には、この奇術の仕掛けが、納得いつた。これなら箱をぶつ切つて、隠れへしたところで、訳はない。再び箱を一つにくつつけて、足を元通りに出し入れさす際には、術者は大方、観客の目を遣る位置に立つのだから。

映画が終つたらしい。弁敬が、幕を下せと命じている

「その、戸祭雛子を、最後に見たものは誰かね？」

と佐藤主任は訊いた。

「たしか花井京子さんと一緒に、楽屋にいやりました

が」

瘦せたノツボの方の助手が云つた。

「華芳さん、あんたはいつ御覧になりました？」

主任の正面切つた間に、華芳は

「舞台で、この箱に入るのを見ましたが」

「しかと——？」

「はい」

「それからすぐ、幕が開いたのですな？」

「いえ、」

華芳は驚いたように返事した。

「私はそれから便所へ行つたのです」

「なるほど、それで便所から歸つてきてからは改めて雛子を見なかつたのですな？」

「はい、開幕に遅れたものですから、急いで出てきました。その時はもう、二人がはいつているものと思つてました」

「二人がはいつているものと思つた？事實はいつていたのじゃないのですか？」

「いえ、もし二人ともはいつていたのなら、その後で、戸祭雛子も、われわれの目に入るはずだからです。何しろ、幕を下して楽屋へ運び込んでから、私らの目が、箱に注がれたのですから」

「舞台には、奈落へ通ずる抜穴がないのですか？」

主任は、弁敬を振返つた。

「御座います」

「それにしても、われわれの目に触れずに、箱からすぐその奈落へは抜けられませんか——華芳は云つた。

主任は、華芳の言葉を相手にせず

「幕が上がる前に、誰か舞台にいたものはありませんか？

舞台にいたくとも、舞台の方を見ていた方は？」

と、あたりの人々に問うた。誰にも、返事はなかつた

「わてら、はよう師匠が来やはりや良いに思て、やきもき、あつちへうろくしてたもんやさかいになあ」

助手の背の低い方が云つた。

「いつとき、舞台上に目が届かなくなることは考えられます。そのように演出者の出が、遅れると——」

弁敬は説明した。

捜査主任は誰にもなく大きな声で云つた。

「それじゃ、戸祭雛子さんをみんなで捜してみして下さい

私物はありますか？」

「荷物はありません。そのままです」

と、座員の一人が向うから返事した。良金巡査は、華芳の回答の要点を手帖に控えていたが、捜査主任の要求を聞くと、懷中電燈を辻中部長から借受けて、舞台裏の奈落へ下りて行つた。

スクリーンと、綴子幕の間に挟まれた舞台へ一行が出て、血潮の溜りを調べて見たのは、この直後、映画が終つてすぐであつた。

佐藤主任は、菱木鑑識員に、

「この出血の量で、死後切斷かどうか？」

と言葉の途中で切つて問いかけた。

「断定出来ませんね？かりに死んでいたにしても、死後の時間が極く僅かなはずですから」

「生活反応の方は？」

「それが死体にあるのです——」

主任は頷いた。それは、死後切斷を意味しない。

「何にしても、戸祭雛子を捜し出すことですね。カギは彼女が握つているのじゃありませんか？」

と、もういい年の、額の禿げ上つたこの鑑識係員は、

捜査主任にと、刑事部長にともなく云つた。



## 二人の花井京子

奈落へ降りた良金巡査は、コトリと何か音がしたように思つた。煤のような粉埃りの積つた足許に、まるい懐中電灯の明りを落しながら、片手で顔にかかる蜘蛛の巣を払い除けていた。

ねずみかな？と彼は足を止めた。劇場の大きな建物を支える土臺がここにあるかのように、太い木組みが、湿つぽい空気の中で、特有の臭いを淀ませ、骨太く陰気に静まり返っている。肺の中まで、埃で汚れるような気がする。

コトリ、とふたたび同じような音がした。良金巡査はその方向に一旦灯を向けてから、足許を照しながら近づいていった。その足許には、何かを引摺つたような跡がついていた。

いぶかりながら近づくと、柱の一本に、猿轡をはめられて縛られている女が、身もだえして、縄目を脱けようとしていたところであつた。

灯に照らされて、括られている人影は、顔を上げ、目をしばたいた。若い女であつた。縄目は、腕のところどころでゆるんでいた。良金巡査は、柱の交叉した股へ電灯を置いて、両手で結び目をほどいた。女は、ギリリと光つた目で巡査を見上げ、自分で猿轡を解いて、乱れた髪を掻き上げた。

「誰が、こんな目に逢わしたのかね？」

しずかな声で良金巡査は訊いた。女は黙つて、うな垂れた。

電灯を手を取つて、片手で女の腕を取りながら、

「それが云えない？いゝたくないの？」

女は首を横に振つて、ちよつとよろけながら、片手でこめかみを押えた。

「ははーん、あんたは重大なことを、今こゝで云いたくないんだらう？」

「分らないの、何が何だか、さつぱり……」

「そうかい……。ところで、舞臺へ出る抜穴口はどこ

かな？……ははーん、こゝか。足跡がついてるな、……おつと、これは乱しちやいけな。さあ、この腕へ乗つた。わたしが抱いて上げるからね。あんたは氣を失つたようにしてなさい」

舞臺で、佐藤捜査主任以下、額をあつめて現場検証をやつてるところへ、奈落へ通ずる床の一区切がポツカリ開いて、裸に近い女の体を抱いて、良金巡査が顔を汚して上つてきた。みんなは果氣に取られてその方を見たが、すぐに腕に抱いているのが問題の戸祭雛子であることを認めた。

「この下の柱に、縛られておりました。この布で口を塞がれていました。綱は、そのまゝにあります」

女を立たせて、良金巡査は、佐藤主任に云つた。御苦

勞、と主任はほめて、すぐ女へ目を移し、しばらく頭の

天辺から足先まで見上げ見下して

いてから、

「もう怖がること

はない。……どう

かね、気分は？」

と云つた。雛子

は、矢張り黙つて

いた。

「知つていること

は、全部云つて貰

いたいね、どうし

て、そんな目に逢

わされたか」

女はちらと、斜

向いに立っている

華芳の顔を見て、

それからまた俯向

いた。

配を察して、雛子を連れて客席の方へ降りていき、雛子に訊問を始めた。辻中部長も、それに附添つた。良金巡査は残念だが、菱木鑑識員らとともに舞臺に残つた。そこで彼は、被害者の京子が、殺されてから鋸刃で切られたか、氣絶しているところを切断されたかだらうということを開かされた。

裾上りにせり上つている客席の、がらんとした中で、今や佐藤主任は、おゝよその目星をつかんだようであつた。

「そうすると、箱の中で、彼に押しつけられてハンカチを嗅がせられているうちに、氣を失つてしまつたというんだね。……その模様を、氣を失つていくあんばいを、ちよつと話して貰えないかね？」





「最初心臓がドキドキしてきたのを覚えています。するうちに、夢と現実がこんがらがっていつて、苦しくて抵抗しようとするのに、力が全然出せませんの。後で気がついたら、あたしはもう柱に縛られていました。それで醒めてみてから、麻酔をかけられて、いつか夢を見ていたということが、分りましたの」

「それが、小旭斎に間違いないんだね？」

「ええ——離子は頷いて云った、

「華芳さんでしたわ」

「ところで、あなたと小旭斎華芳との仲を話して貰えないかね？男女の仲、をだね。これを隠すのは、為にならないよ……」

「そんなことまで云わなくてはいいじゃないの？」

「こいつが、大事なことだよ。分っているじゃないか。

犯罪の動機は、こゝにあると思わんかね」

「……」

「どの位交渉があつた。今更恥かしいことも何もないもんだ、さあ云つた、云つた」

「あたしが馬鹿だつたんですわ、……」

そつういと、顔に手を当て、泣き出してしまつた。

主任は、大きな声で、良金巡査を呼び寄せた。良金巡査は、命に従つて離子を楽屋へ引取らせ、津之内弁蔵に彼女を保護させ、代りに小旭斎華芳を連れて、主任と刑事部長の待ち構える椅子席へ来た。彼はそこで、主任が別命を下さないまゝ、この一問一答に立合うことが出来た。

「舞台へ立つてどの位になりますか？」

「ざつと二十年です。昭和五年の春でした。私が二十三年です」

「その間に、このような失敗をなさつたことは……？」

「ありませんでした。こんどのは、全く思いがけないことで、私は、……私は、……胸が一ぱいなのです」

「でしような。お察しします。——ところで、この真犯人は誰だと思ひになりますか？」

「——すべて、私がわるかつたのです」

「あなたは包まず自供されますか？」

「えッ？……」

「出来たことは、これやもうどうにも仕様のないものです。犠牲者の冥福を祈るためにも、洗いざらい打明けて頂きたいのですな」

「むろん、私の知つてゐる限りは……」

「あなたはなぜ、戸祭離子の方には、手を下されなかつたのですか？」

「なんでしやう？御質問の意味は？」

「花井京子だけを、葬られたわけを、ですな」

「えッ、私が、京子を……？」

「そうです」

「とんでもない、……あゝ、私が京子を？……どうして私が京子を、……とんでもない！」

「麻酔にお使いになつたのは、エーテルですか？」

「何のお話です？」

「あなたは、すっかり打明けると約束されたんじゃないのですか？」

「ですが、私の知らないことを唐突に仰しやられても」

「戸祭離子が、ぜんぶ話しましたよ——」

「そうでしたか、……分りました。……私が、私がわるかつたのです」

そつう云つて、男泣きに泣き出した。溢れ落ちる涙を、彼は腕で拭つて、途切れ途切れに、告白を始めたのであつた。

……「ある雲の降る夜でした。四国の田舎町で興行してゐた時のことです。舞台が終つて、ほつと楽屋で息をついてゐるところへ、可愛い少女が、私のところへ面会に来ました。……あたしの父は、一週間前に亡くなりました。後に三人の弟妹がいますが、これらは、みな現在の母親の子で、自分はこの母とは生さぬ仲なのです。母はどういうものか、私につらく当ります。——と申しました。

どんなに辛いことや淋しいことがあつてもいい、この一座の座員に加えて貰えないか、……けれどもそれには親権者の同意が必要だ、と私が云つて拒むと、翌日、母親といふのを連れて、またやつて来ました。私はその母

親といふのを一目見て、急にこの少女を手許に引取る氣になつたのです。薄化粧をしたみめのよい顔かたちでありながら、義理にもせよ、その娘の親とも思えない冷たさです。好いたようにこの子にさせてやります、と他人事のように云うのでした。

……こうしてこの娘が、私の弟子となつたのは、八年まえ、彼女が十四の年でした。一年経つてから、私は彼女を舞台へ出すことにしました。そして名前を、花井京子とつけました。

……花井京子という名には、深い思い出があるのです——私が舞台に立つ前、師匠天華の許で、厳しい修業を受けていた時、一人前の奇術師となつて舞台へ立つ日のあることを、誰よりも待ち望んでくれたのがその女でした。……その花井京子は、私が舞台に立つて一年後帝都の真中で新進奇術師としての名声を、恣にしていたさなか、毒を仰いで死にました。

……私が彼女を裏切つたのです。いや、裏切るような結果になつたのです。私は、一方で深くこの女を愛してゐながら、私に血道を上げたある旅館のお神と関係を結んだばかりに、京子は、死にました。われ／＼男性には魔ものが巢食うています。われ／＼男性の愛情は、複數形を取つて差支えない、一方で精神的にも又肉体的にも深く京子を愛してゐながら、単に肉体的に、年上の女の愛情を受け入れる位は何でもないと思つてしたことが、激しく京子の絶望を呼んだのでした。私は京子の靈に泣いて謝罪しました。しかし今日まで、この罪が清算されたものとは思つていけません。……京子は、私に取つて初めての女でした。そして京子に取つては、私が唯一人の男であつたのです。

……私はこの娘の芸名に、ひそかに胸に藏してゐる青春の日の花井京子の名を冠しました。彼女は、清楚な、氣品に富んだ容顔をしていて、氣質もそれに劣らず優しい女でした。どういふいわれで花井京子という名を授けられたかも知れないまゝ、京子は年と共に益々その稀な氣質を伸していききました。芸の方も、あの胴切術以外に劔の双渡り、靈交術をやる事が出来ます。この京子と



## 悲戀の罪の意識

むかしの京子とは、顔形こそ違つておりましたが、私はいつか、この京子を愛することが、むかしの京子を愛している続きのようになつてきました。……

……けれども私に忘れられないのは、さきの京子を裏切つた理由、私の肉体への放縱です。それを思い合わせるにつけ、私がさきの京子を愛したようには、この京子を愛することは出来ませんでした。つまり、精神的にはさきの京子に勝るとも劣らぬ深い愛を注いでいながら肉体的にはこの女を自分のものには出来なかつたのです。私がこの女を愛することは、大それた罪のように思われしました。私はこの女を、清く座右に置いていただけで、云うに云えない幸福感を味わうのでした。

……しかしこの状態をつゞけていくことに、無理な点があることを発見しました。それは、私自身の肉体的な要求です。私はこれを、戸祭雛子を愛することで、解決しようと思ひました。雛子は、私の肉慾を、甘んじて受け入れていました。雛子は、私の情婦としての位置を占めました。私は出来るだけ彼女に酬いるため、物質的な面で彼女の虚栄心を満足させたのです。ちやうど昔、むかしの京子を愛しながら旅館のお神との情痴に酔ひ痴れたようにです。

……私はいつの日か、私の目鏡に叶つた清純な青年が京子の前に現れて、私が京子に果し得ない愛の抱擁を、私の身代りに京子に与えてくれることのあるのを、期待していました。私は私の手で、愛する京子と、愛する青年との夫婦の一組をつくることを空想していたのです。……ですが、あゝ、……このような結果になつてみると、私は間違つていました。私は、私のすべてを、京子に注ぐべきでした。心と体を分けて考えた私は、京子を愛する私の心がまだ浅かつたのです。どうして雛子なんかを、私は「弄んだのか、……あゝ京子……」今や惑乱してしまつた華芳は、よろ／＼と立上りざま、両手を拡げて、椅子席の通路を後方へ夢遊病者のように歩き出した。

「逃げるか華芳、——待て」  
辻中刑事部長の聲が、後を追つた。

……京子、……京子、と亡き魂を求めてさまよい出した小旭斎華芳の手を、辻中部長は捕えて、我に返らせた。「見苦しいぞ、小旭斎、さつき主任が云われたように、もう出来てしまつたものはどう仕様もない、男らしく裁きを受けるんだな」

華芳はやつと、吊り上つた目尻を辻中部長に注いだ、「裁き……？ハハ……、受けますよ、喜んで、すぐにでも首をちよん切つて下さい、私は、京子のところへ行きたいんだ……」

「それでは、お前が、京子を殺した真犯人なんだね？」  
「真犯人？さいでございますよ、さつき申上げた通りに……京子を死なせたのは、私だ」

「そうか、よく云つた。……だが待てよ、いや、あの支配人津之内弁敬が怪しい。……良金巡査、来てくれ」

辻中部長は、立つている良金巡査を呼び寄せて、何事か耳打ちしていた果に、又大きな声に返つて云つた。

「良金巡査、行つてきてくれ。……いやどうも、あの弁敬という男が、大いに臭いぞ」

良金巡査は、棍棒を押えて、よいしよと舞台へ駆け上つて走つていつて、休藤主任は、口を明いて、辻中部長と華芳とを見較べた。

舞台へ消えた良金巡査は、すぐ楽屋から出て来て、物凄勢で走つてきた。そして椅子に突き当たり、

「——部長、大変です、戸祭雛子が死にました！」と辻中部長に報告した。

「えッ、死んだか残念、全然こと切れたか？」  
「はあ、息を引取りました。青酸カリを呑みました」

それを聞くと、華芳は、瞑目した。

辻中部長と良金巡査は、その華芳の表情を、永い間見守つていた。しかし遂に、待ち設ける科白を華芳は吐かず、じつと目をつむつたまゝであつた。

「これで、解決した。一応疑つたが、やはり華芳が犯人だつたんだな、……主任、華芳を逮捕します」

佐藤主任は頷いた。辻中部長はつゞけた。

「——支配人弁敬は、あれは嫌疑外だ。もし、華芳が犯人でなければ、犯人は戸祭雛子より外にない。その雛子が死んだというのに、華芳が、まだ自分が犯人であることを否定しないのは、自分が犯人と名乗ることによつて雛子を庇おうとしているのではなかつたことを意味する……しかし、雛子は生きてゐるんだよ。なあ良金巡査」

「はあ、生きています」

「——お芝居は不用です」華芳は、始めて目を開いて云つた。「もし雛子が自殺したのだつたら、私の罪は、二重になるばかりでしたよ」

その落着いた口の利き方はもうさつきの惑乱の状態を脱したかのようであつた。

主任と部長が、小旭斎華芳を、京子殺しの犯人として引立てゝいつたあと、良金巡査は楽屋へやつてきた。

「——華芳という奴はひどい奴だ。二人の女を手玉に取つて、厭いたら殺してしまおうつてんだな。雛子さん、あんたももう少しで、刺されるところだつたに違ひない。舞台をこんぐらがせといて、そつと括りつけたあんたのところへやつてきて、息の根を止めるつもりだつたんだぜ」

それは津之内弁敬が、泣き崩れてゐる戸祭雛子の肩に手を掛けて、なぐさめてゐる声であつた。それを良金巡査は聞いて、顔を出した。

「いや、華芳はひどい奴じゃない、見上げた男ですよ。男らしい男ですよ。ねえ戸祭雛子さん、その理由はあんたが、いちばんよく呑み込んでゐるはずだ。……なに支配人さん、華芳さんはすぐ返されてきますぜ。わたくしが雛子さんを同行して行けば、ね。さあ戸祭雛子さん、立つて貰ひましょう」

エーテルを嗅がせられたのは、あなたじやなくて、花井京子さんでしたよ。嗅がせたのは、むしろ、これはあんたが見当外れをやつてゐる主任と刑事部長に、説明してあげてくれなくちゃいけません。……ついでに、三角関係の痴情の動機をもね。……

良金巡査は、驚いてゐる弁敬の面前で、雛子を引起して手を取つた。これだから探偵小説の一つ位は読まなくちやいけな、と彼は、やがて示すだろ佐藤主任と辻中部長の表情を描いて、胸ふくらむ思いであつた。(終)



# 十年後の彼は女だった

田村喜一郎



草薙久ト

Tosi 画

## (一)

乳色の濃い霧がネオンの光茫を  
うるませている中を幻のような一  
人の影が新世界の舗道をゆつたり  
した足取で歩いていった。

うらぶれ果てた葉ッ葉服にお笠  
帽を目深くかむつている、その人  
眼を避けるような態度が何か其の  
男の暗い過去を思わせた。

日劇の裏通から噴水の前まで来  
ると、ぐつと夜空を仰ぎ見て、  
「すつかり変つていやがる」

と、ぽつんと低く呟いた。映画  
館がはねたのか、ひとしきり雑踏  
が続いたが、一つ、二つと、ネオ  
ンが消え始める頃には、その男の

外、人影はなくなつた。けれど、  
じつと佇んだまゝ動こうともしな  
い。

新太郎は深い傷跡のある額に皺  
を寄せて呆然と十年前を思い返し  
ているのだつた。

十年前……

ぎいぐしきしみながら鳴つてい  
た安レコード屋の虎造節や、みち  
奴の流行歌、十幾万才の小屋から  
洩れて来る爆笑とさんざめき、ぶ  
いんとすき腹にたまらなく匂つた  
関東煮、串カツ、ドテ焼、パチン  
コ屋の騒音、夜風にはためく劇場  
の帳等、それに三百尺の鉄塔通天  
閣までも嘘みたいは何もかもなく

なつていて、モダンな映画館や雑  
多な飲食店がごたごた並んでいる  
だけで、あの懐かしい、新世界の  
雰囲気はもう何処にも見当らな  
かつた。

彼はつい三日前、十年ぶりに娯  
楽の空気を吸つたのであつた。吹  
雪荒れ狂う北海道網走の刑務所か  
ら矢のように一路大阪へ帰つて来  
たのだつた。

刑務所の中で、新聞やラジオか  
ら戦後の大阪の模様を讀んだり聴  
いたりして凡その想像はしていた  
が、まさか、こんなに變つてしま  
つていようとは思わなかつた。  
不意に後ろから、ぎゅつと手を

握られた。

「あんた、遊ばへん。いゝとこへ  
案内したげる」

は、あ、こいつが噂に聞いた  
夜の女と云う奴か——とその毒々  
しく彩つた真つ赤な唇や媚を流る  
艶な妖しい様子にそれと察しがつ  
いた。

「ねえ、サービスするわよ。いゝ  
でしよ。泊つたつて」

女は着物の裾を意識的にちらつ  
かせて赤いものを覗かせる。掴ん  
だ腕を離そうともしないで、ます  
くよりそつて来る。

新太郎は、女の蒸せるような脂  
粉の香りと体臭に、ふと十年間抱  
くことのかなわなかつた女体を思  
い切り虐めたい狂暴な衝動に駆ら  
れた。

「忘れるんだ。何も彼も悪夢だと  
忘れてしまふのだ。この女の肉体  
を攻め苛いなむ事で、悪夢が消え  
去つてくれるのなら、千円でも、  
二千元でも、お安いものだ……」  
そう決心すると、新太郎はぐつ  
と女の腕を抱きしめた。

## (二)

飛田遊廓のコンクリート塀の横  
を過ぎると旭町だつた。がた／＼  
きしむ階段を上りつめると、四畳  
半ばかりの薄暗い部屋に通された  
「ねえ、速慮しないでよ。こゝ  
あたしの借りている部屋なんだか  
ら」

女は鏡台に向うと、羽織を脱い  
だ。

「何か注文しましょうか」

「いや、何もいらねえ。お前の体  
だけで十分だよ」

「まあ、きつい兄さん、たんと可  
愛がつたげまつせ」

女は嬉しそりに、寝化粧をすま  
してにじり寄ると、荒々しい吐息  
で唇を重ねて来た。

器用にさつと布団を敷き終ると  
悩まし気な眼で「寝ましようよ」  
と女は合図した。

「電燈は消さないでくれ」

「あら／＼」

と女は一瞬、恥づかしそりに、  
長襦袢の前を掻き合せると、彼の  
横へ、ブーンとジャスミンの香り  
を漂わせて、もぐり込んだ。

## (三)

女の肉体の異常さに、はつと氣  
づいた新太郎は、驚いて飛び起き  
た。

「お、お前は男じゃアねえか」

正体を見破られてしまふと男娼  
は、口惜しそりに坐り直した。

「男でも、する事は変りがあらへ  
んわ」

「そ、それでもお前……」

「ふふ、あんたは余つ程眼が肥え  
てんのね。あんただけよ。あたし  
を男だと思破つたのは、外のお客  
さんは皆んなあたしを女だと思つ  
て遊んで行かはるのに」  
「俺は嫌だ／＼」



「ねえ、お願いだから、帰らないで、こうなつたらお金なんかいらなから泊つてつて、ねえ、お願い」

「それじゃ、商売にならねえだらう」

「今夜は休んだ事にするは、一晩ぐらい、いゝのよ、だから、帰らんといて欲しいの」

男娼は新太郎の首に、右手をからませると、布団の上へ自ら倒れていつた。

「あたし、もうこうなつたら何もかも云うけど、あんたを、さつき一眠見た時から、惚れたのよ。あたしの初恋の人にそっくりなの。あんたは……」

新太郎はふと、この女(?)を何処かで見かけた事があるような気がした。いや確かに見覚えがある。だがどうしても思い出せない。「おかしい顔してんのね。未だ怒つてはんの。ねえ、気嫌を直して何かおごるから」

「氣を使わなくつたつていゝんだよ」

「じゃあ、帰らないと約束してくれる」

「うん」

嬉しさの余り、男娼は胸にしつかり手を当て、乳房を抱きしめ、うつとりと眼をつむつた。またたくこれが男だとは、新太郎のよくな職業を経て来た男でもなかつたら、素人眼に見破れないのも無理はなかつた。

破れ窓から、おぼろに霞んだ、まんまるい月が覗いていた。遠くて、むせび泣くようなチャルメラの音がしていた。

#### (四)

男娼から光を一本貰うと、新太郎は窓の手すりにもたれて、さもろまそりに吸つた。

「お前さんの名は何と云うのだい？」

「よし子つて云うの」

新太郎は思わず苦笑した。名前まで女名なのだ男娼は完全に魂まで女になり切つてゐるのだ。肉体の一部分が異なると云うだけで女になり切れない男娼の苦惱もあるだろうが、その立居振舞は女をしのいで、女らしいのであつた。

「お前さんは、さつき俺の顔が初恋の男に似ていると云つたが俺のどんなところが似ているんだね」

「何もかもそっくりやわ。そうして一寸口を歪めて煙草を吸う素振りまでが……そやけど、お客さん気分こわさんといとくんはなれやその人の眼は、あんたはんの眼よりもつと優しく、美しく澄んで色つぽうおましたわ」

「何をしていたね。その人は」

「役者、二枚目よ。有名やなかつたけど、新世界の第二朝日では売れつ子やつたわ。女の子により騒がれて、剣劇の立廻りが新国劇の辰

見柳太郎にそっくりで、花道でろつぽ踏む姿のいきなことつたら、わてら興奮して、その晩寝られななんだもんやわ」

新太郎は愕然とした。今、男娼が云つたその男とは十年以前の自分の事なのだった。

「表情には微塵も現さなかつた。そして、」

「その頃から、もうお前さんは女だったのかい」

「いゝえ、未だ完全に女やおまへんでした。そう、あてのえゝもん見したげまひよりか、それ見たら、一ぺんにわかりますつせ」

朱塗りの鏡台の引だしを抜き取ると、古びた黒い表紙のアルバムを開いた。

「見とくれやす。これがわての舞台姿だす」

写真を見て、新太郎は思わず春之丞と叫ぶところだった。が、今更、惨めに変わり果てた己の姿を打ち明けて見た所で何になろうと、ぐつと堪えた。

「そうかい、お前さんは女形だったのかい。さぞ、奇麗だったろうなあ」

「まあからかわはつたら、いや、ほゝ……」

春之丞、いや男娼ヨシ子は口に手を当て、ぽつと頬を染め恥づかしそうに笑つた。白い歯なみがいやに清潔だった。アルバムに貼つてある写真の中

には、新太郎と並んで撮つてあるのも数枚あつた。

「けど、お客さん、恋や云うたかて、それはわての片思いだったんやわ」

寂しそりに、肩をおとして立上ると、窓の外を見た。

ふと新太郎の眼はヨシ子がしている七宝製の紅い椿の帯留に、釘づけになつた。

「なか／＼いゝものを、持つてるね」

「これ、あたしのお師匠さんがしていたものですよ」

新太郎は、ますます奇怪な思いに囚われ始めた。この帯留は確かに座長の雪子が殺された夜、身につけていた物に相違ないのだ。

すると当時、春之丞だった彼がどうしてこれを手に入れたのであろうか……

彼は必死に十年前の惨劇の夜の事を思い返そうと、記憶のページを繰り始めた。

#### (五)

ちやうど、その夜も、今夜のように霧が深かつた。

新太郎は楽屋風呂から上つて来ると、化粧台の上に、赤い封筒がしのばせてあるのに、またかと苦しい顔になつた。

座長の雪子からの誘い状だった一座の二枚目で、雪子の相手役を勤め、三本の狂言のうち一本は主

演するうちにまでなつてゐる新太郎に、淫乱な座長の雪子は、太夫元の櫛田の二号の身でありながら中年女の熱れた欲情のはけ口を、求めて来た。

新太郎は芸にのみ生きる真面目な役者だった。それだからこそ人氣がついたのだ。顔こそ、女を溶ろけさす生白い美貌だが、心は修業一途の渋味で固まつていた。

多くの浮気女の誘惑の手から、一本になるまではと眼をつぶつて逃げ廻つた。

が、座長の雪子にだけは、素つ氣なく断り切れない。義理と恩儀があつた。

それが彼を弱くした。

一夜、たつた一晚だけと云う、雪子のたつての頼みに体を許したのがいけなかつた。

一度、交渉を持った男の味を忘れられない妖婦の血を持った雪子は、執拗に彼にからみついて離れなくなつたのである。

新太郎は何とかして雪子と手を切りたかつた。このまゝでは芸が荒むばかりか、太夫元の櫛田に知れてしまふ。

今夜こそはきつぱり断ろう、もし雪子が腹を立てたその時は、座をやめてしまおうと決心して霞町の裏通りにある、ホテルのドアを押した。

雪子は着物の裾もあらわに、しどけない姿態で、かなり酩酊して待つていた。



何も云わずに抱きついたまゝベツドに転かろうとした、新太郎はその胸をじゃけんに突いて立ち上った。

別れ話を切り出すと、かつと興奮した雪子は、娘役の荒川珠子に惚れているから、そんな事を云うんだらうと、あらぬ嫉妬の炎を燃やし、突然、持つていたウィスキーの角瓶を、新太郎の顔めがけてはつしと投げつけた。

額に真つ向にそれを受けて、新太郎は眉間を割られた。どす黒い血のしたゝるのを見て彼は逆上した。

暴れ狂う雪子の素肌もあらわな体をベツドの上へねじ伏せると、大声でわめく彼女の口を押さえつけた。

はつと気づいた時、雪子は手をだらりと伸ばし切つて死んだように動かなくなつていた。

「しまった！殺してしまつた」と後悔したが、もう後の祭りだつた。

新太郎はひどく狼狽した。雪子の体の上へそつと毛布をかむせると、如何にも眠つてゐる様に見せかけ、散乱してゐる角瓶の破片等をかたづけ、何喰わぬ顔で、アパートへ歸つた。

新太郎が出て行くと直ぐ、風の如く、音もなく、雪子の部屋へ窓から忍びこんだ一つの黒い影があつたのには彼は気づかなかつたのである。



(六)

翌朝「関の彌太つべ」の幕を無事終えて楽屋へ這入ろうとするのがちやりと手錠をかけられ逮捕された。

が、彼は刑事の取調べが不審でならなかつた、刑事は彼が雪子の胸に双渡り五寸の短刀を突き刺して殺害したと自由を強要するのである。そんな馬鹿な事はなかつた

彼は絶対、そんな兇器を所持しなかつたし、最初から雪子を殺害する意志は毛頭なかつたのだから彼と雪子が争つて後で、誰か別の人物が、雪子を刺し殺したのに相違ないのだ。と必死に弁解したが新太郎には総べての状況が不利だつた。無実の罪を狂気の如く連呼し続けたが、遂に殺人犯として十

五年の刑を宣告せられ、北海の果綱走刑務所へ送られる身となつた……。

血の滲む苦しい獄舎生活で彼は当座、幾度も自殺を企てたが死に切れず自暴自棄となり狂い廻つたが、やがて気分が落着くにしたがつて、運命と諦め、真面目に勤めた結果、模範囚として五年の刑を減せられ出獄したのだつた。……

それにしても此の春之丞が俺を恋してゐたとは今の今まで知らなかつた、まさか男は男が恋されようとは、そう云えばあの当時、春之丞の俺を視つめる眼付や態度にぞつとする程、悩ましいものが感じられた事があつた、雪子が楽屋風呂で、俺に背を洗つて呉れとせがんだ時なんぞは、ぶんと膨れて

(七)

出ていつてしまつたりしたのを、俺に對する嫉妬だと思つたが、あれは、雪子への嫉妬だつたのか、もしや此の春之丞が嫉妬の余り雪子を殺害した犯人ではなからうか、証拠は、此の紅い椿の帯留だ

「お客さん、そんなに怖い顔して何に考え込んでしまひまんの」新太郎の腰にするりと手を廻していきなり抱こうとした。

「おい春之丞、久し振りだつたなあ、お前は俺を見忘れたか」春之丞と呼ばれて、男娼ヨシ子の顔からは、さつと血の気が引いて真つ青な表情になつた。

「よく、俺の顔を見ろよ、額の傷こそ変つてゐるが、十年前の俺の顔は」ヨシ子はまじ／＼と新太郎の顔を視つめた。

「あッ！お前は新さん」「思い出したかい、お前の初恋の男、川上新太郎だぜ」

男娼の体は異様にぶる／＼震え始めた、歯が／＼と鳴つた。「何もそんなに驚く事はねえじゃねえか、人殺しをした訳でもあるめえしよ」

新太郎はそう云つてじつと睨まれると、男娼、春之丞は隙を見てばつと窓から下へ飛びおりようとした。新太郎はその襟頸を掴んで引き戻した。「お前、何故逃げるんだ、懐かし

い初恋の男に十年振りに会つたんじやねえか、何がそんなに恐ろしいんだよ」

パーマの髪が乱れて首すじにたれ、凄麗な美しさを増している、春之丞はうつむいたまゝ、いきなり激しく、

「新さん、あたしを殺しておくれあたしはお前さんを殺人犯にした人非人なんだ、雪子師匠を殺したん……」と叫びかけた口を新太郎は、ばつと押さえた。

「春之丞、今更、つまらねえ事を云うのはよせ、壁に耳あり、障子に目ありだ、人殺しをしたなんてつまらねえ、うわ言を口走つちやア折角お天とう様を拝めた俺らがまた、くさい一ぜん飯の味を思い出すしやあねえか」

「新さん、済みません」春之丞は感極まつて泣き崩れたこれが男なのかと眼を疑う程、春之丞のえりあしは白く、乱れた裾の赤い蹴出しが眼を狂わせる。「春之丞、じゃあなかつた、ヨシ子さん、達者で幸せにくらすんだぜ」

新太郎は鏡台の上へ、そつと千円札を二枚折つて置いた。転がる様に階段を駆けおりた。背後で「新さん／＼」と呼ぶ春之丞の必死な声をあとに。霧はすつかり晴れて、深夜の旭町にはもう売れ残りの男娼の姿もなかつた。

(完)



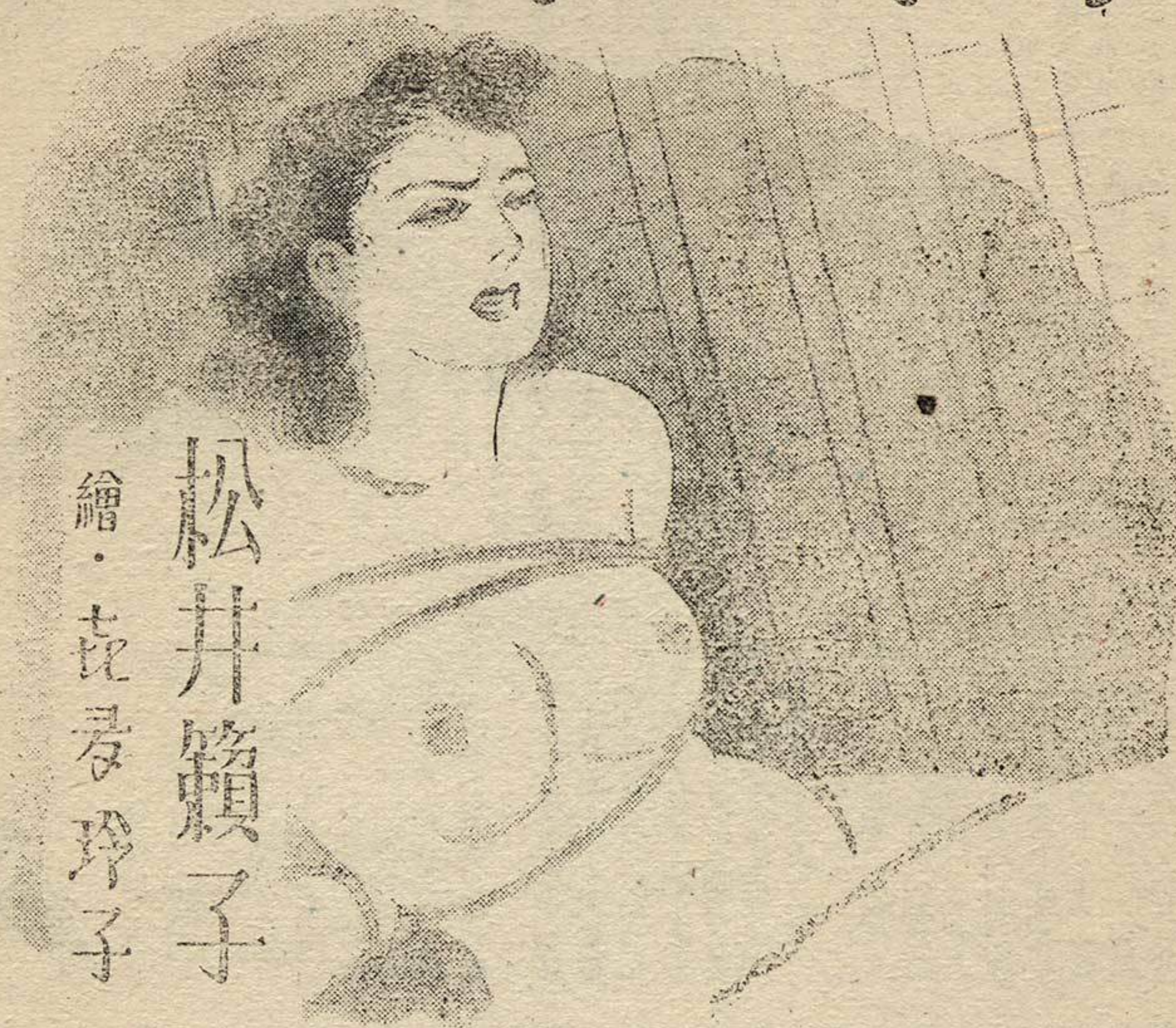
# 作家痴情女

## 欲心説 愛反小

あ い び き

まだ約束の時間を十分すぎたばかりだったが、澄枝は  
じれて、靴のさきをコンクリートの床にコツコツとなら  
していた。

松井 籟子  
繪・花菱 玲子



——来ないのだからか？——

土曜日の午後の阪急の駅は、改札口から流れてくる人  
の顔を一人のこらず見ていると目が痛くなる程の混雑だ  
った。

お誕生日には京都へ行つて泊ろりと前からの約束を——

——来ないはずはない——  
そうは思うのだが、約束の時間に一分とおくれたこと  
のない彼だつたから、十分という時間は澄枝にとつて一  
時間も待つた様な気がするのだ。

——もしかしたら、本当にもう会わないつもりなのか  
しら？——

ふと澄枝は気になつた。此の前の別れしなに、つまら  
ない口争いから、瞳を見ない別れ方をしてしまつていた  
「そんならもう会わなければいゝじゃないの」

そう言つたのは澄枝の方で、彼はべつに「会わない」  
と言つたわけではない。言わなかつた彼の方がかえつて  
そのつもりでいるのに自分ひとり「会わないわ」という  
言葉は「こんなにじれつたくなる程好きなの」という言  
葉と同じなのだ思つていゝとしたら、来ない相手にどう  
それを通じさせることが出来るのだらう。

澄枝は改札口に背を向けて、ぼんやり外を通る電車や  
バスに目をうつした。

——彼との間がこれつきりになる——

そんなことは考えられなかつた。喧嘩をするのも愛情  
の別の表現の様に、二人はよく喧嘩した。泥の中でもが  
くとよけいに深くはまりこむ様に、澄枝と耕一との恋も  
喧嘩をしてはその度に深くなつてしまつたのだ。だから  
澄枝は、前から耕一の誕生日には一晩泊りで京都へ行こ  
うと、時間まで約束してあつたので、「会わない」と言  
つて別れたことも忘れた様に、彼が来るものと思つて出  
て来たのだが……。

耕一はなかなか来なかつた。

トレラーバスが走っている。まるでやどかりという蟹  
の様に、大きな車体を小さい前の運轉台が引張つて走つ  
ている。「トレラーバス」という題のコントを頼まれて  
此処に、こうして立つて、何を書いたらいいだらうと思  
いあぐねていた日もあつたと澄枝は思い出す。原稿用紙  
に字をうめて、それがお金にかわり出してからもう五年  
たつ。耕一との間も三年、いや四年になるかしらと指を  
折つてみた。



## 逢い初め

「作品の中の主人公の情熱はそのままあなたの情熱ではないのでしょうか？ 僕は二度読みかえして、色あせないあなたの小説の情熱にまぶしいような気がしました！」

そんな手紙を未知の耕一からもらった時、澄枝の胸の中にポツとついた灯は、会わないままでもたまつてゆく耕一からの手紙の厚さと一緒に増していった。

小説は書いていても、澄枝は淋しい女だった。結婚と同時に移つて来た大阪には、夫の親戚以外には友達とてなかつた。生れ故郷は東京だが、両親はすでに亡く、兄弟は戦死していた。どつちに住むのも同じと、夫と別れてからは、ただ気候が東京より良いという理由だけで西宮にひとりずまいをしていたが、三十の女の血のたぎりは、ペンの先でみたすより他に道はなかつたのだ。

時代ものの新聞小説でうつつているMという作家は、創作に油がのつてくると、片手でペンを走らせながら、片手が男の大切な場所に自然に動いていつて、無意識にそれにふれていくというのを聞いた。澄枝が原稿用紙の上にえがく夢に、我ながら寝づらい夜をすごした時、その作品は読者うけがよかつたこともある。

「あなたに会ふのがこわい。会つたこともないあなたが僕の淫らな夢の中にまで出てくるようになったのです。怒つて下さい。怒つてもう手紙を下さるのをやめて下さい。僕は夢の中であなたをおかしてしまいました。顔ははつきりわからなかつた。ただ白いも肌燃える様な僕の口づけのあとが、真赤に残つただけ、目覚めてからも一日中、僕の目の前から消えませんでした。失礼な！と怒つて下さい。いつたいこのまゝ会わないで済みますことが出来るのでしょうか……」

耕一の手紙がそこまで進んだ時、澄枝も彼に会つてみたい心を押さえることが出来なかつた。しかし、金うのが恐かつた。逢つて耕一にも失礼させてしまつたら、澄枝は心の灯を失ふことになる。

澄枝が鏡に向う時間が多くなつた。鏡の中の自分に「会つても大丈夫？」

と聞いてみる。夜の鏡は「大丈夫よ」と答えたが、霊間の明るい光線の中で、鏡の顔は「さあ？」と小首をかしげるのだつた。

「春秋のお彼岸には、母と一緒にいろいろなぐの入つたちらしを作つては御近所にくばつたものです。母が死んでから随分長いことそんなこともしませんでしたし、おすしの中に入れるお野菜や卵などを、ぐということさえ関西では通じないのではないのでしょうか？一寸淋しく思えます。久し振りにおいしいちらしを作つてみたくなりました。食べにいらして下さいませ」

澄枝は耕一にそんな手紙を出した。時間も夕食の時間をえらんだのは、電気の光線の下の方がせめて美しく見えるかもしれないという、女らしい心づかいからだつた。

その日一日澄枝は不安と期待の入りまじつた感情で落付かなかつた。小説を書いて、わずかばかりの原稿料をあてに生活している澄枝は、絹の靴下も買えず、ガスの靴下に穴のあいた靴をはいて平気でいる性質の、男の様な気性だつたが、それでも男の人の為に料理をすること、こんなに楽しいものかと思直す思いだつた。にんじんをきざみ、はすをきざみながら、そのコトコトいうまないたの音さえはずんでいる様に思えた。花一つ飾つたことのない部屋には花瓶とてなかつたが、コップに花をさしたりした。

「宮下さん、お客様ですよ」

下宿している階下の主婦によばれて、梯子段をおりる足が浮く様だつた。

「はじめましてお貸しください、まあ、はじめまして、おまねき有難う。遠慮なくやつて来しました」

二階へ通るなりあらたまつて座り直した耕一の思つたより若い顔がまぶしかつた。

「よくいらしてくださいました」

澄枝は微笑しながらわざとくだけて

「私、かたつくろしいこと嫌いな。お酒好き？」

いつそ無遠慮な調子になつた。ぽつぽつとしやべりながら盃を重ねていくうちに、二人の間の妙な氣づまりもやわらかくとけていつて、

「おかしいでしよう？私……。情事なんてよく知りもしないくせにエロ小説書いてるなんて……」

「さあ、どうですかね？」

「知つてゐる様に見えます？」

「とに角女つて嘘つきですね」

「何故？」

「小説を読んで感じるあなたはもつとエネルギー的な人だと思つたけれど、こんなお部屋に、こんな風に清潔そうにしてらして、あんな小説を書くんだから嘘つきですよ。作品が嘘なのか、生活が嘘なのかどつちだかわからないけれど……」

そんなことを耕一は言つたものだつた。けれどそのうちいつか手を握り合つて「さよなら」というようになり唇を合わせるようになり、そしてとうとう

「前言取消し、やつぱり君はエネルギー的な人だ」と耕一が悲鳴をあげ、

「うそ、うそ。その私をこんなにたくたくにするんですもの、あなたの方がよっぽど……」

と、澄枝が言う間がらになつてしまつた。

## 痴話喧嘩

その日もまだ朝寝の床にいる澄枝の布団の上に、どしどしと重みが加つたので目をあけると、背広のまゝで掛布団の上から、耕一が腹這いにのしかかつていた。

「あら！」

と、澄枝が言おうとする唇を澄枝の顔を両手ではさむ様にして、彼は自分の唇でふたをした。

「まだおやすみでしよう？」

と、階下の主婦が告げたのだらうが、寝床へあがつていつてもいゝ客と、主婦も承知しているのだらう。

「駄目よ、まだ顔も洗つてないのに……」

澄枝は唇をかたくして、濡れた接吻をしようとする彼



の唇を、かわいた接吻だけでおしとどめたが、

「いゝよ、一緒に寝れば夜も朝もないじやないか」

「でも……」

「僕が洗つてやる」

「ばかね」

クツクツとのどをならし笑う澄枝の顔を、耕一は掛布

団の裾でつまむようにすると、

「僕のマノン……情夫マノン」は砂でうめたるう？僕の

マノンはふとんで埋めてやる」

「いやアン」

澄枝はもがいたが、布団の上からのしかかられていて

は手も出ない。耕一は澄枝の顔を布団でかこむと、顔中

に接吻の雨をふらした。

「どうしたの？今日は……？」

そんな朝の時間に彼が訪れることはめづらしいことだ

つた。まだ両親と一緒にいるいわば部屋ずみの彼は、宿

直といつて澄枝の家に泊ることはあつても、ふだんは家

から通勤していたのだ。

「急に君に会いたくなつたんだよ」

「でも会社は？」

「今日は官廳まわりで一日外にいてもいゝんだ」

「大変なお役所ね」

「同じことだよ。一定の仕事をきつと片づけるか、だ

らだら一日かかつてやるか、どつちみち半日ですむ仕事

なんだ。君の顔をみて又元気を出してかけつり廻るさ」

「元気が出る？」

澄枝は笑いながら言つた。

「あゝ、出るよ」

「本当？どうだか……。元気がなくなるんじゃない？」

「どうして？」

と、言いながら、澄枝のからかひに気がついたのか、

「うふん」

と、鼻にかゝつた笑い方で、

「そうかもしれない。それは君の心次第さ」

「私の？うそ。あなたのでしょう？ためしてみましようか？」

と澄枝が手をのぼして掛布団の下から、耕一の体にふれ

ると、

「ためさないでも大丈夫。もうちゃんと……」

それでも一寸てれた様に耕一は微笑んだ。

そこまではよかつたのだ。

「とに角、顔を洗つてお茶をわかしてくるわ、そのくら

い待てるでしよう？」

澄枝は起き上つて、寝巻の上から羽織をはおつて、洗

面道具を持つて下へおりていつた。階下に瓦斯はあつた

が澄枝はそれを使わずに七輪で火をおこすことにしてい

る。

顔を洗つて、火をおこして、七輪ごと二階へもつてあ

がつてくると、耕一は寢床の横で新刊の雑誌を見ていた

「つまんないもの読むんじゃないわよ」

軽く声をかけておいて、鏡台に向うと、髪を結い、薄

化粧をすました。そのうちにはお湯も沸く。

「コーヒー？ お茶？」

耕一に聞くのに、彼は雑誌から目をはなさなかつた。

粉末のネスで簡単にコーヒーをいれると、

「召上れ」

声をかけるのに、それでも耕一は顔をあげない。

「何に読んでるの？」

と、聞いてみたが、自分も本を読み出すと興がのれば

人の言っていることが聞えなくなる経験もあるので、耕

一をそのまゝに澄枝も片手でコーヒー茶わんを持ちなが

ら新聞をひらいた。

やつと彼が本を伏せたので、

「コーヒーがさめるわ」

とうながすと、顔をあげた耕一の頬が妙

にかさかさ皮膚がこわばつてみえた。

「どうしたの？」

と聞きながら、伏せた本の表紙を見ると

澄枝の最近の作の載っている雑誌だつた。

「どうしたの？」

重ねて聞くと、

「不愉快なんだ」

はき出す様に耕一が言つた。

「君が君の御主人にされるまゝに身をもだ

えていたかと思ふと不愉快なんだ」

「ばかね。それは小説じやないの、本当と

は違うわ」

「だけど此のモデルは別れた御主人だろ

う？」

「そうよ」

「だつたら、やつぱり君の経験したことを

書いてあるんじゃないか」

「なあに？それ……。やきもち？」

澄枝は軽く笑つてすますつもりで云つた



「やきもちじゃない」  
耕一は強く言い放った。

「じゃあ何なの？」  
「不愉快なんだ」

「それがやきもちよ。やくことないじゃないの、私に夫のあつたのは過去の事実だけど、仕方ないことだわ。でも過去は過去よ、もう別れてしまった人にあなたがやきもちやくなっておかしいわ」

「だからやきもちじゃないって言ってるじゃないか。君の血の中に濁ったものがあるのが不愉快なんだ」

「何が濁っているの？」

澄枝も少し気色ばんだ。

「君は御主人に縛られたり、いじめられたりして嬉しがっていたんじゃないか」

「だから小説だと言ってるじゃないの。私がいつ嬉しがった？」

むしろそれが厭に別れた夫だったのだ。

## 夜の虐待

その頃澄枝は毎日夜のくるのをどんなに恐ろしい思いで待たねばならなかったろう。黒い雲におほわれた様な生活だった。

——夜さえなかつたら！——

いつも澄枝はそう思った。

夫は澄枝を愛してくれただ。夜をのぞけば、仲人口に偽りのない善良な夫だった。

けれど夜になつて、寝る時間がくると、きまつて夫は澄枝を押し倒して、厭がる澄枝を無理やり後手に縛つてしまふのだつた。

「こうしないと僕にはどうしても、お前が僕のものだと思えないのだ」

そう言つて夫は澄枝を抱きあげて、後手に縛つたまゝ、ベッドの上へどしんとおろす。もし澄枝がもがいてあばれれば、ずるずると引きずつてさえ行くのだつた。それから細引でくるくるまきにベッドへしぼりつける。



「さあ、澄枝が僕のものになつた」

言いながら澄枝の姿をなめる様に見て、それから澄枝の寝巻の衿を紐の間からひっぱり出して、片方の乳房を出す。そして乳房をさんざん吸つたりいじつたりしてから又片方の乳房を露わにする。もし澄枝が自由な足でけりつければ、両足を別々にベッドの脚に縛りつけて、無理にズロースを破つてしまつたりもした。そして、

「僕の澄枝、僕の澄枝」

と狂気のように体中に接吻の雨をふらせて愛撫するのだつた。

女体のかなしきには、そうして両手両足が自分の自由にならないみじめな恰好でも、夫の唇がのどにふれ、乳にふれ、だんぐにふれてくると、思はず切ない声をあげてしまふ。

その泥沼の様な夫婦生活を書いた作品は、澄枝にとつて過去の残骸だった。

それなのに……

「今だに君の血がそんな汚れたものに魅せられている証拠なんだ」

と、耕一は言つた。

「さもないけれど今になつて、それを書こうとする意欲が

おこるはずがないじゃないか」

「違うわ。意欲があらうとなかろうと、私はこれで食べているのよ、雑誌によつてはそんなものがうけるんですもの、誇張してだつて書くわ」

「芸術の冒険だと思わないのかい？」

「人間の本当のきいたない、卑いごめきをえぐることで、反対に美しいものへのあこがれをよびますことも出来ると思うわ。でも理屈を云つても仕様がな。私が小説書くこと承知でこうなつてしまつたんじゃないの。私の書くもので不愉快になるならもう会わなければいいじゃないの、いつでも別れてあげるわ」

耕一は出されたコーヒーに口もつけずに

そのまま帰つていつてしまつたのだ。

——やきもち——

澄枝はそうとしか思えない。自分が今、どんなに耕一を愛しているか、彼が一番よく知つてゐる筈だ。それは彼が澄枝を愛してくれているという澄枝の自信が、彼女のうぬぼれではない様に、耕一自身にも澄枝の愛情がわかつていていい筈だと思ふのだつた。

別れた夫をモデルにして書いた小説で耕一との恋が破れてしまふとは思はず、そのつもりで原稿料の中から、別にとつておいたお金まで用意して、耕一のお誕生日をたのしく二人ですごそうと出て来た澄枝だった。

陽が西に廻つたのか、外の明るい光線が、すき通つた様な牙えた色からだんだんに赤味がかつてきたようだった。

此の前不意に耕一が朝の寝床をおそつたのはプログラムにはないことで、今日此処で会おうという約束はその前に出来ていたのだから、あんな中途半端な別れ方も、澄枝はたいして気にしていなかつたのだ。けれど耕一が来ないとなると、急に澄枝の自信はぐらつき出した。

——来ないつもりかしら？——



澄枝は何となく腹立たしいような気持ちになつてきた。それが仕事だと思つて自分の小説で、耕一が自分から離れていくとしたら、耕一という男は何とせまい心を持つてゐるのだろうと腹立たしい様にも思われるし、来ないつもりを彼を一時間近くも待つてゐる自分自身にさえ腹立しくなつてもきた。

澄枝はいらした様に、靴をカタカタとならしてみ

## 偶然のいたづら

ボマードの匂いと煙草の匂いの入りまじつた様な、男独特の匂いがふつと漂つたと思つと、肩をたたかれた。

「待つたわ」

思わずそう言うところだつた。耕一だと思つたのだ。けれど澄枝の肩をたたいたのは、思いがけなく別れた夫の峯村だつた。

「元氣かい？」

なれなれしい口調で峯村は言つた。

「ええ」

澄枝も微笑で答えられたのは、夫の性癖は別として、円満に別れた以上、三年という夫婦生活の記憶は、肉親に会つた位の親しさは残つてゐたからだつた。

「誰か待つてゐるのかい？」

「ええ、でもたしかな約束ではないんです。もう帰えろかしらと思つてゐたところなの」

時計に目をやりながら澄枝は言つた。きつちり一時間待つたことになる。

「お茶でものまないか？」

「のんでもいいけど……」

もし今、夫とつれ立つて此の場所をはなれるとたんに耕一が来たらどうしようかと、澄枝はためらつた。けれど一時間も待つて、まだくるかしらと待ちのぞんでゐる自分の女心が急にわびしく感じられた。

耕一の愛情を信じてゐるからこそ、作品は作品、これを耕一が読んだらどう思うだろうなんてことは一寸も考

えずに書いて来た。それを不愉快がつて、折角たのしみにしてゐたお誕生日までおながれにしてしまふ彼の愛情とは、そんな小つぽけなものだつたのだろう

五年振で会つた夫に今、澄枝は何の感情もおこさないのに、それを根にもつて耕一が怒つてゐるとしたら、いつそ夫とお茶をのみにいつてやろうか。

「おのみになるのならビールでものみましようか？」

澄枝はせめてビールでものんだら、耕一に待ちぼうけをくわされた心のしこりがとけるかと思つた。そしてそ

れは、今日一日の待ちぼうけではなくて、本当に耕一が会わないつもりなら、澄枝はお酒にでも酔わなければならぬ気がした。

澄枝は峯村と肩を並べて阪急の梅田の駅を出ると、小松原の喫茶店街の方へ歩いていつた。

土曜日の夕方の小松原はどこかのもいづばいに混雑してゐた。迷路の様な露地の奥の喫茶店でビールを一本とつて向ひ合つたが、峯村との間にたいして話もなかつたけれど澄枝は現在小説を書いて食べてゐるということ

はしやべらなかつた。

峯村と結婚した当時も、本は好きだつたし、いわゆる文学少女だつたが、自分で小説を書いたことはなかつた別れた当座は一寸した闇屋のさやとりや、洋裁で食べ



ていたのだ。夫をモデルに書いた小説があるなんて、もし峯村が知つたら困ると思つて、ペンネームを使つてゐた。澄枝はよく夫をモデルにした。だから、その事を峯村が知れば、耕一が不愉快がつたことは別の、もつと深い厭な気持ちで怒るのではないかと思われたのだ。

その時入つて来た客が澄枝を見ると、

「あゝ、宮下さん、いゝ所で会つた」

と、近付いた。顔見知りの夕刊新聞の記者だつた。

「あさつて座談会をしたいんですが出てくれませんか、是非宮下さんという部長の名指しなんです、速達出しておきましたがお願ひします」

そういうと、テーマや時間について簡単に説明してか



「何しろ男心を語る」となると、宮下さんに一枚加へてもらわなければ……。ハハハハ、」

愛想笑いをして去つてゆくのを、峯村はげげんそりに見送つて、

「結婚したのかい？」

そう澄枝に聞いた。

「いえ、でも、何故？」

「宮下つて……」

「あゝ、私のペンネーム」

言つてしまつてはつとした。

「いえ、私、よく洋裁やつてたの御存知でしょう？それで時々洋裁の記事書くのにペンネーム使つてますの、私の姓と同じでもつと有名なデザイナーがあるの、私の方がペンネームにかえたんですわ、今西宮にいますよ、だから宮下つて……」

早口にごまかした。洋裁でペンネームを使うなんておかしいことだと言われはしないかと、二重にごまかしてみたのだが、峯村は気がつかない様子で言つた。

「そう？僕も此の頃絵を書いてみてゐるんで、何かいゝ変名つけようと思つてゐるんだよ。ペンネームを考えるつて一寸愉快だね」

澄枝は彼が軽うけてくれたので、ほつとした、そのおせじのつもりで、

「絵をおかきになるの？拝見したいわ」と言ふと、

「じゃこれから行こう、僕のアトリエを見せてあげようどうせ素人のお道楽だけれど、アトリエを作つたんだよ一寸自慢なんだ。行つてみないか？」

どうせ今日は耕一と京都で泊るつもりで出て来たので家へ帰つても用はなかつた。すつかり用事を片付けて、遊ぶつもりで出た家へ、そのまゝ帰るのは、ひとりずまの場合殊更に淋しいものだつた。

「どこなの？」

「武庫川べりでね、まあ来てごらん。君は西宮だらう？そう遠くはないよ」「じゃあ……」

と、再度二人は肩を並べて、梅田の駅へ戻つた。

## 夜のアトリエ

澄枝が構内の洗面所に入つて出てくると、峯村は本の売店の前に立つて、新刊の雑誌をバラバラとめくつていた。

——まづいな——

澄枝は男の様に舌うちしたい気持で近付くと、自分の小説の出ている雑誌をすばやく目でさがして、その上で別の雑誌を開いてみた。

けれど、阪急の売店は雑誌を半々に分けて二ヶ所に並べている。その片方で峯村が開いているのは故意か偶然か澄枝の小説の出ている雑誌だつた。彼は片手でその頁を開いて、目はその上を追いながら、片手をズボンのポケットに入れると、無難作に百円札をひき出して、つり銭をもらふ間も本から目をはなさなかつた。

もともと変つた性癖をもつ彼にとつて、その小説のカットのさし絵からして興味をおぼえさせるものはあつたろう。しかし澄枝の胸は妙なおそれどきどきとなり出した。

何とかして彼にわからない様に帰つてしまふ方法はなにかしらと考へたが、峯村はいかにも自然な形で澄枝の腕を組むようにささえて、止つていた電車へ急いだ。西宮北口行の普通車で、二人は並んで腰をおろせた。

澄枝は電車をおりてしまふ口実はないものかと、いそがしく思いめぐらしたが、お便所は行つてきたばかりだしうまい嘘も出て来ないうちに発車してしまつた。

峯村は雑誌を開いて読み出している。

——わかるだらうか？——

澄枝は不安でたまらなくなつた。

——けれどわかつたとしても、おそれることはないじやないか——

そうも思う。

そのうち電車は武庫庄へついた。

峯村は雑誌をとじると、又澄枝の腕をとつて電車から

おりた。改札口を出て歩き出しても、彼は物も云わなかつた。

——やつぱりわかつてしまつたのだ——

澄枝はだん／＼足がすくんできた。

「遠いの？私、あんまりおそくなるといけないから帰えろうかしら？」

それとなく云つてみた。逃げればどうして逃げるのだと腕をつかむだらう。ただだまつて歩いている峯村を無頼漢よばはりに大きな声で助けをよぶのもおかしいことだ。

「すぐそこだよ」

峯村は言ふと、畠の中の小道を折れた。足元がだんだんに暗くなつていたが、百姓家風の朽ちかけた家の横にそれときわだつて新しい木の肌の、小さな家が建つていた。

その扉をあけて澄枝をさきに中へ入れると、峯村はその戸にガチャンと鍵をかけた。

「ぶつそうなんだよ、此の辺は……」

澄枝のハツとした顔に彼は云つた。

部屋全体が一目で見渡せる建て方で、アトリエ風の高い硝子窓には黒いカーテンがおりていて、峯村のパチンとつけた電燈が妙に不気味だつた。広い板敷の部屋から一段高く六畳位の畳敷の部屋があるつきりで、お勝手らしい流しも部屋のすみについていたが、いかにも男ひとりの仕事場らしい殺風景なつくりであたたかみがなかつた。

「何をぐずぐずしてゐるんだい。靴をぬいであがつたらいゝじやないか」

峯村は急に言葉もそんないに、それでもちらかつていゝものをかたよせて、椅子を二脚向い合わせにおいた。澄枝をうながして、それにかかせると、今買つて来た本を澄枝の前に出して、

「これはお前が書いたんだね」

彼は立つたまゝで言つた。

「いえ」

澄枝は彼のけんまくに思わず否定した。



「宮下さんてよばれていたじやないか？何が洋裁だ。僕だつてこれを読むまではまさかお前が小説を書こうとは思つていなかつたし、お前の言葉をうのみに信じたがこの小説はいかにもお前の書きそうなものだよ、美枝という名だつて、澄枝の『す』をとつて『みえ』としたんだらう？これでも違ふというのか？」

「でも作家が女名前でも女とはきまりませんわ、男の人でわざと女みたいなのペンネームを使う人だつてあるんですもの」

「じゃこれはお前じやないつていうんだね？」

澄枝は返事が出来なかつた。

「あやまれ！」

峯村は大きな声でどなつた。

「済みませんと、あやまれ！」

「何故あやまらなければいけないの？それは小説じやありませんか？」

「あやまらないか？」

峯村は澄枝の手をつかんだ。

「痛い！」

澄枝は悲鳴をあげたが、

「あやまることないじやないの、誰が書いたかわかりもしないものを」

「お前じやないというのか？」

峯村は澄枝の手をねじつた。

「痛い！何するの？乱暴なことしないでよ」

「言わしてやる。お前が書いたんだらう？俺の恥を、三年間つれそつた夫の恥を、お前はここの手であかるみに出したのだ」

「いや！何するの。誰もあなたのことだとわかりやしないじやないの」

「やつぱり書いたんだな」

「痛い！やめて、やめて！」

泣きそりに叫ぶ澄枝の両手を彼は後手にねじあげたが結える紐がなかつた。あたりを見廻わして、紐を目でさがしている。そのまに澄枝はもがいて彼の手からぬけ出そうとしたが、男の強い指は手首にくいこむばかりだつ

た。そのまゝずるずると窓辺までひきずられていった。

峯村は窓のカーテンの紐をひきちぎつた。ばさつと黒いカーテンが下におちて、窓から外が見えたが、あたりに家もないのか、灯もみえなかつた。

「ひどいわ、痛い！」

澄枝が叫ぶのにおかまいなく、峯村はカーテンの紐で澄枝の後手に縛りあげた。

「どうしてこんなことされなければいけないの？あんまりだわ」

「あやまれ！此の雑誌の出版元へ行つて本をみんな回収して焼きすてもらえ」

「そんなこと出来やしないわ、無理よ、そんな……」

「どうしてもあやまれないんだね」

峯村はいきなり澄枝の頬をなぐつた。手は自由をうばわれている、肩でよける様に澄枝は顔をそむけると、峯村は衿をつかんで引きおこして、二度三度とめつた打ちにした。口の中で頬の肉をかんだのか、すっぱい様な血の味が舌のさきににじんで、顔中が腫れた様にがあとと鳴る様だつた。けれどそんなにされれば、よけいに澄枝は素直にあやまれなかつた。

「何を書こうと私の自由じやないの、そんなこといちいちあなたにあやまる必要ないと思うわ」

「まだそんなことを云つてるんだな。よし、どの口でそれを言うんだ」

峯村は澄枝の口をつねつた。

「さあ、云つてみる、生意気な口をきいてみる」

ううつと痛さをこらえるので澄枝は言葉が出なかつた。

「さあ、あやまれ」

「いや！」

「まだいやだというか」

峯村は指の力をまして、澄枝の頬をねじ切る様につねつた。

「ううつ！」

澄枝は呻いた。

「これでもか！これでもか！」

峯村は頬から衿、胸、腕と、ところきらわずつねりま

くつた。

「ああッ！ううつ！」

澄枝は彼の二本指に責めさいなまれて、横倒しに倒れたまゝ荒い息をついた。引きちぎられたブラッスの衿から胸へ、紫色のあとが点々と残つていた。

峯村はそんな澄枝を小気味よさそうに見ていたが、体中の痛みには動けない澄枝をそのまゝにして六疊の部屋へあがつていくと、押入から細引を出してきた。それを手にして近付く峯村に、澄枝は顔をあげた。

「もうかんにんして。こんなにいじめて、まだ何かしやうというの？」

「お前は俺を小説の上ではだかにした。だから俺はお前を今はだかにしてやるのだ。そして、そのみじめな姿を絵にしてやろう」

それから峯村は澄枝のブラッスのボタンをはずしてぬがそうとしたが、手が後手に縛られているので袖がぬけなかつた。彼は卓の上からパレットナイフをとつてきてそれを引きさき、スリッパの紐も切つてしまった。スカートをとり、そして順ぐりに澄枝は一糸まとわぬ裸体にされてしまったのだ。

彼女は抵抗する気力もなく、ぐたつと首をたれてされるままになつていた。裸体の上からもう一度細引をかけて、荷物の様に縛りあげるとモデル台まで引きずつて行き、峯村は澄枝が動けない様に足のさきまで細引でぐるぐるまきにしてしまったのだ。

「顔をあげていろ。誰が見てもお前だとわかる様に書いてやる」

絵の道具をひろげかつた峯村が、急に、

「あつ！」

と言つて窓の外を見た。

「火事だ！」

窓硝子に赤々と焰が光つてみえたのだ。外の闇が急に明るくなつた。

峯村は澄枝をそのままにして、ドアの鍵をあけると外へとび出していった。

その峯村と入れ違いに、影の様にすつと入つて来た男

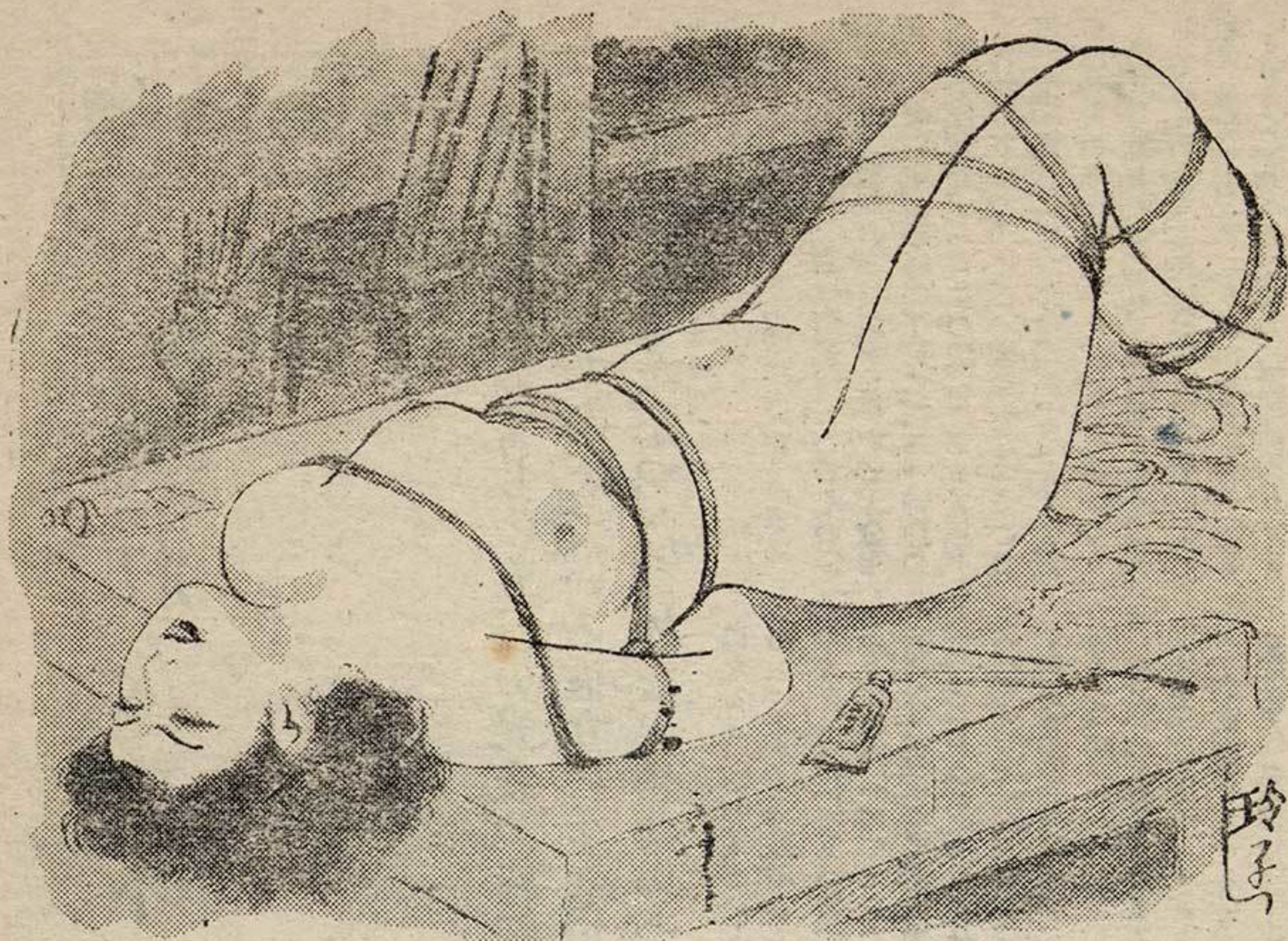


が、澄枝に近付くと、手にもつていたナイフでその足の紐を切った。

「あつ！耕一さん！」

澄枝が言うのにそれには答えず、手早く下半身の紐を切つてほどくと、

「歩けるかい？」



口早やに聞いた。

「ええ」

澄枝は立上った。

「さあ、早く、逃げるんだ」

まだ手は縛つたままに、耕一は自分のスプリングコートを着せかけて、かたわらに丸まつている澄枝のずたずたに切れている服をそのまま片手にかかえこみ片手で澄枝をかばう様にして、あけたままのドアから、転る様に外へとび出した。

「早く、早く！」

そのまま二人は馳けた。島の中をかけぬけると、武庫川の流れがきらきら光っていた。

「もう少し」

そう言うとき耕一は一層足を早めて、澄枝を武庫川べりの松の木かげへかかえこむ様につれこんだ。

やつと澄枝は手のいましめを自由にされ、

「耕一さん」

彼の胸にすがりついた。

「ほか、ほか」

わけもなく涙がにじんだ。

「スカートをはいて、僕のコートを着たまえ」

言われて急に自分のおかしな恰好に気がついた。耕一のかかえて来てくれた服をまきつける様に体につけ、スカートをはいて耕一のコートに手を通したが、足はあり合わせた台所下駄の様なものをはいている。しかしそんなことよりも、

「何故……？」

耕一が来てくれたのか聞こうとするのを皆まて云わせず、

「もう別れた御主人の事は書くんじやないよ」

耕一は笑った。

「見てたの？」

「どうやつて救い出したらいいかと困つたよ、警官をよんできたなら君が困るだろうし、中へは

入れないし……。今日はね、出がけに僕の課のものが急に脳貧血おこして倒れちやつたんだよ、たいしたことじやなかつたんだが、いにく他に人がいなくてね、女ばかりだつたんでつかまつちやつたんだよ、それから大急ぎで梅田へ来てみたら、君が本屋の前に立っていたら、声をかけようと思つたら連れがあるじやないか。とうとうここまでついて来ちやつたんだよ。又やきもちついていいかい？ でもやきもちのおかげで君を助け出せたんだよ」

「よかつたわ、本当に……。でも火事大丈夫なの？」

「ああ、あれはね、積んであつたわらたばに火をつけてきたんだ。風はないし、すぐ消えるよ、けれど案外火つけてつてむづかしいもんだね、ぼろと燃え上つてくれた時は嬉しかつたよ」

「軽犯罪にならないかしら？」

「君の御主人をあわてさせただけさ。すぐ消えるよ、怪火も燃えるかもしれないよ、あのでいたらくでは……」

澄枝は恥しそりに顔を伏せた。その耳もとへ、耕一はささやく様に云つたものだつた。

「ねえ、もう小説なんか書くのおよしよ」

「やめてどうするの？」

「結婚しようよ、ちやんと」

耕一は澄枝を抱きしめた。

「痛い！」

思わず澄枝は声をあげた。峯村に責められたあとが耕一の腕でしめられて痛かつたのだ。

「ごめん、僕は……」

耕一があわてて手をはなすのを、

「いいの、痛いぐらいいいの。抱いて……」

そう言うとき、自分から耕一の胸にしっかりとだきついて彼の唇を待つ様に顔をあげたのだつた。

(終)



## 汚されたマネキン人形

愛 山 久

森 あ き ら ・ 画

ねつとりと惱ましい五月の深夜、洋裁學校へ忍びこんだ混血兒の泥棒は、切ない慕情を寄せている彼女に生き寫しのマネキン人形を見つけた……何一つ盗まなかつた奇妙な泥棒はいつたい何をしたのであろうか

去年の秋から、加代が通っているその洋裁學校は、神戸の三宮駅から歩いて十分もかゝらない中山手通二丁目に在る。神戸の人たちは昔ながらにこの坂道をトローロードと呼んでいる。ひどい戦災にあつてこの辺一帯は丸焼けになつたのだが、もとゝ富裕な外人の多い街だから、復興も早かつた。洋裁學校といつても、別に闊々しく文部省公認とか何とかの看板は出してない。加代たち二十人あまりのお嬢さんが、勝手にそう呼んでいるだけで、教授格のマダムだつて、

「あら、私を先生なんて呼びないでちょうだい、マダムでたくさんだわ」と、中年の洗練された美しい眼をいたずらそうにばちばちさせる。別にみつちい授業料なんか欲しいのではない。形だけは授業料の名で毎月千円納めるけれど、三時になると、いつもおいしいお茶とお菓子が出る。十九才で結婚してすぐ、フランス人の夫と一緒にパリへ行つて、終戦後十八年ぶりに神戸へ帰つてきたマダムだけに、お茶の入れ方だつて素人ではないし、お菓子だつて、ずつとモロゾフの物を愛用しているのである。週三回、一月に十二回として千円の授業料ではお菓子代にも足りるはずはない。

「学校？、とんでもない、私も、マダムも、あなた方、日本のお嬢さんが好き、みんな楽しいサロンつくりたい、それだけわかりますか、この気持ち」

ときどき二階へ上つてきて、三時のお茶と一緒に飲みダリル氏は、マダムと顔を見合せて、うれしそうにわらう。ダリル氏の言葉でいうサロン、加代たちがいう教室は実にあかるい。大体はお茶のあとのダンスに使う目的だつたらしく、床は鏡のように滑らかな堅いラワン材を惜しげなく敷きつめてあるし、豪華なビクトロラも隅に据えてある。広さは五十坪あまりもあるが、正面だけを壁にして、三方は、広い窓をと

つてある。その中央に共用の大きな仕事台窓辺には、シンガミシンが十台あまり配置されている。

そこまではいいとして、加代がはじめこの洋裁學校へ入つたとき、はつと立ちすくんだのは、正面の壁の前に、五人ほどの美しい外人の娘が全裸体で、それゝのポーズをとつて微笑していることであつた。燃えるような金髪、海のような碧い眼、大理石のような肌、すつきりと成長した四肢豊かな乳房をそなえた広い胸……、日本人娘のには見られないビーナスのような美しいモード。

それが精巧なマネキン人形であるとわかつてからも、加代の胸の動悸はしばらく納まらなかつた。

良くみると五つのマネキン人形の身体の寸法は少しずつ異つていたフランスの女体は、アメリカやロシアやドイツの女体に比べて、一まわりほど小柄なのであろうか、巻尺で計つてみると、日本人の女である加代たちの丈や胸囲や腰囲や股下の寸法と、五分とはちがつていなかつた。

デザインがすみ、布地に鉄を入れ、仮縫をしてみると、加代たちは、自分の身体の寸法とそっくり合ふマネキン人形をえらんで着せてみるのである。着せるのに便利にように、人形の首や手足は付根から自由に外せるようになっていた。

人形は見かけは実に精巧で、外した首や手足を仕事台にのせ、胴体に仮縫のピンをとめながら、ふとふりかえると、まるで、手術台の上に、切り離された美しい外人の女の首や腕や足が転がっているような無気味な錯覚を起すことさえたびゝあつた。それも、仕事台の上に散らばるのが、真赤



なビロードやサテンであつたりすると、首や手足の切口から流れ出た鮮血がなめらかに固まつているような妖しい恐怖がさつと加代の背を走つた。しかも、その人形の体の寸法は加代の体の寸法とそっくりそのまゝなのである。

まるで、自分の首や手足が切り離されて血潮の中に転つていような夢にうなされて、加代は、なれるまでは、よく寝床の中でびつしより冷汗をかいて眼をさましたものである。

「これはふつりの人形じやありませんのよ主人と私の一番愛している娘たちですわ、あちらの腕利きのメーカーが、私たちの離しい注文通りに作ってくれました……、みんな名前がついていますわ、あなたのお体とそっくりなのが、アンヌですのよ、モンマルトルに住んでいた美しいお嬢さんをモデルにしましたわ」

「そう、マダムという通りです、あなたがアンヌそっくりなのは、私、ほんとにうれしい」マダムとダリル氏が、交る々々説明しながら、眼を細くして、マネキン人形をながめる様子に、加代はぼつと頬を赤くした。

「日本では顔で美人をきめるのに、外国では体全部で美人をきめるのかしら……？」代表的なパリジエンヌ五人を選びぬいてモデルにしたというマネキン人形の一つに自分の体がびつたり合うというよろこびと誇らしさを、加代は押さえきれなかつた。

二  
土曜日の夕方の映画館は、芋を洗うような混雑であつた。加代が洋裁学校からの帰りに、仲良しの友達のマネキンと一緒に、マダムからもらつた優待券で見に行つたのは、

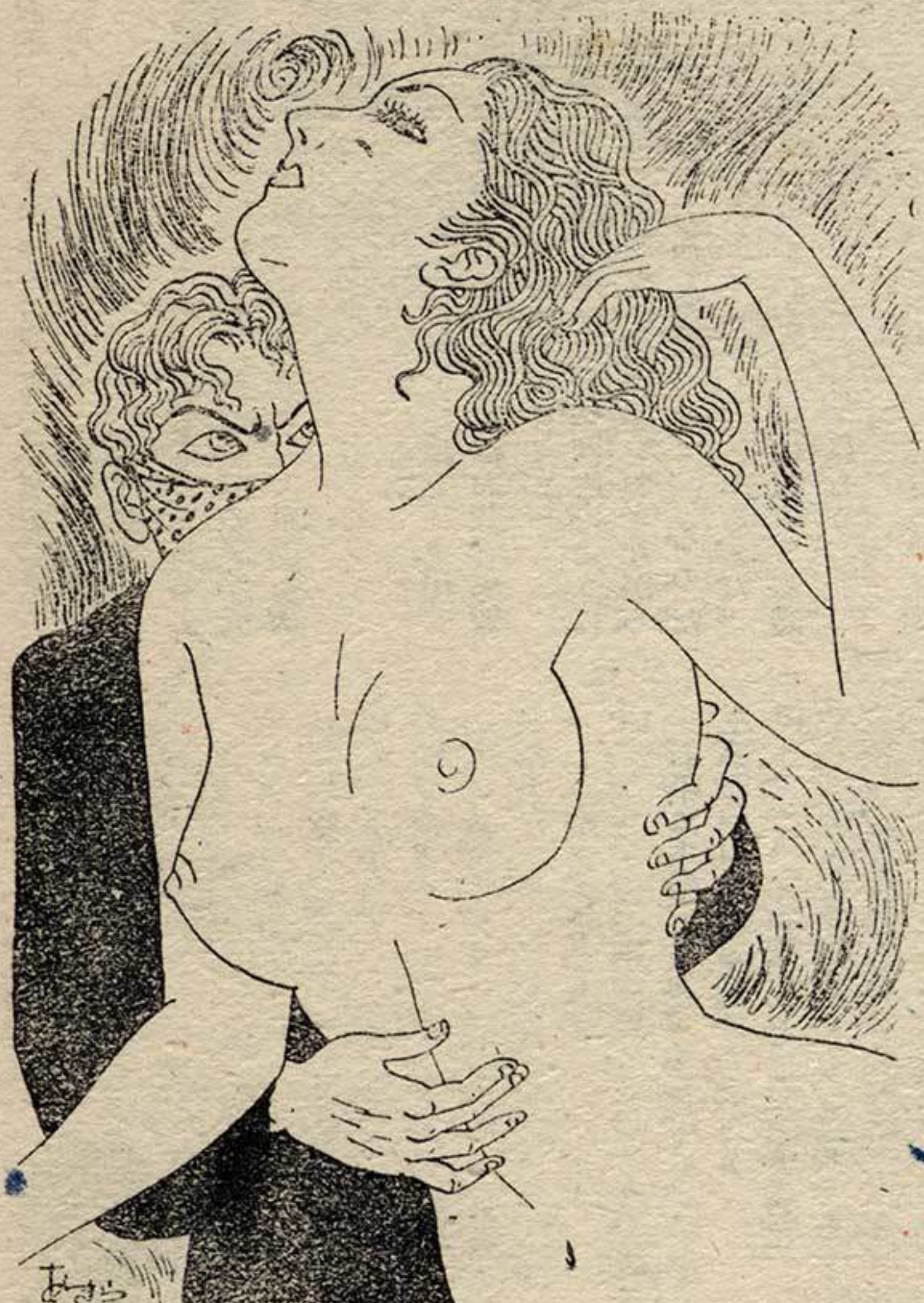
三宮ガード下の外国映画であつた。五月も終りの、むつと汗ばむような夕方のことである。

「え、すばらしいラブロマンスの映画なんですつて、この間の情婦マノンや密会よりもつと凄いらしいのよ」

弓子がむやみに昂奮して、しやべりつづけるのをあましながら、加代が映画館へ入つたときは、もう夜の部が始まつていた。ぎつしり詰つた観客の後からは、いくらか爪先き立ちをして見ても、スクリーンは全然見えなかつた。

「だめよ、お淑やかに控えていちや」弓子は活潑に、加代の腕をつかむと、ぐんぐんと人波の中を掻きわけて前へ出始めた。

「どう、これで見える？」



「え」

人いきれの蒸し暑さに、加代の額にはじつとりと汗が滲み出ていた。

噂の通り、それはすばらしい恋愛映画であつた。放浪の旅をつづける美貌の人妻と逞ましい海賊の男との、疼くような情痴が綿々と描かれてゆくのだつた。いくたびかの火のような接吻と抱擁。地中海の無人島で繰りひろげられてゆく破倫の恋はスクリーンから生々しい肉の臭いさえ発散させてくるような気がした。加代はいつしか恍惚と我を忘れていた。幸か不幸か、厳格な家庭に育てられ加代はまだ一人の男友達も持つていなかった。だが、十九才の加代の心は、肉体がまだ純潔のまゝであるとはいへ、恐怖におののきながら、ひそかに誘惑されることを待ち受けていると言つてまち

がなくなつた。

そのときである。

加代は、びつたり背後からよりそつていける背の高い男が、顔だけはスクリーンに向けながら、まわりの誰にも気づかれないように、しずかに、ゆるやかに、加代の背中に、とどきき手をふれていることに気がついた。身動き出来ない混雑の中のことである。加代はまだ若いらしいその男が、自分と同じように、すつかり映画に酔つて我を忘れていたのだと思つた。

いゝ音楽に聞き惚れているときには、誰でも、いつか、夢中で、手を動かし、足ぶみして、リズムに合合しているものである。映画に陶醉しているときも同じことだ。加代はくすぐつたさを我慢した。

だが、どうも無意識にしては、男の手の運びは妙であつた。女の官能を刺激する微妙なこつを充分心得ていて、わざと映画に酔つていようように装おつていようである。それは男の手が、次第に背中から下へ下へ降つてきたときに、はつと思ひあたつた。

なめるように、楽しむように、男のなまあたゝかい手は、毛虫に這われるような戦慄とともに、加代の横腹から腰のまわりに降りてきた。

「弓ちゃん……出ましよう、気分がわるいの、私」

必死に三四人前の友達の前をつかんだ。

「どうなすつたの、あら、人いきれで逆上したんでしよう、顔が真赤だわ」

やつと人ごみを潜りぬけて、待合所へ逃げ出すと、加代はぐつたりと長椅子にもたれた。

「仁丹ならあるわ」



「ありがと、せつかく映画のクライマックスなのにすみせんわ」

五六粒の仁丹を舌の上で転がしながら、加代は、弓子の顔をまともに見られなかつた。いくら親しい仲でも、実際の事は話すわけには行かなかつた。よく新聞に出る映画館内の痴漢とはあゝした誘惑手段を取るのだから。あの方法ぐらい女にとつて手痛い致命的なものはない。どんなに理性が勝っている女でもあゝした直接的な攻撃をされれば、自分から火を噴いて燃える。つまり、男の胸にみすみす飛びこんで身をもち崩すのも、これが発端である。加代は間一髪で危険を免がれたことを知ると同時に、恐怖が一度にこみあげてきた。

「私なんだか頭痛がするわ」

「……惜しいけれど、今夜は帰りましたよ」

加代と弓子が待合所から出てゆくのを、同じ長椅子の端で、チューインガムをかんでいた若い男が、寂しそりに見送つていた。黒い頭髮のくせに、皮膚は外人のように白く、高い鼻と引きしまつた唇。たしかに混血児らしくかつた服装も瀟灑なニュースタイル、一分の隙もなかつたが、どこかに荒んだ不良青年らしい様子がたゞよつていた。

「おい、ジョージ、魚を逃がしたらしいな」

その肩をぽんと叩いたのは、一眼で私服刑事と判る眼つきの鋭い男だつた。

「ふんあつしはなにもしやしませんぞ、旦那」

不貞腐れて、ぶつとガムを床に吐きつけるのへ、おつかぶせて、

「わしの眼が狂つとりや幸いだがね、おい

お前の奥の手のエンコズケも大分鈍つたらしいな、あはは」

「……」

「くやしそうなツラをするところを見ると的中だろう、とにかく、この黒崎の眼が光つとる三宮界限で、じたばたして世話を焼かすと承知せんぞ」

「だつて、旦那」

「言訳は要らん、今の娘に二度と手を出せんことは覚悟しておけ、今夜はお前の失敗に免じて眼をつぶつといてやるが」

他人が見れば仲のいい友達同志のように黒崎刑事はジョージの肩に手をおきながら低く、しかも力強く叱りつけているのだ。ジョージの全身がびくつとふるえた。伏せた睫毛に涙が滲んだ。加代に対する感情は決して単なる誘惑だけではなかつた。

### 三

「あなた」

「うむ、なんだね、マダム」

揺りおこされたダリル氏は、ダブルベッドの枕許のスタンドランプのスイッチを入れると、マダムの顔をのぞきこんだ。

「変な足音が二階でしますわ」

「ふむ」

たしかに二階を誰かが歩いているのである。午前二時をやゝまわつてゐる時計の針を見ながら、ダリル氏とマダムは、全身を耳にして、じつと二階の足音を聞き澄ましていた。

「電話かけなさい、マダム、低い声で、気づかれないように」

「はい」

自動電話のダイヤルをマダムがまわしはじめると、ダリル氏は、パヂヤマのまゝでベッドから降りると、洋服ダ

ンスの抽斗をしずかに探つた。

「大丈夫ですか？」

「あなた」

「しーっ、安心なさ

い」

右手に小型のコルト拳銃、左手に懐中電燈を握つたダリル氏は、につこり笑うと、足音を忍ばせて二階への裏階段を上つて行つた。

ふるえる指先でマダムがまわすダイヤル警察がすぐに三名の武装警官をのせたサイドカーを急派してくれると聞いたマダムは、やがて二階で起きる大格闘を想像して立つても居てもいられなかつた。だが、ブスツ、ブスツと押し殺すように低いピストル二発の音と、ばた／＼と誰かが走る足音、それからガチャンと鋭く硝子窓のこわれる音が一瞬の間に起きたあとの二階は、またシーンと静まつた。

警察のサイドカーが眩しい前照燈を輝かせて殺到してきた。ばた／＼と三人の警官が走りまわつてゐる。

「マダム、泥棒はつかまつた、ピストルで足を射つたから走れなかつた」

店の扉を現場検証のために入つてくる警官たちのために開きながら、ダリル氏の叫ぶ声がうれしそりに響いてきた。

マダムは手早くパジャマの上に雨外套を

羽織ると、鏡台に向つた。女の寝乱れ顔を、たとえ警官でも紳士の前にさらすべきではなかつた。

「奥様ですか、真夜中に御心配だつたでしょう」

かちんと半長襦の踵を合せて、マダムの挨拶に答えてから、若い逞ましい警官は、健康な歯並びをみせて微笑した。

「泥棒はこの男です、ジョージと言いまして、かね／＼警察に世話をかけていた不良青年ですが、お宅の品物は何一つ盗まな







さい、たとえば宝石とか指輪とか、小さく  
て高価なものがなくなつてはいませんか」  
マダムは使いたれた洋装学校の一室をく  
るりと見渡した。もとより宝石や指輪など  
はおいてあるはずはないし、十台あるミシ  
ンにしても、ビクトロラ電蓄にしても、男  
一人が窓幇子を破つて軽く運び出せるもの  
ではない。泥棒は隣の中華料理店の屋

根すたいに、この二階の硝子窓を

破つて侵入したゞけで盗むも

のを物色中に、ダリル氏の

懐中電燈に照し出され

あわてゝ、椅子をふ

りあげて抵抗す

るところを、

ピストル

で足を

射たれたのである。びつこを曳いて硝子窓  
から逃げ出そうとしたとたんに、警察のサ  
イドカーが到着したのだからぐうもすうも  
なかつたらしい。

「御苦勞様でした、…幸い、なにも盗られ  
ておりません」

「被害がなくて何よりでした…では、こ  
れで」

さら／＼と走らせていた鉛筆を手帳に挟  
むと、警官はふたゝび拳手の礼をした。

マダムの視線は、二人の警官に両腕をつ  
かまれ、手首につめたい錠のかゝつてい

混血児の泥棒に向いていた。右の足首近く  
ピストルに射たれた傷から流れる一筋の血

が、白いズック靴を染めていた。

マダムは黙つて、仕事台の上に散らばる  
婦人服地の切れ端をつかむと、ジョージの

足許に蹲んだ。ズック靴の少し上、ぶくぶ  
く吹き出す血泡を試いてから、マダムはき

り／＼と血止めの繃帯を施した。ダリル氏  
も、三人の警官も、黙つてじつと見守つ

ている。乱れた髪の毛、うなだれ  
ていたジョージも、黙つて、マダ

ムのなすがまゝに任せている。

「この人を許してあげるわ  
けには行かないでしよ

うか…？」

哀願するよう  
なマダムに

「それ…  
は、一

物も盗らなくてもやはり強盗は強盗ですか  
ら」

「刑務所へ入るのですね、この若い青年が」  
ダリル氏も悄然と言葉をついだ。

「御好意は上司に十分お伝えします…しか  
し、この男には婦女誘拐の余罪容疑もたく

さんありますから」

「やはり、そうですか」

警官達がジョージを引き立てゝ、サイド  
カーで去つてしまつたあと、ダリル氏は、

戸外に集つてさわいでいる近所の人達に、  
何か町噂に説明していた。

一さわぎが終つて静かになると、もう短  
い夏の夜明けが白々とせまつていた。

「あはゝ、すつかり寝そびれたねえ、マダ  
ム、熱いコーヒーでも沸かそうかな、少し

早い、ついでにビスケットかなにかで朝  
食としよう」

「はい、用意してまいりますわ」  
台所へ行きかけると、ためらいながら、

「マダム、ちよつとお話がある」

「なんでございますの？」

「あなたは気がつかなくなつたらしいね、一  
番たいせつな私達の宝が今の泥棒に盗まれ

てしまつたことを」

「あら、だつて二階にはなにも」  
ダリル氏は、いぶかしそうなマダムの顔

を、困惑しきつた表情で見つめながらなぜ  
か口ごもつた。

「言いくいこととす、かりにも、紳士と淑  
女の舌に乗せるべきことではないのだが」  
マダムは、はつとして、ダリル氏の眼を  
のぞきこんだ。  
「そのことなら、私もすぐに気がついてい  
ましたの、でも、あなたにまさか」  
「マダムは五人の娘達のママ、私はパパ、

自分の最愛の娘の一人に異常があつたこと  
をどうして直感せずすみませうか」

「アンヌのことですわね」

「そう…、あの男はアンヌを汚してしまし  
た、その証拠を見つけると、私はすぐ気づ  
かれないように拭いてしまつたのだが」

「私も二階へ参りまして、すぐ、アンヌの  
身体に残つてゐるシミを発見しました、男

性のあなたがお気づきにならなくても、女  
の私にはすぐ判りますわ」

「可哀そうなアンヌ…、パリで雇つた職人  
の一人でやつぱり今の男のよりに、私達の

娘を汚した男がありましたねえ」

「ロベールのことでしょうか？でもねえ、あ  
なた、若いロベールは私達の娘を汚したあ

と、下宿で自殺しましたわ…、あの青年  
も、私達の娘をつくりの、本当の人間の娘

に失恋してゐたのでしたわ」

「そう、私達の娘は生きたパリジエンヌを  
モデルにして、五つの女の標準の体を作つ

たのだから、人間のどの娘を愛しても、必  
らず、私達の娘のどれかにあてはまります

ね…、そうすると、いま捕つたジョージも」

「あなた…、ジョージはきつと誰かを愛し  
てゐるのです、その恋が遂げられなかつた

ためにアンヌを汚したのですわ」

ダリル氏は眼を閉じると、胸の前に指で  
十字を切つた。マダムも膝の上に手を合し

た。

「マダム、判りました、あなたが、ジョー  
ジの傷に繃帯をしてやつた理由が」  
マダムは微笑して答えなかつた。次第に  
海の方から白んでくる五月のトーアロード  
の夜明けのことである…、向いのカトリッ  
ク教会は、朝の礼拝の鐘を鳴らしはじめて  
いた。



熱球に狂う

# 女学生の性典

女子プロ野球秘聞

青空に飛ぶ白  
いボールに乙  
女の夢を秘め  
て、華々しく  
幕を切つて落  
された女子プ  
ロ野球の裏に  
は、女と女の  
激しい性の葛  
藤が渦を巻い  
ていた

早乙女晃

TOSHIYOKI 絵

## 一 紅白試合

カーン。……

小気味のよい打球の音が、青草のグラウンドに爽やかに響いて、外野の蒼穹高く、白い球が弧を描いて飛んだ。

——九回の裏。五対五の対得点で、熱戦相伯仲したフェニックスの紅白試合は、春の準備運動を終ったばかりの、如何にも女子プロ野球らしい潑刺さと、生新たな闘志が漲っていた。

守備の白軍は、二死でやゝリード。名捕手と謳われた勝気な榎江は、走者を一壘に走らせて、一寸残念そうに下唇を噛んで、汗の滲んだ面の中から、投手に何かサインを送った。

四番の打者が紅軍きつての強打者。あと一押しの際戦だけに、榎江としても気が気ではなく、バッターボックスに、打撃の姿勢を構えた、肉づきのよい由利の背後から「飛ぶよ!」と、外野に合図をした。それに呼応して、右翼手も中堅手も左翼手も、素早く守備位置をバックして、皆、一斉にグローブを挙げた。打たれても、守備には自信のある彼女達は、ピンク色の艶やかなユニフォーム姿を堅固な布陣に敷いて、投手のモーションを見守った。一瞬由利の全身に燃え立つばかりの闘魂が閃めいた。

第一球! プレート真ん中から、外角へ曲る鋭い曲球! が、由利は悠々と選球して軽く見送った。ワン・ストライク!

第二球目! 大きくワインドアップした投手の狙いは、発矢とばかり、打者の胸許を衝く速球! 其の刹那! 由利の打棒



は渾身の力を揮つた。打つた！ 見事なライナー性の飛球である。走者が走つた！一壘から二壘へ、そして三壘を目掛けて――

わーッ、と、喚声が挙つた。清美ははッとなつて、左翼に放たれた飛球の方向に、懸命となつてバックした。夢中で走つた。是非でも捕らねばならぬ大切な球である。其の球が、清美が走つて、此処とばかりクルリと振り返つて跳躍したグロウヴの中に音をたてて掴まれた。が、そう見えたのは、遠い視野の観覧席からの事であつて、握力を僅かにそれた球の勢いは、あッという程の呆ッ気なさで、ポロリと鋭に滑り落さた。

再び喚声がどつと挙つた。狼狽した清美は、嘲笑のどよめきにカーッと頬を紅潮させて、球を拾うて三壘に投球した。けれど其の球は、試合終了を宣告する、取りかえしのつかない大きな失策となつてしまつた暴投である！ 球は三壘手の頭上を高く飛んでいつた。

「あ！……」  
清美は勿論のこと、白軍の選手達は球を眼で追つて、呆然と戦意を喪つて佇んだ。

## 二 グラウンドの密語

試合の終つたグラウンドには、まだ陽炎が弱いながらも午後の陽射しに燃えさかつていた。

最終回の裏を飾る、最善を尽しての敢闘だけに、観衆を踏んで、ベンチとネット裏に引揚げる、両軍選手達の桃色の頬は、ほとぼりの覚めぬ攻防戦の汗と共に、熱した処

女の香わしい体臭が、ぷーんと四辺に咽せかえつていた。

凱歌を挙げた紅軍に比べて、やや意気消沈の白軍の選手達は、ネット裏の叢の上に三々五々の憩いの脚を投げ出して居たが、紅軍側のベンチから、主将の由利が清美を呼んで、人気の無いグラウンドの隅に歩み寄ると、両軍の選手の好奇に満ちた眼が、言い合せたように、二人の密語の姿に注がれた。

「ふん……矢ッ張り噂ばかりやあらへんわあの通り、由利と清美はできてるやないの……」

吐き出すような侮蔑の声音で、反感をその儘露骨にあらわして、胸に着けたプロテクタアを、荒々しく足許に投げ降ろした榎江は、低い小鼻を憎悪に歪めて、チエッ！と男の子のように舌打をした。

二人に、聞えがしの毒舌である。

「皆んな何う思うの？ 苟しくもチームの指導者としての主将が、自ら団体生活の秩序を紊すような、いかかわしい行動を執つてもええのやろか……」

亢奮して口穢く由利を罵る榎江の態度に皆んな軀をつつき合つて、含み笑いを殺して居た。榎江は更に続けた。

「本塁打を打つだけが主将の資格やつたら何もチームの統御者なんかいれへんわ。主将は飽迄率先垂範して、人格共に皆んなから尊敬せられてこそ、始めて其処にチームの質的向上と云ふものがある訳よ。其の責任重大な主将の立場にある者が、いやらしい！ 女同志にモーションをかけたたりして……同性愛なんて綺麗に聞えるけど、あんなのが本当に変態性やわ！」

と、榎江は、さも忌々しそりに顎をしやくつた。

其の舌鋒の、矢表に立たされた由利は、榎江より数カ月遅れて採用された、後輩であつた。

容貌は兎に角、技倆の上では、到底自分に太刀打は出来まいと、多寡をくくつていた後進者の由利は、めき／＼と優秀なプレイヤーを見せるばかりか、何日の間にか、チームの人望を一身にあつめて、首位の主将に迄榮達した。おさまらないのは榎江である後輩に、拔擢の功名を樹てられた不満を殊更由利の卑劣な術策と喋り廻つた。

「女は美人に生れると、何に彼につけて得をするわ。由利が一番ええ手本や。色眼をつかると、すぐに監督さんに主将にして貰えるし……」

其の点、妄なんかあかんわと、眞しやかに由利を誹謗する傍ら、がっかりと装うて暗に主将の昇進に翻る、情実の追及を煽るように言ふ。そのみか、由利と清美がチームの朋輩達から、鋭い監視で見守られるようになった動機は、元はと言えば榎江の宣伝からである。

然し当の榎江は、其の饒舌を裏付けるかのような、今日のグラウンドの偶然な密語に内心勝誇つて北更笑んで居た。これで、主将としての由利に対する皆んなの信頼感がすつかり失墜するものと、吐では、日頃の溜飲を下げていた。

「あんなふしだらな選手が一人でも居ると皆んな迷惑をするわ。そうでなくても女子プロは色眼鏡で観られがちやのに。肉体選手一人の為に、たつた今、フェニックスには処女は居ないと、スタジアムに出たら彌

次が飛ぶやろ」

榎江は野卑な薄笑いを泛べた。そんないけずは今に始つた事ではないが、チームでも最古参で、然もリーダー格の彼女には、誰も反撥して来る者もない。

## 三 同性愛の選手

榎江は、由利と何か顔き合つて別れて来る清美を途中で待ち構えて、其の儘に座らせた。

「清美ちゃん。あんな此の頃何かあるのんと違う？」

鯨から棒に詰問されて、清美は、虚を衝かれた愕きをあり／＼と面にあらわした。口喧しい先輩の彼女が呼び止める以上は、てつきり守備の不出際をなじられるものと観念の腹で居た矢先、意外にも話題の核心は、清美の秘密に触れられたのである。

「野球の選手が不振になると、其の裏には必ず醜聞があると謂うけど、あんなのよりに、将来を期待された新人が、若し万一そんな事があつたとしたら、今のうちによう反省した方がええと思ふわ」

静かに、濁水の底を見透すような薄気味悪い訊方である。

「……………」

「チームでは専ら、由利と清美が同性愛とえらい評判よ。相手が男なら兎に角も、女同志で、そんな莫迦なことがあるやろか……妾は信じたらないやけど。――」

「……………」  
清美は黙つて、膝許の草を千切つて捨てた。

男を対象とする恋愛のかたちは識ていたが、自分のように、ただ単なる好感から発



した、由利との深い交際を、何故、同性愛と看做すのだろうか……？黒い制服を脱ぎ捨てて、ようやく乳房がふくらんだばかりの、おぼこい十八歳の清美は、其の限界に苦しむのだつた。

愁いの利いた美しい貌を俯向けて、清美は、撈り取つた青い草の穂を、ブルー色のストッキングの上に、虚ろにバラバラと掌から撒いた。

ふと、横江の強い視線を、頬に感じて貌を上げた。横江がにじり寄つて来た。それは丁度、男が女に言寄ろうとする、あの熱情の素振りと同じだつた。瞬間、清美はハツとなつて身を固くし乍ら、何日か由利が求めた事と同じような恥かしい仕草を、俄かに挑めるのではないかと予感して、ドキドキと胸の奥が血の音をたてた。

「清美ちゃん。本当のことを言うて……あんた由利が好きなんと言う？」

「……………」

突然、横江に掌を握りしめられた。球歴の長い女捕手の掌は、固い指だが、出来ていて、其の固い触感が、清美の軀に異性に満たされたような狼狽をつたえた。

「……あんたが、好きやつたら仕方ないけど……妾、由利なんか遣りやうない。あんな厭らしい変態性より、もつともつと清美を愛しとる、眞剣な女が他にあるんよ……あんたにはそれは判らへんけど、時機が来たら、其の中に判るわ……」

掻き口説ように言う、横江の眼差しは、恋情を訴える、男の炎と似通つていた。

それ程、彼女の線は逞しく、又精悍そのもので、何処にも、女性らしい優美な容姿は認められなかつた。いや、噂に聴けば、

横江は未だに月経も無く、そうした生殖器の、機能の衰微が原因で、生涯結婚も覚付かない、所謂、半ば男性的な、畸形體質の中性であるという。

清美は、握られた手触りのいかつさより一度も口紅を塗たことのない、肉の厚い、横江の唇許を眺めて居る中に、ぶるぶると、悪感のあまり身顫いをした。

居堪らなくなつて、膝の上の横江の掌を極り悪るそうにおずくめと解いて、

「誤解しないで……わたし、絶対に由利さんとは何んでもないんです」

清美は強く弁解し乍ら、其の言葉尻に、うしろめいた記憶の影に怯えて居た。

「ほんと？ まさか、一時の言遁れやないんやろね。それやつたら改めて訊くけど、さつき由利と何話したの？」

「……………」

「何んでもないんやつたら、二人でこそそこそと、内緒ごとなんかせん方がええわ。噂が余計に拡がるばかりやないの——」

横江は、嫌味たつぷりと皮肉を言つて、清美の肌を沁み込んだ、由利の体臭を嗅ぎ付けるように、賢い眸を光らせた。

「——すみません。これからは氣を付けます」

清美は、問い詰められた苦しさのあまり素直に出るより仕方がなかつた。詫び乍ら頭の中では、さつき由利と約束した、今夜の行動が看破れるような氣がして、自分だけに叱つたことのない、横江の態度が薄気味悪くなつてきた。

## 四 人身御供

「叔母さん、お先に……」

由利は風呂から上ると、みだれ籠の、派手な藍しぼりの浴衣を、小脇に抱えて、シユミーズ一枚の露わな恰好で、レコードの聴える、調理場の方へ声を掛けた。

特需景氣で活況を呈した、北浜街の小さなグリルは、株取引の商談の客で、かなり混んでゐるらしく、叔母の返事は、電気蓄音機の声で聴き取れなかつた。多分忙しいのだろうと思つて、其の儘、由利が階段を

## 實話コント

## 淫賣婦 足立武男

ユミと別れて間なしだつた。

何時側へ寄つて来たのかわからなかつた。

ぽんと軽く肩をたたくかれ、(きたな)と振り返つたマサの眼に、五十位の男が立つていた。

田舎くさい感じのする男だつた。マサは一寸期待はずれの感だつた。が、より好みの許されないうきびしい昨今、こんなのも、あればよしとしなければならぬのである。

話は定まつた。案に違はずショート・タイムである。もう少し待つておれば、もつといふかもあるような氣がしたが、その逆もあるのだから、マサ自身に云い聞かせ、男の腕にすうつと腕をからませた。

マサが男を連れて宿に帰つてくると、オバさんは、

「早かつたネ」と目顔で喜んでくれた。

上りかけると、

「由利ちゃん、菅沢はんが来てはるえ」と、叔母がふりかへつた。

若い時、祇園で左様をとつて居た叔母は未だに京訛りが抜けきらなかつた。

旦那と縁が切れて以来、かなりの臍癆と手切金を資本に、自立の水商売に還つたものの、根が芸者あがりの抜目の無い叔母は両親を喪つた美貌の姪に、はやくも金蔓の

「おかげで——」

と、マサは眼で答えた。昨日も一昨日も客が取れず、今晚も若し取れなかつたら、客の取れるまで帰らないと、心ひそかに定めて宿を出たマサだつただけに、云うに云えない嬉しさだつた。

部屋には入ると、男はもう待つたなしの連続だつた。

足、耳、手、腹、ところきらわらず、その父親はとも年の違ふ田舎男の愛撫の対称だつた。もとくマサにしても、肉体を元手の商売をする位だから、足の指から頭の先まで、相手の男の自由にまかす位のことは覚悟の上だつた。が、この男の女を弄ぶ仕草には念がいつていた。

金で買つたのだ。心ゆく迄したいだけのことをしてなければ損だといつた見えすいたこの男のきたない根性。マサはもう腹もたたなかつた。年甲斐もなく、我を忘れてしている男のしぐさを、夢でも見ている様な眼でぼんやり見守つていた。



食指を動していた。若くて縹緲が良くて、それに素晴らしい肉体の三拍子揃った由利を餌に、不逞な企みをいだいていたところへ、願つてもない、金持の道楽息子が現れて来た。

つまり菅沢章太郎は、叔母が効かに橋渡しをした、由利を繰つての金蔓であつた。父は、数千万円の資産を有する、関西屈指の運動用品の会社を経営し、息子は有り余つた巨万の富を道楽に費して、最近、ホワイ・ト・ジュエルと謂う、女子プロ野球を創設したばかりのところであつた。

若くして、女子プロ野球の社長におさまつた章太郎は、チームの編成に先立つて、一番に着目したのが、フェニックスの名三壘手、由利の大柄で近代的な容姿だつた。

彼は其の引抜仕事を、誰にも委せず、自ら起つて、グリン「アマンド」に度々訪れた。彼としては、名選手を擁しての、チームの完璧を期する一方に、女子プロ野球には稀れに見る、端麗なフェスで君臨する由利に、少からず男の関心を惹きつけられていたのである。

其の章太郎から、叔母は再三多額な札束を握らされてゐるらしく、契約の要談にかこつけて、琵琶湖ホテルに泊つた時も、由利を口説落したのは叔母だつた。不可抗力の暴行ではあつたが、処女が、一度男に肌を奪われると、憎い癖に又忘れられぬ、脆い女の愛着が湧くのだ。

今日に限つたことではないが、章太郎が訪れて来る度毎に、由利は、何かしら心の浮立つ動揺を覚えた。それでいて、浴衣を着て部屋の前迄忍んで来ると、彼女は俄かに邪慳な態度となつた。章太郎が聲音を

聞いて、振返つた。

「やア、今晚は。黙つて這入つてて、悪かつた？」

ワイシャツにくつろいで、勝手に障子を開け放つてゐる彼は、由利の硬ばつた表情を見て、半ばあやまるように、口を利いた「よくもないけど、でも、あかんと言うても這入つて来やはる、あんたやないの」「は、は、来る早々から手厳しいな」「あたりまえやわ！ 女の部屋に無断で踏み込んだり。これからは気を付けて頂戴」それ程嫌いでもないくせに、由利は冷淡に章太郎を一瞥してから、

「お酒飲んで来てはるの？」と、熱柿臭い男の顔を改めて眺めた。「少しね。だが今晚は酔つちやあ居ない。大丈夫だよ」

「判れへんわ。男はお酒を飲むと、すぐにけだものになつてしまふんやから。……琵琶湖ホテルの時がそうやつたやないの。酔つた勢で無理矢理に妾を……」

貴郎、覚えてるでしよう……と言わねばかりに、由利は新たな嫌悪を走らせた。章太郎は苦笑して、煙草をせわしくもみ消し乍ら、

「過去は過去、現在は現在だ。然し、君を愛しているという点に就いては、未だに僕の心境は變つてはいない。寧ろ、それ以上の情熱を寄せてゐる僕なんだ。其の点は充分認識して貰いたい」

「もう結構！ そんな囁き話はホテルのベッドで……囁かれたわ。口惜しかつたわよ」

「……」

「あの時は夢を見て居たんやわ。悪い夢に欺されて。金持の立派な菅沢夫人になれるやと思つて……。あんたは色魔ね。何処の

約束の時間が来た。

「田舎では、こんな面白いことは出来ない」

男はこんなことを云いながら笑つた。マサは手にあるハンドバックでも投げつけてやりたい衝動にかられたが、これから貰うべき約束の金のことを思うと、それも出来なかつた。

先日金を持てた男が、約束で遊ばせた男が、ユミが一寸便所へ行つたすきに、只逃げをしたという事をユミから聞いていたので、遊ぶ前に金を貰つておかなければと思つた。つい言いそびれてしまふのだつた。

男は腹巻から財布を取り出すと、金にはあんまり縁がないとみえ、不器用な手付で一枚二枚と数えだした。数え終つたのでそれで渡すのかと思つと、又数え始めた。

たまらなくなつてマサがよつぽど、

「そんなに、お金が大事なんだつたら、女にも、あんな魔術を使うてはるんでしょ？」

「莫迦！ よせよそんな話。結婚したらそれでいふんじやないか」

遠に章太郎も気色ばんで遮えぎり、不気嫌に立上つて、窓際に歩み寄つた。

生暖かい夜風の撫でる堂島川畔は、長い灯影を川面に曳いて、黒い中之島公園の岸辺から、人眼をはばかりる男女のボートが、



「家は一町六段もある百姓家だが、息子がやかましくて、俺は毎日きまつた小使しか貰えないので十分やる事が出来ないが、まあ辛抱してくれそのかわり、俺のような田舎者のジイさんでもよかつたら、これからは遊びに来るから……」

こんな助平のイヤらしいジイさんなんか二度と来て貰わなくともいい、——その心の中かと思ひながら、紙幣をハンドバックにおさめて、これで下宿代の一部でも払えるという安心から、スカートの裾をはらつて快活に立ち上つた。

「怒つたの……ねえ……」

由利は鼻声になつて、後から、章太郎の横顔を覗き込んだ。章太郎は返事もしないで、無感動に、ボートの提灯をジツと睨めて居た。（一寸葉が効き過ぎたのかしら……）

由利は辛辣な言葉を、ふと後悔すると同



時に、男の心に住んで居る、清美の面影に嫉妬を覚えた。自分を愛しているように見せかけて、実は引抜工作を口実に、密かに清美を狙っている、章太郎の老獪な手口が最近になつてやつと感じられた。

る事に成功はした。清美は眞実以つて、由利を慕い、由利は由利で、心にもない仮面の愛人となつていたのである。

## 實話コント

### くろやんの旦那

紀市郁榮

くろやんというのは妻の仲好しで、近所の二階に間借りして工場に勤めている娘である。妻の話に、くろやんのこと

まるで自分のことみたいに昂奮した面持である。一年前の自分達のことを想い出して、刺戟されるのであろうか。

がときどき出るのだが、私は、はじめは男かと思つていた。黒島道子という名前は太分経つてから知つたのである。妻の話に依ると、私の留守にときどき遊びに来るらしいけれど、私は顔を会わしたこともない。

然し私はそんな気のない返事で、それどころではなかつた。三十年史の躍進篇に組む写真のことで頭は一杯だつたのである。

そのころ私は、会社三十年史の編集にそれこそ寝食を忘れて没頭していた。帰宅するのは八時過ぎになり、公休日にも出勤した。創立記念日を間近に控えていたのである。

編集も三度目の校正を終えて、ホツとしたところであつた。久し振りでくつろいで飲んだビールも美味しくホロ酔いのいい機嫌であつた。妻に誘われて散歩に出た。夜店が出ていた。妻はまるで子供がはしゃぐみたいに、おかしいほどうきうきしていた。帰途、タバコ屋の辻を曲つて少し歩いたところ、不意に妻は私の袂を引いた。

「あのね、くろやん結婚するのよ。」

「もう消えてるわ。」

「ほー」

「え？」

「旦那さんはね、同じ工場に勤めている人で二十八ですつて。体格のいいきれいな人らしいわ。お祝を上げようかと思ふんだけど、どうか知ら。」

「くろやんとかよ。こんなに早くから閉めて暑くないんか知ら。」

た。

「……ね、こちら向いて。……バカねえ怒つたりして……」

男の顔をいきなり両手の中に挟んだ。

「今の事、本気にしてんの？ ほ、ほ、冗談やわ。一寸憎らしくなつただけ」

含み笑いを、すぐに閉じて、由利は静かに、章太郎の首筋に手を巻つけた。

「ねえ……」接吻して、と無言の双眸にかがやきを漲らせた。が、章太郎は、咄嗟に軽く唇を重ねると、俄かに強暴に彼女を抱き上げて、隣室の寝台に運んで来た。

「何うするの？ 厭ッ、叔母さんがいつ上つて来るか判れへんわ！」

由利は、たしなめるように小さく叫んで章太郎の胸の下から、寝台の隅に転がって行つた。其の拍子に、乱れた浴衣の裾許から一度知つた女の肌が、燃えた眼に濃厚に映つた。

「何故厭なんだ！ 君の軀は僕のものだ！」

火を吐くように言つて、章太郎は、尙も執拗手を伸した。由利は警戒して除々に後へしざり乍らも、びつたりと太腿を合せていた。

「卑怯よ、あんたは！ 結婚なんて大嘘やわそれ程誠意のある方やつたら、何んで清美を付け狙うのよ。舞踏場へも二回誘つてるやないの……色魔ッ」

「何、僕が色魔だつて……」

「そりやわ、暴力で妾を自由にした上に、まだ飽足りないで、清美の軀を征期する肚よ」

「……」

真ッ向から、斬り付けるような由利の一言に、章太郎は興ざめて佇んだ。接吻は許しても肉体は委せようとしな、強固な女

の身構えには、夢に破れた、苦い経験の自重がありくと読取られた。

「それじゃあ、どうしても厭なんだね？ 警え君の軀に十萬円の金が、つぎこまれているとしても……」

「え！……十萬円？ いつ、そんなお金を頂いたの、脅迫は止してよ」

「脅迫じゃあない。事実だ。若し疑うのだったら叔母さんに訊いてみたらいい、二度に分けて確かに十萬円を渡した筈だ」

「えッ！……」

由利は愕然となつて、寝台の上に蒼ざめた。(十萬円？ それでは叔母が慾にからんで……) やりかねないと直感した。いつも

章太郎が訪ねて来ると、齒の浮くようなお世辭を並べていたが、今になつて、やつと不審が解けてきた。

章太郎は落着はらつて、荒い呼吸の由利の手首を、無慈悲に膝許へ引寄せた。が、由利は其の手を振りはらう勇氣もなく、唇を噛んで俯向いていた。章太郎が肩を叩いた。

「元氣を出すんだ。お金の話なんかもう止そう。水臭いよ。は、は、は、どつちみち、君の春のスーツになつたり、知らぬ中にお小遣で消えているんだ。それよりか、一緒に白浜温泉へでも行こうじゃあないか

実は其の打合せで、叔母さんから電話があつたんだよ」

章太郎はそれとなく、由利の氣持を訊いてみたが、彼女は黙つて顔も上げなかつた。うま／＼と二人の口に欺瞞された口惜しさ

が、咽喉元に聞えて涙の熱湯をつき上げた。由利は最早菅沢章太郎には、微塵の未練も残らなかつた。

彼の求めているものは、フェニックスの



感じてあつた。

私は黙つて二階を見上げた。灯が消えて無論何も見えない。何も見えないが、若い二人の痺れるような交りが眼に見えるようである。フト妻の横顔にほのかな羞恥が匂うていた。多忙に紛れて暫く妻を顧みるとまもなくあつたことに、私は気がついた。その夜の妻の媚態は、かつてない激しいものであつた……。

それから四、五日過ぎた夕方のことである。妻と市場の通りを歩いてみると、向方から若い男が近づいて来た。男はいいねいに頭を下げた。妻がしとやかに会釈を返した。行き違ひ男を、ちよつと振り返つてから私は訊いた。

「誰だい？今の——」

「くろやんの旦那さんよ。」

「へえ？あれが……」

私は一寸おどろいた。妻の嘗ての話に依ると、くろやんの主人は体格のいい美男子の筈である。今、擦れ違つた男は、職人みたいに五分刈の頭をして、五尺そこそこの小身で鼻の低い、ひたいの突き出た、およそ醜い男であつたのだ。

「なんだ、もちつといい男じゃないじゃ



ないか。あれが美男子だつたのかい？」

私は皮肉をこめて言つた。それに妻が答えたのはしばらくしてからである。

「だつて……そんな話だつたのよ。」

眼を落して気まり悪げにささやくような低い声であつた。それで私は若い妻の氣持が判るような氣がした。私はもう何も言わなかつた。そつと妻の手を探つて力をこめて握つた。  
(おわり)

名三蟲手ではなく、遊蕩児の章太郎をこよなく満足させる、豊満な由利の開花の肉体なのだ。

## 五 女の生理

「二、二、三——二、二、三……」

グラウンド五週の駐足が終つて、繩飛びが済むと、朝の練習の最後の課目は、基本

体操と深呼吸である。

投げ、打ち、そして走る野球選手の三つの要素は、機嫌ない平素の練習に依つて培われるのだ。

純白のトレーニング・シャツに、緑色のパンツ。豊かな黒髪を帽子の下に隠せて、活潑に号令を掛けて、四肢の運動を行ひ、甲高い響きの鮮やかな体操は、晴れの公式試合を目睫に控えて、はやくも、鬱鬱とし

た制覇の氣慨が迸つていた。

「一、二、三——一、二、三……あ！」

突然、由利はクラクラッと眩暈を感じた。本能的に両手で顔を掩い、真ッ暗くなつた眼の前の廻転に、辛うじて足を踏みしめたが、すぐに軀の重心を喪つて、泳ぐように前へのめつて、ドタリと倒れた。

四ツん這いとなつて、地上に倒れた瞬間誰れか呼ぼうと焦燥したが、頭の中に星が散つて、どうにも声が出なかつた。

と、其の隣りに体操をしていた清美が、ハツとして振り向き、周章でて由利に駆け寄つて来た。

「ど、どうしたの、由利さん！ しつかりして頂戴！」

声をどもらせて、清美は慌だしく介抱した。上体を懸命に抱起して、遅れ毛の蔭に苦しそうな顔色を確かめた時、由利は嘔吐を催したのか、俄かに呻いて口許を蔽つた。

「由利さん苦しいの？ 待つて、すぐに医務室に行つて来るわ」

清美は、甲斐々々しく肩を撫で乍ら、前の体操に向つて、

「大変よ、皆んな来て頂戴！ 由利さんが倒れたんよ」と大声で呼んだ。

皆んな後を振り返つた。

愕いてバタ／＼と駆け寄つて来た。

「何うしたの？ 卒倒？……」

「早より医務室に連絡せんといかへんわ」口々に叫んで、由利は皆んなから抱き上げられた。一人の選手が医務室へと走つた。

「大丈夫？ 由利さん」

心配そうに、皆んな寄つて顔を覗いた。

由利は少し楽になつたらしく、一寸極り悪そうに眼を伏せた。

「すみません、御心配を掛けて……もう大丈夫」

皆んなの手前、由利は殊更に何んでもないように言い繕つて、泥をはらい乍ら立上つて見せた。皆んな、ほつとした面持である。

が、由利は内心、不安が募つて競々としていた。こんな兆候は今日が始めてではない。二三度弱かに経験していた。

眩暈……嘔吐……？ それではこれが悪阻なのだろうか？ 妊娠！……

由利はいつか読んだ、婦人雑誌の妊婦の心得を思い泛べた。ドキリとなつた。

「由利さん、ほんとに大丈夫なの？ 顔色がとても悪いわ」

皆んなが再び体操に集合した後、清美は一人残つて、親切に訊いた。

「そうかしらん——」

ふと、淋しく由利は呟いて、静養をすすめられるが儘に、清美に付添われて、更衣室に這入つて来た。周囲がスリ硝子で、尙外部からの盗視を嚴重に遮切つた、男子禁制の室の中に、鑢て、由利の全裸の姿があらわれようとした。が、何故か彼女はためらつて、

「清美ちゃん、一寸あちら向いて……」

いつにない由利のねがいである。

其の際に、由利は自分の軀を見た。動悸が打ちだした。生理に暗い三カ月の中に、乳房は既に大きく浮上り、乳嘴の辺りも黒ずんで見えた。下腹部に触れるのが怖しくなつた。(肥えたのじゃあない！ 此のお腹の中には小さな赤ちゃんが宿っているんだ！)

其の父の名は、菅沢章太郎——。然かも彼は、再び非を重ねようとしてい



るのだ。約束の時間は、今夜の八時十九分  
白浜温泉行の夜行列車である。  
由利は思わず、溜息をついた。

## 六、嫉妬に狂う

清美は、由利が帰った後の、とり残され  
た更衣室で、暫くの間、物足りない顔付で  
佇んで居た。

由利の真剣な願いと言うのが、想像もし  
なかつた菅沢章太郎との約束の代人なので  
ある。

「駅に行つたらすぐ判るわ、場所は売店の  
横。時間だけは正確に守つてね」

軀の調子が悪いのを口実に、由利は清美  
に納得をさせてが、清美にしてみれば不精  
無精の承諾であつた。

由利以外の人には、誰にも興味を感じな  
い、ひたすらな清美の純真さを、冒瀆する  
には過酷でもあつたが、それ程罪悪を感じ  
ないのは、偽れる同性愛の原因であらうか

由利の代人とは体のいいかたちであつて  
惨酷な人身御供に外ならない。おそらく章  
太郎の毒牙に接近した以上は、清美を純潔  
で返す筈がなかつた。が、それを少しも意  
に介せぬくらい、由利の感情は恋に醒め、  
其の動機を醸し出した、清美の美貌を嫉ま  
しく思うのである。

だが清美は、そんな由利の吐が判ろう筈  
はなく、帰りに由利と重ねた、身も溶  
けるような接吻の後味を、まだ生々しく唇  
に覚えていた。

代人さえ済ませば、今夜も又、由利の腕  
にいだかれて、たんのうする迄悪戯が出来  
る。そう想うと、嬉しさと楽しさに四肢が

疼いてきて、もうジツとはしていられない  
処女の快感が身内に走つた。

清美は四辺を見回した。

誰も見て居る人がないと判ると、憑かれ  
たように由利の脱衣箱の蓋を開けた。

「ある！」

よろこびに顫える胸の叫び！

異様に光る双眸！、心臓が痛い程高鳴つ  
た。

其処には、たつた今、由利が脱いだばか  
りの、色とりどりの運動衣と、薄桃色のズ  
ロースとが見えた。

清美はそれを取り出して、韓と夢中で抱  
締めた。

ぷうんと香料の移り香の匂う、練習の汗  
の中には、直接に由利の体息を吸うた、ほ  
のかな腋香の臭いもして、それが余計に清  
美の煩悩をかきたてる。

「由利さん！……わたし、わたし……」

遺瀾無く身を悶えて、清美は、まるで由  
利と抱擁するように、喘ぎながら、切なく愛  
撫の頬擦りをした。ジーンと恋しさが身内  
に張詰めてた。

清美は其の儘、夢我の陶醉に酔痴れて、  
暫くは四辺の気配さえも判らなかつた。

と、不意に背後から、

「清美！何してんの？……」

降つて湧いたような声が迫つた。

清美は心臓が停るくらい、驚いた。

横江は、何時の間にか、忍び寄つて居た  
「清美！ あんたは由利と何んでもないん  
やと、言いきつたねえ？ 大嘘つき！」

嫉妬に逆上した横江の声は、亢奮すると  
男のような乱暴なひびきがあつて、清美は  
恐しさのあまりガタガタと戦くばかりで、



蒼い顔で立竦んで居た。

けれど横江はひるむ様子もなく、清美の  
腕から手荒く運動衣をひつたくると、襦ら  
わしそりに床にはうり投げ、  
「これでもまた、同性愛やないと言う心算  
？ 猫を冠るにも程があるやないの！ あ

「……………」

清美は一言も無く項垂れて、横江の誹を  
力無く呼吸をはずませて浴びて居た。

同性愛が、風紀の紊乱と看做された以上は、  
明らかに、チームの宣言に抵触している事  
になる。其の証拠の裏付となるべき、先程  
からの現場を目撃した、横江の吐の如何に  
依つては、清美も、自身の処置を考えねば  
ならず、或は、最悪の場合に立至つた時の

んたと由利が内  
緒で、男の子が  
するような真似  
をしてんの、皆  
んなチャンと知  
つてるんよ」



観念のほぞをくくらはなければならない。

出来ることなら、此の場を機便に消せて貰いたい、弱点を掴まれている清美にしてみれば、拝み倒しても取組まなければ思案もなかつた。

「横江さん。おねがいです！　どんなことでもしますから、これは絶対に言わないでください」

と、清美は暴露されたくない一心から、どんなことでも……と思わず口に滑らせた突嗟の場合の勢いに駆られて、前後の分別など考慮する余裕も無く、迂闊に口走つたのではあつたが、横江にすれば、思う壺なのだ。

「それ、ほんと？　清美ちゃん……」

「……ええ」

消入するように僅かに頷くと、横江の態度が、ガラリといつぺんに打つて変つてきたそれは、男が女に挑めかかる寸前の、怒つたり、すかしたりして、ヤツと女を口説落した、あの刹那的な悪魔の囁いとでもいうのか、横江の口許には、これから清美に求めようとする、中性の女の肉体に潜んでいる野心が、露骨に唇を歪めていた。

「清美ちゃん、今のことは絶対に喋わへんわ……そのかわり……ねえ？……」

と矢庭に腕を握られた。

横江の眼がキラツと異様にかがやいてゐる！

然し手を握られただけでは、清美には横江の意志が通じなかつた。幼い清美のからだは知つてゐるものは、性と云ふより、寧ろ由利がおしえてくれた、悪戯半分の夫婦ごつこなのだ。同じ褥に抱合つて、接吻を交わして、それで男女の世界を想像してい

た清美などには、相手が逞しい線の、男性そつくりの横江である、全然様子が違つてきて、どうしてよいのか、思い惑うのである。

ぼんやりとして、成行きにまかせている清美の軀が、軀でござつゝとした横江の腕に、有無も言わず抱締められた。いや應なしの唇を重ね合つた。肉のむくれた横江の唇は、程度のひどい南方の土人を想わせて、朝の菜の葱の悪臭が、ムウツと清美の鼻先に匂う。

たまらなくなつて、ようやく唇を離そうとすると、横江は物狂わしく尙も引寄せて清美の胸のチャツクを外し、シャツの中に手を飼わせてきた。

瞬間、清美はびくツと軀をくねらせて、乳首を撫でる横江の手を、悪感のあまりはらい除けた。

「勘忍して……それだけは……」

「何故、厭なの！　清美——」

だが、清美はそれには答えないで、一寸ひるんだ横江の腕の中から素早くバタ／＼と更衣室から遁れて行つた。

「あ！　清美、遁げる心算！」

後を懸命に追いかけてよとしたが、清美の足は疾かつた。

「覚えといで」

残念そうに唇を噛んだ、横江の屈辱に打ちのめされた胸に、由利を嫉んだ報復の血が、奔流のように流れはじめた。

## 七、肉体相うつ

「ウム、困つたものだ。然し君は確かに其の根拠を、掴んで言つてゐるんだらうね」主事は暫らく考え込んで居たが、やがて

ふと顔を上げて

「兎に角此の問題は、蔦岡由利の個人としての、桃色遊戯だとか、同性愛だとかいうだけではなく、名門を謳われたフェニックスの、いや、大きく謂えば、日本女子プロ野球界に、恥辱も甚だしい、一大破点をつける事になつてしまふ。然し、由利の行跡に就いては、何れ徹底的に調べるとして、其の前に、一応本人の口も照し合せてみたのだが、蔦岡は今、グラウンドに居るのかね？」

そう訊かれると、横江は、はたと当惑した。主事にはキツパリと言いきつたものの事実はかなり誇張もし、又、嫉妬の脚色が無いではない。由利と自分の言つた事に、大きな誤謬の有ることを、始めから意識して居る横江なのである。が、此処まで由利を追詰めて来て、今更になつて憶病風は吹かせたくはない、意地からでも敵に体当りをする覚悟にならされた。

「本人をお呼びになるのですか。由利さんは、ギョウラー・バツテングをやつて居ましたから、多分、まだグラウンドに居る筈です」

「そうか。じゃア落さないけど、君、一寸呼んでくれないか」

主事は眼鏡越しに言つた。

其の結果がどんな事態迄運れるか、横江は聴いてみたい気心もあつたが、雑多な書類に眼を通して居る、主事の多忙な机上を眺めると、身勝手な口もはばかられて、仕方なくグラウンドへ由利を呼びに行つた。

自分が呼んで由利が難詰されて帰つて来ると、すぐに告げ口をした反動が、来るのではあるまいかと、予感して居た横江なのに、更衣室の入口の蔭で、由利が蒼い顔

で佇んで居ると聞かされると、横江は、そらッ！　と緊張した。其処へ、

「横江さん、由利さんが外で呼んでるわ」と、後から這入つて来た選手の一人が、横江に由利の言伝をした。

「ふん、用事があるんやたら、自分で這入つて来たらええやないか」

頭から喧嘩を覚悟の横江の反事は、表に向つて高飛車にとんだ。すると其の声に応じて、昂奮で頬の筋肉をびく／＼と引つた由利が、皆んなに見守れて這入つて来た「横江さん、あんまりひどい事は言わないで頂戴！　妾がいっ……」

頼え声で詰寄るのへ、横江は皆迄言わせないで、

「何がひどいの、本当の事を言うただけやないの。フェニックスを裏切つて、契約金に眼がくらんで身売りしたのは、一体誰？」

横江は此処とばかり、逆ねじを食わせた心算だつたが、由利は遮るように頭をふり、

「そんな事やつたら誰も怒れへんわ。もつとひどいこと言つてはるやないの……名譽毀損もはなはだしいわ！」

「名譽毀損？　ふふふ、えらいたいそうな話やなア。それ程面子を思ふあんたやつたら、なんで噂のタネをつくらはつたの？」

ホワイト・ジュエルの菅沢さんが、ちよいちよいアマンドに行つてはる事実を、チャンと新聞記者は嗅ぎつけてはんのよ」

「時々はね、でも、それは妾と関係の無い下のグレルのお客さんやわ。それだけで妾と疑つてはるの？」

二人の口論に注目して居る、朋輩達の眼の前で、もの囁いの敗北はみたくはなかつた。鋭く揚げ足をとつてくる。相手の横江



を見据え乍らも、其の中に、軀の異常を追及して来たら、何んと應酬したものかと、由利は心で苦しんでいた。と、榎江は意地の悪い含み噓いで、

「まだあるわ。由利さん、あんたは近頃、よく嘔吐をしたり眩暈を起しているけれどあれは一体何んと言ひようき？」

由利は無言で唇を噛んだ。ぐさツと一剎しに、心臓を抉られた悲痛な傷手だった。「どうやの由利さん？びようきの名前を覚えて頂戴。皆んな聞きたがつているんよ」

「……………」

「ほほほ、判らんのやつたら、教えてあげようか？……赤ちやんの出来るびようきやろ」

そう言つたかと思うと、榎江は声高に嘔い痴けた。由利は口惜しさで、キリキリと歯の根を鳴らせて睨んだ。

周囲が俄かにざわめきだした。由利は、恥も外聞も無くなつた戦きに、暫く憎々し氣に對峙して居たが、いきなり榎江の胸許を目掛けて、毬のように突きかかつて行つた。

「あ！ 何すんの！」

劇しい体当りを喰つた榎江は。二三歩足許を跟めかせて、床にドツと折り重つて倒れた。

由利は上になり、榎江は其下に組み敷かれて、どちらも髪を掴み、顔を殴り合つて仲裁も出来ない殺氣を孕んだ格闘となつた。然し、力の相違は確かに榎江が勝つていて、渾身の力をふりしぼつた由利の軀が榎江が劇しく反撃する度に、後へ転げそうになる。それへ、敗けるものかと、のし掛つて行く由利が、突然、あッ！ と小さな声を挙げて、下腹部をおさえてどつと転ん

### 三郎物語の内

# 爆発事件



杉山清詩

沖研二画

京に田舎あり。右も左も田圃の中、天神川の畔りに、鉄筋三層の立派な校舎がある。それが京都の西南隅に聳える、吉祥院高等学校。

その校門の前に、大阪へ続く長いアファルトの道があり、朝暗いうちから、夕の星を仰ぐまで、ひっきりなしに肥車が通る。名付けて、通称アササ街道、朝から臭いという意味だが、これが吉祥院のメインストリートなら、そこを毎日通勤する者は、吉原遊廓へ続く浅草八丁土手の朝帰りくらいに思つて自ら慰めてゐるのだらう。

吉祥院高校の三年英語を受持つた三郎君

も実はそのアサクサ・プロムナードの往還者の一人。チャップン／＼揺れながら、尿尿桶を満載して、ひねもすのたくつて行く黄金牛車の大行進に挟まれて、天下の吉祥院ブロードウェイを行く時、我が青春に間隙を覚えるのは、彼一人ではなからう。

夏休み近い炎暑の日には、その桶から蒸発する香料の臭いは、満員電車で蒸された安髪油の難よりも、映画館に渦巻く御婦人の方の、体臭と腋臭のカクテルよりも、もつと印象的な芳馥を残して行く。それが車曳く牛の涎と共に、蜿蜒いつ果てるとも知れないのだから、

又、何をか謂わんやである。

学校へ着く頃には、既にその臭氣に酔つて、もう一度頭を冷す為顔に顔を洗う、それから煙草をつけて、やつと楽園に到着した欲びを感じる。そのうちに、緯名を陳列すれば一大動物園でも出来そう、先生方の御登場となつて、又今日の活動は始まる。

こゝは隣接校舎に中学校も併置されているので、時折学窓から洩れるピアノの音などが、とても心を和らげてくれる事もある。今日も試験の答案に読み疲れて、金一円五十銭也のバットの美味さに、ほつと一息入れた時、微かに洩れて来るスクエア・ダンスの軽快なリズムが、モルヒネ患者の麻薬よりも、妙なる効果を運んで来た。

「大杉さん、御精が出るね」

漢文の武蔵先生が、大量の答案らしきものを彼の妻君のように、今にもパンクしそうなボロボロに入れて、帰る仕度しながら言つた。その机の上に、さつき彼が平らげたアイスクリーム容器の残骸から、ドライアイスが白煙を上げていた。

「例によつて、三年B組の悪童連の答案は全然なつてないんで、眼を通すのにも骨が折れますよ」

「山田達ですね、しかし、奴等は、この土地から選出した、教育関係の市会議員の息子ならある程度は大目に見るより仕方ないでしょう、月給に束縛された我々ならね」

「東縛ですか」

三郎はその上何も答えず、煙の輪を吹いて窓の外を眺めていた。その机の上には、空になつたラムネの瓶が、もう胸のすく魔力もなくなつて、ボンヤリ口を開けてい



だ、楓江の足蹴にやられたらしく、其の際に、楓江は逆に馬乗りとなつて、

「皆んな早く手と足を押えてよ！妾達を裏切つた不見転の証拠を見るのは、今の中よ！」

と、周囲に叫んで応援を求めた。

由利は狂つたような悲鳴を挙げて、応援の無い間にと藻掻き暴れたが、楓江のどつしりとした重量に邪魔をされて、両手と両足は押え付けられ、人垣の中に大の字にされてしまつた。

「厭ッ。いやッ！誰か助けてッ……」

由利は全身を波打せて叫ぶ。けれど猜疑に満ちた朋輩達の手は、今にも楓江の叱咤の下に由利の肉体を調べようとして居るのだ。「何を躊躇してんの！かまうことはないよ。相手はパンパン同然の妾達の敵やないか。妊娠ぐらいへとも思ふとらんよ！」

楓江は馬乗りになつた儘、もどかしそうに叫び乍ら、自分是由利のバンドを外して後は「やれ！」と言わねばかりに、罵り呻く由利の口を、しつかりと両手で押え付けた。

其の勢いに引きづけられて、二三人が寄つてたかつて、由利のユニフォームを脱がせ始めた。由利は見せまいとして、はげしく軀をのた打つたが、

臆て、楓江が軀から降りると、集人環視の床の上に、男を知つた由利の肌、明らかにさまたつてゆく。胸が覗いた。乳房があらわれた！そして、ややふくらみの丘をつくつた、男の呪わしき交渉のあとが、由利のせき上げる嗚咽の中に、惨酷に白い輪廓を見せていつた。

## 八、青空への憧れ

面会謝絶の札がとれた翌日。

た。

「暑いから、まア一休みしてやりなはれ、僕は女房の事が気になるんで、一足先に帰りますわ」

八方美人主義の彼は気軽に言つた。

「まだですか」

「ええ、もう予定日は過ぎてるんで、いつ何時とも分らんのですが、何しろ始めてなもんやさかい、どう出て来る迄が心配でね何やら期日の過んだ滞納税金を、事安かれと念じてるみたいで、落着きまへんわ」

「始めての子達ですか」

「そりやア、結婚後まだ十ヶ月、事前交渉なしで、ギリギリ一杯という所だつさかいな。あんたも早う奥さん貰いなはれ、それええもんだつせ」

「どうも御馳走様、ラムネの一本位、出て

もよさそうですね、それともビールかな」

「男の子でも出来たら奢ります。それより、中学の方の体操の先生か、養護婦の中村はんどらだ。ミス吉祥院の双壁や。それとも生徒の中に心当りでもおまんのか、三年生なら十九やで、もう充分使用にも耐えまつさかいなア——。ではまア……、お先にごめん」

武藤先生、モナリザのような微笑を残して出て行くと、三郎は生欠伸を一つ殺して校庭へ出てみた。空には美味そうなちぎれ雲が一つ、その下の花壇に、カンナより美しく燃え立つている女性は、西国街道の鄙には稀なる佳人、体操の高野幸子先生、この春、市立二条中学から移植されて来た名花である。吉祥院の慈姑島に植えれば、名花もカボチャの花になりそうだが、それでも若い先生達の間にはかなりの噂だつた。強烈な午陽が教員室に射し込んで、遠い

窓ガラスは巨大なオリオン星座のように輝く。ミス吉祥院の双壁、養護の中村先生が

花を持つて教員室へ入つて行く姿が見えた。この高野先生が罌粟の赤さなら、中村先生はゴスモスの感觸、ぼんやり彼女らを見送つて三郎君は、そうなると、さしず

めこの花壇の隅で、間の伸びた顔をしていゝる、向日葵にでもなりそうだ。

大体が養護婦の質流れみたい斜見して職員の数の中に、入れてくれないような所が多い。自由の学園に、人権蹂躪も甚だしい話だが、だから養護の先生は、いつも衛生室の隅に蟄居して、他の先生達の仲間から、自ら一步退こうとする。心臓の方はけつこり強いんだらうが、我が中村泰子嬢も内気で優しく大人しく見えた。

そこへ上級生の女の子が、競技に汗かいた所だろう。黒いブルマースに鉢巻姿で二、三人、バレーボールを抱えて走つて行く。過渡期を脱け出して、成育した肢態を持つてゐる。洋服でも着せたら、パリパリの娘として、充分恋人の役目だつて、果してくれるだろう。どの子も美しい。餓えてる加減かな、それとも、武藤教諭の御説のように、交尾期には、久米の仙人も、タマには雲から落ちてみた方がいゝのかな。

悪童の顔役、B組の山田君が、教員室の方から出て来た。煙草の喫みっぷりが、余程三郎より垢抜けしている。それでも彼はチョッピリ煙い部類に属してるのか、靴の裏で火を揉み消して恰好だけでもお辞儀しただけしおらしい。

「先生、まだ居られたんですか」

とテレ隠しみたいな、揶揄みたいな口調で山田が言う。

「試験される君達もエラからうが、試験す

る僕達も染ぢやないんだぞ。少しは僕等の苦衷も察して答案ぐらいもう少し真面目に書けよ」

「だつて先生、今日の英作文はちと難しすぎましたぜ。それに第一、全然ヤマが外れちまつたからねえ」

「いくらヤマが外れたからつたつて、クラスメイトの恋愛行状記を、あんなに事詳かしう答案用紙に細述しなくてもいいだろ」

「その代り、化学の問題なら満点確実ですからね。本当は先生の恋愛秘史を書こうと思つたんですが、今停学になると、ちよいと後が面倒なのでやめたんです。でも大杉先生、中村先生は、先生に相当気があるようです。今も教員室の前を通つたら、先生の机の上の花瓶に、サルビヤの一輪をそつと挿してる所なんか、情緒てんめんなるものがありましたよ。その中村先生に、カニやドラム鱧が横恋慕つてんだから、吉祥院高校の恋愛秘史も書いてみたくなりますよ」

「馬鹿！」

ガチンと一発落雷した時、遠くでパーンと物の弾ける音、ガラスの破れる音。殆んど同時にキヤアアと真夏の校庭に投げ付けられた悲鳴、崩れた窓ガラスは職員室、何か起つたらしい。

すぐ駆け行くと、ドラム鱧こと和田先生が、その巨体で中村嬢を抱えている所。おやッ、暴行未遂の現行犯かなと、吃驚して眼を瞪ると、彼女の左手から一条の血が垂れている。まさか此鹿先生が、ドラム鱧を向うに廻して、チャンバラを演じた訳でもあるまい、いよいよ不可思議なる光景である。



清美は見舞の花束を抱えて、由利の病床に訪れて来た。看護婦から、一時絶望の状態で迄陥つた、危なかつた由利の病状を、いつまんで話されると、日頃の愛情が身に泌みて、清美は思わず涙ぐんでしまった。

まだ安静にしないで、いけないんです——と言う、看護婦の注意に領き返して、静かに枕辺に歩み寄ると、由利は安らかな寝顔の中で、突然、かすかに

「きよみ……キヨミ……」

と、唇を動して、再び元の寢息をたてた夢の中でも、其の名の人が気掛りらしく、何か安否を忘れかねて居る様子である。

清美は、ぐつと胸をしめつけられた。

「由利さん、妾よ昨日白浜から帰つて来たんですよ」

口には出さなかつたが、清美は其の気持が、屹度、由利の心につたわると思ひ、いつとはなく、そつと寝顔を覗き込んだ。それは、微妙な人の気配とでも言うのか、まじまじと眺める清美の顔の下で、由利は、呼び起されたように瞼を開き

「あー清美ちゃん」  
と、懐しそくに喜びを溢れて、無理にも起き上ろうとする様子に、清美は周章で「駄目よ！まだまだしつかり回復しないと起きたりしたら、元にかえるわ」

やさしくなだめて、軀を労わる清美の心遣りに、見上げる由利のやつれた顔は、みるみる白い涙を引いた。

「由利さん、皆んなから事情は詳しく聴いたわ。口惜しかつたろうと思つたわ。……でも、自殺を計るなんて気が弱いわ。由利さんが自殺したと言ふ報らせに、榎江さんを始め、あの時一緒に手伝つた人達は、皆んな、後悔して泣き崩れたそうやわあの人達

「どうしたんです？」  
三郎は先づ第一問を發したが、それに対する和田氏の答えは

「誰か俺を陥れやがつたに違ひない」

と激憤して言う、被害者は彼ではなさそうなのに、いよいよ分らん事になつて来た。

「いや、一体どうしたというんです？」

「屹度これは誰かの策謀だよ」

「はア——そうですかねえ」

「俺は大杉君、君を疑いたくないが……」

「え？ 今度は僕の方へ飛火ですか。しかし事件発生当時、僕にはアリバイがありますよ、それはこの山田君が証明してくれま

す。それに第一、僕はまだ事件の内容を、よく知らないんですが」

ドラム罐は牝鹿先生の腕に、騎士的態度を以つて、ハンカチを巻きながら、ジロリと三郎を一瞥した。

「しかし、ラムネを飲んだのは君だろう」

「え？ ラムネを飲んで悪いような、そんな条令でも出来たんですか？」

「そんな事を言つてやせん、君の策謀によつてラムネ瓶が炸裂し、中村さんが傷つ

た。その現場に僕が居た。そこへ第三者が飛込んで来て、それを目撃したら、その人は一体どう思う、アアン？ 誰でもが加害者

は僕だと思つたらう。中村さんに対する、三角關係的な噂などもある折柄、僕の立場はどうなる。これは僕の致命傷だ。そうとは思わんかね」

「三角か微積分か知らんが、正に高等数学的論述ですね、途中の運算を全然飛ばすんだから、全く驚いちゃう、つまり和田さんが入つて来たら、僕の机の上にあつたラムネ瓶が破裂して、中村さんを傷つけたというんですね。それをドラム罐……いやあの

つまり和田さんが、中村さんとの離間を謀る策略だとして」

「そうだよ。君は陰險なテロだ」

「じゃア明日から地下へでも潜りますかな、但しラムネ瓶は空だつたんですよ」

「空の瓶が突然爆発する筈がない。君は何か細工をやつ

たんだ！」

「液体空気でも詰めて、遠くから超短波で誘爆させたとしても仰言るんですか？ 僕は英語の教師ですからね」

論争が段々ヤヤコシクなつて来たので、中村先生は颯風園を連れて、自分で衛生室へ戻ろうとした。自分の手を自分で縛縛するといふ芸当は、いくら看護婦の拙下げ嬢でも難かしい、すぐ和田先生は、自ら淑女の奴隷を買つて出た。紳士の友情も恋愛の限界に於ては、時に茶番に見える事もあるから難しい。

三郎はミイラ取りがミイラになるのを恐れて、傷つける小羊を追う事はやめた。彼女の看護は、ドラム罐の十八世紀的騎士行為で、充分だつたからである。

それより、どうして空のラムネ瓶が炸裂したのだから、これはビール瓶などと違つて非常にガラスも厚いし、少々の外力を加へたつて、そう簡単に破裂するものではない。

「山田、お前、この謎が解けるか？」

「ええ、何でもありません。僕なら分ります」

「そうか、さすがは化学屋だな、僕にはさつぱり分らん」

椅子に坐つて、倒れた花瓶を直しながら飛散した破片と、破れたガラス窓を、もう一度見直した。

「先生は探偵小説ファンだそうです、こんな簡単なトリックが、分らないですか」

「うーむ、しかし何だ、若しこゝが密室で、種も仕掛けもないラムネ瓶が破裂してそこに居た婦人の胸を貫き、死亡したとすると、これは完全な密室の殺人だね、この部厚いラムネ瓶なら、充分可能性はある」

「種も仕掛けもなければ破裂しませんよ、僕が名探偵なら、この完全密室の謎はすぐ解いてみせる。ヴァンダイクの作か何かに窓際にガラス瓶を置いて、太陽光線を屈折させて、その熱光線を利用して、密室内の





は悪い事はなかつたんよ。罪を誂いたのはあの菅沢章太郎やわ！ あんな色魔が権勢をふるつて居たばかりに、誰も彼もが災難に遭うたんよ」

現に妾だつて。と清美は白浜温泉で遂に純潔を犯された経緯を、咽喉まで言いかけたが辛うじて呑み込み、窓際の草花を眺めるふりをして、睫毛に伝つた口惜し涙をそつと指先で拭い取つた。

「清美ちゃん、ホワイト・ジュエルとの公式試合は何日？」

由利が、興味深い眼差しで訊く。

「惑々、明後日よ」

「そう？ しつかり打つてね。妾の分も」

感慨に沈んだ由利の言葉の、中に秘められた妾の分とは、同じ境遇に泣かされた身の、報復に燃えた合言葉なのだ。

勝つのだ！ ホワイト・ジュエルに！

それが畢竟、破廉恥漢の菅沢章太郎へ対する肉体の呪う女の雄叫なのだ。

「由利さん。打つわ！ 打つて見せるわ」

清美は叫んで、其の眼を蒼空に移した。

澄みきつた空。果しない空。

無限に伸びた大空の彼方に、数万の観集に見守れて飛ぶ、白い熱球の幻想の中に、

清美は、自分の本壘打を描いた。

闘志が満々として、全身に漲つて来た。

敗けてなるか！

打倒、ホワイト・ジュエル！

清美は空を見上げた儘、呼吸をはずませて佇んで居た。其の後姿を見て、由利は両手で顔を蔽つた。あつい嬉し涙が、心の中を撫でゆくのだが、それが清美に感じられない中に、何処かでスイッチを入れた、プロ野球の中継放送が、瞬くうちに由利の嗚咽を消していった。

——おわり——



「こら山田、余計な事を言うんじゃない」

「じゃア先生、馬に蹴られないうちに、僕帰ります」

つたんです。僕は吃驚して、職員室へ来ましたが、まアまア大した事もなかつたのでほつとした所なんです。どうもすみませんでした」

「まア、そんなに謝らなくてもいいけど、本当に驚いたわ、どうして空の瓶を破裂させたの？」

「中村さん、一寸待つて下さい」「はア、何か」

「種明ししましょう。何でもありませんよ武藤先生の机の上にあつたドライアイスがラムネの空瓶の中へ詰めただけなんです。ドライアイスとは、固形にされた炭酸ガスです。窓から射し込んでゐる西日に熱せられて、ドライアイスは急激に溶解してゆきました。固体から液体になり、更に気体になる時は、その膨脹率は非常なものになります、他の瓶なら駄目なんです、ラムネの瓶に限つて、その強い蒸発力で、ラムネの玉が押し上げられて完全に蓋をしてしまいます。ラムネを詰める時の原理と同じです、所が太陽光線の熱によつて、分解蒸発は尙も烈しく続き、今度は狭い瓶の中で行われます。それが飽和状態を超えた時瓶を爆裂させるのです。破裂してしまえば、後は気体ですから、何の証拠も残りません。つまり完全犯罪ですね」

「えー？」

「但し、中村先生を傷つけようとして、やつたのでは決してありません。大杉先生は出て行つたし、後はノッソリ入つて来たドラム缶だけ。よし彼奴を驚かしてやれと思つて、窓から入つて、ちよいと仕掛けをしたんです。そして、丁度そこへ、恋人の机上に捧げるべく、先生が花を持つて入つて来られたんです」

「まア——」

「あゝ危い、と思つた僕は、すぐ逃げて帰ろうとした所を大杉先生にぶつかつて、時間を取つてゐる間に、ドカーンと来てしま

「大丈夫ですか」

「えゝ、ほんの擦り傷ですわ。それに和田先生つたら……」

何か言いかけて、山田悪童君の存在に気がつく、後の口を結んでしまった。

「やれ薬だの繻帯だのと、看護を口実にして、ドラム缶の野郎がしつこく付きまとつて身体に触れて来るんでしよう」

「まア！」

「あゝ危い、と思つた僕は、すぐ逃げて帰ろうとした所を大杉先生にぶつかつて、時間を取つてゐる間に、ドカーンと来てしま

「まア！」

「あゝ危い、と思つた僕は、すぐ逃げて帰ろうとした所を大杉先生にぶつかつて、時間を取つてゐる間に、ドカーンと来てしま

「まア！」

「あゝ危い、と思つた僕は、すぐ逃げて帰ろうとした所を大杉先生にぶつかつて、時間を取つてゐる間に、ドカーンと来てしま

「まア！」

「あゝ危い、と思つた僕は、すぐ逃げて帰ろうとした所を大杉先生にぶつかつて、時間を取つてゐる間に、ドカーンと来てしま



掌 愛 小  
情 篇 説

税 務 署 員 と

そ の 戀 人

山 代 章 雄

志乃田よしろー・画



遠くの喫茶店あたりからセンチな宵待草のメロデーが流れてくる。桜は散り、早や夏へひと飛びに駆け出していく白い雲も、西の山へ消えて星がキラメき出し、青葉を掠める夜風も妙に胸を締めつけ出す。

大介君は待ち草臥れている。恋とは待つことから始まる——。

宵待草が夜のプラットホームになる。随分と古いレコードばかりかける店である。昨夜まではその喫茶店で彼女、美代さんと楽しい逢曳をやつてたのだが、一杯六十円のコーヒを、蚊のようにポチポチ吸上げるにしても、一時間保たすのは難かしい。彼女とで二杯分、百二十円、それへ税金がつく。

大介君、つくづくと考えてみたのだが、何と恋をするに金が要るものか——と云う愕きから始まり、所在なく吹かしている貰一本にも、又、美代さんの柔らかいおてゝを握つた夜の感激につられて、うつかり飲んだお酒にしたつて税金で作られてるよう

なものだ。

恋と税金——処が大介君は税金を呪えな

いのである。何故なら彼は税務署勤め——

昨夜、別れる時に彼女は囁いた。「ネエ、喫茶店なんて平凡だし、それに浪費だし、嫌な人の眼があるし、ウチかなんし……あほらしいし——」

恋人の言葉はその儘詩である。實際に於てシが多い。内気な大介君は我意を得たりと喜んだ。二人きりになりたい——これが恋愛の躍進でなくて何であらう。美代さんは喫茶店を出た時、振返つて上の方を指差した。その指の先を何気なく大介君眺めて赤面。お二人様の静かな休息に！お越し下さい——桃夢郷。紅いネオンで囲まれた旅館の広告である。驚きは轟きに交つて大介君の脚が震えた。如何にも人眼がない所ではあろうが、とてもお廉くない金を支払わねばならないであらう。胸算用するまでもなくこれは莫大な浪費になりそう。処が、これは大介君の早合点で、美代さ

んは丘の上の公園を指差したのであつた。

無料で静かで気分も清々しい。銀行の会計の仕事をやつている美代さんは、他人様の顔を余り見ない場所で仕事をしている。だから癪つと人に見詰められてることが堪らない。彼女は結婚した時に一錢でも多く貯金を持つていたかつた。

大介君とは、のど自慢の会場で知り合つた。彼は俗曲の部で「秋田おぼこ」を唱い彼女も俗曲の部で、「津山音頭」を唱つた。皮肉にも、津山生れの大介君が美代さんの故郷である秋田の歌を、反対に、美代さんは大介君の故郷である津山の歌を唱いお互いに同県人だと感通した。

歌がとりもつ縁かいな……

二人は急速に結ばれなかつた。非常にスローである。愛しあつてると判つてゐるから何も今更、愛してゐるとか惚れました——なんて云うことが大介君は面倒臭いし、一つには甚だ気の弱い点もある。美代さんの方も心の中で算盤を弾いてみると、二人を

加えて情熱を掛け、見栄を差引くならば、答えは結婚と出た。早い方がいゝ。このカローリを家庭へ貯金すれば、生活安定という利息がつく。

——大介君は遂に三時間も待つたのである。簡単に三時間と云つても大変長いもので、ましてや来るかくるかと待つ身の辛さ——とても口笛やハーミングで誤魔化されるものではない。会社から直行するという約束なので、大介君は彼女の為にハムサンドを用意していた。無論それを二人で食べる心算だから、彼も腹ペコを我慢している。幾組となくアベックが目前を流れて行く。それを果やりと大介君眺めていた。まるでお祭へ小遣を忘れて来た恰好だつた。如何なる理由があるとしても、もはや男たるもの、絶対に立腹せざるべからざる程の遅刻だ。例え美代さんが、涙を流して謝罪したとて許せないぞと大介君は考えた。ヤケになるという気持——それがポチポチ解るよう



# 奇譚百話

## 都会の溜息

信士寒郎



### 第六十六話 女の足を覗く

#### 獨身青年は語る

その日もボクは歩き疲れてデパートへ入つて行つたんだ。が、生憎く二階の椅子も三階のも満員だったので、仕方がないので一番廉だが地下室へ降りて行つた。そこでボクはやつと空いた椅子を一つ見つけて、いつもの様に腰を下ろすと、静かに鼻から煙りを出し初めた。

そこは食料品の売場であつたので、来る女も来る女も、どちらかというところ、若いボクには不愉快な程世帯じみていた。やがて何の気もなく顔を上げると、ボクはハツとして天井をじつと見詰めた。この上は一階入口の喫茶室の真下に当るらしく明り取りのガラス窓が四角な白さを見せていた。

ふと、その中にボクはその窓の一つが最近取り替えられた形跡のあるのを見つけた。他の窓は全部厚いスリ硝子であるのに



その一枚だけは普通の硝子になつてゐるのだ。臨時の間に合せにしたものらしいが誰もそれに氣のつく者はいないのか。アとボクはじつとそれを眺めていたのだ。氣がつくと、その窓にちり／＼と白いものが映つた。ボクは何かに思ひ当るとはツとなつた。いきなり胸がきゅつと引き緊ると顔が一時に赤くなつた。

窓の上に女がゐるのだ。女の白い太股の色が、その真下に坐つてゐるボクの瞳にはつきり映るのだ……。ボクは知らぬ間に、かたづけをのんでゐた。そのふくよかな素足はちらり／＼と動いた。白い白い影が……。

な氣がしてきた。

そこで大介君は焦々しながら歩き始めた。仄かな月夜である。木蔭の間を縫うようにして歩いた。矢張り一杯六十円でも美代さんの顔を確実に見られる。あの喫茶店の方がいゝなアと嘆息を洩らして歩いた。

遂には何処を歩いてゐるのか大介君、自分で自分の位置が判らなくなつた。星は輝き、丘の下例の喫茶店から一杯のコーヒーから……という歌声が流れてくるのを聞き思わず深い溜息を吐くと草の上に坐りこんだ。まるで皮肉じやないかと涙がにじみ出る。大介君は胸からハムサンドを取り出し、味氣ない顔でかぶつた。涙がホロホロと流れた。パンに塗つたカラシがきつかつたのである。

最初は何が大介君には解らなかつた。とにかく涙に濡れた眼の前に、すんなりとした女の姿が見えた。ハンカチで慌てゝ眼をこすつて見直すと、一間程前の草の上に、町の燈を見下しながら一人の娘が坐つていた。

「あゝ……死ぬより仕方がないわ——」

確かな声で呟やくのが聴えた時、ハムサンドの塊を大介君は大急ぎで吞込もうとした。これは良くない結果を招いた。それだけでなくとも三時間も立ん棒で焦々し、チラッと女の影を見てさえ、もしや……と固唾を吞み續けてきた為、口中には砂漠のように水氣がなくなつてゐる。そこへグツと呑み込んだのだから、とたんに、ウーム。

人のことだと皆はよく笑うが、やつてゐる本人は大変である。何しろ生命に拘ることだから必死だ。夢中で大介君は草を叩いた足の靴を踏み鳴らした。転げ廻つた。「どうなさつたの——ねえ。毒でも飲んだ

の？青酸加里？それとも劇薬？」

抱き起された大介君、眼を白く睨みつけながら、お門違いの質問に怒つてゐる。モ、ハが云えないので涙が流れる。

「失恋ですの？それとも公金カイ帯？競輪で取られたの？ねえ、そんなに苦しいものなの？私も此処で毒を飲んで死ぬ氣だつたのよ。そんなに苦しいのなら私、やはり考え直そうかな……だつて、死んだ後で見苦しい恰好だつたら羞かしいんですもの。ねえ——」

大介君は生死の境、分岐路、地獄の一里塚の手前——暢氣な話じやないのである。

と、洋装のその娘が肩から掛けてゐる水筒が、月の光でそれと見えた。夢中である。ひつたくつて栓を飛ばすとゴクン——

「駄目、駄目よ、そ、それ、その中には毒が入つてゐるのに——」

「ゲ——ッ」

大介君吃驚した。如何にせん！もはや一息飲んだあとの祭。まゝよと吐がすわつた。

「死んだつていいさ」

イヤに落付いてしまつた。涙が又流れた。「僕は裏切られたんだ。死んだつていいんだ。いや、一層のこと死んでしまいたい」洋服のポケットから裏を出して吐えた。度胸を定め覚悟を決した態度である。

「どの道僕は何れも死に損つてきた男だ。戦地で生き残つたのが不思議な位だ」

嘘も嘘、大嘘の八百である。大介君は戦争中沿岸警備兵だつた。カーツとしてゐるのだ。ヤケクソになると面白ものだナアと心の裡で感心してゐる。娘さんが下を向いてオドオドしてゐるのが、大介君の意識の中で一層腐るのだ。死ぬと云つたこの娘



ボクの瞳はギラ／＼と輝き初める。  
それからどれだけたつたか、ボクにとつては時間なぞ更に問題でなかつた。ボクは只もう窓と、その窓に映る女の白い

足とそれだけの世界に生きていた。  
突然、桃源の夢を破る開店を知らずべルを、ボクはどんなに恨めしく思つたことだろう。

## 第六十七話 妾は馬鹿な女

### 或る娘の告白

あたしは弱い人が大嫌いだわ。お転婆娘かも知れないけれど、此のあたしの身体を痺れる程、クタクタにして呉れる人つてないものかしら。

初恋の相手——気弱なというより憶病なくらい、あたしの手さえ触れないこの人が純情というのかしら？

逢つて歩いて、話し合つて映画を見たり、お茶をのむのはすぐつまらなくなつて、それであたしから言い出して静かな郊外の木蔭で二人つきりになつたのに、いつもの通り、おど／＼して、あたしの顔さえ見ようととしては呉れないの。「つまらないわ、帰りましょうか」

やさしくすねて、謎をかけてみても、一向に通じる相手でもない。あたしが気嫌を損じたとしても思つたのでしよう、只黙つて立ち上つて駅へ通じる道を歩いて行つたの。

それきり手紙さえ呉れなくなつた初恋の人は次第にあたしの眼中から消えて、次に現れた相手は、力強くあたしの身体を抱きすくめて呉れるピアノの教師

男性的な振舞いを待ち設けるのは娘の本能でしようか。今になつて考えれば、それはいけない事だと思つていても、尙更、禁断の木の実は、あたしの肉体を妖しく誘惑するのです。

子供が三人あつて、胸を患う病妻を抱えた四十男。そんな男があたしの最初の相手になるなんて……。  
ピアノの御稽古は一週に一度、父も母



も外出して、あたしが一人お留守居を言いつかつた日に丁度ぶつかつてしまつたのがいけなかつた。いやあたしの肉体の中に集く情慾の鬼がいけなかつたのだわ。

肉慾の陶酔の大きな錯覚、いいえ、それよりも病的な情熱のはけ口を求めて、淫らな妄想の虜になつていたあたしが馬鹿な女だつたのですわ。

時計の長針が盤面を一廻りもしないうちにあたしは、さつきとは違つた自分を発見しなければならなかつたのですもの。通り魔、ほんとにそうです。まるで悪夢のようにあたしの肉体の上を駆けめぐつた思い出、女つて、ほんとに駄目なんです。処女を捧げたというだけで、愛してもいない男に、父母にかくれて関係を續けているのです。

だつて、何にがなんでも、父母がこのあたしを許してくれる筈がありませんもの。あたしの様な馬鹿な女が又とあるでしようか。

を驚ろかしてやろう——位の心算で、大介君は芝居をしている気なんだが、娘が神妙になつたので戸惑い、この調子でイデマエ……と空気で叫びだすと妙に調子づいてきた。

「生きてるなんて下らないよ。さあ、君も死ぬつて云つたらう、ね。先刻そう云つてたね。殺して上げようか——どうせ死ぬんだらう。いいよ。僕が序に殺して上げるよ。」

「いえ、あ、あたし……」

娘さん、尻の方から逃げようと試みた。処が仲々牀の自由が利かない。ぐいつと大介君に手を掴まれた。肩を激しく引寄せられた時思わず眼を閉じた。

娘さんは甚だ美しくなく顔立だつた。

家は可成商会というお金持だが、三人兄妹の縁談が十組？も申込まれ、一時は感激の中にあつたものの、愈々という処で親父が持参金を出し渋る為に破談に終つてしまふ親にしてみれば金を目当てと見え透いているので、娘の前途を案じてのことだつた。

「ああッ……私を殺すの？」

大介君の顔の下に美しく匂う顔があつた。月の光は魔術師である。まして生きるか死ぬかの重大な場合だから、娘さんの顔は輝やいている。醜いといつたつて処女の美というものは又別の違つた輝きを持つてゐる。

「君の名前は？殺すにしたつて名前位知つときたいからなア——」

大介君は精一杯の空気を絞る。もう娘の吐息を吸いすぎてボウツとなつてゐる。

「夜詩子……夜という字と、詩、ポドレーヌの詩というあの詩ですの……」

夜詩子は大介の顔を見上げながら云つた



頸へ彼の掌がかかつてゐる。じり、じりと絞めつけられていた。  
「夜詩子、よし……じや覚悟をしたね」ふとセンチな熱いものが大介君の顔を急に重たくした。冗談とは云え、本当にこの娘は死ぬ気なんだらうか——愛情が急激に湧上つた。美代さんのことを忘れていた。一時に得体の知れぬ情感が又頭を重くした物理学的な法則として重きものは沈む——柔らかな夜詩子の頬に触れた唇が、慌てて彼女の唇の上に重なつた。下の喫茶店から何とかルンバが流れてきたが、もう大介君の耳には聴えない。美代さんのことも……毒薬入りの水筒のことも……自分達が今何をしているかと云うことも……忘れていた。

二人は並んでハムサンドを喰べた。運動後の食慾は又格別である。水筒のコーヒを二人は飲んだ。夜詩子さんが嘘を云つた訳でもないのだが、実は用意した薬をまだ入



## 第六十八話 内股のほくら

### 或る少年の話

電車に乗り降りする娘たちの白い素足や脛に限りない憧れと興味を感じて、恐る恐る盛り場の停車場に佇む私なのですが、此の私に、女の裸を遠慮もなく拝ませて呉れるのがストリップショーなのです。

勿論私の様な親がかりの少年に、百円も二百円もする立派な劇場へは行くことは望めませんが、街の焼跡に小屋掛けをした〇〇座の裸踊り専門のショーは、こよなく私の慾望を満足させて呉れました。入場料三十円で入れ替りなしの連続裸踊りばかりというのが私にはたまらない魅力なのです。

天幕が風にはためいて、一瞬明るくなったりしますが、外気に慣れた眼で人の顔さえ弁明出来ない暗さは、少年の私にも恥しさを感じなくてもすむのでした。小さい身体の方は、大人の足の間をくぐつて一番前のかぶりつきへとりついて背のびしながら眺めるのです。

すり切れてガリ／＼雑音の多いレコードに合して、総勢五人の娘たちが殆んど全裸に近い姿で、あまり上手ではない踊



りを入れ替り立ち替り踊るのです。

その踊りが上手でないということが、私のように女のハダカそのものを見に来る者にとつては、本当に有難いのです。赤や青の裸電球に照らし出されて、私の眼にはその娘たちの生毛や毛穴までがはつきりと眺めることが出来ます。

五人の踊り子のうちで四人迄は、身体がダブ／＼と大きかつたり、色が黒かつたり、顔が鬼瓦のように恐ろしかつたり背が高くカガシのように瘦せていたりして、私の理想の女には程遠いのでした。最後の一人は、中肉中背の色白で特になつこり笑うエクボは、男の心を動かすようなコケツトリ／＼なところがありました。

私は心ひそかに独りでこの女に恋い慕つて、ひまさえあれば、この小屋に姿を現していました。私はもうこの女ばかりを見ました。舞台の中央に横になる彼女の可憐な裸の姿に射るような視線を注いで、何時間もかぶりつきに立ち続けるのでした。

或る雨の日です。蒸し暑い人いきれにもまれて私は相変らず舞台にとりついていました。もうそれは何十度も倦かずに眺めた彼女の踊りでした。

均整のとれたなやかな脚を伸して舞台の中央で高く上げて彼女は横に倒れました。ああ私はそこで何を見つけたでしょう。今迄何十回となく眺めた真白い彼女の太股には嘗て見たことのなかった大きな黒子がはつきりとついているではないですか。

私はこの内股の黒子にとりつかれてとう／＼学校もしくじつてしまいました。大きな太股の入れホクロのために――

れてなかつた。しかしそれが先入観になつていて、思わず大介君へ毒入りだと叫んだのだ。人間て奴は、或る目的を果すと妙に落付いて事を考え直すものである。

翌朝、可成商会へ大介君は乗込んだ。差押に行つたのではないが、確かに何かをサシオサエた事実はある。直接可成氏に談じて夜詩子さんを下さいと云つた、僕は無一文、現在税務署に働く男です。身分が違ふなんて封建的な事は云わんで下さい。男一匹覚悟も仕度もあります――何しろ現物を下宿へ置いてあるので非常に威勢がいい。可成氏も考えた。税務署に弱い尻はないがこの男は、まことに真面目そうである。よろしいと思つた。

「何も仕度してやれんがいかね」

三日経つて夜詩子は大介君と結婚した。二階住いの下宿生活でも愉しかつた。金のことと元来大介君は気にしない性質だつたので、愛妻に貯金帳とハンコを渡してのんびりしている。夜詩子さんは全く良く仕えて申分ない妻であつた。夏の夜、屋根裏のむし囂さ、冬の夜、屋根裏の身に沁む寒さ（家が欲しいなア）と大介君は夜詩子さんに云つた。落さないなア、君は金持のお嬢さんなのに苦勞させて――夜詩子さんはその夜泣き明した。醜い自分をかほどまでに愛してくれる良人――翌朝、実家へ駆け込むと、父母の前で泣きながら訴えた。すでに桜が散り、白い雲が空に飛ぶ頃だつた。一年間、じつと娘の上を注目していた可成氏は、ウムよしよしと頷いた。

大介君は公用で東上して四日目に、狭いながらも愉しい屋根裏へと、銀座土産を抱えて飛ぶように帰つて来た。夜詩子さんは玄關で大介君を迎えた。そして、どうぞ……

……と奥の間を指差した。下の老夫婦は留守かなと大介君怖る怖る入つた。とたんにアレツと云う顔で棒立になつた。確かにこれは屋根裏の部屋で見た机であり布団である。小さな本箱も自分の品に違いなかつた。「お風呂へお入りになるでしようあなた」「フロア／＼、行つてもいいが……」

夜詩子さん笑いながら大介君の手を握つて、縁先に出て風呂場へ案内した。お加減もいいからと大介君裸にされた。流しよし……とシユミーズ姿で後ろへ廻る。大介君、茫然として湯の中で只ろろろ――可成氏は、家の中に二人の姿が見えぬので変に思つた。可愛い末娘を倅にしてくれた男へ、一年振りの出し遅れた持参金、大した金でもないが、チョツと五百万円、自ら届けに向いてきたのだ。開け放たれた庭の方から誰かの声がした。ハハア風呂場じやわいと可成氏は覺つて、娘がセガんだので俄造りだがどんな様子か――とそつと覗きに行つた。

――なあおい婆さん。風呂へ入ろうと思ふが、お前、そのう、わしの背中を流してくれんかな。いや何、そのう何だ。ウフンコレ、痛い！女中が笑つとるぞ。ウツフンじや入るか一風呂――」

可成氏は夕刊を投出して立上つた。

三面記事の片隅に

「春過ぎたれば」という見出しで、遺書を残して美人服毒自殺、S銀行会計部の素人美代（三）は、一年前の今夜、恋人を待たせながら、つい金持の中年男に誘惑され、金に眼が眩んでその男と同棲したが、男には妻子があつた為にトラブルが続き、遂に厭世自殺に至つたという事が細々と認められてあつた。

（完）



# 姉の秘密と妹の秘密

佐々木 喜多玲子 画

女の秘密は、桃色のベールに包まれている。發展娘の妹は戀人とのかくれた冒険を楽しむ。内氣娘の姉の秘密は果して……？

だが、今日は素直に見送つていた、やはり最前の事がひどく氣になつて照れているのだらう

一

「この着物いいね、断然いい、僕は好きだ  
洋子さんが眩しいほど美しく見える」

浩治のアパートで、口をきわめてほめられた。

「いいでしょう、あたしも、とつてもこれ好きなのよ」

袖口を指でつまんでぴんと張つて見せた  
「ほんとうにいい、令嬢に見えて近づき難い氣がしますよ」

「いやよ、そんなにみつめてばかりいて……」

……ねえ、いつものように……」

洋子は鼻にかかつた声であまえた。

「着物だけ脱がなきゃ、皺がよるよ……」

「いいのよ、皺がよつても……」

「しかし、惜しいなあ」

浩治は腕時計をのぞきこんだ。

「もう、三十分すれば、友達が来るんだ、

ゆつくりはしていられないし、困つたなあ」

「いいのよ」

洋子は、ぱつと浩治の膝に乗つた。もう着物へよる皺のことなど考えていられなかつた。

暫くして扉をノックする音に、洋子はあわてて枕元に投げ出していたものもろの物を袂へ突きこんで、立ちあがるなり着物の皺をのぼし、窓下の机の前に坐つて、汗ばんだ額をハンカチでたたき、コンパクトを出して、神妙にのぞきこんだ。

「いまあけるよ」

浩治の手に、ぼろつと顔が赧らんだように思つた。

「悪いところ来たね」

「いいんだよ、入り給え」

「すまん、すまん、お楽みのところへきて、とんだ艶消しだつたね」

「いいんだよ、昨日から約束していた時間

だし、僕も待つていたんだ」

訪問客は、それでもなにか、くどくど言いなから入つてきた。

「紹介するよ、僕の友人市橋……近く結婚する洋子さん」

すつかりおちついた浩治は、なにもなかつたように言つた。

「浩治さん、あたし帰るわ」

羞恥がつきあげてきて、この場にいたたまれぬ思いがする、先刻の狂乱の姿が頭に泛ぶと、しらじらしくけろりとしている氣にはなれなかつた。

「いいんですよ、洋子さんもいて下さい市橋は、創作を見てくれと言つているんだから、あなたも忌憚のない批評をしてやつて下さいよ」

「あたしなんか、とつてもそんな才能はないの、また晩にくるわ」

洋子は逃げるようにしてアパートを出たいつもなら、しつこく引きとめる浩治なの

二

「いやだわ」

明石の単衣の袂の破れをみつめて、洋子は眩いた、見ていると、がらむしやに腹が立つてきた、ことを欠いてこの着物の、それも袂噛むなんて、鼠への憎悪がこみあげてきた、浩治がまぶしいほど美しく見えると言つてくれた、着物、それを思うと残念でならなかつた。

この単衣を手に入れるまで、どれほど努力したことか、父母へのおねだりの数が知れぬ、洋子の強引なくいさがりに根負けした母が、父には内密で買つてくれた曰くつき着物の着物の、というのは、姉の由美子が結婚を間近にひかえて、その調度品の購入期だつたので、洋子の衣服など父母の念頭になかつた、そんな雰囲気をおしきつて手に入れたのだから、洋子は獅子奮迅の活躍をしたのだつた。それが、愛人の浩治の



賞讃をうけたのだから、その得意さはまた格別であつた。

「まあ洋子つたら、簞笥の抽出を二寸ほども開けて、昨晚はこのまま休んだのでしょ

う」  
朝がた、二階あがつてくるなり母の種子は、こう言いながら、びしんと抽出を押し

た。  
「これから気をつけねばいけませんよ、風

にでも噛まれたら大変じゃないの」

「これから気をつけまーす」  
半裸で鏡台をのぞきこみ、首すじへクリ

ムをすりこみながら、種子の今日の叱言第一号をはねかえした。

「おまえは由美子とちがつて、しまりがな

いから先が案じられる」  
種子の叱言にふふと笑つた。

「母さん、あたしの行状を知つたら氣絶するかも知れないわ、姉さんは処女、あたしはフ、フ、」

「なにがおかしいの、親の注意を鼻先きで笑うなんて……」

「ちがうのよ」

叱言第二号に、美しくなつた顔を種子へ向け

「明石の單衣のことを思うと、うれしくなつて」

殊勝氣に言つた。

日曜だつたので、遅い朝食を食べていると、由美子がどこから出てきて飯台の前に坐つた、家にも存在がはつきりせぬほど静かな姉である。

「お姉さん、まだだつたの」

「ええ」

「一しよに召上らない」

二本の箸をひろげて、自分の前の食器を



移動させた。

「まあ、お行儀のわるいこと」

由美子は左手で袂をおさえ、右手をのぼして静かに食器をひきよせた。

洋子の健啖にひきかえ、由美子は一ぱいきりで茶碗をふせた。

「どうしたのお姉さん、お元氣がなさそうよ」

「なんだか胸につかえたようで……」

「結婚が氣になるのね、お姉さんの感情は江戸時代ね、もつと勇敢にならなくつちや駄目よ、男女同權ですよ、主人に洗濯でも手伝す心臓が大切よ」

洋子は盛んにばくつきながら言つた。

「そんなことではないのよ」

「じゃ、なにかほかに氣にかかることでもあるの……」

「いいのよ」

由美子は静かに立つて奥へ入つてしまつた、なにか心にわだかまりがあるように思え、その原因探究に洋子は興味を感じ、パジャマのボタンをとめながら、姉を追いかけて奥へ入つた。

膝に赤い紋羽二重の長襦袢地をひろげて由美子はぼんやりみつめていた。

この長襦袢が皺くちやにされてしまふ、洋子は嫉妬めいたものを感じた、女になつているだけに、あらぬ妄想が頭に泛んできた。

そんな想念をふりおとすように

「お姉さん、心配ごと、洋子にうち明けて下さらない、わたしお姉さんのためだつたら、どんな犠牲にもなつてよ」

「ありがとう」

「煮えきらないのね、結婚がご不満なのでしよ、洋子、ぶちこわしてくるわ」

「あら駄目よ、結婚がいやじゃないの、わたし、あの方、ほんとうに好きなのよ」

「ほうつと頬を染めてうつむいてしまつたらあら、違つた、ごちそうさま、だつたらなんなの」

「もういいのよ、いまに判るわ」

こんな由美子と話すことは氣ずまりだたし、また、かまつてもいられなかつた、午後から浩治と歌舞伎座を約束している。

「じゃあ、またあとで」

洋子は、トンコ節の口笛に合して二階へとびあがつてきた。

簞笥の抽出を三寸ほど開けて明石の單衣をひきずり出した、浩治が好きだつたというのを今日も着る氣になつていた。

「あらッ、こんなことになつてゐるわ」

單衣の袂をつまみあげた、明らかに鼠の仕業である、袂のそこが穴だらけであつた、母に報告すれば、また叱言である。

「いやんなつてしまふ」

男のように、ごろりとあおむけに寝て天井裏を睨みつけた「鼠め鼠め」と呟いた、たつた一夜しめ忘れただけに、明石の單衣だけが鼠族一味に狙われて、台なしにされるなんて、どうにも承知できなかった

「どうしてだろう、袂が袂だけが」眼を宙にすえて考えた。

「あらッ」洋子はそう叫んで顔を真顔にした、あの日のアパートでの狼狽、もろもろの品を袂につきこんだことが思い出された

「エロ鼠め」と呟いて起きあがり、袂を手にとつてつくづく眺めた。

セツトに行つて、この着物を着て、浩治と二人でお芝居を観る、そんな楽しみがふ



きとんでしまった。

「洋子、お出掛けじゃないの」

由美子が入ってきた。明石の着物をあわてて、くるくる丸めながら

「もう、行かないのよ」

と答え、丸めた着物をぼんと部屋の隅へ投げて、ごろりと不貞腐れたように横になった。

「まあ、どうしたの」

由美子はそう言いながら、丸めた着物を拾ってきて、畳の上にばらりとひろげた。

「まあッ、鼠が噛んだのね」

「エロ鼠よ」

くすりと笑った。

「エロ鼠つて……」

「お姉さんにはわからない」

一瞬、変な優越を感じた。

「洋子、あなた、糊のついたものを袂に入れたとちがう？」

「糊、ホ……」

着物を抱いて笑いこぼれた。

「変なひと、お出かけだろう」

「行きたいんだけど、糊づけ着物では……」

「……」

「わたしのを着ていらつしやい、同じ柄のを持っているから」

「でも、お姉さんのお嫁入衣裳でしよ、皺にしちや大変よ」

「いいのよ、それにこの着物、お袖の分だけあまつているから、直しといてあげるわ」

「わるいわ」

と言ったが、洋子の心は浩治とならんで歌舞伎座の椅子席にもうこしかけていた。

「じゃあ、お借りするわ、そのまえに噛まれた片袖、といて持つて行くわ」

「このままにしておけばいいの、あとですぐ直しておくから」

「ううん、噛れた片袖、見せたいひとがあるのよ」

洋子は手早く片袖を解いて、噛れた部分を鉄で切り取って、ハンドバックへ入れた。何も知らぬ由美子に見られたのはなんの痛痒も感じなかったが、母には見られなかった。

着物ができると洋子は急に元気になった

「お姉さん、てつだつてよ」

鏡台の前に座りこんで化粧をはじめた、もうセットへ行く時間はない

「このアップスタイル、とても洋子によく似合うわ、前髪のアクセントなんか、とても個性を表現しているわ」

こんな純情な由美子に、ランデブーに行く化粧を手伝うなどと思うとなんとなく気が咎めた。

### 三

観劇が終つて、執拗に迫る浩治の腕をふりきつて帰ってきた、借ものの単衣に皺をつけたくなかつたし、またエロ鼠に噛れては大変だと自重したのだつた。

晩の食卓を囲んだとき

「猫を飼いましょ」

と洋子は提案した、浩治の忠告なのである。

「猫なんかいやなんだけれど」

「鼠がいなくなりますよ、猫も飼つてみると家族の一員のように思えて、あの柔順さに愛情がわきますよ」

「あなた好き？」

「僕は好きですね」

「浩治さんがお好きだつたら飼つてみるわ」

歌舞伎座の話をそのまま持つて帰つて、いきなりの提案



である。

「被害者は真剣だね、だがエロ鼠つてどんな意味だい」

阪大に行つてゐる兄の良太が変にからんできた。由美子から聞いたのだらう。

「女の着物なんか噛むからよ」

この思いつきに洋子は、またくすんと笑つた。

「それでエロ鼠か、なんだそれきりか、僕はおまえがあまり発展しているから、もつと深い意味があるのかと期待していたんだ

洋子、今後、袂へ餅や饅頭を入れるなよ」  
糊つきの追究はこれで難をのがれたらし

い。

「そりや真剣よ、猫を飼うこと兄さん、どう？」

話をもとへ逸早くもどした。

「飼つてもいいよ、僕も、ミットを噛まれたんだから被害者だ」

「お父さんは……」

「各個訊問かわ……民主的に多数決とするか、わしは最後に賛否の態度に表明しよう

現在のところは筒井順慶だね」

「卑怯よお父さんは、じゃあ、お姉さんは？」

「絶対反対よ」日頃の由美子に似合ぬ激し



い口調だつた。

「どうしてなの……」

「猫は陰険でいやよ、猫の鳴声には鳥肌になるわ、着物の一枚や二枚の犠牲をはらつても猫はいやよ、まして夜の時の声なんか……」

由美子は真赧な顔をして激しく反対した  
「でもお姉さん、婚礼衣裳を噛まれると大変でしょう、猫がおれば鼠がいなくなつて衛生上にもいいわ、それに飼っていると自然に愛情が湧いてくるそうよ」

洋子は猫が飼いたかつた。恨み骨髓に徹している鼠の直接被害者でもあり、また浩治の言葉も尊重したかつた。

「お母さんはどう？」

「可もなし、不可もなしよ、でも猫は、はだしで、不潔な所を歩いて、そのまま座敷へあがるでしょう、それがいやなの」

「下へ降らさないようにするわ」

「なんとしてでも猫が飼いたかつた。」

「二対二だね、それじゃ採決するかね」

父が髭についたビールの泡をふきながら言つた。

「多数決はいやだわ、一人の意思を無視するなんて暴力的よ、ファシズムだわ、猫は肉食獣よ、鼠をとらえて、散々もてあそんでから食つてしまふ、あの惨虐性が見ていてもぞつとするわ、陰険で狡猾で猛猛で不衛生で、どこに一つとして美点がない、わたし、大反対よ」

由美子のどこにこんな激しいものがひそんでいたかと、眼をみはる思いがした。

「でも、お姉さん、仔猫、とつても可愛いわ」

由美子の反対が強ければ強いほど、洋子は面白さも手伝つて自説を固執した。

「洋子、わたしだけが、わがまま言つて……」

許してね、わたし猫が嫌いと言うよりも怖いのよ、だから、どうしても飼うのだつたら、わたしが結婚してからにしてね、お願いよ、それまでに鼠害があつたら、わたしはみんな弁償するわ、それまで待つててね」

涙を浮べて哀願する由美子を見ると、洋子もこれ以上、自説を主張することができなかつた、こう争つてまで猫を飼う必要はなかつたのだが、浩治が、どうかで仔猫を探してくると言つた、好意を裏切るのが寂しかつた。

#### 四

猫を飼わなかつたがために、破綻するではなからうかと案じていた、浩治との愛情交渉も、一秒の休止もなく進展して、近く結婚の運びにまでおちついてきたし、由美子も猫の恐怖もけず、とどこおりなく新婚生活に突入した。

由美子は里帰りをしてから、暫く実家へ姿を見せなかつた。

食後、燈下の集いで

「由美子、どうしているかしら」

と種子としての心遣いの言葉が出た。

「よろしく円満にやつているだろう」

新聞をのぞいた父は、こともなげに言つて髭をなでた。

「ねえ洋子、お母さん、明日あたり由美子の様子を見てこようかしら」

話のほこ先が洋子に向いた。

「でも、新婚家庭へ、親という条件で予告もなしに乗込むのは変よ、消息を尋ねるお手紙出して、訪問日を予告するのよ」

「突然に行く方が喜ぶと思ひけれど」

「駄目駄目、そんなことは盲目の愛よ、お姉さん、いまは一人じやないんだから」

「そんなものかね」

結局、手紙を出すことにした、三日目に美章園の由美子から返事がきた、要約すると、まだ新世帯でおちついていない、こちらから、御案内するまで来てもらつては困る、近日中に夫婦揃つて明るい顔をお見せする。

という返事であつた。

「それ御覧、やはり行つちや駄目でしょ、お姉さんたちにも都合があるのよ」

お姉さんたち、そばで見ちやおれぬ、甘つたれた生活をしているのだから、キスくらいは公然とひとの前でするのかもしれない、それがお姉さん気になるのだわ。

洋子はそんな解釈をして、由美子たちを羨望した。

「親の子を想う情とは反対ね、洋子もそうなるのかしら」

種子は昏い顔をした。

「親のエゴイズムよ……結婚すれば何物にもかえられぬ、最愛のハズがあるんだもの嫁ぎ先まで追いかけてくる、親の愛情の延長は迷惑よ、お姉さん、きつとハズの愛情に食傷されているのかもしれないわ」

洋子は、浩治のことを頭に描きながら、づけづけと言つた。

#### 五

由美子夫妻は、返事の通り明るい顔で派手にやつてきた、黒のワンピースが由美子の色白をひきたたせ、粹なしぐさが身についていた、これが夫の辻の好みだろう。

一通り挨拶がすむと

「洋子、猫飼っている」

それが、由美子の最初の言葉だつた。

「飼つちやいないのよ」

「そう」

ほつとしたらしい由美子を見て

「お姉さんは、やつぱり猫恐怖症？」

「……」

それには答えなかつた。

「猫は陰険で、猛猛で……」

「もういいの、よして」

由美子は激しくさえぎつた。それぎりまで猫の話は中絶した。

辻が便所へたつた際に

「わたしの家へ来ることは、当分駄目よ、ご案内するまで来ちやいけないのよ」

猫を飼う相談したときよりも、もつと力を入れて言つた、血縁のものたちを一步も家へ近づけたくない気概が、烈々と燃えている

なにかある、洋子は、ちかつとしたものを感した。

「どうしてなの、そんな不合理なことは……」

親が娘の家へ行けないなんて……」

種子は顔色を変えて詰めよつた。

「なにかわけがありそうね、お母さんの納得がいくまで説明する必要があるわ」

洋子は、由美子の態度に不満を感じ、母への同情で胸が一ぱいになった。

「来るなど言われると、よけいに行きたくなるわ」

洋子は意地悪く言つた。

「駄目駄目」

由美子は超然として拒否した。

「予告なしにお見えになると、わたし自殺するわ、そのかわり、毎月一回は辻と連れ



立つて元気な顔を見せにくるわ、それまで、わたしのわがまま許してね」

由美子の常套手段である。哀願になつてしまつた。

辻が便所から帰つてきた。

「由美子、もうおいとましようじやないか」

立つたままと言つた。

「義兄さん、もつと、ごゆつくりしていらつしやいよ」

「そうはできないのです、これから帰りに目的がありますのでね」

「あらッ、映画、お芝居、ごちそうさま、それとも……」

「かなわんなあ、洋子さんには……白状しなければ釈放してもらえませんか」

「もちろんよ」

「あのね、医者へ行くのですよ」

「あらッ、早いことね、あきれたわ」

洋子は大袈裟に驚く真似をした。

「それになつたら困るから、指導してもらふですよ、親切な女医でね」

「じゃあ、あたしも紹介してよ」

「洋子さんに、そんな必要があるんですか」

「いまはないのよ、でも、もう少しすると結婚するんだもの」

真赧な顔をした。

「じゃあ帰ろう……、ねえ、お母さん、こんどの日曜日には是非来て下さいよ、うんとごちそうしてお待ちしています」

「あなた、いやよ、まだおコーヒのセツトさえないのに駄目よ、そんなことを言つちや」

由美子は辻の言葉をあわてて取消した、

「新家庭になにも揃つていないのが、また

面白いんだよ、是非、来て下さい」

「義兄さん、あたしも行くわ、新家庭の雰囲気を見学……」

由美子が反対の言葉をさしはさむまでに機先を制するように言つた。

なにか秘密がある、洋子は好奇心がわきあがつてきて、次の日曜日がひどく待たれた。

## 六

あれほど反対していたのに、母娘そろつて訪問すると、由美子は両手をひろげて迎えた。

「せつかく来て下さつたのに、辻は日直で留守なのよ、すみません」

辻の存在をことさらに説明する由美子の顔を見ながら、これは臭いと洋子は思ひ、なにかを嗅ぎ出そうと焦つたが、秘密らしいものの片鱗さえ見つけることができなかった。

由美子の心尽しのもてなしに気をよくしてばくついたり、おしやべりしているうちに、詮索心はうすらいでしまつた。

五時頃までおしやべりして、美章園の家を出たときは、陽が西に傾いていた、美章園駅へ出る近道、阪和線の高架線下へ出たとき

「お母さん、あれ義兄さんじやないの」

ずうつと前をいくワイシャツの男の後姿を、洋子は指さした。

「似ているらしいけれど、まさか」

「変だわ、追つかけてみましょう」

二十米ほど走つたが、駅から降りて来た人波に、辻に似ているワイシャツ男は吞まれてしまつた

## 七

辻が故意に他出して居留守をつかつた。すると……そこまで考えた洋子は、姉夫婦たちの生活態度に、大きな疑惑の眼を光らせた。

アパートへ浩治を訪れてこの話をする面白、なにかある、僕が主役になつて姉さんの秘密をみつけますよ」

馬車馬のようにいきりたつた。

「でも、なんだか、わるいような気がするわ」

「秘密をつくる姉さんたちこそいけない。……しかし辻さんたちの円満すぎる姿の毒消氣にあてられて、窒息する可能性が充分ありますよ氣をつけていなくちゃ」

「大丈夫よ、あたしたちだつて二人だもの負けやしないわ」

訪問の作戦を練つた。

「日曜日がいいわね」

「断然日曜だ、辻さんのいない留守のときなんか、意味なしです」

浩治は、こう然と言ひ放つた。

待ちに待つた日曜日、二人はいそいそと美章園の駅へ降りた。

「うまくやつてよ」

「自信がありませんよ」

「いまになつて駄目じやないの、心細いわ」

「僕は、保険の勧誘員に化けるのは生れてはじめてだから……しかし、うまくやりま

すよ昨晩から保険勧誘員虎の巻つてのを読んで勉強しましたからね」

「勧誘なんてどうでもいいのよ、観察が肝心なのよ」

「大丈夫ですよ」

口では大丈夫だと言つたが、浩治はひどく不安だつた。

戦災をうけていない、町の一面へ入つた「あのうちよ、小さい門のある」

「あれですか、いいうちですね」

浩治は大きく深呼吸して、「えへんッ」と咳ばらいをした、襟を正して、大跨に家へ向つて歩いて行つた。

洋子は十米ほどあとずさりして角の家の陰に身をよせて、浩治の帰りを胸を高鳴らせて待つた。

十和戸の松は、近郷近在に知られた、愛嬌たつぷりの白痴である。年は五十の坂を越していたが、精力満々その元氣さは二十代の若者に負けない位であつた。

彼は、僅かの労賃か与えなくとて調子に乗ればあたりまえの日傭人夫よりもよく働くので、百姓仕事の多忙な季節になると

# 農村 奇談 白痴男の戀慕

幸 島 源 太



門にとりつけてあるベルのスイッチを押しながら、浩治はふり返つてにやりと笑つた。もう覚悟がついたか、おちついていて門を入つた浩治はすぐに引き返してきて顔を真顔にして、たたたと駆け戻つてくる。浩治は口を手を当てる笑いをおさえている。洋子の顔を見るなり、気が狂つたようにいきなりアハ……と大きな声でいつまでも笑つた。

「どうしなさつたの」  
「おかしくて、おかしくて……」

浩治の笑いはなかなか止まらなかつた。「洋子さん、新家庭拜見にいきましよう、気づかれぬように、かいづかの生垣のすき間から、見るのですよ」

足音を低く二人は由美子の家を前へきた「ここから、なかをそつと……」

浩治に肩をおされて、洋子は好奇心に胸をはずませながら、そつとのぞいた「あらッ」と口まで出かかつた叫び声を、ぐつとのおおろし、いきなり駆け出した。

高架線沿いの道まで帰つてきて、ぎくんと立ちどまり

「お姉さんたら、お姉さんたら」  
「……」

「驚いたでしょう」  
「……」

「そりでしょう、とんだ猫恐怖症ですね」  
「ほんとうだわ、猫に煩うりしたり……見

ちやいられないわ」  
「あれがお姉さんの秘密ね……」

「あたしは、浩治さんのあることが秘密……早く結婚したいわ」

「ただ形式が残っているだけで……」  
「でも……早く帰りましよう、ア、バ、ト、へ……」

みつめる洋子の眼が濡れていた。(完)

# 奇譚奇談



雲泥の差があつた。彼は若い頃木挽で飯を食つていたのだが、その頃大きな楽しみの一つであつた女遊びが祟つて悪性の梅毒に冒され、その最大の治療薬だつた六〇六号とかいう注射が利き過ぎて、脳神経を麻痺させてしまつたのである。

松が白痴になると、たつたひとりの肉親で隣村に住む彼の兄は、他人のように冷酷に振る舞い、さんざん毒づきながらも現在の松の起居している六疊一間の小舎を建ててくれた。それから約三十年、松はあちこちの日傭稼ぎと貰いごとで、人間生活とは遠くかけ離れた、ケダモンのような明け暮れを送つてきた。

その日の夕方松は日傭仕事の帰り、ひさの家を覗いて見た。家人は誰もいないらしく、ひさがひとり縁側で遊んでいた。松はニヤリとし、あたふたとひさの側へ寄つて行つた。

「ひさや、何しとるぢや」  
松がよだれをたらしながら眼をとろかし、話しかけると、

「ヤ、ヤ、ヤ」ひさは喜びの奇声を上げながら、松の両腕を握り揺さぶる。これは松の愛撫を求める、ひさのいつもの仕草だつた。——松は、抱えるようにして、ひさを近くの納屋の中に連れ込んだ。

それから暫くして、ひさの父親が野良から帰つて来た。父親は、ひさの姿が家の中に見当たらないので、さては、と思い松とひ

さの入つた納屋に走つた  
「この阿呆んだ奴、今度来たら承知しねえぞ」

ひさの父親の威嚇の荒声を背後に、松は殴られた腰をさすりながら逃げて行つた。

そんな事があつてから半月ばかり過ぎた或る日十和戸の松はまたもやひさを訪れた

ひさは家の庭で犬とたわむれていた。松の顔を見ると、いつもの「ヤ、ヤ、ヤ」という奇声を上げて駆けよつて来た。松はすつかり悦に入つて、然し怯えた眼であたりを見延しひさの手をとつて引つ張つた。

「うちに、うちに」松はひさの耳にそり囁き、連れだつて往來に出た。

松はひさを自分の小舎に連れて行く考へだつた。この智慧はむろん彼の頭から出たものではなく、村の若者達の揶揄い半分の入智恵であつた。松はそれを本気にし、早速行動に移したのだつた。

村通を手をとりあつてほんの少し歩いて行つた時、彼方の路傍で遊んでいた数人の子供達が、松とひさのそんな姿を一言に見やつてワツと喚声を上げ囁し立てた。松とひさはそれに白痴笑いを返しながら、逃げ

る様に歩いて行くのだつたが、村のはずれの小舎近くなつたとき

「こら松、待て」と背後からの怒りの大声に、ドキリとなつて後を振りかえつた。子供達の注進で駆けつけて来たひさの父親だつた。

「何ちゆうこつた、このザマは」  
父親は松の手からひさを奪い離し、「警察にひつぱつて行つた」と喚き罵つた。

松はひさを奪られると、途端にオーと唸るような声を上げおいおい泣くのだつた。



# 女は泥濘の中



三宅  
リヲ子

京乙画

厳な道徳家だ。妻は死んだ。それなのに秋子を家に入れないのは、彼の社会的な立場の所為だ。一人の妻を守り通し、独身でいることが必要なのだ。

もう一度、倉田は横に頸を振った。

「じゃあ何かしら」

と秋子は本気で考えたが、ふと思いついた。

「みどりさんね？そうだわ。それに決つてゐる……」

みどりは倉田の娘だった。たつた一人の娘……。十九だから秋子とは八つ違いだ。影ながら、秋子はみどりを見たことがあつた。個性的な、いゝ顔をしていた。

「みどりさんどうかなさつたの？好きな人が出来たの？」

「そうらしいんだ」

「アラッ、そうらしいつて、随分頼りないお父さまね。お判りにならなかつたの？」

「あれはわしを憎んでいる……」

「悲劇ね。模範的な教育家が家庭では自分の娘に憎まれて……でも御心配なさることないと思いますわ。どこにでもあることですもの」

秋子は気軽に笑つた。

「笑いごとじゃないんだ。昨夜、わしはあれの日記を見た」

「あらあら、日記を盗み読むつていけませんわ。あなた、それで良心の苛責をお感じになりませんか？」

「修身の先生のようなことを云つてくれるな。わしは深刻なんだ」

倉田は指でこめかみをもんだ。

「三村健次という奴らしい。相当深いところまで行つてゐるんだ。あれの文章の書き方で、わしには判る」

「お顔の色、悪いわ」

と秋子が云つた。

「心配事が絶えないんだ」

「大変ね、ほんとに」

フツと、倉田は太い吐息をついた。

「そんなに顔色、悪いかな？」

「嘘にもいゝとは云えないわ」

「ふけて見えるか？」

「えゝ」

秋子はちよつと眼を伏せた。  
「四十八。お前より二十一も年上なんだからなあ、これでふけたら見られんだらうな。どうだ、若い男と寝たいだらう？」

秋子は返事をしなかつた。すねたような

顔をしてゐた。また何時もの嫌がらせが始まつたと思う。こうした対話の交された夜にかぎつて、狂おしいまでに燃える倉田だった。

秋子は少々うんざりした。妾という自分の地位……、ひいては倉田その人にも不満を持つようになつてゐる秋子だった。

顔には皺がよつてゐる、喉にも太い筋が眼立つた。だがまだ倉田は四十八という年齢からすればずつと若く見えた。いやに精神的なのだ。今夜のようにふけ込んだ倉田を、秋子は見たことがなかつた。何か、よ

ほど重大な心配事があるのだろうか。

秋子はわざと話題を元に戻した。

「心配事つて何ですか？」

「うゝ……」

と倉田はうなつた。

「あたくしには仰云れないこと？」

「やわらかくならんだ。だが男は答えないゆつくりと頸を振つた。肩もこつてゐるらしい。そんな頸の振り方だった。」

重ねて秋子は聞いた。

「学校のことですか？あたくしのことが見つかつたの？」

倉田は女学校の校長だった。学校では謹



「で、どうなさいますの？」

「きつぱりとみどりとは手を切らせるつもりだ」

「だつて、愛し合つてゐるんでしょ？」

「バカなことを云うな。愛情だつて？そんなものが何になる？三文の価値もない。愛しているだけで飯が食えるほど今の日本は楽に出来てないんだ。わしはどんなことがあつても二人を別れさせてみせる。そうだどんなことがあつても……」

倉田は勢込んで喋つた。そしてその後、ほつと吐息をつき、

「だが……」

と気弱くつぶやくのだ。

しばらく、秋子は考えていた。

「それがあなたの心配事ですの」

倉田をきつと見すえた。相手の考えを、底まで見抜いてしまふ深い眼の色だつた。急に倉田の表情に動揺があらわれた。

「何を云おうとしてゐるんだね？」

倉田はぎこちない手付きで煙草を吸いつけた。

「だつてエ……」

と秋子は甘えた声になつた。

「あなたほどの方ですもの。考えたことは何でも最後まで実行するあなた……。冷酷な、非情なあなた。ほんとにあなたにとつては愛し合つてゐる二人を別れさせるくらい何でもなしのことの筈ですわ。そのあなたがそれ位のことにとりしてそう御心配なさるのか、あたくし、それが判りませんの。今晚のあなた、とつても変ですわ」

「日記には色んなことが書いてあつた」

倉田はそつとつぶやくように云つた。

「みどりはお前のことも知つてゐるらしい……。」

若しもこんなカンヅメがあつたなら

山田清香



「そう、判りましたわ。強制的にお二人を別れさせると、みどりさんが今度はあたくしたちのことを明るみへ出される、とあなたは思つてらつしやるのね？だから不安なんでしょ？いゝえ判つていますわ。あなたはあたくしと別れようと思つてらつしやるのよ」

つん、と秋子は横を向いた。怒つたように見えたかも知れない。しかし本当の秋子は喜んでゐた。北原の顔が臉に浮かんだ。別れたい、別れたいと思つてゐる倉田だつた。何かの機会を掴んで云い出そうと思つてゐた。それを倉田の方から云つてくれたのだ。

「秋子」と倉田が呼んだ。手が伸びて来た「別れたくない。お前と別れたくない。それだからこそわしは苦しんでゐるんだ」

無表情な秋子の唇を、倉田が吸つた。……。

服にブラシをかけた。隣りの部屋で、倉田はまだ眠つてゐた。秋子に会ふと、どうしても朝の遅くなる倉田だつた。

丹念に、秋子はブラシをかけた。別れよう、と心に決めた男の洋服ではあつても、二年越ししみついた習慣は仲々抜けるものではない。無意識の裡について手入れをしてやるのだ。ワイシャツのボタンが落ちているとかぐりもする。……そんなことをしながら、秋子はふつと物想いにとりつかれたきつぱり別れようと決心してゐる。しかし本当はづるづると倉田の死に水までとる自分ではないだらうか。

朝日が縁に差してゐた。学校へ行く子供たちが塀の外を通つた。ガヤ／＼と話してゐる。駆ける足音も聞えた。

運命というものが、どういふものか判らない秋子だつた。倉田の洋服にブラシをかけてゐると倉田の死に水までとるのが自分の運命のよりに思えてくる。だが、秋子は三月続けて月のものを見てゐないのだ。もしや、という危懼があつた。

あくまでも用心深い倉田は、事情を複雑

にしないための彼独得の思いやりから、必ずコンドームを用いてゐた。生れるとすれば北原の子だ。そしてそれならば倉田と別れて北原と一緒にゐるのが運命のように秋子には思えるのだつた。倉田との生活は嘘に思えた。

「おい」

と隣の部屋から倉田が呼んだ。目覚めたらしい。

「はい、新聞、そこにおいてありますわ」

「何をしてゐるんだ？」

「お洋服の手入れ……」

「なに！」

倉田の声が変つた。寝間着の前をはだけたまゝ起きて来た。秋子の手から洋服を奪い取るのだ。眼がギラ／＼と光つてゐる。

「触るな！」

「あら、だつて……」

秋子がブラシを持つてゐるのを見て、やつと倉田は落ちついてきた。子供じみた自分の態度を恥じたらしい。急に間の抜けたような顔になつた。

「きよ、きよは手入れしなくていい。P



「TAの会合があるからな、型の崩れている位の方がいいんだ。真面目な校長に見えるだろう？」

「づるい方、あなたつてほんとにづるい方だわ」

そう云つて秋子は笑つた。だが心の底は笑つていなかった。どもつて云つた言葉はただの云いわけだ。嘘にきまつている。洋服のポケットに、見られては困る物を持つているのにちがいない、と秋子は思つた。

何だろう？何が隠されているのだろう？

これが普通の夫婦なら、酒場のマツチとか、口紅のついたハンケチ、女からの手紙……そういつた物を最初に想像することであらう。秋子はそんなものとは思わなかつた。倉田を信用していたわけではなかつたが、秋子一人のことにもよく／＼している謹厳な教育家だ。新しい冒険をするとは思えない。それにあつて方が常軌を外れていた。もつと深刻な、もつと重大な物である筈だ。

秋子は洋服にこだわらなかつた。強いて見ようとすれば争いになる。それではまづいのだ。そつと調べてみたかつた。

倉田のために洗面の用意をした。髪そりの湯は沸いている。

「秋子、袂を持つてくれ」

「はい」

「秋子、タオル」

「はい」

「秋子、鏡」

「はい」

何時もはこんなに細かい用事を云いつける倉田ではなかつた。顔を洗い、髪をそる間中、自分のそばから秋子をばらさないでいようとしている倉田の気持が、秋子には

察しられた。一人になる隙がなかつた。

倉田は顔中に石鹸をぬりたくつてゐる。今だ、と秋子は思つた。安全カミソリの刃を調べてみた。

「この刃、もう駄目ね、とつて来ますわ」

倉田を台所において部屋に帰つた。鏡台の引き出しを開けている態だ。素晴らしい早さで洋服のポケットを探つた。堅い物があつた。ガラスの小型薬品瓶……。塩のような、それでいて塩ではない完全な結晶体……。

それだけで全てが判つた。戦争中、女子挺身隊で製薬会社に徴用されていた秋子には薬品に就ての知識があつた。一眼見てそれが青酸カリだと判るのだ。

「お待ち遠さま」

と秋子は新しいカミソリのかえ刃を倉田の前に差し出したが、激しい感情の動揺を顔に表わさない努力だけで精一杯な秋子だつた。

### 3

倉田が出かけて行つたのは九時だつた。そしてそれから秋子の煩悶が始まつた。正午のサイレンが鳴つたことも知らなかつた。西陽が差して来た。

秋子は机にうつぶして大きな眼を開けていた。もう既に涙はかかっている。やつと立ち上つて外に出た。公衆電話は近かつた。

R新聞社を呼び出した。北原は社会部の記者なのだ。

「あたくし、……お判りになつて？」

「あなたの声を、僕が忘れるとでも思つてゐるのかな……」

北原の優しい声が聞えて来た。逢ひきの日は秋子の方から電話で誘うことに決めた。

ていた。その最初は何時もこんな対話から始まる。何時もと同じ調子で始まるということは、北原が秋子を待つてくれていることだ。涙は出つくしてしまつた筈だ。それなのに北原の声を聞くと、またもやぐつと胸におえつのかたまりがつかえる秋子だつた。秋子は何もかも北原に打ち明けようと思つてゐた。

秋子の悪い癖……。求められればこぼみ得ない弱い性格が、倉田に囲われる結果を見た。そしてその関係を清算もしないで、北原の胸に身を投げかけることになつてしまつたのだが、それも弱気から倉田とのことを北原に隠していた。云つてしまえば北原に軽蔑されると思つたのだ。幾度、北原の熱烈な求婚をこぼんだことであらう……。だが、今こそ強くならなくてはいけない

と秋子は我れと我が心を打ちつのだつた。「お会いしたいんですけれど……、いいえ今日はあなたにではなく、新聞記者としての北原さんに……」

「へえーん、そりやあまたとんだ難かしいことを云うんだね。いいよ。では新聞記者としての北原信吉が、お眼にかかりましよう」

場所と時間を、二人は約束した。

その約束した喫茶店の隅のボックス……。秋子は蠟人形のように表情をこわばらせていた。

「倉田は自殺する人ではありません」と彼女は云つた。

電音がベートーベンの第五、英雄交響楽を奏でていた。靴の爪先で曲の調子をとりながら、さつきからじつと北原は秋子の打



ち開け話を聞いている。

「俗気たつぷりな人なのです。政治家が自殺するとは思えせんわ。市会議員の肩書きにも倉田は魅力を感じているのです。あんな人は自分の地位や名譽を守るためにはどんな悪魔的な手段でももてあそんで、ちつとも恥じだとは思いませんの。倉田は、自分のおばあさまでも——いるとしてですよ——自分の野心のためなら犠牲にして何とも思わない人なのです。みどりさんや、そしてあたくしに何の未練があるでしょう……」

「……」  
「あの人は青酸カリで自殺する人では絶対にありません。あの毒薬は、誰かを……、誰かを殺すためのものなのです」

「……」  
「みどりさんは倉田としては貴重な持ち駒です。政治的な勢力と姻戚関係を結びたいというの、あの人は永い間の抱負でした。みどりさんはそのためだけに大切に育てられて来たのですわ。三村健次というような人は問題にもなりません。どうしても二人は別れねばならないのです。でも、倉田がもしも親の威光を振りまいて別れさせるとみどりさんはあたくしのことを世間に発表するに決っていますの。道徳家の仮面ははがれるのです。あの人の野心は消え、それどころか、世の指弾を受けねばなりませんわ……」

「……」  
「どうして倉田がそんな愚かなことをするでしょう……。至てはもみ消されねばならないのです。あの人の手で、あの人の手だけでもみ消すのですわ」  
「……」

「あたくしは殺されるかも知れませんが、でもあたくしを殺しただけでは完全と申せませんの。みどりさんも、そして三村さんも殺さねば秘密は保てないのです」

「……」  
「みどりさんを失くすことを、倉田の政治的な野心は少しは残念がることでしょうね。姻戚関係から食い込む手段を失うんですもの。でもあの人は一面諦めのいい人なのです。背に腹はかえられせんわ。倉田はきつと実行すると思いますの。三人の生命は消えるのです」

「……」  
「あたくしは……、あたくしはかまいませんの。みどりさんと三村さん、お若い二人がお気の毒ですわ。倉田は、一点非の打ちどころのない死亡証明書まで用意しているにきまつています。あの人はそんな人なのですわ」

「……」  
「倉田の、この恐ろしい犯罪をふせぐ方法は、たつた一つしかございません」  
それまでは話を聞く側にばかりいた北原が突然云つた。  
「判りました。倉田敬介の失脚……。そうでしょう？」

秋子は深くうなづいた。  
北原は立ち上つた。カウンターの横に電話があつた。社会部の部長を呼び出したらしい。まるで喧嘩腰だ。大声が、はなれている秋子にまで聞えた。  
「三面のトップ、五段、僕が責任を持つ……」  
電話をかけ終ると、北原はチラッと秋子を見た。ニコリと笑つた。そしてそのまゝ喫茶店のドアから消えた。

出て行つた扉がバタン／＼と揺れた。揺れは段々小刻みになる。その扉を秋子はじつと見つめていた。

「あの人は去つて行つた……」  
彼女は一人でそう呟くのだつた。

4  
北原の活動は素晴らしかつた。短い時間で、どうしてこんなにまで数々の事実が調べられたのだらう？ K新聞の朝刊には三村健次の写真まで出ていた。

北原の書いた記事を、秋子は幾度も繰り返して読んだ。何遍読んでも飽きないのだ。走り廻っている北原の姿が眼に浮かんだ。男の来ない妾宅の朝はのんきなものだ。狭い庭に黄色い蝶々がまぎれ込んで来たあんな風に知らない土地で生きよう、と秋

子は思つた。

死を決意した。だが、昨日の北原には云わなかつたけれど、秋子は普通の身体ではなかつた。北原の子と一緒に死なすことが辛かつたのだ。母は稀代の悪女でも、子は北原に似てくれるだらうと思つた。それだけがたつた一つの慰めになつた。雨も雪もそして風も、母に苦勞はない筈だ。

ゆる／＼と秋子は立ち上つた。押入れから旅行カバンを取り出した。倉田に買つてもらつた物はみんな残して行く心算だつた。そしてふと気附けば、今着ている着物も倉田が買つた物なのだ。

二年前の、赤い縞の派手な着物を秋子は着た。ぐるり、と家の中を見廻した。さすがに哀愁があつた。好きな男ではなかつたが、倉田の死に水をとるのが自分の持つ





て生れた運命なのかと、一時は思つてもみた。その男の体臭が残つてゐる。

これではいけない、と秋子は思つた。たつた一人で旅立つ旅路に、この感傷は荷厄介だ。

秋子は灰皿をつかんだ。ハッシと投げた。「——ガチャン……」

鏡が割れた。瀬戸物の灰皿も二つに割れて転つてゐる。

それでさつぱりした。

丁度その時だつた。表の格子戸が開いた。何といふこともなしに秋子は不吉な予感に胸ふるいした。

倉田が入つて来た。眼が血走つてゐる。髪が乱れてゐた。

「秋子」

と呼んで彼はふら／＼と畳の上に坐つた。そして思わず秋子は自分の胸を抱きしめるのだ。

学校に与えた新聞の効果は絶大だつたに違いないと思つてゐた。その方の問題でんやわんやの騒ぎを起しているだろうと思つた、その当の本人が今頃やつてくるとは夢にも考えない秋子だつた。

倉田は秋子の足元の旅行カバンを見た。粉々に割れた鏡……

「秋子、お前までわしから逃げるのか？」

悪魔のような笑いが倉田の唇をゆがめた。「だが逃がしはせん。秋子、逃がしはせんぞ」

低い低い声だ。

秋子は口がきけなかつた。恐怖に頬がこわばつた。

倉田はゆつくりと秋子の方に近附いてくる。逃げようと思つた。だがどうしても秋子

の足は動かないのだ。髪をつかんで曳きづられた。そして始めて声が出た。

「——アレーッ」

とても悲鳴を上げたのだろうか……。自分は何と叫んだか、秋子は全く記憶がない。

倉田が彼女の全身をなでまわした。

「死ぬんだ、秋子、一緒に死のう。わしの夢は破れた。わしには、もうすることが一つもない……」

倉田は荒い息つかいで秋子の上におおいかぶさつた。秋子の着物の裾が乱れた。生命に別離の盃を投げる前に、身も心もとける情怨の谷に今一度したろうとする倉田だつた。だが今日の秋子は昨日の秋子ではない。今日の秋子は母なのだ。母が渾身の力を振りしぼつた。ドウと倉田は倒れた。その隙に秋子は立つた。だが執拗に秋子の足にすがりつく……

しばらくの間、二人の身体がもつれ合つた。つかみ合い。まるで泥試合だ。そしてこんなことになれば、いかに抵抗しても男の力に敵うものではない。秋子はかすかに眼が廻つた。いやらしい倉田の顔が二つにも三つにも見えた。その奥に、去つて行つた北原の微笑が浮ぶ。北原に向けて、秋子はそつと笑いかけた。

今度こそは強くなろうと思つた。そして一度は強くなつた。鏡も割つた。それなのに、また倉田に引き曳られて行く自分が……。倉田の指す方向のままに歩かねばならぬ自分が、秋子はたまらなく口惜しかつた。悲しかつた。女にはそんな道だけしか与えられていないのだろうか？

秋子は眼を閉じた。全身の力を抜いた。倉田の指が胸元を押しひろげてくる。パッ

と裾をまくつた。それでも足りないと思える。しごき、帯締め、帯を解かせるのだ。

全ての態度が、念には念を入れ、用心深い倉田の性格を反映してゐた。倉田には秋子が逃げはしないかとそれだけが心配なのだ。帯を解きながらでも、全身の重圧を秋子の身体にかけてくる。

二年前、秋子が倉田と始めて会つた時と同じだ。強姦……。そんな方法で秋子は倉田の妾になつたのだつた。

秋子は眼を閉じたまま苦笑した。だがその時、不意に秋子の身体が楽になつた。倉田の声が何か叫んでいる。

秋子は眼を開けた。そして……。その時の気持を何と言えはいいのだろうか？秋子は全身が羞恥で真赤に染め上げられた。

「ダ、ダレだ。キ、キサマ、誰だ？警官を呼ぶぞ」

倉田が手指をふる／＼ふるわせながら云つた。

「警官ですつて？そりやいい考えだ。あなたがそらお考えなら僕が警官を呼んで来ましょう」

答えたのは北原だつた。何時の間に入つて来たのであろう。

「ウッ」

倉田は詰まる。北原のために収賄事件まであばかれてゐた。警官は倉田を探しているのだ。

「さあ」と北原はうつぶしている秋子の肩をたたいた。

「ここに用のない人間が二人いる。僕とあなただ。行きましょう」

だが秋子は北原の顔をなかつた。見られなかつたのだ。こんなぶざまな恰好を彼に

見られる位なら、舌をかみ切つて死ぬ方がよほどいい。今まで隠し通して来た住所を昨日、始めて教えた。あれが失敗だつたと秋子は思つた。

「今日の僕は新聞記者の北原信吉じゃない。あなたの北原信吉ですよ」

無理に北原は秋子に帯を結ばせた。「ざつとでいい。表に自動車待つてらんだから」

北原は秋子の旅行カバンを下げた。もう倉田は顔も上げない。部屋の隅に小さくうづくまつてゐた。

自動車は軽やかな快走ぶりだ。町が、そして人が、たちまちのうちに後になつて行く……

そつと、北原が秋子の手を握つた。「秋子さん、僕の正式な求婚を受け入れてくれませんか？もしもあなたが駄目だつて云うんなら、僕は青酸カリを飲んで死んじやいますよ」

窓から吹き込む青葉の風が、秋子の髪の毛をそよがせるのだつた……

——おわり——

### ◎愛読者の皆さまへ◎

奇譚クラブに掲載の小説、説物の作家に対して御通信を出したい愛読者の方々は、返券御同封の上、奇譚クラブ編集部気付にて御出し下されば、各作者の方々に御連絡申し上げ、出来るだけ御返事を頂けるよう御取計らい申し上げます故、御遠慮なく御便り下さい。

奇譚クラブ編集部



